

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第111集

広沖遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

広沖遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県は縄文時代の遺跡を中心として、県内各地に数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7,000箇所を越えております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にその基幹となる道路など交通網整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日の課題となってきております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたつて、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和60年度に発掘調査した二戸郡浄法寺町広沖遺跡の調査結果をまとめたものであります。平安時代の大集落である飛鳥台地Ⅰ遺跡と同一段丘上にあり、沢によって開析された北側に対峙しており、平安時代の住居跡や縄文時代の住居跡・陥し穴状遺構などが発見されました。平安時代の住居跡には鍛冶などの工房跡と思われるものがあり、当地方の歴史解明の貴重な資料となるものと考えられます。

この報告書が研究者のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解や保護の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にあたって御援助・御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、浄法寺町、浄法寺町教育委員会をはじめ関係各位に感謝申しあげるとともに、今後の御指導、御協力をお願いいたします。

昭和61年7月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 中村 直

例 言

1. 本報告書は、岩手県二戸郡浄法寺町大字御山字広沖43-2に所在する広沖遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和60年4月15日に開始され、同年6月19日に終了した。室内の整理作業は、昭和60年11月1日から昭和61年3月31日まで行った。
4. 発掘調査と報告書の作成は、文化財専門調査員の岩淵久と田村壮一が担当した。
5. 鑑定は、次の方々・機関に依頼した。
 - 石質鑑定 佐藤地質工学研究所佐藤二郎氏
 - 炭化材樹種鑑定 岩手県木炭協会早坂松次郎氏
 - 鉄製遺物の分析 岩手県立博物館、岩手県医薬品衛生検査センター
6. 本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

I. 調査に至る経過	近藤宗光
II. 調査方法と整理方法	岩淵 久
III. 遺跡の立地と環境	岩淵 久
IV. 検出遺構と遺物	1-[2]-① 2-[2]-① 田村壮一
	その他 岩淵 久
V. まとめ	2-① 田村壮一
	その他 岩淵 久
7. 発掘調査は、佐藤道治氏をはじめとする地元の方々の御協力を得た。また、室内整理作業には、臨時職員の協力を得た。
8. 本報告書の編集、校正は岩淵久と田村壮一が行った。
9. 調査によって得られた資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序	
例言	
I. 調査に至る経過	3
II. 調査方法と整理方法	4
III. 遺跡の立地と環境	7
IV. 検出遺構と遺物	14
1. 縄文時代	
〔1〕 遺構と遺構内出土遺物	14
(1) 住居址	15
(2) ビット	17
(3) 陥し穴状遺構	41
〔2〕 出土遺物	47
(1) 土器	47
(2) 土製品	54
(3) 石器	55
2. 平安時代	
〔1〕 遺構と遺構内出土遺物	57
(1) 住居址	57
(2) ビット	66
〔2〕 出土遺物	69
(1) 土器	69
(2) 石器	71
(3) 鉄製品・鉄滓等	71
(4) その他	71
3. 近世・近現代	
〔1〕 遺構と遺構内出土遺物	72
(1) 土取穴	72
(2) 炭窯	74
〔2〕 遺構外出土遺物	75
出土遺物観察一覧表	103
V. まとめ	112
1. 遺構	112
2. 遺物	114

図版目次

第1図 岩手県全国	1	第10図 AII-1 ビット	17
第2図 遺跡位置図	2	第11図 AIII-1 ビット	18
第3図 グリット配置図	6	第12図 AIII-2 ビット	18
第4図 地形図	8	第13図 AIII-3 ビット	19
第5図 土層断面図	11	第14図 AIII-4 ビット	19
第6図 遺構配置図	13	第15図 AIII-5 ビット	20
第7図 AIII-1 住居址平面	15	第16図 AIII-6 ビット	20
第8図 AIII-1 住居址断面	16	第17図 AIII-7 ビット	21
第9図 AIV-2 住居址	17	第18図 AIII-8 ビット	21

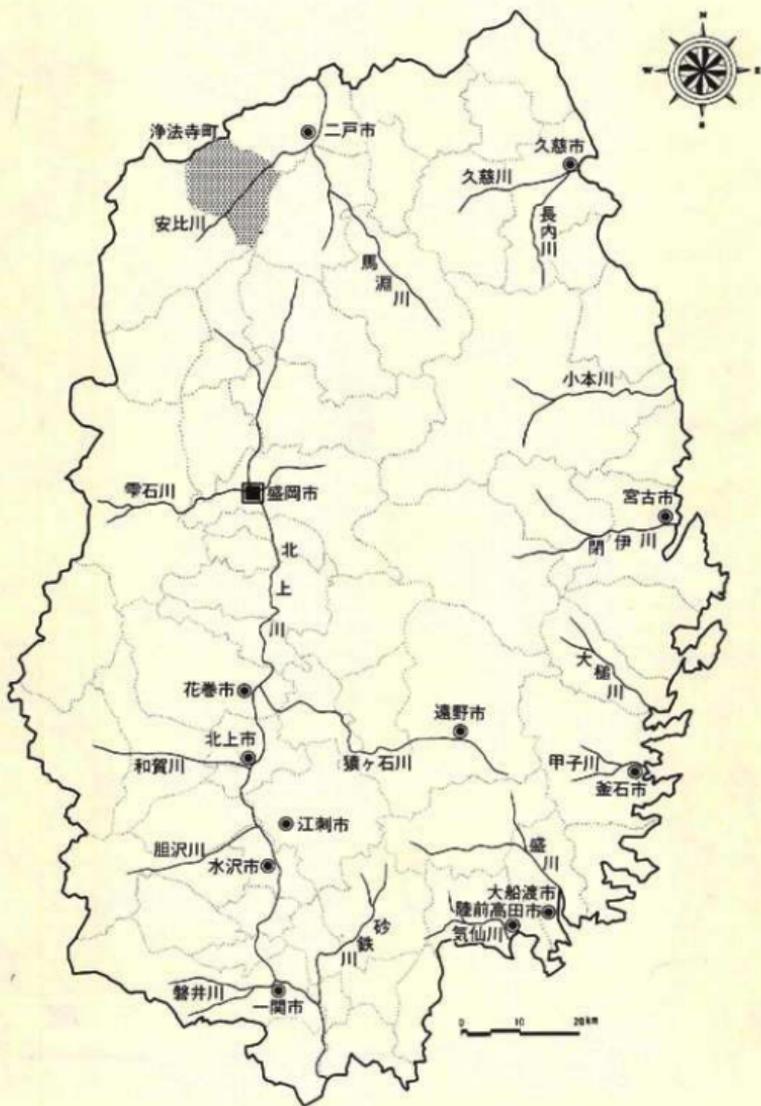
第19図	A III-9 ビット	22	第51図	B IV-12 ビット	38
第20図	A III-10 ビット	22	第52図	B IV-13 ビット	39
第21図	A III-11 ビット	23	第53図	B IV-14 ビット	39
第22図	A III-12 ビット	24	第54図	B IV-15 ビット	40
第23図	A III-13 ビット	24	第55図	B IV-16 ビット	40
第24図	A III-14 ビット	25	第56図	B V-1 ビット	41
第25図	A III-15 ビット	25	第57図	A II-1 陥し穴状遺構	41
第26図	A III-16 ビット	26	第58図	A II-2 陥し穴状遺構	42
第27図	A III-17 ビット	26	第59図	A III-1 陥し穴状遺構	43
第28図	A IV-1 ビット	27	第60図	B II-1 陥し穴状遺構	44
第29図	A IV-2 ビット	27	第61図	B II-2 陥し穴状遺構	45
第30図	A IV-3 ビット	28	第62図	B II-3 陥し穴状遺構	46
第31図	A IV-4 ビット	28	第63図	B III-1 陥し穴状遺構平面	46
第32図	A IV-7 ビット	29	第64図	B III-1 陥し穴状遺構断面	47
第33図	A IV-8 ビット	29	第65図	A IV-1 住居址平面	57
第34図	B II-1 ビット	30	第66図	A IV-1 住居址断面	58
第35図	B II-2 ビット	30	第67図	B III-1 住居址	60
第36図	B II-3 ビット	31	第68図	B III-2 住居址平面	61
第37図	B II-4 ビット	31	第69図	B III-2 住居址断面	62
第38図	B II-5 ビット	32	第70図	B IV-1 住居址	64
第39図	B III-1 ビット	32	第71図	B IV-1 住居址断面	65
第40図	B III-2 ビット	33	第72図	B IV-1 住居址断面	66
第41図	B III-3 ビット	33	第73図	A IV-5 ビット	66
第42図	B III-4 ビット	34	第74図	A IV-6 ビット	67
第43図	B IV-4 ビット	34	第75図	B IV-1 ビット	67
第44図	B IV-5 ビット	35	第76図	B IV-3 ビット	68
第45図	B IV-6 ビット	35	第77図	A IV-1 土取穴	72
第46図	B IV-7 ビット	36	第78図	A V-1・A V-2 土取穴	73
第47図	B IV-8 ビット	36	第79図	炭窯	74
第48図	B IV-9 ビット	37	第80図	縄文土器(1)	76
第49図	B IV-10 ビット	37	第81図	縄文土器(2)	77
第50図	B IV-11 ビット	38	第82図	縄文土器(3)	78

第83図 縄文土器(4)	79	第95図 石器(2)	91
第84図 縄文土器(5)	80	第96図 石器(3)	92
第85図 縄文土器(6)	81	第97図 石器(4)	93
第86図 縄文土器(7)	82	第98図 石器(5)	94
第87図 縄文土器(8)	83	第99図 石器(6)	95
第88図 縄文土器(9)	84	第100図 石器(7)	96
第89図 縄文土器(10)	85	第101図 石器(8)	97
第90図 縄文土器(11)	86	第102図 平安時代の土器(1)	98
第91図 縄文土器(12)	87	第103図 平安時代の土器(2)	99
第92図 縄文土器(13)	88	第104図 平安時代の土器(3)	100
第93図 縄文土器(14)	89	第105図 平安時代の土器(4)	101
第94図 石器(1)	90	第106図 土製品・金属製品	102

写真図版目次

写真図版 1 遺跡空中写真	121	写真図版18 ビット(4)	138
写真図版 2 調査状況	122	写真図版19 ビット(5)	139
写真図版 3 土層断面	123	写真図版20 ビット(6)	140
写真図版 4 AIII-1 住居址	124	写真図版21 陥し穴状遺構(1)	141
写真図版 5 AIV-2 住居址・ ビット(1)	125	写真図版22 陥し穴状遺構(2)	142
写真図版 6 ビット(2)	126	写真図版23 陥し穴状遺構(3)	143
写真図版 7 ビット(3)	127	写真図版24 AIV-1 住居址(1)	144
写真図版 8 ビット(4)	128	写真図版25 AIV-1 住居址(2)	145
写真図版 9 ビット(5)	129	写真図版26 BIII-1 住居址・ BIII-2 住居址(1)	146
写真図版10 ビット(6)	130	写真図版27 BIII-2 住居址(2)	147
写真図版11 ビット(7)	131	写真図版28 BIV-1 住居址(1)	148
写真図版12 ビット(8)	132	写真図版29 BIV-1 住居址(2)	149
写真図版13 ビット(9)	133	写真図版30 平安時代ビット(1)	150
写真図版14 ビット(10)	134	写真図版31 平安時代ビット(2) 土取穴(1)	151
写真図版15 ビット(11)	135	写真図版32 土取穴(2)・炭窯	152
写真図版16 ビット(12)	136	写真図版33 縄文土器(1)	153
写真図版17 ビット(13)	137		

写真図版34	縄文土器(2) ……………	154	写真図版46	縄文土器00 ……………	166
写真図版35	縄文土器(3) ……………	155	写真図版47	石器(1) ……………	167
写真図版36	縄文土器(4) ……………	156	写真図版48	石器(2) ……………	168
写真図版37	縄文土器(5) ……………	157	写真図版49	石器(3) ……………	169
写真図版38	縄文土器(6) ……………	158	写真図版50	石器(4) ……………	170
写真図版39	縄文土器(7) ……………	159	写真図版51	石器(5) ……………	171
写真図版40	縄文土器(8) ……………	160	写真図版52	平安時代の土器(1) ……………	172
写真図版41	縄文土器(9) ……………	161	写真図版53	平安時代の土器(2) ……………	173
写真図版42	縄文土器00 ……………	162	写真図版54	平安時代の土器(3) ……………	174
写真図版43	縄文土器01 ……………	163	写真図版55	平安時代の土器(4) ……………	175
写真図版44	縄文土器02 ……………	164	写真図版56	土製品・金属製品 ……………	176
写真図版45	縄文土器03 ……………	165			



第1図 岩手県全図



第2図 遺跡位置図

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車道であり、本県にかかるのは第7次施行命令区間約27.6kmと第8次施行命令区間約26.7kmである。このうち第7次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年で終了している。

昭和53年11月第8次施行命令が出された。二戸郡安代町、浄法寺町、二戸市、一戸町を通る路線である。岩手県教育委員会はその区間の埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。そのなかで、浄法寺町には天台宗の古刹である天台寺が所在し、天台寺緑地保全区域となっていることから、路線はこの地を避けて設定されることとなった。

県教育委員会事務局文化課は、昭和54年10月に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿い500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとに更に両者で協議を重ねた。昭和56年5月には路線発表があり、文化課は路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、約30遺跡を確認した。昭和57年には安代町内の5遺跡について発掘調査範囲確認調査を行っている。

昭和58年度事業として、安代町内4遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢Ⅲ遺跡、繁沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の発掘調査と関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査を行った。文化課はこの年度に浄法寺町内12遺跡の発掘調査範囲確認調査を行っている。

昭和59年度には、安代町の2遺跡、関沢口遺跡、水神遺跡、浄法寺町の9遺跡、柿ノ木平Ⅲ遺跡、五庵Ⅰ遺跡、五庵Ⅱ遺跡、海上Ⅰ遺跡、海上Ⅱ遺跡、大久保Ⅰ遺跡、沼久保遺跡、桂平遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡の発掘調査が委託された。このうち、関沢口遺跡は58年度の継続調査であり、沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰ遺跡は工事用道路分の調査である。文化課はこの年度に二戸市、一戸町所在それぞれ6遺跡の発掘調査範囲確認調査を行っている。また、その際新たに発見された浄法寺町内2遺跡、五庵Ⅲ遺跡、広沖遺跡の確認も行っている。その結果縦貫道関連の浄法寺町内の遺跡は14箇所となった。

昭和60年度には、浄法寺町の8遺跡、田余内Ⅰ遺跡、田余内Ⅱ遺跡、五庵Ⅲ遺跡、沼久保遺跡、桂平遺跡、安比内Ⅰ遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡、広沖遺跡及び二戸市の2遺跡、西久保遺跡、大久保遺跡、一戸町の3遺跡、堀切遺跡、竹林遺跡、親久保Ⅲ遺跡の発掘調査が委託された。このうち沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰ遺跡は59年度の継続調査であり、親久保Ⅲ遺跡は粗掘遺構確認調査である。また広沖遺跡は本報告遺跡である。

II 調査方法と整理方法

1. 調査方法

〈グリッド設定〉

調査区は道路本線部分と浄法寺インターチェンジの下り引込み線部分にあたる。基準点は引込み線の中心杭2点を使用した。基準点の成果は次のとおりである。

基準点1、D 3 +60 (X = 21002. 8675 Y = 29279. 5503)

基準点2、D 3 +40 (X = 21022. 1091 Y = 29285. 0058)

基準点1と基準点2とを結んだ直線と平行する東側5mを通る直線を東西の基線とし、これに直交し基準点1を通る直線を南北の基線として設定した。

この基線から四方に20m×20m単位で調査区を大区画した。区画の名称は、東西方向に西からA～Cを、南北方向に北からI～Vを付してA II区、B II区のように表した。また遺物取り上げのため、大区画に5m×5mの小区画を設け、北西隅からa～pを付してA III g、B III mのように表した。

〈粗掘・遺構検出〉

2本の基線沿いに土層観察用ベルトを残しながら、手掘りで層ごとに土層を除去し遺構の検出に努めた。遺物はそのつど層位を確認しグリッド名を付して取り上げた。検出された遺構の名称は、検出大区画名と遺構の種類、検出順にAIV-1ピット、AIV-2ピットのように表した。

〈精査〉

住居址は4分法、その他は2分法を原則として精査した。遺物は必要に応じて写真撮影や実測をした後取り上げた。

〈実測〉

平面形は5mグリッドによる簡易遣り方を設定し実測した。実測図の縮尺は20分の1で統一した。

〈写真撮影〉

6×7cm判カメラ(白黒用)1台、35mm判カメラ(白黒用、カラーズライド用)2台を使用した。遺跡全景撮影は空中写真によった。

2. 整理方法

整理作業は遺構図面のトレースと遺物の仕分け・復元を並行して進め、その後に遺物の実測、拓本、トレース、図版作成を順次行つた。これらの作業は、調査員の指示・点検のもとに室内

整理協力が担当した。

〈図 面〉

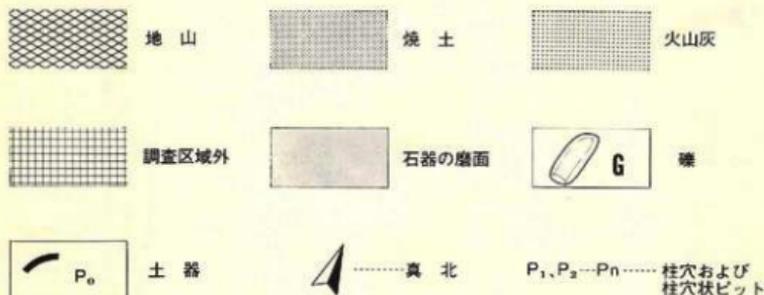
野外調査で作成した遺構図面は、遺構別に合成・分離した後、種類別に分類し番号を付して収納した。

〈遺 物〉

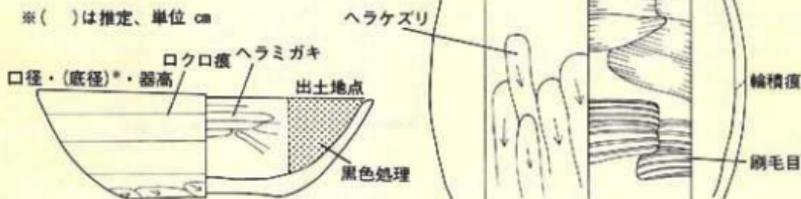
現地で水洗とラベル記入をほぼ終了し、室内では仕分け、登録、接合・復元、写真撮影、実測を行った後、種類別に収納箱に整理した。

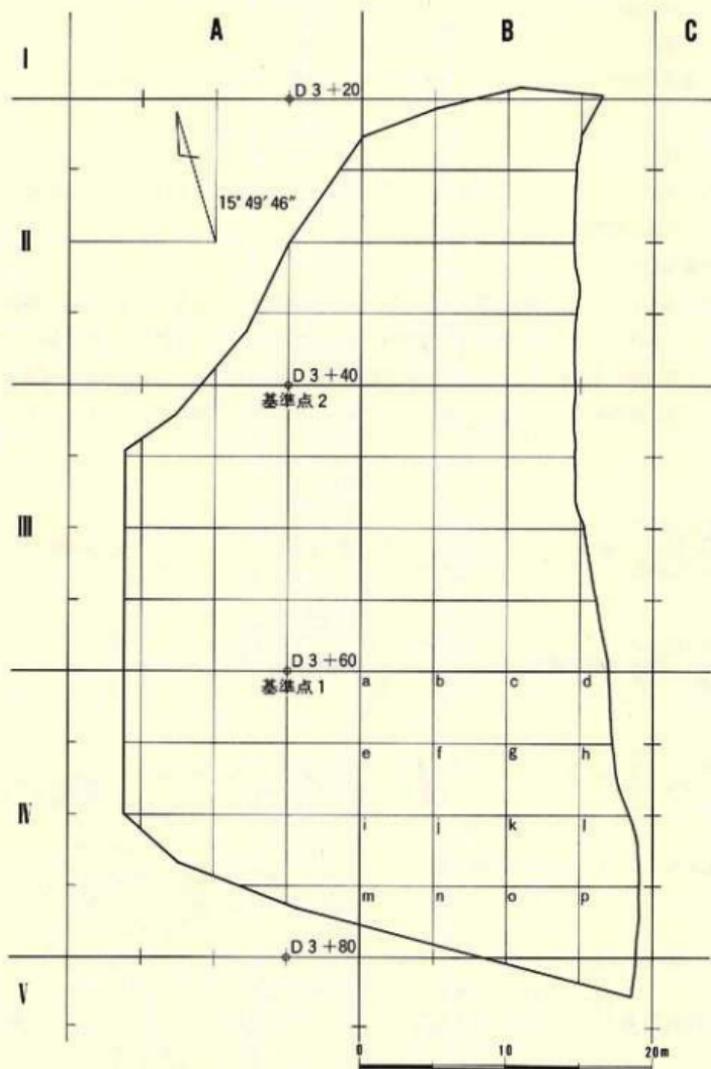
〈報告書作成〉

遺構図面のトレース、遺物実測図のトレース、拓本作成、図版作成を順次行い、原稿執筆を併行した。遺構図版の縮尺は40分の1を原則とし、遺物図版についてはそれぞれに縮尺を掲載した。写真図版の縮尺は不定である。遺物の番号は通し番号を使用し、実測図版と写真図版を一致させた。図版に使用した記号・スクリーントーン等は次の用例に示したとおりである。



浮石が多い……浮石の含有率15%以上





第 3 図 グリッド配置図

III 遺跡の立地と環境

1. 位置

遺跡は、浄法寺町の東端部にあたり、町役場から東北東1.8km、県道一戸・浄法寺線を安比川から250mほど東進した地点の北東側に位置する。

遺跡が所在する浄法寺町は、岩手県北部に位置し、北東に向かって流れる安比川沿いの低地と安比川を挟んで西部の山地および東部の山地性丘陵一帯に広がる面積183.24km²の町である。その北縁は青森県田子町に接し、北東縁は二戸市、南東縁は一戸町、西縁は安代町と接している。

2. 地形

浄法寺町は西部の山地と東部の丘陵地とに大別され、その間に低地があるものの町城のほとんどはこの山地と丘陵によって占められている。

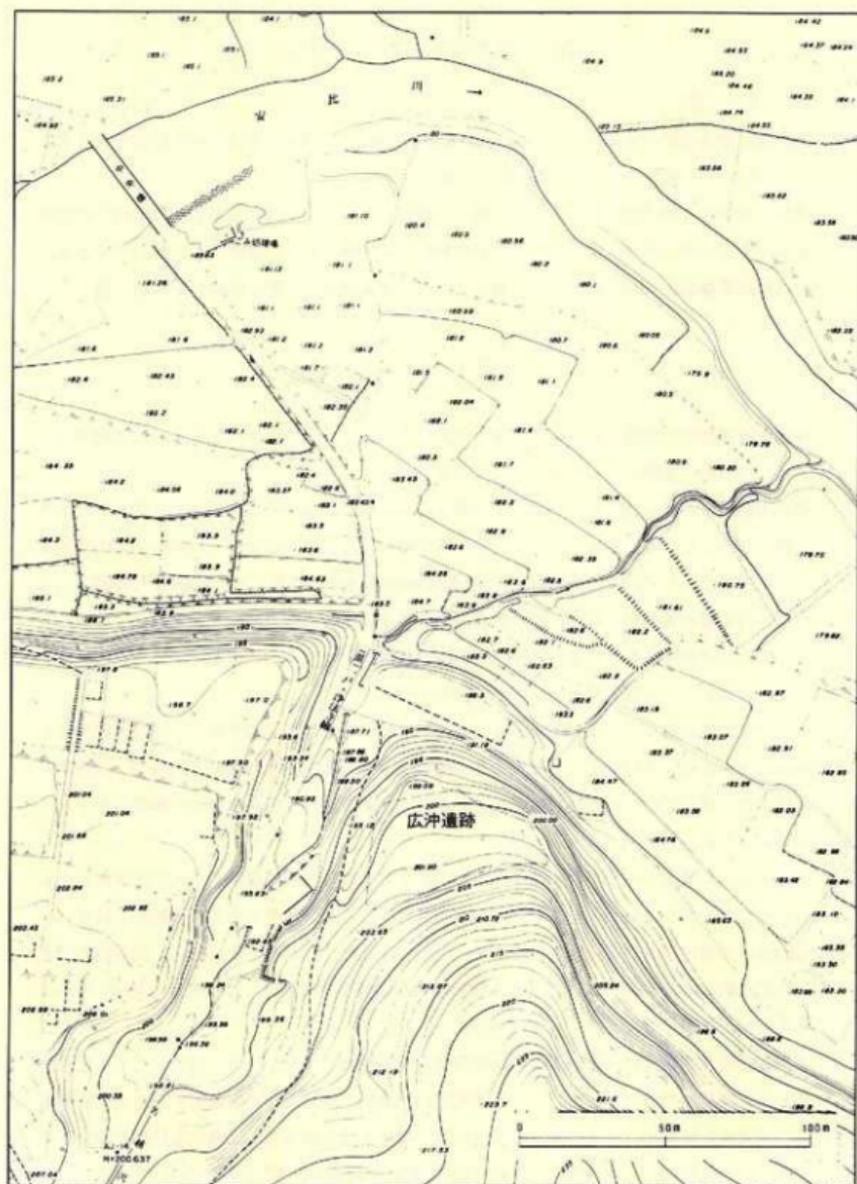
西部山地の最高峰は稲庭岳(1,078m)である。この稲庭岳は東方に向かって高度を下げて山麓丘陵を形成している。東部丘陵地は、安代町東端に位置する七時雨山(1,060m)の山麓丘陵の北部末端を形成している。両山麓丘陵とも標高300m~400mの間にあり定高性が比較的良好。この二つの山麓丘陵の間を馬淵川最大の支流である安比川が北東方向へ流れている。

安比川はその源を八幡平に発し、安代町荒原、浄法寺町、二戸市御辺地を経て一戸町鳥越で馬淵川と合流する。流路延長約58kmにおよぶ河川である。

低地は安比川に沿って発達しているが、形態的にはすべて谷底平野である。谷底平野で最も規模の大きいのは安比川によって形成され、遺跡の西方地域では約700mの幅である。谷底平野は丘陵地にも延びてはいるがそれほど長くはなく、遺跡周辺では枝別れの無い単純な形をした谷底平野となる。

安比川沿いには上・中・下位の砂礫段丘と、上・中位段丘の間に位置する火山灰砂段丘の4段位の段丘が分布している。しかし、河川の規模に比して段丘規模が小さく連続的ではない。上位段丘は長渡路付近、中位段丘は清水尻、吉田、浄法寺、八幡館、大森付近、低位段丘は尻平、漆沢、御山、飛鳥付近、火山灰砂段丘は長渡路から長流部にかけての地域と滝見橋、小泉、下谷地、柿ノ木平付近にそれぞれ分布する。

本遺跡の載る地形面は、七時雨山の北側山麓丘陵北西縁にあたり、西に向かって下る丘陵張り出し部の緩斜面である。しかし、この緩斜面の先端部で低位段丘の構成層である火山灰流凝灰岩(シラス)が検出されていることと、対岸に隣接する飛鳥台地I遺跡の低位面と同一面を示すことから低位段丘に相当すると思われる^{*)}。遺跡の南側は名越沢に開析され、西から北側に



第4図 遺跡周辺地形図

かけて沖積低地が広がる。遺跡周囲には崖錐が分布する。遺跡の標高は198m～204mで沖積面との比高は約20mである。遺跡の現状は山林となっているが、それ以前は北東端を除き畑地として利用されている。そのため東端山際と西端部が削平を受けている。

3. 地質

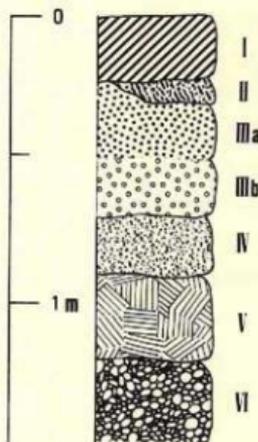
遺跡中央部に縦横に残した土層観察用ベルトと小規模の深掘りによる表層地質はおおよそ以下のとおりである。

遺構の時期決定に有力な灰白色火山灰（十和田 a 降下火山灰）、細粒の黄褐色火山灰（苫小牧火山灰）が遺構あるいは凹地等に観察される。遺構検出面は、削平の影響もあって一様ではないが、中掬浮石層上面（平安時代・縄文時代後期）と黒褐色土～黄褐色土層面（縄文時代前期）とに区分される。

遺構に関する基本土層は次の6層に区分される。

- I 層 黒褐色土 (10Y R2/2) 層厚20cm～30cm、最大45cm。表土（耕作土）で植生根が多い。粘性なくやわらかい。I'は層厚20cm～30cmの流れて堆積したものであり灰色に近い。遺跡北端部の表土はすべてこれにあたる。
- II 層 黒色土 (10Y R 1.7/1) 最大層厚35cm。粘性なくやわらかい。遺跡北端と中央部にのみ堆積する。
- III_a 層 暗褐色土 (10Y R3/4) 層厚20cm。粘性なく柔らかいところとか固い部分がある。中掬浮石（アワ砂）をまばらに含む。
- III_b 層 ぶい黄橙色 (10Y R6/4) ～浅黄色 (2.5Y 7/4) 層厚20cm～30cm。中掬浮石層。全体にたたく、固結している部分もある。上位に暗褐色土が混入するが区分せず同一層とした。遺跡北端にはみられない。
- IV 層 黒褐色土 (10Y R2/2) 層厚20cm～30cm。白色化した浮石を多く含む。粘性がありかたい。遺跡全域にみられる。
- V 層 暗褐色土 (10Y R3/3) ～黒褐色土 (10Y R2/3) 層厚20cm～30cm。粘性がありかたい。下位のVI層の腐植土。a はやや明るく、b は黒味が強い。a、b 同時に分布するのは斜面上方側

土層模式図



に限られる。ほとんどの地区はaであるが褐色土として表れている。

- VI層 明褐色土 (7.5Y R5/8) ~黄褐色土 (10Y R5/8) 粘性がかりかたい。八戸火山灰層相当。この層の上部に赤褐色浮石の薄層が分布する部分がある。下位には黄灰色~灰白色の粘土質土、さらに下位には砂質土が分布する。南北崖寄りには礫が混じる灰白色土が分布する。

遺跡を覆う層としては認められないが、II層とIII層の間に位置して遺構の上面ないしは埋土中、遺跡北端部に灰白色火山灰が分布する。

なお、道路公団のボーリング調査による基盤地質では、上位にローム、下位に砂岩が分布している。

4. 周辺の遺跡

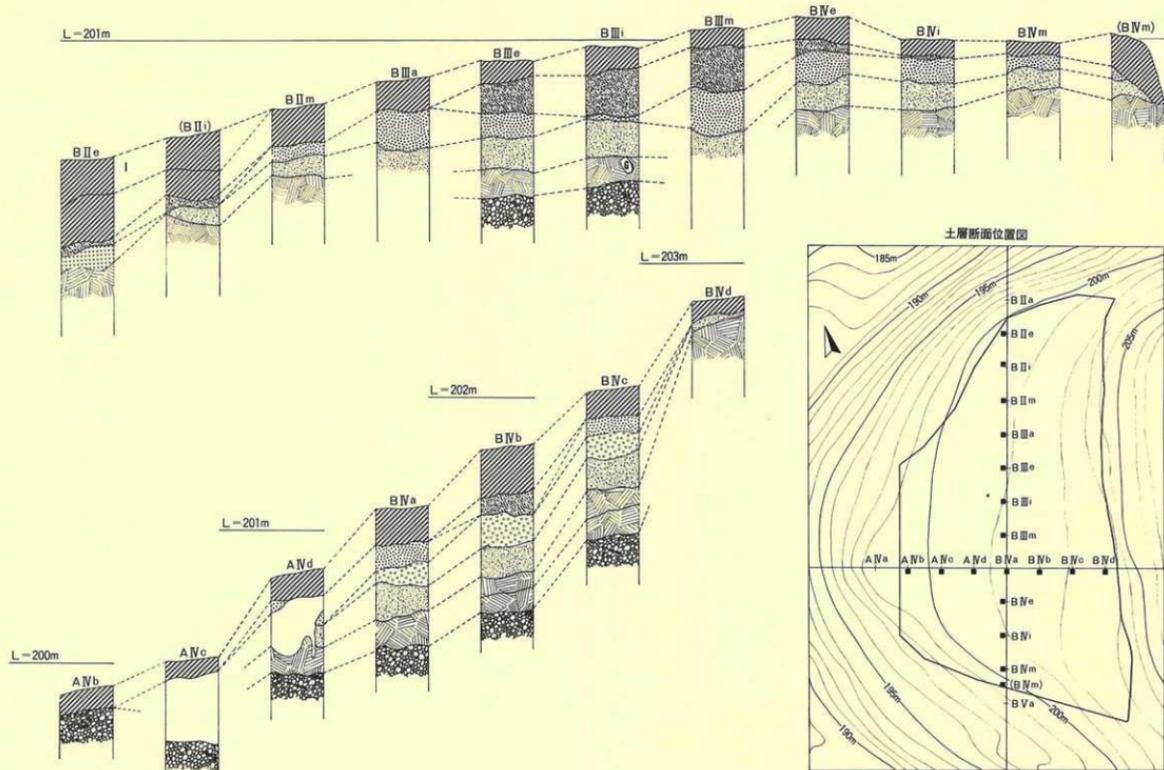
浄法寺町内における遺跡は、岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳によれば72箇所であり、これに本遺跡と五庵III遺跡を加えて74箇所となる。時期は縄文時代・晩期と平安時代が半数以上を占め、しかも、複合する遺跡が多い。遺跡の立地をみると、大部分は安比川右岸の段丘上に分布している。これは主として自動車道関連の遺跡分布調査が実施されたことによるものである。

59年~60年度にわたる発掘調査の結果、多くの遺構や遺物が検出されている。縄文時代早期の遺物は田余内I遺跡など7遺跡で出土し、特に飛鳥台地I遺跡では住居址が確認された。縄文時代前期では飛鳥台地I遺跡など4遺跡で合わせて9棟の住居址が確認された。縄文時代中期の遺物は出土しているが住居址はない。縄文後期の遺物はほとんどの遺跡で出土し、住居址は沼久保遺跡など5遺跡で確認された。縄文時代晩期では、住居址が五庵Iなど3遺跡で合わせて4棟と少ない。弥生時代の遺物も少ないが7遺跡で出土し、住居址は沼久保遺跡の1棟のみである。

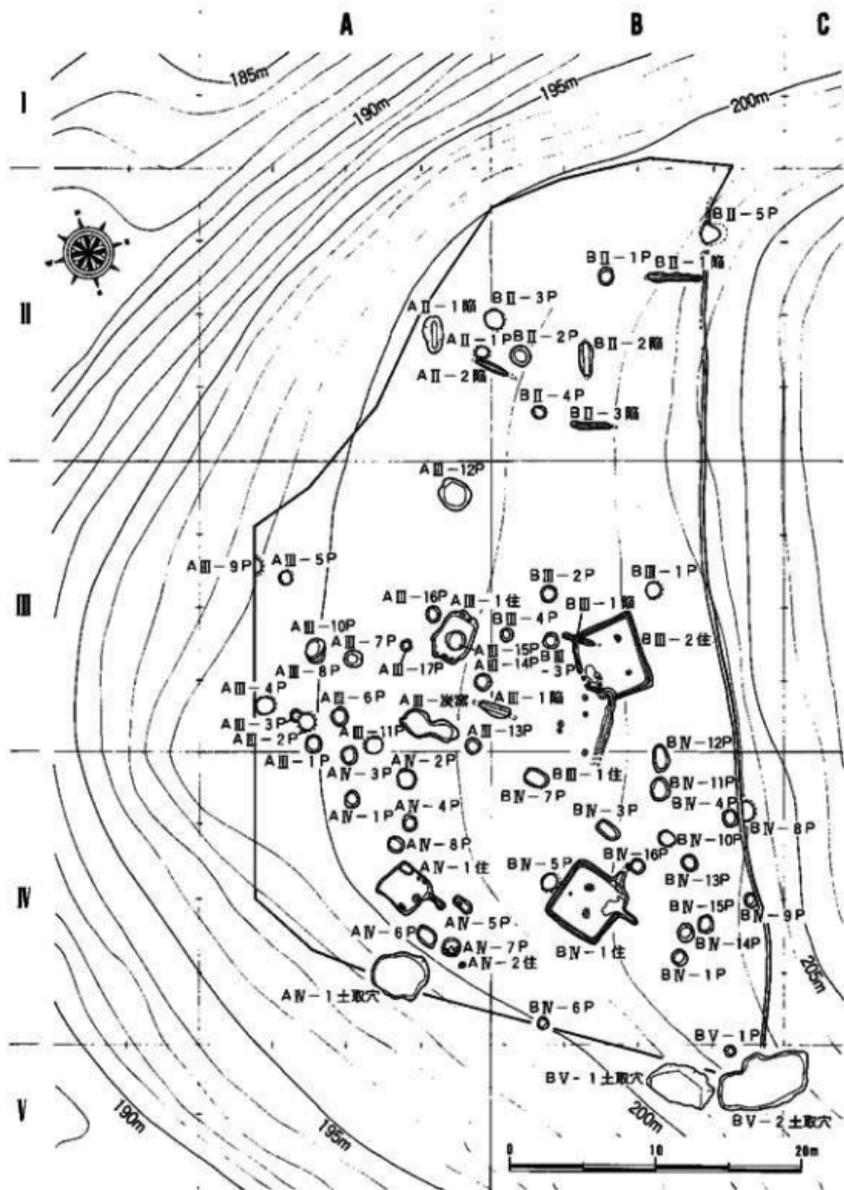
縄文時代に関ると見られる陥し穴状遺構は、榊ノ木平III、五庵I、安比内I、沼久保などの遺跡で多く検出された。また縄文時代から平安時代にまでわたると見られる土坑も確認され、中でも飛鳥台地I、五庵II、桂平などの遺跡に多い。

平安時代の遺構や遺物は、各遺跡で検出され、特に飛鳥台地I、五庵I、桂平などの遺跡で多く確認された。住居址の構造や占地、工房址、土坑、土器の編年など、当地方における平安時代の集落のあり方を知る良好な資料となっている。

中近世の遺構には、五庵IIや飛鳥台地I遺跡で掘立柱建物や竪穴住居址が、また五庵I、五庵III、飛鳥台地I遺跡では墓塚が検出されている。浄法寺町の漆器生産に関わる遺物が飛鳥台地I、五庵II遺跡で出土し、注目される。以上の自動車道関連遺跡以外にも、天台寺などの発掘調査が町教育委員会によって進められている。



第 5 图 土层断面图



第6図 遺構配置図

IV 検出遺構と遺物

調査によって検出された遺構は

縄文時代……………住居址2棟、ピット46基、陥し穴状遺構5基

平安時代……………住居址4棟、ピット4基

近世～現代……………土取穴3基、炭窯1基

時期不明……………ピット1基、陥し穴状遺構2基

の計68である。全体の配置状況を見ると、Ⅲ区の北半で途切れるほかは、ほぼ全域にほとんど重複なく検出されている。

出土した遺物は、遺構内出土遺物を除いてほとんどが縄文時代のものであり、総数3,750余点である。遺跡の中央部であり、出土量が多く、土器破片数の最も多い地区はAⅢP区の320点余である。遺物を種類別にあげると、

土器・土製品……………縄文土器、土師器、土玉、円盤状土製品、スプーン状土製品

石器……………石鏃、スクレイパー、石匙、筥状石器、石錐、石棒、磨石、敲石、凹石、石錘、砥石、剥片

鉄・銅製品……………紡錘車、古銭、鉤

その他……………砂鉄、フイゴの羽口、鉄滓、陶磁器などである。

1. 縄文時代

[1] 遺構と遺構内出土遺物

住居址2棟のうち1棟は炉をもたず、他の1棟は石囲い炉をもつものである。検出状況と形状から前期と後期の2時期である。

ピット46基の半数以上は、検出面が下層のV～VI層である。埋土の中聚浮石との関連から前期のほか、後・晩期のものである。

陥し穴状遺構は、溝状が5基、小判形ないし長方形状が2基で、遺跡の北端に5基集中する。

遺物はほとんど出土していないので、ここでは概要のみ記し、遺構外出土遺物と合わせてまとめて記述することとする。出土状況で特徴的なのは、1基のピットから石錘が7個もまとまって出土した点である。

なお、時期不明のピット・陥し穴状遺構については、他の遺構との関連から記述する。

(1) 住居址

A III-1 住居址

遺構 (第7・8図, 写真図版4)

(検出状況) A III 1区中央の検出面を褐色土層(V層)面まで下げた段階で、中礫浮石混入土による長方形のプランとして検出された。

(形状) 平面形は西南西隅が丸くなるが、長軸を北東-南西にもつ長方形を呈する。断面形は皿形を呈する。

(規模) 上端が3.4m×2.5m、下端が3.1m×2.2mである。壁高は北東30cm、北西20cm、南西20cm、南東30cmである。

(埋土) 11層に細分される。2は木根などによる攪乱部でやや柔らかいが、他はすべて固くしまっている。壁寄りに中礫浮石が混入する。

(壁) 褐色土層で、南西壁と南東壁は直立ぎみであるが、他は崩落のため外傾する。

(床面) 褐色土層で、ほぼ平坦である。全体に固くしまっている。

(柱穴) 南西壁に3個検出された。

径15cm~20cm、深さ30cm~40cm、暗褐色の埋土で壁に沿ってならんでいる。北西壁や北東壁に柱穴状の凹みがあるが、南西壁の柱穴のように深くはない。また南東壁には柱穴も凹みも全く検出されていない。

(炉) 検出されなかった。

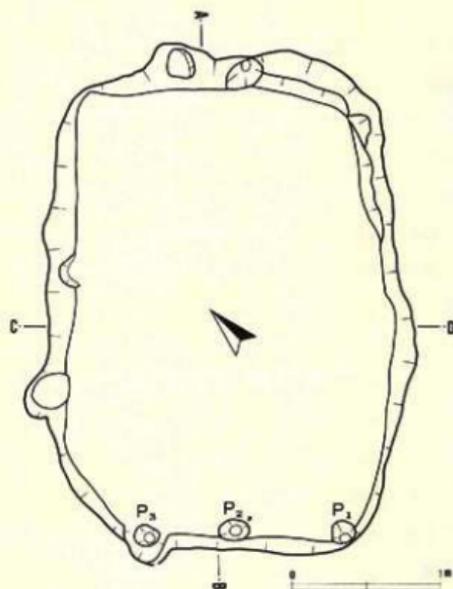
(重複) 住居址中央部にA III-15ピットがあり、当住居址がピットの上部を切っている。

遺物 (第80図; 写真図版33)

(土器) 北西壁の凹みとピットの上面とから縄文時代早期の破片(15、16)が出土している。また、埋土の中位から6と同一個体と思われる貝殻条痕のある破片が出土している。

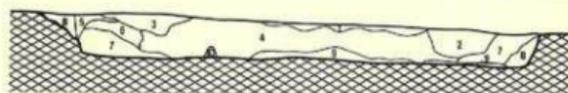
時期

時期決定資料が十分でないが、検



第7図 A III-1 住居址 平面

A L=200.200m

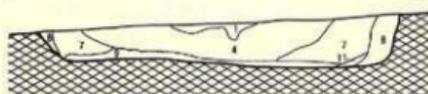


B

単位: cm

柱穴	上端径	下端径	深さ
P ₁	16×16	7×6	27
P ₂	21×15	8×8	40
P ₃	16×15	8×7	30

C L=200.200m



1. 黒色土 10YR 2/1 V層に似ている かない 浮石が多い
2. 黒褐色土 10YR 2/2 粘りなくかない 6に似ているが浮石が多い
3. におい黄褐色土 10YR 3/4 V層のブロック土
4. 暗褐色土 10YR 3/3 粘りあり かない 浮石が多い V層に似ているがやや暗い色である
5. 黒褐色土 10YR 2/3 中瀬浮石を含む 粘りなくかない
6. 黒褐色土 10YR 2/2 粘りなくかない
7. 黒褐色土 10YR 2/3 中瀬浮石を含む
8. 黒褐色土 10YR 2/2 やや粘りあり かない 浮石が多い V層が多い V層が凝る
9. 黒褐色土 10YR 2/2 かない 6に似る
10. 黄褐色土 10YR 3/6 見層のブロック土
11. 黒褐色土 10YR 2/3 中瀬浮石を含む

第8図 AⅡ-1住居址 断面

出状況と埋土の状況、住居址の形態等から縄文時代前期以前と考えられる。

AⅣ-2住居址

遺構 (第9図、写真図版5)

(検出状況) AⅣ1区、表土を除去した黒褐色土～褐色土層 (IV～V層) 面で石囲い炉が検出された。炉のレベルまでプランの確認を行ったが、斜面上方部側には住居址と認定する痕跡は検出されなかった。斜面下方には床面の一部と柱穴が検出された。

(形状、規模) いずれも不明である。

(埋土) 確認されたのは炉の上部や周囲にわずかに残る埋土と床面上の埋土のみで、炭化物を若干含む黒色土である。

(床面) ガリガリにかない褐色土層からなりほぼ平坦である。

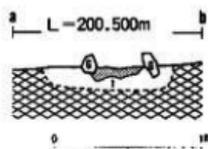
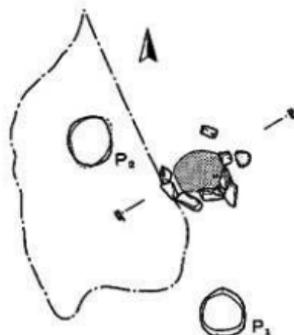
(柱穴) 2個検出された。径30cm～35cm、深さ24cm～38cm、炉から40cm～50cmの位置にある。埋土は黒色土である。

(炉) 一部破壊されているが、ほぼ円形に亜角礫が配列された石囲い炉である。規模は径50cmで、焼土の厚さは最大10cmである。

(重複) AⅣ-7ピットの上部を切り、ピット上に炉がつくられている。

時期

時期決定資料を欠き不詳であるが、炉の形態、周囲の遺物の出土状況等から縄文時代後・晩期と考えられる。



単位：cm

柱穴	上端径	下端径	深さ	底層高(m)
P ₁	33×32	27×25	38	199.955
P ₂	33×30	32×28	24	200.066

第9図 AⅡ-2住居址

(2) ビット

AⅡ-1ビット

遺構 (第10図、写真図版5)

(検出状況) AⅡ1区東辺の褐色土層(V層)面に、黒褐色～黒色土の楕円形プランとして検出された。AⅡ-2陥し穴状遺構の北端に接する。

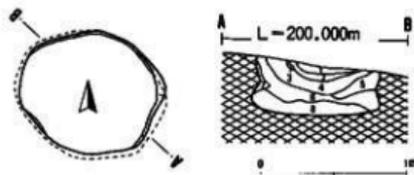
(形状) 平面形は開口部、頸部、底部とも楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

(規模) 開口部径0.95m×0.86m、頸部径0.93m×0.84m、底部径1.03m×0.88m、深さ0.36mである。

(埋土) 8層に細分されるが、全体的にしまっており、黄褐色浮石がわずかに混入する。4～6はさらに赤褐色浮石が混入する。3は粘土である。5、7を除いては混土状態である。

(壁) 褐色～黄褐色土層で上部は崩落のため外傾するが下部は内傾する。

(底面) 黄褐色土層で凹凸がある。木根穴と思われるものが壁寄りに多くある。



1. 黒色土 7.5YR 2/1 黄褐色土がわずかに混入
2. 明褐色土～褐色土 7.5YR 5/6～4/6 浮石が多い
3. 暗黄褐色土 10YR 7/6
4. 黒色土～黄褐色土 7.5YR 2/1～2/2 黄褐色土も混入
5. 黒褐色土 7.5YR 3/2
6. 黒褐色土 7.5YR 3/1 上位は暗褐色土その混土と
7. 暗褐色土 7.5YR 3/3
8. 黒褐色土 黒色土 明褐色土 7.5YR 2/2, 2/1, 5/6

第10図 AⅡ-1ビット

AⅢ-1ピット

遺構 (第11図, 写真図版6)

(検出状況) AⅢn区南辺、赤褐色浮石を含む明褐色土層(VI層)面で、黒褐色土の円形プランとして検出された。

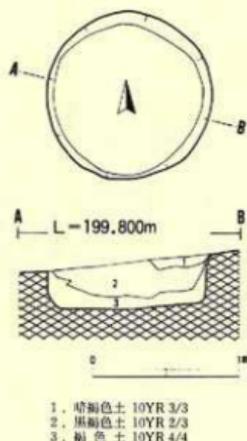
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.15m×1.12m、底部径1.02m、深さ0.31mである。

(埋土) 2層に大別される。上位が黒褐色土、下位が褐色土でいずれも赤褐色浮石が混入する。

(壁) 赤褐色浮石を含む明褐色～黄褐色土層で、ほぼ垂直に立ち上がる。

(底面) 黄褐色土層からなり、平坦でしまっている。



第11図 AⅢ-1ピット

AⅢ-2ピット

遺構 (第12図, 写真図版6)

(検出状況) AⅢn区中央、AⅢ-1ピットの北側、赤褐色浮石を含む黄褐色土層(VI層)面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。北西側に赤褐色浮石混入の暗褐色埋土の遺構があり、その南東半分を切るものである。

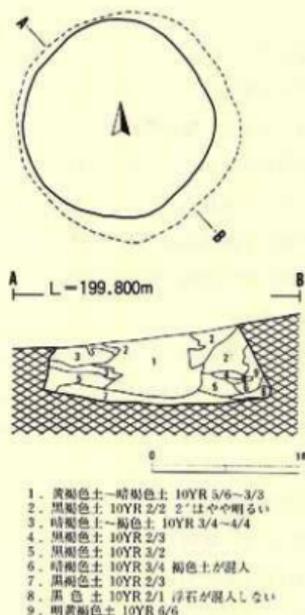
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

(規模) 開口部径1.30m×1.26m、底部径1.48m深さ0.48mである。

(埋土) 中央が褐色土(V層)起源の埋土、壁寄りが同じく褐色土(V層)起源の汚れの強い土と黒褐色土との互層、底面に黒褐色～黒色が堆積している。

(壁) 黄褐色土層で、全面内傾する。下部のためか崩落がなく内傾している。

(底面) 礫が表出するため南半に凹凸があるが、北半は明黄褐色土の平坦面を示す。全体に中央に向かって



第12図 AⅢ-2ピット

やや傾斜する。

遺物 (第82図・写真図版35)

(土器) 埋土上位から縄文時代前期の破片(47)が出土している。

AⅢ-3ピット

遺構 (第13図・写真図版6)

(検出状況) AⅢ-2ピットに切られ、その北西に位置する。黄褐色土層(VI層)面で暗褐色土の不整長方形プランとして検出された。

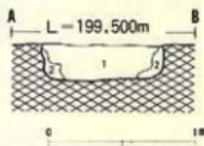
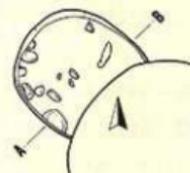
(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形状を示す。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径0.85m、底部径0.80m、深さ0.24mである。

(埋土) 赤褐色、黄褐色浮石が混入する暗褐色土が大半を占める。

(壁) 黄褐色土層で、全面がほぼ直立する。

(底面) 北西半に掘り過ぎがあつて詳細は不明であるが、ほぼ平坦で礫が表出するものと思われる。



1. 暗褐色土 10YR 3/3
2. 黄褐色土 10YR 5/6と暗褐色土 10YR 3/4との混土

第13図 AⅢ-3ピット

AⅢ-4ピット

遺構 (第14図・写真図版7)

(検出状況) AⅢm区調査区境界線際の赤褐色浮石を含む黄褐色土層(VI層)面に黒褐色土の円形プランとして検出された。

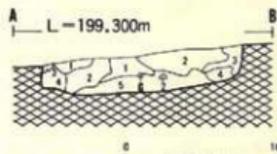
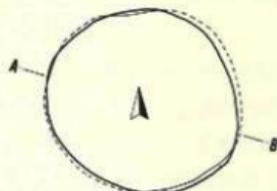
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

(規模) 開口部径1.38m×1.26m、底部径1.36m×1.31m、深さ0.27mである。

(埋土) 5層に細分される。全層とも微量ながら赤褐色浮石が混入する。3、4は壁の崩落土である。

(壁) 赤褐色浮石を含む黄褐色土層で柔らかく礫が出ているところもある。一部直立する部分もあるがほぼ内湾する。

(底面) 明黄褐色～灰白色土層で、斜面なりにやや傾斜



1. 黒褐色土 7.5YR 3/2 灰オリーブ色の浮石を含む
2. 黒色土 7.5YR 2/1 炭化物を含む
3. 褐色土～明褐色土 7.5YR 4/6～5/6
4. 褐色土～暗褐色土 7.5YR 4/3～3/4
5. 暗褐色土 7.5YR 3/4

第14図 AⅢ-4ピット

する。隙が多数表出し、他のピットにくらべて凹凸が激しい。

AⅢ-5ピット

遺構 (第15図、写真図版7)

(検出状況) AⅢ f 区、赤褐色浮石を含む褐色～黄褐色土層(V～VI層)面で、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状であるが、下部のみのためその形状が表れない部分が多い。

(規模) 開口部径0.88m×0.86m、底部径0.88m×0.87m、深さ0.17mである。

(埋土) 3層に細分されるが、2に赤褐色浮石がわずかに混入する。

(壁) 褐色～黄褐色土層で内湾する。

(底面) 隙を含む黄褐色土層で、細かい凹凸をもつがほぼ平坦といえる。壁寄りには中央に向かってやや傾斜する。

遺物 底面から70と同一の土器破片が出土している。

AⅢ-6ピット

遺構 (第16図、写真図版7)

(検出状況) AⅢ n～o 区中間、赤褐色浮石を含む褐色土層(V層)面で、黒色土の円形プランとして検出された。

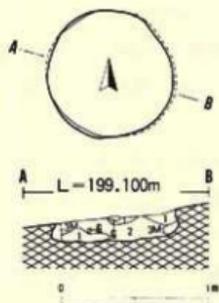
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.21m×1.16m、底部径0.90m×0.84m、深さ0.56mである。

(埋土) 5層に細分されるが、色調の相違だけで組成はほぼ同じである。全体にやや粘性がありしまりのある埋土である。

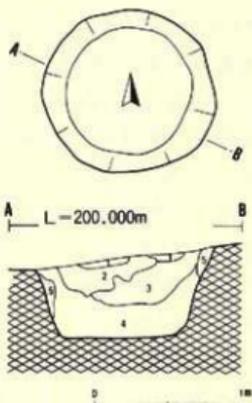
(壁) 褐色～黄褐色土層で、全体に外傾する。

(底面) 黄褐色土層で柔らかい。隙が表出し凹凸がある部分(南半)もあるが、全体として平坦である。



1. 黒色土 10YR 2/1
2. 黒褐色土 10YR 2/2
3. 黒褐色土 10YR 2/3 と 褐色土 7.5YR 4/4 との混土

第15図 AⅢ-5ピット



1. 暗褐色土 10YR 3/3
2. 黒褐色土 10YR 2/2
3. 暗褐色土 10YR 3/3 浮石が多い
4. 濃い黄褐色土 10YR 5/4 と 暗褐色土 10YR 3/3 との混土
5. 褐色土 10YR 4/4

第16図 AⅢ-6ピット

AⅢ-7ピット

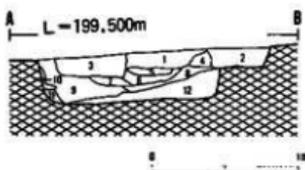
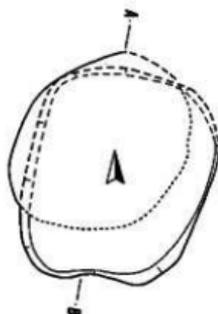
遺構 (第17図, 写真図版 8)

(検出状況) AⅢ k 区、黒褐色～暗褐色土層 (V層) 面で、黒色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状を示す。

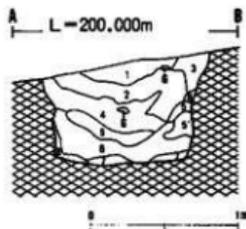
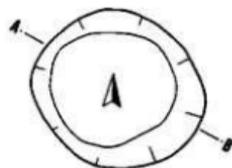
(規模) 開口部径1.21m×1.10m、底部径0.87m×0.81m、深さ0.73mである。

(埋土) 8層に細分される上位が黒色～黒褐色土、中位に黒色土をはさみ、下位が黄褐色土となる。いずれも赤褐色



1. 暗褐色土 10YR 3/4 浮石が多い
2. 暗褐色土 10YR 3/4 黄褐色土が混入
3. 黄褐色土 10YR 2/2
4. 黒褐色土 10YR 2/2
5. 黒色土 10YR 2/1
6. 暗褐色土 10YR 3/4
7. 褐色土 10YR 4/4 赤色浮石が多い
8. 黒褐色土 10YR 2/3
9. 褐色土 10YR 4/4と黒褐色土 10YR 2/2との混土
10. 黄褐色土 10YR 5/6
11. 黒褐色土 10YR 2/3
12. 黄褐色土 10YR 5/6 黒褐色土が混入

第18図 AⅢ-8ピット



1. 黒色土 10YR 2/1
2. 黒褐色土 10YR 3/2 浮石が多い
3. 暗褐色土 10YR 3/4
4. 褐色土 10YR 4/4 礫が混入
5. 黒褐色土 10YR 2/2 5'は黄褐色土が混入
6. 黄褐色土 10YR 5/6と暗褐色土 10YR 3/4との混土
7. 黄褐色土 10YR 5/6
8. 黄褐色土 10YR 5/8

第17図 AⅢ-7ピット

浮石が混入する。底面に炭化物が出土する。

(壁) 黒褐色土層、黄褐色土層、最下部が明黄褐色土層 (礫混じり) で、下部は

ほぼ直立する。

(底面) 明黄褐色砂質土層で、礫が表出し凹凸がある。

AⅢ-8ピット

遺構 (第18図, 写真図版 8)

(検出状況) AⅢ j 区、赤褐色浮石を含む黄褐色土層 (VI層) 面で、暗褐色～黒褐色土の不整形円形プランとして検出された。

(形状) 周辺に現代の小ピットが数基あり、当遺構も一部同様のピットに切られているため、原形は推定である。平面形が隅丸長方形、断面形がビーカーないし皿形である。

(規模) 開口部径推定1.50m×1.30m、底部径推定

1.40m×1.20m、深さ0.13mである。

(埋土) 1～5が当遺構の埋土である。このうち2、3は小ピット等による擾乱部である。

(壁) 黄褐色土層で北東壁に掘り過ぎがある。浅く、やや外傾する部分もあるが全体的に直立する。

(底面) 黄褐色土層、AⅢ-10ピットの埋土で、地山面は平坦であるが、斜面に沿ってやや傾斜する。

AⅢ-9ピット

遺構 (第19図、写真図版8)

(検出状況) AⅢe区調査区域の、赤褐色浮石を含む黄褐色～赤褐色土層(VI層)面に、柔らかい黒色土の半円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はプラスチック状である。

(規模) 開口部径1.14m、底部径1.20m、深さ0.30mである。

(埋土) 壁寄りに明褐色土が入るがほぼ単層である。褐色土と黒色土が混じり、色調の違いは認められるが線引き不能である。

(壁) 黄褐色土層、明黄褐色土層で内傾する。全体に良好な残存状況である。

(底面) 明黄褐色土層で、礫が表出するため凹凸が感じられるが、全体としては平坦である。

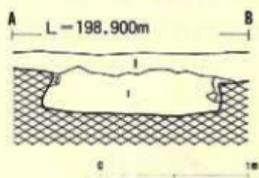
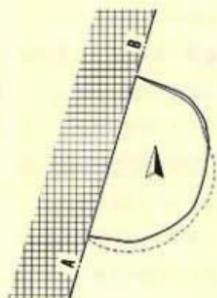
AⅢ-10ピット

遺構 (第18図、写真図版8)

(検出状況) AⅢ-8ピットを掘り下げた段階で、さらに下位に暗褐色土等があったことからピットと認定したものである。

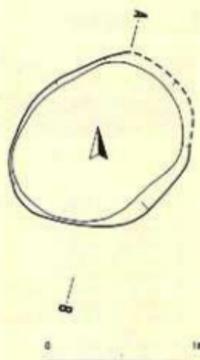
(形状) 不注意によって掘り過ぎたが、平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカー状を呈している。

(規模) 開口部径は推定1.36m×1.10m、底部径1.22m×0.93m、



1. 黒色土 10YR 1.7/1と褐色土 10YR 4/6との混土
2. 明褐色土 7.5YR 5/6

第19図 AⅢ-9ピット



第20図 AⅢ-10ピット

深さ0.34mである。

(埋土) 第20図6～12が当遺構の埋土である。黒褐色土と褐色～黄褐色との互層ないし混土状態である。

(壁) 黄褐色～明黄褐色土層で、ほぼ直立する。

(底面) 明黄褐色砂質土層、礫混じりで、中央に向かってやや傾斜する。

AⅢ-11ピット

遺構 (第21図, 写真図版9)

(検出状況) AⅢo区のIV区際、褐色土層(V層)面で、黒色土の楕円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示している。

(規模) 開口部径1.28m×1.16m、底部径1.40m×1.23m、深さ0.42mである。

(埋土) 5層に細分されるが、主体は黒色土である。壁際と下位の埋土は地山黄褐色土との混土状態である。

(壁) 褐色～黄褐色土層で、全体として内傾するが、崩落があって凹凸が激しい。直立する部分がある。

(底面) 黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物 (第97図, 写真図版49)

(石器) 埋土下位から幅の狭い側面に磨面をもつ棒状の磨石(43)が出土している。

AⅢ-12ピット

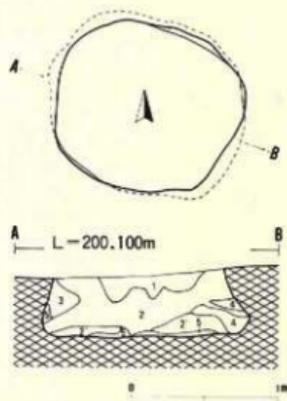
遺構 (第22図, 写真図版9)

(検出状況) AⅢd区中央、中礫浮石層(Ⅲ層)を除去している際に硬くなった中礫浮石細粒部分が確認された。さらにその下位に粗粒部分があり、凹地であると判断された。精査の結果ピットとなったものである。

(形状) 平面形は五角形状の不整形、断面形はビーカー状を示している。

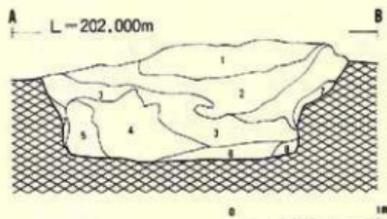
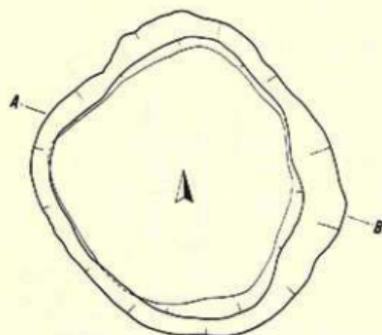
(規模) 開口部径2.07m×1.88m、中端径1.77m×1.64m、底部径1.65m×1.58m、深さ0.80mである。

(埋土) 上位が中礫浮石、中位が黒色土から暗褐色土、下位は褐色土となるが、底面上と壁寄



1. 黒色土 7.5YR 2/1
2. 黒色土 7.5YR 2/1 浮石がやや多い2'は褐色土が混入
3. 暗褐色土 10YR 3/3 褐色土が混入
4. 褐色土 10YR 4/4 黄褐色土が混入
5. 明褐色土 7.5YR 6/6 黒褐色土が混入

第21図 AⅢ-11ピット



1. に近い黄色 2.5YR 6/3 ~ 淡黄色 5Y 8/4 中礫浮石層 上半は細粒団結 下半は粗粒
2. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い 2'は褐色味がある
3. 暗褐色土 10YR 3/4
4. 褐色土~に近い黄褐色土 10YR 4/6~4/3
5. 黒褐色土 10YR 2/2 に近い黄褐色土が混入
6. 黒褐色土 10YR 2/2 と褐色土 10YR 4/8 との混入
7. 褐色土 10YR 4/6 黄褐色土が混入
8. 黄褐色土 10YR 5/8 黒褐色土が混入

第22図 A III-12ピット

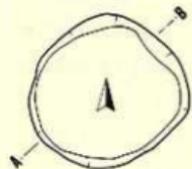
りに黒褐色土が堆積する。下位と壁際は混土状態である。

(壁) 上部から黒褐色土層、褐色~黄褐色土層で、下部は直立するが、上部は外傾する。

(底面) 明黄褐色土層で、中央部がやや盛り上がるが全体としては平坦である。

遺物(第81図, 写真図版34)

(土器) 縄文時代前期の破片(35)が埋土中位から出土している。



A III-13ピット

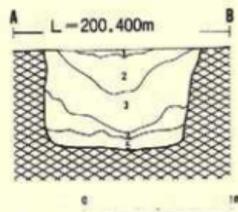
遺構(第23図, 写真図版9)

(検出状況) A III P区南東隅の観察用ベルト断面に中礫浮石層の下垂する部分があり、遺構の予想をしてV層面まで下げたところ、黒色土の楕円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.08m×1.00m、底部径0.94m×0.89m、深さ0.71mである。

(埋土) 5層に細分される。1は中礫浮石が上面を被い、または混入する黒褐色土である。2は白色化した浮石を多く含



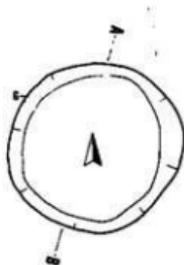
1. 黒褐色土 10YR 2/2 中礫浮石が混入
2. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い
3. 暗褐色土 10YR 3/3 浮石が多くに多い
4. 褐色土 10YR 4/4
5. に近い黄褐色土 10YR 4/3

第23図 A III-13ピット

む層でIV層に似る埋土である。

(壁) 上部から暗褐色～黒褐色土層、褐色～黄褐色土層、明黄褐色土層で、ほぼ直立する。

(底面) 明黄褐色土層からなり、全体として平坦であるが、北東部分がなだらかに壁に続き境界が明瞭でない。



A III-14ピット

遺構 (第24図, 写真図版10)

(検出状況) A III I～P区東端の褐色土層(V層)上面で、黒色土の楕円形プランとして検出された。

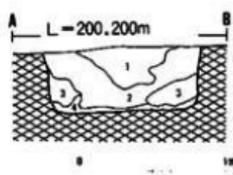
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.20m×1.15m、底部径1.04m×0.96m、深さ0.45mである。

(埋土) 4層に細分される。1～3はかたくしまり、4は柔らかい。

(壁) 暗褐色土～黄褐色土層で、全体としてやや外傾するか南壁のみ直立する。

(底面) 黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



1. 黒色土 10YR 1.7/1 白色浮石が多い
2. 黒色土～黒褐色土 10YR 2/1～2/2 赤色浮石が多い
3. 暗褐色土 10YR 3/4
4. 褐色土 10YR 4/6

第24図 A III-14ピット

A III-15ピット

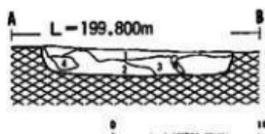
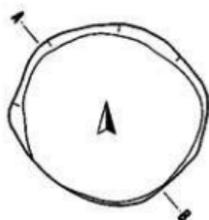
遺構 (第25図, 写真図版10)

(検出状況) A III I区中央部に位置するA III-1住居址の床面の汚れからピットとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状ないし皿状を呈する。

(規模) 開口部径1.30m×1.23m、底部径1.21m×1.16m、深さ0.18mである。

(埋土) 5層に細分される。1は住居址の床面にあたり、ガリガリにかたくなっているものである。2、3は比較的柔らかい。5は木根の痕跡である。



1. 黒褐色土 10YR 2/2とよい黄褐色土 10YR 4/3との凝土。浮石がとくに多い(赤色・白色浮石)
2. 褐色土 10YR 4/6 赤色浮石が多い
3. 暗褐色土 10YR 3/3
4. 黒色土 10YR 2/1
5. 黒褐色土 10YR 2/2

第25図 A III-15ピット

(壁) 明褐色土層で、やや外傾する。

(底面) 明褐色土層で、平坦である。

A III-16ピット

遺構 (第26図, 写真図版10)

(検出状況) A III 1区北東隅の褐色土層 (V層) 面に黒褐色土の楕円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

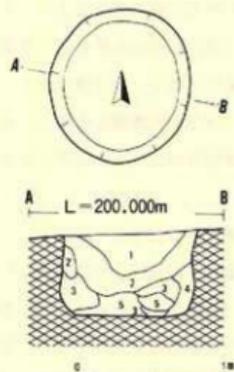
(規模) 開口部径1.05m×0.96m、底部径0.88m×0.80m、深さ0.57mである。

(埋土) 5層に細分される。1は基本土層のIV層に、2はV層に似ている。3～5には浮石が混入しない。

(壁) 上部から褐色土層、明褐色土層、灰白色土層となり、直立する。

(底面) 灰白色砂質土層で、蹠が表出する点をのぞけばほぼ平坦である。

遺物 埋土上位から、15と同一土器の無文部破片が出土している。



1. 黒褐色土 10YR 2/2-2/3 浮石が多い
2. 暗褐色土 10YR 3/3
3. 褐色土~にぶい黄褐色土 10YR 5/8-4/3
4. 褐色土 10YR 4/4
5. 褐色土 10YR 4/4とにぶい黄褐色土 10YR 5/4との混土

第26図 A III-16ピット

A III-17ピット

遺構 (第27図, 写真図版11)

(検出状況) A III k区東辺中央、褐色土層 (VI層) 面で、黒褐色土の円形プランとして検出された。

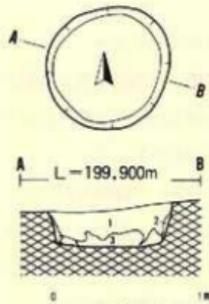
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状を示している。

(規模) 開口部径0.88m×0.83m、底部径0.76m×0.72m、深さ0.25mである。

(埋土) 3層に細分される。1は基本土層のIV~V層に似ている。

(壁) 褐色~明褐色土層で、北東部のみ外傾するが他は直立する。

(底面) 明褐色土層からなり、平坦である。



1. 黒褐色土 10YR 2/2-2/3 白色・赤色浮石が多い
2. 褐色土 7.5YR 4/6
3. 褐色土 7.5YR 4/4

第27図 A III-17ピット

AV-1ピット

遺構 (第28図, 写真図版11)

(検出状況) AIVc区、赤褐色浮石を含む暗褐色土層 (V層) 面で、黒褐色～黒色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部が円形、底部が楕円形を呈する。断面形はピーカー状である。

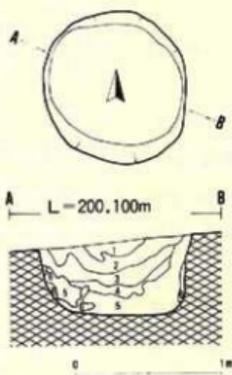
(規模) 開口部径1.06m×0.98m、底部径0.98m×0.84m、深さ0.53mである。

(埋土) 6層に細分されるが、ほぼ同質の埋土で、全てに赤褐色浮石が混入する。埋土全体がかたくしまっている。

(壁) 上部から暗褐色土層、褐色土層、黄褐色土層であり、東側は中央部まで直立する。本来はピーカー状に直立すると思われるが、南側はやや外傾する。

(底面) 黄褐色土層で柔らかい。ほぼ平坦である。

遺物 埋土中位から7と同様の土器破片が出土している。



1. 黒色土 10YR 2/1
2. 黒褐色土 10YR 2/3 浮石がとくに多い
3. 暗褐色土 10YR 3/4
4. 褐色土 10YR 2/3
5. 暗褐色土 10YR 3/4 黄褐色土が混入
6. 黄褐色土 10YR 5/6

第28図 AV-1ピット

AV-2ピット

遺構 (第29図, 写真図版11)

(検出状況) AIVp区東辺の黒褐色土層 (IV層)～褐色土層 (V層) 面に、中級浮石が載る黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.28m×1.24m、底部径1.19m×1.16m、深さ0.70mである。

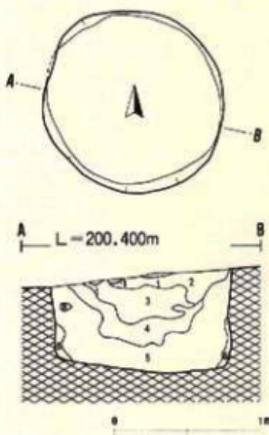
(埋土) 最上位に中級浮石層が載り、上位が黒褐色～黒色土、中下位が暗褐色～褐色土となる。

(壁) 褐色土層、黄褐色土層で、ほとんど直立する。

(底面) 明黄褐色土層で、西半は東に向かって傾斜するが、東半はほぼ平坦である。

遺物 (第80・101図, 写真図版33・51)

(土器) 埋土上位から、表裏縄文の土器片 (22) が出土し



1. 浅褐色土 2.5Y 7/4 中級浮石層
2. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石がとくに多い
3. 黒色土 10YR 2/1
4. 暗褐色土 10YR 3/4
5. 褐色土 10YR 4/4
6. 明褐色土 7.5YR 5/8

第29図 AV-2ピット

ている。

(石器) 石核 (71) が出土している。

AIV-3ピット

遺構 (第30図・写真図版12)

(検出状況) AIV c 杭、黄褐色土層 (VI層) 面を除去した段階で、黒褐色土の半円形プランとして検出された。

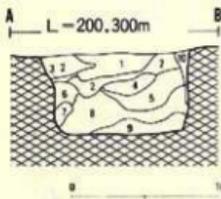
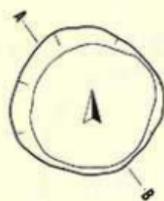
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

(規模) 開口部径1.20m、底部径1.13m×1.10m、深さ0.55mである。

(埋土) 5層に細分されるが、2は攪乱部分であり、3は壁の一部とも考えられる。したがって、上位が黒褐色土、中位が暗褐色土、下位が混土となり、いずれも柔らかい。

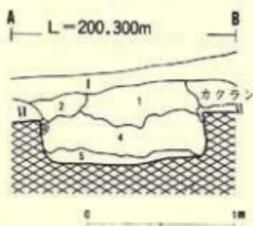
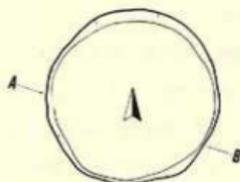
(壁) 黄褐色土層で、北壁のみ崩落したのか直立状態を示すが、他は内湾している。

(底面) 黄褐色土層からなるが、北側は壁との境界が不明瞭である。全体として平坦であり、中央に向かってやや傾斜する。



1. 黒色土 10YR 2/1
2. 黒褐色土 10YR 2/3
3. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石が混入しない
4. 黒褐色土 10YR 2/2
5. 暗褐色土 10YR 3/3
6. 黒褐色土 10YR 3/2
7. 黒色土 10YR 2/1 浮石が混入しない
8. 黒褐色土 10YR 3/2
9. 褐色土 10YR 4/4
10. 黄褐色土 10YR 5/6

第31図 AIV-4ピット



1. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
2. 黒褐色土と褐色土 攪乱
3. 褐色土 10YR 4/6
4. 暗褐色土 10YR 3/3
5. 暗褐色土 10YR 3/3と黄褐色土 10YR 5/6との塊状混土

第30図 AIV-3ピット

AIV-4ピット

遺構 (第31図・写真図版12)

(検出状況) AIV c 区南東隅の褐色～黄褐色土層 (V～VI層) 面に黒色～黒褐色土の不整円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.03m×1.00m、底部径0.90m×0.83m、深さ0.56mである。

(埋土) 10層に細分されるが、3、7、9、10を除き土性は同様である。いずれも赤褐色浮石が混入し上位がしまっている。

(壁) 上部から褐色土層、黄褐色土層、明黄褐色土層で、ほぼ

直立する。

(床面) 明黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物 (第82図、写真図版35)

(土器) 縄文時代前期の破片 (45) が埋土上位から、出土している。

AIV-7ピット

遺構 (第32図、写真図版12)

(検出状況) AIV 1 区の黄褐色土層 (VI層) 面にAIV-2 住居の炉と重複し、黒色土の楕円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカーないし皿形を呈する。

(規模) 開口部径1.42m×1.17m、底部径1.31m×0.96m、深さ0.16mである。

(埋土) 3層に細分されるが、3は後世の柱穴である。

(壁) 黄褐色土層で、外傾する。

(底面) 黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物 (第91図、写真図版44)

(土器) 沈線文の細片と縄文の施文される (196) 破片が出土している。

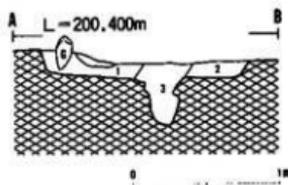
AIV-8ピット

遺構 (第33図、写真図版13)

(検出状況) AIV 8 区、黄褐色土層 (VI層) 面で、黒褐色～黒色土の円形プランとして検出された。

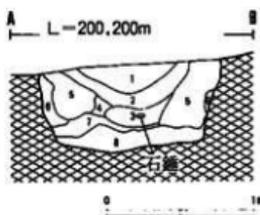
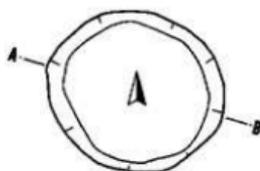
(形状) 平面形は開口部が楕円形、底部が円形を呈する。断面形はビーカー状を示している。

(規模) 開口部径1.24m×1.10m、底部径1.01m×0.95m、深さ0.58mである。



1. 黒褐色土 10YR 2/2
2. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い
3. 黒褐色土とに黄褐色土との混土

第32図 AIV-7ピット



1. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
2. 褐色土 10YR 4/4 黄褐色土が混入
3. 暗褐色土 10YR 3/3
4. におい黄褐色土 10YR 5/4
5. 黒色土 10YR 1.7/1 黄褐色土が混入
6. 明褐色土 7.5YR 5/6-5/8
7. 褐色土 10YR 4/6
8. 黄褐色土 10YR 5/6-5/8

第33図 AIV-8ピット

(埋土) 8層に細分される。1、2のみかたく他は柔らかい。3には石鍾が含まれる。

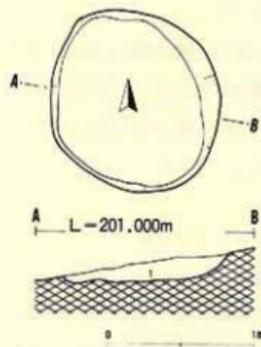
(壁) 黄褐色～明褐色土層で、外傾する。

(底面) 明褐色土層で、中央に向かって傾斜する。

遺物 (第81・100図、写真図版34・51)

(土器) 縄文時代前期の破片 (36) が出土している。

(石器) 埋土の3層から7個の石鍾が出土している。いずれも楕円形の鏢の両端を打ち欠いてつくられている。



1. 黒褐色土 10YR 2/2 黄褐色堆土が混入

第34図 B II-1ピット

B II-1ピット

遺構 (第34図、写真図版13)

(検出状況) B II f 区中央の赤褐色浮石を含む褐色土層 (VI層) 面に黒褐色土の不整形円形プランとして検出された。

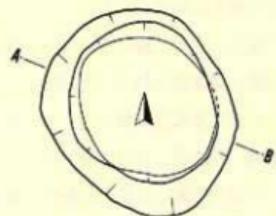
(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形は皿状を呈する。

(規模) 開口部径1.33m×1.20m、底部径1.24m×1.02m、深さ0.15mである。

(埋土) 柔らかい黒褐色土の単層であり。

(壁) 褐色土層で、凹凸が激しい。垂直に立つ部分や外傾する部分がある。

(底面) 褐色土層からなり、凹凸がみられる。



B II-2ピット

遺構 (第35図、写真図版13)

(検出状況) B II i 区中央の褐色土層 (V層) 面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.46m×1.24m、中央部径1.12m×0.98m、底部径1.04m×0.91m、深さ0.86mである。

(埋土) 7層に細分されるが、中位の2～5層は同様の土性である。最下位は粘土質土である。

1. 黒褐色土 10YR 2/2
2. 暗褐色土 10YR 3/4 黒褐色土が混入
3. 黒褐色土 10YR 3/7
4. 黒褐色土 10YR 3/2
5. 暗褐色土 10YR 3/4 黒褐色土が混入
6. 褐色土 10YR 4/6
7. 濃い褐色土 7.5YR 5/4 灰白色粘土質土が混入

第35図 B II-2ピット

(壁) 上部から褐色～黄褐色土層となり、その間に赤褐色浮石層をはさみ黄褐色土層、最下部が明黄褐色土層で、上部は外傾するが下部は直立する。

(底面) 明黄褐色粘土質土層で、平坦である。

B II-3 ビット

遺構 (第36図, 写真図版14)

(検出状況) B II i 区北西の褐色土層 (V層) 面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部が楕円形、頸部、底部が円形を呈する。断面形はフラスコを呈する。

(規模) 開口部径1.36m×1.22m、頸部径1.20m×1.18m、底部径1.34m×1.28m、深さ0.70mである。

(埋土) 5層に細分されるが、中央部の黒褐色土と壁寄りの暗褐色土に大別される。

(壁) 上部から褐色土～黄褐色土層、赤褐色浮石層、明褐色土層となり、上部は不整に崩落してきている。下部は内傾するが、赤褐色浮石層部分が崩落し扶れている。

(底面) 明褐色土層からなり、平坦である。

B II-4 ビット

遺構 (第37図, 写真図版14)

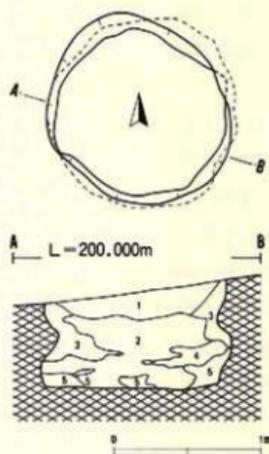
(検出状況) B II m 区北東寄りの黒褐色～褐色土層 (IV～V層) 面に、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

(規模) 開口部径0.99m×0.90m、底部径0.88m×0.82m、深さ0.39mである。

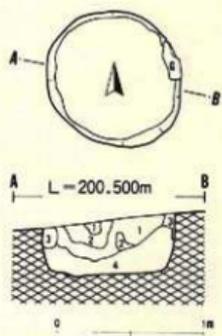
(埋土) 4層に細分されるが、上位が同質の黒色～黒褐色土、下位が混土となる2層に大別される。

(壁) 黒褐色～褐色土層、黄褐色土層でほぼ直立するが、北西部と南東部がやや外傾する。北東部に礫が突出している。



1. 黒褐色土 10YR 2/3
2. 黒褐色土 10YR 2/2
3. 暗褐色土 10YR 3/4
4. 暗褐色土 10YR 3/3
5. 褐色土 10YR 4/4

第36図 B II-3 ビット



1. 黒褐色土 7.5YR 3/1
2. 黒色土 7.5YR 1.7/1
3. 黒褐色土 7.5YR 3/2
4. 暗褐色土 7.5YR 2/3と褐色土 7.5YR 4/6との混土

第37図 B II-4 ビット

(底面)黄褐色土層からなり、凹凸がある。南西部、北東部は中央に向かってやや傾斜する。

B II-5ピット

遺構 (第38図、写真図版14)

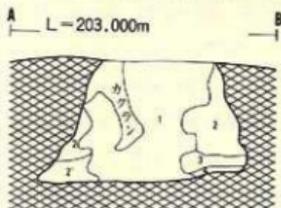
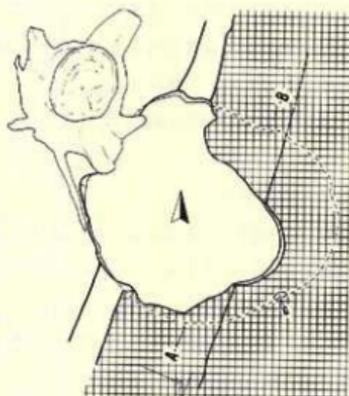
(検出状況) B II c 区南東隅の調査区域外にかかる。斜面を地山黄褐色土上面まで掘り下げた段階で黒褐色土部分が確認され、精査の結果ピットと判明した。

(形状) 平面形は削平や木根による擾乱によって原形を把握しにくい、底部は楕円形を呈している。断面形はフラスコ状である。

(規模) 底部径1.74m×1.48m、深さ0.85m(斜面上位では1.25mを測る)である。

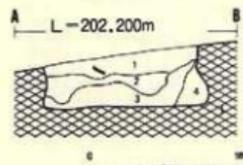
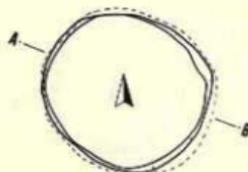
(埋土) 4層に細分されるが、1~3層は混土である。壁寄りには地山の崩落土が多い。

(壁) 黄褐色土層で、内傾する。東壁下部が崩落のため挟り込みが深くなっている。



1. 黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土 10YR 2/2, 3/4, 5/8の混土。浮石が多い
2. 黄褐色土 10YR 3/6 暗褐色土が混入。2'がより多く混入
3. 暗褐色土 10YR 3/4 黄褐色土が混入
4. 黄褐色土 10YR 5/8

(底面) 黄褐色土層からなり、凹凸がある。



1. 黒褐色土 7.5YR 3/1
2. 黒色土 7.5YR 1.7/1
3. 黒褐色土 7.5YR 2/2
4. 暗褐色土 7.5YR 2/3との褐色土 7.5YR 4/4との混土

第39図 B III-1ピット

B III-1ピット
遺構 (第39図、

写真図版15)

(検出状況) B III g 区南西部の表土を除去した暗褐色土層(III層)面で、黒色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、頸部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

(規模) 開口部径1.15m×1.04m、頸部径1.08m×1.00m、底部径1.20m×1.12m、深さ0.37mである。

(埋土) 4層に細分される。1層は中東浮石層を起源とすると思われるが上面に地山の褐色土のみられる部分もある

第38図 B II-5ピット

る。この層から土器が出土している。

(壁) 上部から暗褐色土層、黒褐色土層、褐色土層となり、内湾する。斜面上方は崩落のためやや外反する。

(底面) 褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物 (第92図, 写真図版45)

(土器) 深鉢の口縁部～体部下半の破片 (201) で、縄文のみが施文されている。

BⅢ-2ピット

遺構 (第40図, 写真図版15)

(検出状況) BⅢe区南東隅の暗褐色土～褐色土層 (V～VI層) 面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

(規模) 開口部径1.09m×1.07m、底部径0.98m×0.96m、深さ0.42mである。

(埋土) 4層に細分される。上位はやわらかく下位はかたい。

(壁) 暗褐色土層、褐色土層で、ほぼ直立する。

(底面) 黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

BⅢ-3ピット

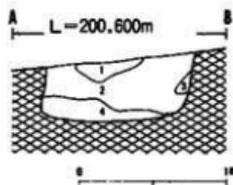
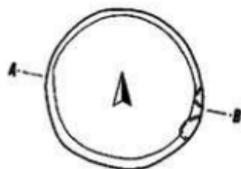
遺構 (第41図, 写真図版15)

(検出状況) BⅢi区東辺のBⅢ-2住居地の周辺を掘り下げたところ、その断面に中礫浮石層の落ち込み、さらにその下位に黒色土が検出された。これによりピットと判明したものである。

(形状) 平面形は中端、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

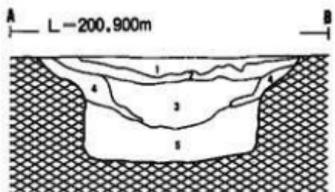
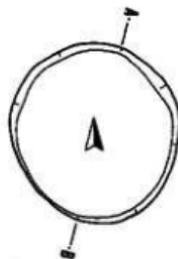
(規模) 中端径1.25m×1.15m、底部径1.14m×1.07m、深さ0.73mである。

(埋土) 5層に細分される。1層は中礫浮石層、



1. 黒色土 10YR 1/7/1
2. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
3. 褐色土 10YR 4/4
4. 暗褐色土 7.5YR 3/4 浮石が多い

第40図 BⅢ-2ピット



1. 黄色～暗オリーブ褐色 2.5Y 7/8-3/3 中礫浮石層
2. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
3. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い
4. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
5. 暗褐色土 10YR 3/4 浮石が多い

第41図 BⅢ-3ピット

2層以下は白色浮石の多い埋土である。

(壁) 上部から黒褐色土層、暗褐色土層、黄褐色土層であり、下部は直立する。

(底面) 黄褐色土層からなり、平坦である。

B III-4 ビット

遺構 (第42図, 写真図版16)

(検出状況) B III i 区西辺の暗褐色土層 (V層) 面に、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

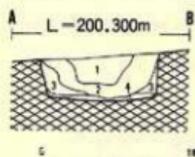
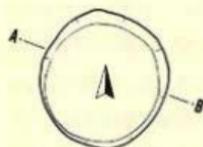
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径0.91m×0.86m、底部径0.81m×0.77m、深さ0.30mである。

(埋土) 4層に細分される。1、2層は柔らかく、他はかたい。

(壁) 暗褐色～褐色土層で、北壁のみやや外傾し、他は直立する。

(底面) 明褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



1. 黒色土 10YR 1.7/1 白色浮石が多い
2. 黒褐色土 10YR 2/2 白色浮石が多い
3. 黒褐色土 10YR 2/3 白色浮石が多い
4. 褐色土 10YR 4/4

第42図 B III-4 ビット

B IV-4 ビット

遺構 (第43図, 写真図版16)

(検出状況) B IV d 区南西辺の調査区境界線際に位置する。緩斜面上位のため表土、耕作土を除去したのみで黄褐色土層 (VI層) となり、その面で黒褐色土の円形プランとして検出された。

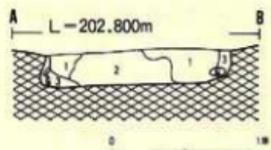
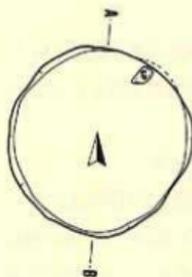
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

(規模) 開口部径1.32m×1.26m、底部径1.23m×1.18m、深さ0.25mである。

(埋土) 3層に細分される。いずれも地山の黄褐色土がまばらに混入する。

(壁) 黄褐色土層で、内湾する。東側上部を溝に切られている。

(底面) 黄褐色土層で、中央は平坦であるが壁寄りには椀状になる。



1. 黒褐色土 10YR 2/2
2. 暗褐色土 10YR 3/4
3. 暗褐色土 10YR 3/3

第43図 B IV-4 ビット

BIV-5ピット

遺構 (第44図, 写真図版16)

(検出状況) BIVe区南東隅、表土を除去した段階で乾きが遅いことから遺構の予想をした。中層浮石層まで掘り下げた段階で黒色土の円形プランとして検出された。

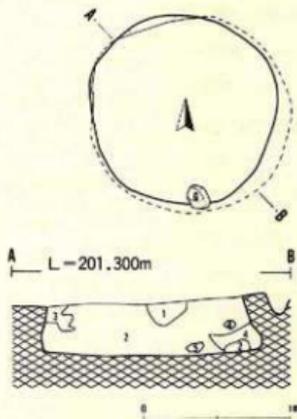
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

(規模) 開口部径1.30m、底部径1.45m×1.37m、深さ0.36mである。

(埋土) 5層に細分されるが、主体は黒褐色土である。

(壁) 上部から中層浮石層、黒褐色土層で、一部直立状になる部分もあるがほぼ内傾する。

(底面) 暗褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



1. 黒色土 10YR 2/1
2. 黒褐色土 10YR 2/2
3. 浅黄色～濃い黄色 2.5Y 7/3～6/4 中層浮石主体
4. 暗褐色土 10YR 3/4 浮石が多い
5. 明褐色土 7.5YR 5/8 浮石が多い

第44図 BIV-5ピット

BIV-6ピット

遺構 (第45図, 写真図版17)

(検出状況) BIVm区南東部、黒褐色土を除去した褐色土層(V層)面で、黒褐色土の円形プランとして検出された。

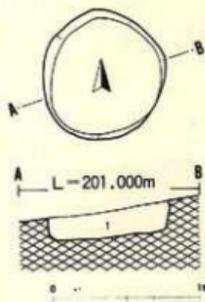
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状を呈するがフラスコ状の可能性もある。

(規模) 開口部径0.89m×0.83m、底部径0.82m×0.74m、深さ0.18mである。

(埋土) 地山のブロック土が混入する黒褐色土の単層である。

(壁) 褐色土層で、斜面上位(東壁)がやや内湾するが他は直立する。

(底面) 褐色土層で、ほぼ平坦であるが斜面に沿ってやや傾斜する。



1. 黒褐色土 10YR 2/2

第45図 BIV-6ピット

BIV-7ピット

遺構 (第46図, 写真図版17)

(検出状況) BIVa区、IV層の黒褐色土を除去した段階で、中

礫浮石が数か所のブロック状をなす黒い円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。

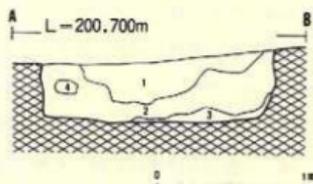
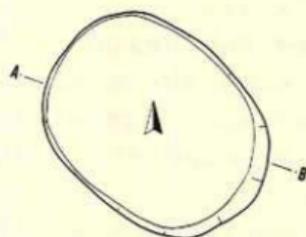
断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.65m×1.25m、底部径1.50m×1.18m、深さ0.41mである。

(埋土) 4層に細分される。1層は柔らかく浮石が多い。3層は汚れた地山黄褐色土である。

(壁) 黒褐色土層、褐色～黄褐色土層で、東壁がやや外傾するほかは直立する。

(底面) 黄褐色土層からなり、平坦である。



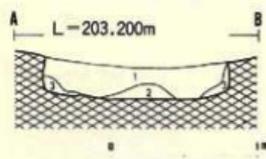
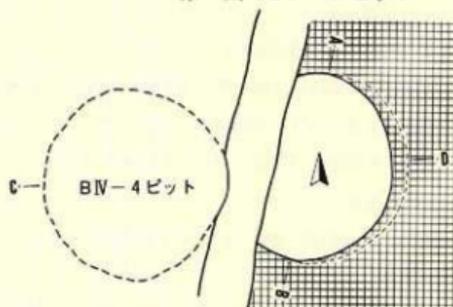
1. 黒色土 10YR 2/1 赤色・白色浮石が多い
2. 暗褐色土 7.5YR 3/4
3. 褐色土 7.5YR 4/6
4. 黄褐色土 10YR 5/6

第46図 BV-7ピット

BV-8ピット

遺構 (第47図、写真図版17)

(検出状況) BIV d 区の調査区境を走る溝を完掘したところ地山の黄褐色土が黒褐色土で切られていたことからピットと認定し、斜面の表土を除去してプランが検出された。BIV-4ピットと切り合う位置であるが、その間の溝により詳細は不明である。



1. 黒褐色土 10YR 2/2
2. 褐色土 10YR 4/4
3. 暗褐色土 10YR 3/4

第47図 BV-8ピット

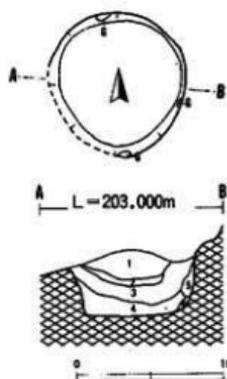
(形状) 平面形は半分が消滅しているが、円形を呈するであろう。断面形はフラスコ状である。

(規模) 開口部径1.28m、底部径1.30m、深さは山側で最大0.70mを測る。

(埋土) 3層に細分される。1、3層は柔らかく、2層は赤色浮石が混入する。

(壁) 黄褐色土層で、内傾する。地山の礫が表出する部分もある。

(底面) 黄褐色土層からなり、山側の礫により凹凸があるが全体として平坦である。



1. 黒褐色土 10YR 2/3 浮石が多い
2. 黒色土 10YR 1.7/1 浮石が多い
3. 黒褐色土～暗褐色土 10YR 2/3 ~3/3
4. 黒褐色土 10YR 2/2
5. 黒褐色土 10YR 2/3
6. 褐色土 10YR 4/6

第48図 BV-9ピット

BV-9ピット

遺構 (第48図、写真図版18)

(検出状況) BIVh~1区調査区境の暗褐色土層(V層)面に黒褐色土の不整形円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。

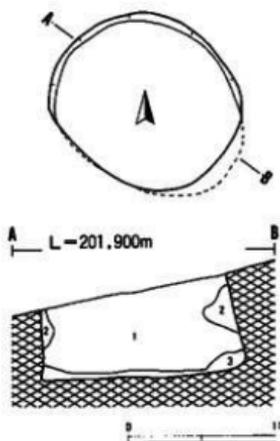
断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径0.98m×0.94m、底部径0.85m×0.83m、深さ0.45mである。

(埋土) 6層に細分される。2層が黒色で柔らかい。6層は地山のブロック土で、他は黒褐色土である。

(壁) 暗褐色～黒褐色土層、下部の一部が赤褐色浮石層で、南西壁に掘り過ぎがあるがほぼ直立する。

(底面) 黒褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



1. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い
2. 暗褐色土 10YR 2/3
3. 黄褐色土 10YR 5/8

第49図 BV-10ピット

BV-10ピット

遺構 (第49図、写真図版18)

(検出状況) BIVg区北辺の黒褐色土層(IV層)中に、より黒い楕円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部底部とも楕円形を呈する。断面形はピーカー状であるが、一部フラスコ状を示す。

(規模)開口部径1.29m×1.14m、底部径1.34m×1.09m、深さ0.60mである。

(埋土) 3層に細分されるが主体は浮石の多い黒色土である。いずれもかたくしまっている。

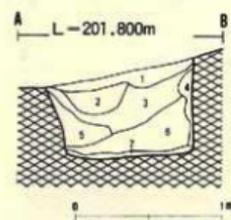
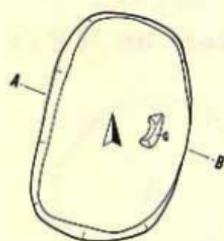
(壁) 黒褐色～暗褐色土層、褐色土層で、南東壁が内傾するほかは直立する。

(底面) 褐色土層からなり、平坦である。

BIV-11ピット

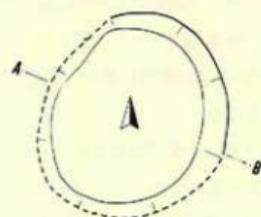
遺構(第50図・写真図版18)

(検出状況) BIVc区の暗褐色土層(V層)面に、黒色土の円形プランとして検出された。

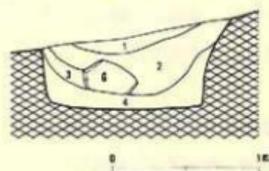


1. 黒色土 10YR 2/1 赤色と白色の浮石が多い
2. 黒色土 10YR 1.7/1 赤色と白色の浮石が多い
3. 黒褐色土 10YR 2/2 赤色と白色の浮石が多い
4. 黒褐色土 10YR 3/2
5. 暗褐色土 10YR 3/4
6. 黒褐色土 10YR 2/2
7. 黄褐色土 10YR 5/6

第51図 BIV-12ピット



A L=201.800m B



1. 黒色土 7.5YR 2/1 浮石が多い
2. 黒褐色土 7.5YR 3/1 浮石が多い
3. 黒色土 7.5YR 2/1 浮石が多い
4. 黒褐色土 7.5YR 2/2 浮石が多い

第50図 BIV-11ピット

(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。

断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.46m×

1.28m、底部径1.24m×1.04m、深さ0.52mである。

(埋土) 4層に細分される。いずれも赤褐色、黄褐色浮石が15～20%程度混入し、固くしまっている。

(壁) 暗褐色～黒褐色土層、褐色～明褐色土層で、掘り過ぎのため詳細は不明であるがほぼ直立する。

(底面) 明褐色土層からなり、平坦である。

BIV-12ピット

遺構(第51図・写真図版19)

(検出状況) BIVc～BIIIo区の暗褐色土層(V層)上面に、黒色土の楕円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも隅丸長方形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.59m×0.99m、底部径1.48m×0.92m、深さ0.59mである。

(埋土) 7層に細分される。2層を除きかたくしまっている。
上位は浮石が多く混入している。

(壁) 暗褐色～黒褐色土層で、ほぼ直立する。

(底面) 明褐色土層からなり、平坦である。

BV-13ピット

遺構 (第52図, 写真図版19)

(検出状況) BIV g 区の黒褐色土層 (V層) 面に、黒色土の円形プランとして検出された。

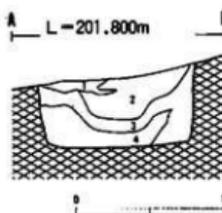
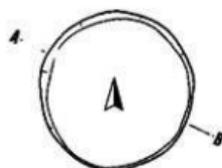
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.11m×1.06m、底部径1.05m×0.97m、深さ0.49mである。

(埋土) 4層に細分されるが、3、4層の境界は明瞭でない。
上位は浮石が多い。

(壁) 黒褐色土層、褐色～明褐色土層で、ほぼ直立する。

(底面) 明褐色土層で、平坦である。



1. 暗褐色土 10YR 3/3 浮石が多い 黒色土が混入
2. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い
3. 黒褐色土 10YR 2/3
4. 明褐色土 10YR 3/3

第52図 BV-13ピット

BV-14ピット

遺構 (第53図, 写真図版19)

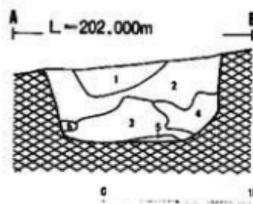
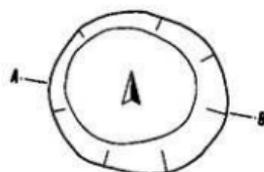
(検出状況) BIV k 区中央、黒褐色土層 (V層) 面で、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部が楕円形、底部が円形を呈する。
断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.22m×1.10m、底部径0.89m×0.82m
深さ0.54mである。

(埋土) 5層に細分される。上位に浮石が多く、3層のみやわらかい。

(壁) 黒褐色土層、一部赤褐色浮石層をはさむ明褐色土層で、ほぼ直立する。東半は立ちあがりが明確でない。



1. 黒色土 10YR 1.7/1 浮石が多い
2. 黒褐色土 10YR 3/2 浮石が多い
3. 暗褐色土 10YR 3/3
4. 褐色土 10YR 4/4
5. 明褐色土 10YR 5/6

第53図 BV-14ピット

(底面) 明褐色土層からなり、中央は平坦であるが壁寄りには傾斜する。

BV-15ピット

遺構(第54図, 写真図版20)

(検出状況) BIV k~l 区の黒褐色土層(V層)面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

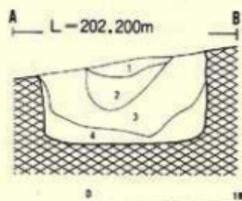
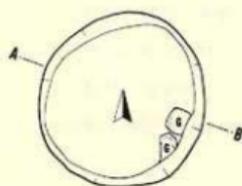
(形状) 平面形は開口部が円形、底部が楕円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.22m×1.15m、底部径1.12m×0.98m、深さ0.58mである。

(埋土) 4層に細分される。3層まで浮石が多く混入している。

(壁) 黒褐色土層、明褐色土層で、ほぼ直立する。

(底面) 明褐色土層からなり、平坦である。



1. 黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
2. 黒褐色土 10YR 2/1 浮石が多い
3. 黒褐色土 10YR 3/2 浮石が多い
4. 暗褐色土 10YR 3/3

第54図 BV-15ピット

BV-16ピット

遺構(第55図, 写真図版20)

(検出状況) BIV f~g 区中央の黒褐色土層(V層)面に、黒色~黒褐色土の円形プランとして検出された。一部はBIV-1住居址煙出し部に切られている。

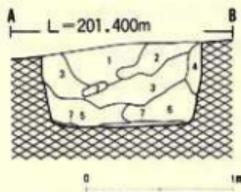
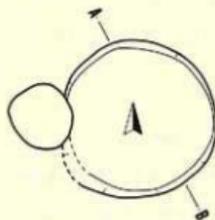
(形状) 平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はピーカー状である。

(規模) 開口部径1.11m×1.08m、底部径1.00m、深さ0.58mである。

(埋土) 7層に細分される。上位は浮石が多い。

(壁) 黒褐色土層、褐色~明褐色土層で、ほぼ直立する。

(底面) 明褐色土層からなり、平坦である。



1. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い
2. 黒褐色土 10YR 3/2 浮石が多い
3. 黒褐色土 10YR 2/3 浮石が多い
4. 黒褐色土 10YR 3/2
5. 暗褐色土 10YR 3/4
6. 黒褐色土 10YR 2/3
7. 黄褐色土 10YR 5/6

第55図 BV-16ピット

BV-1ピット

遺構(第56図, 写真図版20)

(検出状況) BV d 区北辺の暗褐色土層(V層)面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

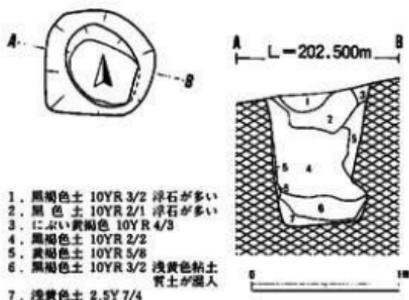
(形状) 平面形は開口部が不整形、底部が楕円形を呈する。断面形は円筒形である。

(規模) 開口部径0.82m×0.80m、底部径0.50m×0.83m、深さ0.92mである。

(埋土) 7層に細分される。壁際と底面は黄褐色土、その他は黒褐色土が大半を占める。

(壁) 暗褐色土層、明褐色土層で、下部に挟り込みが一部あるほかはほぼ直立する。

(底面) 明褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



第56図 BV-1ピット

(3) 陥し穴状遺構

A II-1 陥し穴状遺構

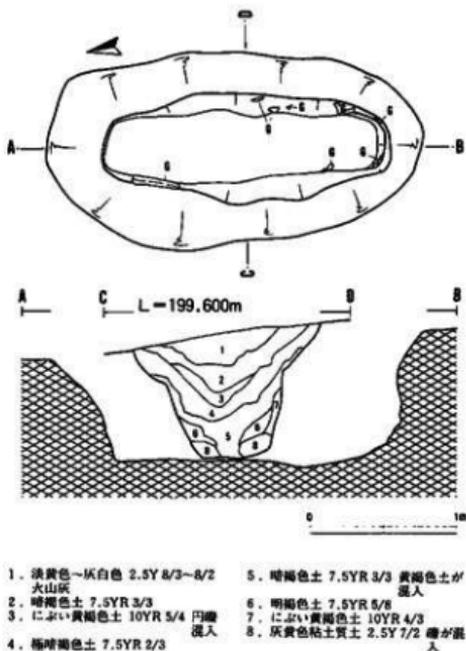
遺構 (第57図, 写真版23)

(検出状況) A II 1区北西隅に位置する。崖に向かって傾斜する変換点の褐色土層 (V層) 面で、長楕円形に入る灰白色火山灰が分布していることから確認された。

(形状) 平面形は南北方向に長軸をもち、開口部が楕円形、中端、底部が隅丸長方形を呈する。断面形は長軸・短軸方向ともバケツ状ないしピーカー状を呈する。

(規模) 開口部径2.60m×1.30m、中部の径1.96m×0.77m、底部径1.86m×0.44m、深さ0.88mである。

(埋土) 8層に細分される。最上位に灰白色火山灰、中位に暗褐色



第57図 A II-1 陥し穴状遺構

土、下位壁寄りに崩落土が埋積する。3・8層は礫が混入する。

(壁) 上部から褐色～暗褐色土層、黄褐色土層、礫混じりの灰黄色粘土質土層で、崩落が多く上部が大きく外傾する。

(底面) 灰黄色粘土質土層からなり、礫が表出して凹凸が激しい。

遺物 (第82図、写真図版35)

(土器) 縄文時代後期の破片 (58) が1点出土している。

A II-2 陥し穴状遺構

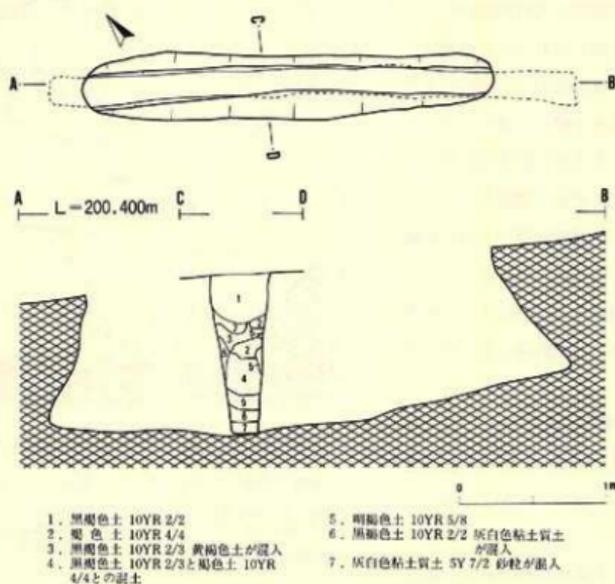
遺構 (第58図、写真図版21)

(検出状況) A II 1～B II 1区、褐色～黒褐色土層 (V層) 面で黒褐色土の筋状プランとして検出された。

(形状) 平面形は北西-南東方向に長軸をもち、開口部が長楕円形、底部が帯状を呈する。短軸方向の断面形はU字状を呈する。

(規模) 開口部径2.80m×0.43m、底部径3.58m×0.17m、深さ1.08mである。

(埋土) 7層に細分される。黒褐色土と褐色土との互層ないし混土状態である。最下位に灰白



第58図 A II-2 陥し穴状遺構

色粘土質が堆積する。

(壁) 上部から褐色～黒褐色土層、黄褐色土層、灰白色粘土質土層で、短軸方向は直立し、長軸方向は強く内傾する。

(底面) オリーブ灰白砂質土層で、やや凹凸をなしている。中央部から斜面上位は斜面と同様に傾斜する。

AⅢ-1 陥し穴状遺構

遺構 (第59図、写真図版21)

(検出状況) AⅢP～BⅢM区の中環浮石層面に、長楕円形に入る黒褐色土のプランとして検出された。

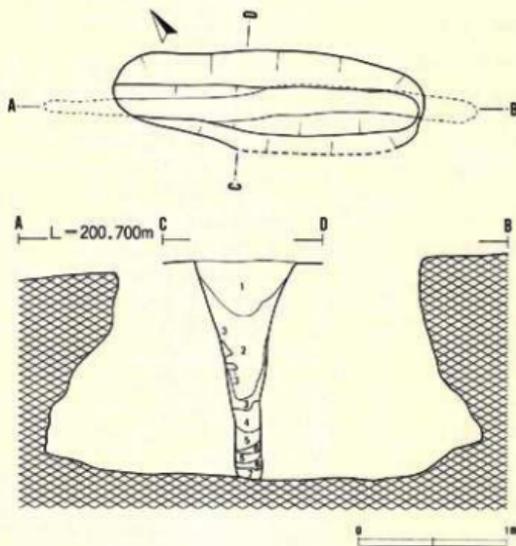
(形状) 平面形は北西-南東方向に長軸をもち、開口部に握り過ぎがあるが長楕円形、底部が中央で屈曲した筋状を呈する。短軸方向の断面形はロート状を呈する。

(規模) 開口部径2.12m×0.57m、中央部の径2.10m×0.34m、底部径2.93m×0.22m (最小8cmを測る)、深さ1.54mである。

(埋土) 7層に細分される。中に黄褐色土をささむ黒褐色土主体の埋土である。2層には中環浮石が混入する。最下位には灰白色粘土質土が堆積する。

(壁) 上部から中環浮石層、褐色土層、明黄褐色粘土質土層、オリーブ灰白砂質土層で、短軸方向の下部が直立し、上部が外傾する。長軸方向は両壁とも内傾する。

(底面) 明黄褐色砂質土層で



- | | |
|-------------------------|--------------------------|
| 1. 黒褐色土 10YR 2/2 | 5. 黒褐色土 10YR 2/2 灰白色粘土質土 |
| 2. 黒色土 10YR 2/1 中環浮石が混入 | 6. 灰白色粘土質土 2.5Y 8/2 |
| 3. 黄褐色土 10YR 5/6 | 7. 灰白色粘土質土 2.5Y 8/1 |
| 4. 黒褐色土 10YR 3/2 | |

第59図 AⅢ-1 陥し穴状遺構

長軸方向壁寄りが登り勾配になる。

B II-1 陥し穴状遺構

遺構 (第60図, 写真図版21)

(検出状況) B II 区中央調査区境界山際にかかった地点であり、赤褐色浮石を含む褐色土層 (V層) 面に、斜面と平行な黒褐色土の筋状プランとして検出された。

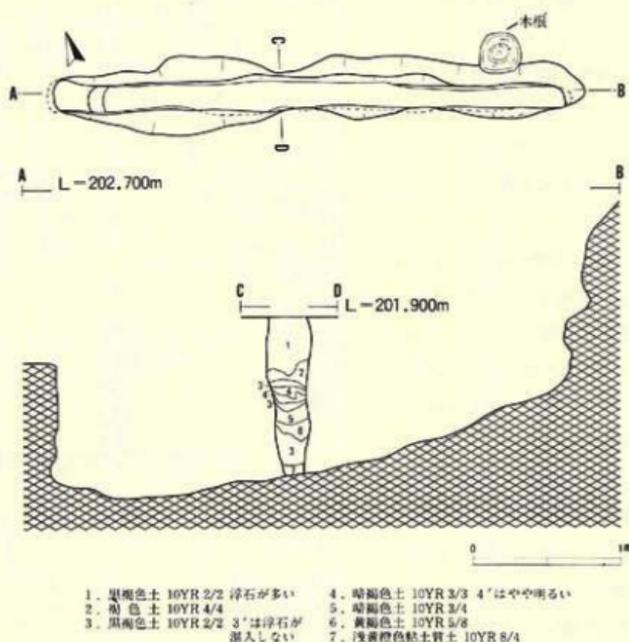
(形状) 平面形は西北西-東南東に長軸をもち、開口部が崩落して不整な長楕円形、底部は帯状を呈する。短軸方向の断面形はU字状を呈する。

(規模) 開口部径3.62m×0.26m (最大0.56m)、中端径3.48m×0.22m、底部径3.56m×0.18m、深さ1.10mである。

(埋土) 7層に細分される。黒褐色土と暗褐色土との互層となる。黒褐色土以外は壁の崩落土である。最下層は粘土質土である。

(壁) 上部から褐色土層、赤褐色浮石層、黄褐色土層、黄灰色土層となり、短軸方向の中位以上は崩落や木根等で形が崩れているが下部ではほぼ直立する。長軸方向は下部が内傾し、上部が直立ないし外傾する。

(底面) 黄灰色土層で、斜面下方に段があり、上方は階段状を示しながら斜面と同じく傾斜する。



第60図 B II-1 陥し穴状遺構

B II-2 陥し穴状遺構

遺構 (第61図・写真図版23)

(検出状況) B II j 区西寄りの黒褐色土層 (IV層) 面に、黄褐色土や灰白色土を混入する暗褐色土の楕円形プランとして検出された。

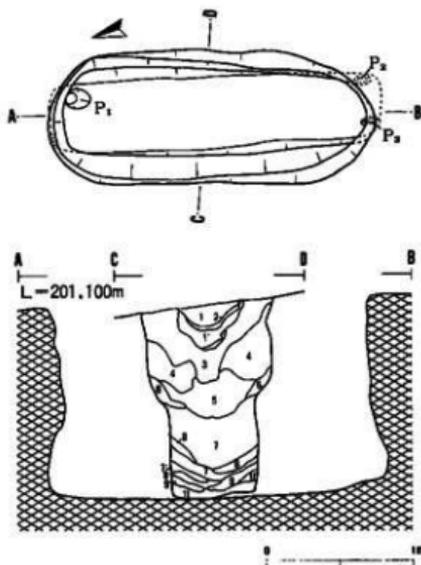
(形状) 平面形は南北方向に長軸をもち、開口部が楕円形、底部が長方形を呈する。短軸方向の断面形は中段のあるコップ状を呈する。

(規模) 開口部径2.22m×0.91m、中端径2.10m×0.58m、底部径2.26m×0.48m、深さ1.32mである。

(埋土) 11層に細分される。上位は灰白色土ないし褐色土が混入する暗褐色土～黒褐色土で、下位は褐色土ないし赤褐色土と黒褐色土との互層である。2層は炭化物層で、一部焼土がみられる。3層は灰白色土が主体で、7層は黒褐色土と褐色～赤褐色土との互層であるが不鮮明である。

(壁) 上部から黒褐色土層、暗褐色～褐色土層、赤褐色浮石層、黄褐色ないし赤褐色土層、黄灰白土層である。短軸方向の上部は段をもち、さらに外傾するが、下部は直立する。長軸方向の下部は内傾し上部はほぼ直立する。

(底面) 黄灰白土層で、ほとんど平坦である。三隅に抗穴がある。P₁は10cm、P₂、P₃は5cmの深さである。



1. 暗褐色土 10YR 3/3 黄褐色土が混入 1'はより多く混入
2. 黒色土 10YR 2/1 炭化物層 一部に焼土が混入
3. 灰白色土 2.5Y 7/1と暗褐色土 10YR 3/3との混土
4. 黄褐色土 10YR 2/2
5. 黒褐色土 10YR 3/1 灰白色土が混入
6. 黒褐色土 10YR 3/2と黄褐色土 10YR 5/6との混土
7. 黒褐色土 10YR 2/2と明褐色土 7.5YR 5/6との互層ないし混合層 灰白色土も混入
8. 明褐色土 7.5YR 5/8
9. 黒褐色土 10YR 2/2と明褐色土 7.5YR 5/8との混土
10. 灰白色粘土質土 10YR 8/2
11. 灰白色粘土質土 10YR 8/2と黒褐色土 10YR 2/2との混土

第61図 B II-2 陥し穴状遺構

B II-3 陥し穴状遺構

遺構 (第62図・写真図版22)

(検出状況) B II n 区中央の黒褐色土層 (IV層) 面に、斜面と平行に走る黒色土の筋状プラン

として検出された。

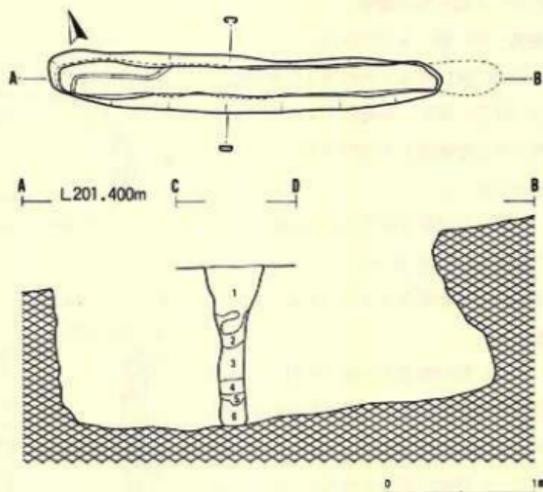
(形状) 平面形は西北西—東南東方向に長軸をもち、開口部、底部とも帯状を呈する。短軸方向の断面形はロート状を呈する。

(規模) 開口部径2.68m×0.39m、中端径2.58m×0.19m、底部径3.04m×0.21m、深さ1.03mである。

(埋土) 6層に細分される。上位が黒色土、中位が黒褐色土で、下位の5、6層は粘土質土である。

(壁) 上部から黒褐色土層、褐色土層、黄褐色土層、灰白色土層である。短軸方向は上部が外傾するが下部は直立する。長軸方向は斜面上方側のみ内傾し、下方は直立する。

(底面) 灰白色土層からなり、斜面下方に段状の部分があるが他は平坦で、斜面に沿って傾斜する。



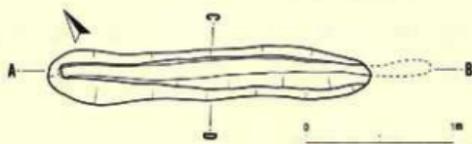
1. 黒色土 10YR 2/1 浮石が多い
2. 暗褐色土 10YR 3/3
3. 黒褐色土 10YR 2/2
4. 褐色土 10YR 4/4
5. 濃い褐色粘土質土 7.5YR 5/3
6. 灰褐色粘土質土 7.5YR 5/2

第62図 B II-3 陥し穴状遺構

B III-1 陥し穴状遺構

遺構 (第63・64図、写真図版22)

(検出状況) B II j 区西辺、B III-2 住居址の床面精査の際に黒色土の筋として発見された。検出作業の結果中氣浮石層を切っていることが判明し、陥し穴状遺構と認定した。



第63図 B III-1 陥し穴状遺構平面

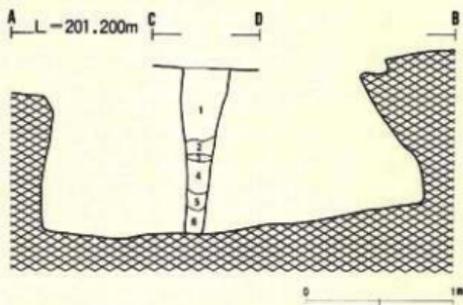
(形状) 平面形は北西—南東方向に長軸をもち、開口部が幅のせまい楕円形、底部が細く中央部でやや屈曲した筋状を呈する。短軸方向の断面形はU字状を呈する。

(規模) 開口部径2.20m×0.34m、底部径2.50m×0.10m、深さ1.16mである。

(埋土) 6層に細分される。上位はやや固めの黒色土、中位は黒褐色土が主体であり、下位に柔かい黒褐色土が堆積する。

(壁) 上部から中層浮石層、黒褐色～褐色土層、黄褐色土層、灰白色土層であり、短軸方向はほぼ直立するが、南壁は全体として外傾きみである。長軸方向は斜面下方は直立状であるが、上方は深く内傾する。

(底面) 灰白色土層で凹凸をもちながら中央部がやや凹む。全体としては斜面に沿って傾斜する。



- | | |
|------------------|------------------|
| 1. 黒色土 10YR 2/1 | 4. 褐色土 10YR 4/4 |
| 2. 黒褐色土 10YR 2/2 | 5. 黒褐色土 10YR 2/2 |
| 3. 黒褐色土 10YR 3/1 | 6. 暗褐色土 10YR 3/4 |

第64図 B III-1 陥し穴状遺構断面

〔2〕出土遺物

縄文時代の遺物は遺構内及び遺構外出土も合わせて土器約3,500点、土製品3点、石器74点である。時期は早期から晩期にわたる。

(1) 土器 (第80図～第93図, 写真図版33～46)

遺構に関わって出土したものは少なく、ほとんどは遺構外のものである。破片が多く、復元できた個体数は少ない。施文法や胎土、器形などの違いにより、第I群～V群に大別した。第I群土器は早期中葉、第II群土器は早期末～前期初頭、第III群土器は後期前葉、第IV群土器は晩期、第V群土器は粗製のもの及び底部一括(主に後期前葉)であり、各群をさらに細別した。本遺跡で最も出土量の豊富なものは第III群である。

第I群土器 (第80図1～20, 写真図版33)

縄文時代早期中葉に位置づけられている貝殻文系の土器である。施文の手法が異なり、1～3類に細分した。1類は貝殻条痕文を地文としているもの、2類は貝殻腹縁圧痕文を地文としているもの、3類は平行沈線と貝殻腹縁圧痕文を併用しているものである。土器の編年上では

1類と2類は、白浜式、寺の沢式、吹切沢式などに類似し、3類は物見台式に比定される。各類とも出土量は多くない。本群土器の出土する層位は基本土層第V～VI層のものを少量含むが、ほとんどは粗掘段階（I～II層）の出土である。

1類は図1～7である。貝殻腹縁による条痕文（撫で調整痕）を地文としているが、爪形の刺突文の施されているもの（1～5）と地文のみのももの(6)がある。形状は口縁部がほぼ直上する単純な深鉢形と推定されるが、底部は全く不明である。1は2列の爪形刺突文が連続山形状（波状か？）に斜めに並び、さらにその上部に並列する、爪形刺突文が口縁部文様帯をなしている。口唇部には貝殻腹縁の圧痕文が施されている。内面にも条痕の撫で調整痕が残る。胎土に繊維は含まず、焼成は良い。2も同様の爪形刺突文をもち、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施している。焼成は不良である。3～5は同一個体である。施文や胎土焼成は1に近似している。6は条痕文のみの深鉢である。口縁部上端には凹凸があり、不整な小波状口縁線となっている。胎土に砂粒を多く含んで分厚く、1～5とはやや異質である。7は1～6とは異なる種類の貝殻による条痕とみられる。条痕の間隔がせまく、明瞭である。

2類は図8～14である。貝殻腹縁圧痕文を地文としたもので、口縁部（8、9）と体部5点（10～14）がある。破片のため、器形の判明するものはない。貝殻腹縁圧痕文には縦位に並列するものとやや斜めに傾いているものがある。焼成の良いものが多い。胎土中に繊維はほとんど見られないが、12で微量含まれている。8は口唇部にも圧痕文が施されている。9は口唇部につまみ状の小突起がついている。13には斜めの圧痕文に直交した貝殻条痕文（調整痕）が残っている。

3類は図15～20である。半截竹管によると思われる幅の狭い平行沈線と貝殻腹縁圧痕文を併用している類である。出土点数は少ない。薄手で焼成も良く、胎土に繊維は含まれない。器形は不明である。15～18は同一個体である。平行沈線の直線文に沿って貝殻腹縁圧痕文が施され、特殊な効果を表わしている。文様の屈曲点や端部には円形の刺突文がつけられる。内面には貝殻条痕による調整痕が残っている。17では貝殻腹縁圧痕文が、沈線から離れて地文様に並列している部分がある。18には貝殻頂部の圧痕文がついている。19と20は同一個体の体部片である。施文や胎土は15などに酷似している。

第II群土器（第80図21～第82図52，写真図版33～34）

縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられる土器群である。出土層位は基本土層第III～V層が多い。縄文を地文とした土器が主体である。施文の相違により1～6類に細分した。1類は表裏両面に縄文を施文するもので編年上では赤御堂式や早稲田IV類などに相当する。2類は表面のみ縄文を施文するもので、早期末の早稲田V類相当である。3類は無文のもので早期末であろうか。4類は特殊な縄文をもつもので、時期は早期末～前期初頭と思われる。5類はルー

ブ文などが見られ、前期初頭の大木1式などに類似し、6類は不整な燃糸文を用いており大木2式に似る。

1類は図21～30である。表裏阿面に施す縄文には単節斜行縄文、0段多糸縄文、右撚りと左撚り合わせて撚りもどしの見られるものなどの種類がある。口縁部はなく体部と底部のみで器形は不明である。厚手で、胎土に繊維を含まない。

21～23は単節斜行縄文の体部である。21には沈線文が見られる。24～26、28は0段多糸縄文の体部である。27と29は、右撚りと左撚りを合わせて撚りもどしの見られる原体の縄文をもつ。30は0段多糸縄文の底部である。底部の末端は欠けており、形状は不明だが尖底となるらしい。

2類は図31～40である。表面にのみ縄文を施すもので、胎土に繊維を多く含む。縄文には単節斜行縄文と0段多糸縄文がある。分厚い器厚で焼成も軟質なものがほとんどである。31～33は単節斜行縄文を施すものである。31は補修孔のある口縁部片である。器壁に凹凸がある。口唇部は丸味をもち、不整な波状を呈している。32、33は底部であるが、先端を欠いている。尖底と見られる。34～40は0段多糸縄文をもつものである。口縁部は丸味をもつもの(34、35)と平らに撫でられているもの(36、37)がある。前者は軟質の焼成であるが、後者は比較的硬質である。36には補修孔がある。38～40は0段多糸縄文の体部である。

3類は図41の1点のみである。AIVの土取穴から出土している。体部と底部は接合しない。無文で平縁の小型尖底深鉢である。薄手で、胎土に若干繊維を含む。尖底部は傾斜が緩い形状である。内面には煤が多く付着している。

4類は図42～46である。特殊な縄文を施文するものを一括している。2類土器と併行するものとみられる。42と44は単節斜行縄文を重ねて施文している。43は多輪絡条体の回転施文である。45は0段糸縄文、46は極太の単節斜行縄文と思われる。

5類は図47～48の2点である。口縁部片で、口唇部が撫でられ平坦とされている。胎土には繊維を含んでいる。47は単節斜行縄文を地文とするが、原体の末端部によるループ文が見られる。48は0段多糸縄文を地文とし、角棒状工具の先端によって押し引き文が横方向に3条見られる。

6類は図49～52の4点である。不整な横位の燃糸文を施すもので胎土に繊維を多く含む。49は焼成不良の体部片で、補修孔が見られる。50と51は口縁部の上部に不整燃糸文帯をもち、2個1対の小突起がつく。口唇部は丸味を帯びた断面形である。52は不整燃糸文のみの体部片である。

第Ⅲ群土器（第82図53～第90図184、写真図版35～43）

縄文時代後期前葉の土器群である。編年上では十腰内I式の前半期のものに比定される。本遺跡で最も多く出土している。施文法の相違から1～6類に分類し、その中でさらに細分した

類がある。なおⅢ群の中で分類の不確定な口縁部を7類として一括している。

1類は隆線文を用いているもので図53～65などがある。これらの中で隆線のみのもを1a類、隆線文と沈線文を併用しているものを1b類とした。

1a類は図53～55の3点である。同一個体とみられる深鉢の口縁部である。隆線による区画文やボタン状の貼付文が施されている。焼成は良くない。

1b類は図56～65などである。隆線文による楕円形や曲線状の区画に沿って、沈線文を施している。器形の判明するものには、口縁部が外反する深鉢や体部が大きく脹らむ壺形土器などがある。56～59は隅丸長方形の区画をもつ口縁部片である。58は表裏両面に朱塗りが施されている。60は口縁部～体部にかけて器形の堆定できた壺形土器であるが、残存部位は少ない。三角形の区画文や楕円形の曲線文で表現され、区画の節目にあたる隆線文上には円形の刺突文が2個～3個つく。口縁部上位にも等間隔で円形の穿孔が並んでいる。

61～63は同一個体の口縁部～体部破片である。大波状口縁の深鉢で、隆線や沈線文による長円や曲線の区画文をもつ。煤が多く付着する。64も大波状口縁の深鉢である。突起部には「8」字状の隆線文が貼付けられ、沈線の曲線文がみられる。他の1b類とは若干異なるようである。65は壺形土器の体部片で、表面は朱塗りで、60と同様に隆線の節目に円形の刺突がある。

2類は無文の地に沈線で区画文や曲線文を施す図66～101などである。Ⅲ群土器の中でも本類がもっとも出土量が多い。これらのうち、平行沈線による入組文や曲線文をもつものを2a類、長楕円などの区画文や円文をもつものを2b類と細分した。

2a類は図66～87などである。平行沈線による曲線文には、渦巻文、弧状文、入組文などが表現されている。器形の判明するものでは壺形土器が多い。これらのうち69・80～87は比較的間隔のせまい平行線を用いているものである。66は壺形土器の体部で、口縁部を欠く。体部上半に文様帯をもち、底部の周縁にも平行線の弧状文が見られる。外面に煤が多く付着する。67は大波状口縁の小型深鉢で底部は不明である。口縁部の突起部は6個と推定される。文様は口縁部で突起毎に隅丸の三角形のモチーフが連結し、体部で渦巻文を配した区画文を施す。68～70は壺形土器の口縁部である。68の頸部は特に細く、徳利形となるものであろう。71は大波状口縁の深鉢の口縁部である。沈線が複雑に入り組んだ文様である。煤が多く付着する。73～78は既述の66～71などと同類の体部片である。

79は浅い沈線を用いており、他のものとは異なるが胎土・焼成は似ている。80～82は前述のように細い平行線を用いている口縁部片である。大波状口縁の小型深鉢形と思われる。83～87はその体部片である。

2b類は図88～101である。沈線による長楕円文や円文などをモチーフとしている。88は体部上半に長楕円形と円文、平行線文を用いた単純な文様帯をもつ壺形土器である。口縁部はやや

肥厚している。残存部位は少ない。89は同様の文様帯をもつ口縁部片である。口縁部には貼り付けられた隆帯があり肥厚している。90は波状口縁の深鉢の破片である。長楕円の切れ目には縦の弧状文がみられる。91は大型の壺形土器の口縁部である。幅の狭まい長楕円文が多数重層して施され、区画に1本の隆線が横走する。口縁部上端は隆帯が貼り付けられ肥厚する。

92～101は長楕円形の区画文をより簡略化したものである。平行線を縦に区切り、長方形のモチーフをもつ口縁部片である。波状口縁と平口縁の両者がある、隆帯の貼り付け（折り返し口縁）は92～95、98の5点に見られる。95には竹管円文の刺突列が施されている。96、97、100は同一個体である。99は内外朱塗りのものである。

3類は地文に縄文が用いられ、沈線で区画文や曲線文を施すもので、図102～119などがある。施文やモチーフに相違があり、a～cの3種に細分した。3a類は隆線による区画文を口縁部にもつもの、3b類は波状口縁を呈し、短い棒状の貼付文を突起部にもつもの、3c類は沈線の区画内を磨消し、磨消縄文による表現のものである。3類の中では3b、3c類が比較的多く出土している。

3a類は図102と103の2点である。2～3本の平行沈線の区画文や渦巻文、円文が施文されている。102は口縁部に低い突起を4個もつ大型深鉢である。残存部位は少ない。口縁部文様帯は突起部を中心に展開している。突起の中央には円弧文が重なり、その左右に長楕円形の区画文と、それに沿って隆線文の貼り付けがなされている。隆線文上には刺突列が施される。体部の文様は突起部から懸垂した渦巻文が続き、体部中位でも渦巻文が横に並ぶ。地文の縄文は間隔をおいて縦に施され、一部に磨消されて消えている部分がある。地文は重視されていない印象である。

3b類は図104～108である。口縁部に短い棒状の貼付文をもち、それを中心に文様が展開する。やや外反した口縁部は波状を呈し、体部の脹らんだ深鉢形の器形とみられる。104～107はその口縁部片である。108は器形の判明した唯一のものである。3本の平行沈線で渦巻文や曲線の区画文などを描いている。地文の縄文は102などと同様でまばらな印象である。

3c類は109～119である。磨消縄文手法のものを一括している。器形は平縁の深鉢と推定されるものが多い。口縁部が折り返し口縁となって肥厚しているのは109、113の2点である。109は口縁部が外反し、体部が脹らむ小型の深鉢である。残存部は少ない。口縁部の肥厚部分には縄文を残し、その下の頸部は無文、体部上半は沈線による文様となる。110と111は同一個体である。三角形の区画文が重要モチーフである。112と116も同一個体である。区画文内の無文部には横S字状の沈線文が配されている。113～115は口縁部片であるがいずれも細片である。117～119は同類の体部片である。

4類は沈線文を地文としているもので、図120～135である。地文とする沈線には網目状文の

ものや節目状文、縦位の平行線文などの種類がある。胎土や器形の点では後述する5類の土器と非常によく似ている。5類における燃糸文の効果を沈線で表現したものと考えられる。

沈線の網目状文(格子目状)を用いているのは120~130である。器形は平縁で口縁部がほぼ直上する単純な深鉢形が主である。120はAⅢ区より一括して出土した大型の深鉢で体部下半を欠く。口縁部の上部は肥厚し、その下位に1本の沈線を施している。赤褐色で焼成も良い。121は口縁部の肥厚はなく、横走る沈線が2本の口縁部片である。122は肥厚した口縁の下に平行沈線(3本)と縦に区切る線をもち、その下は地文の沈線である。123~130は同類の体部片である。124と125には横走る沈線がみられる。

131は節目状文を地文とした大型の深鉢である。BⅢ区に正立して一括出土した。体部下半の一部を欠くがほぼ完形である。口縁部が緩く外反した円筒形に近い器形である。節目文を縦に施すが、口縁の上端と体部の下部は無文のまま残している。口縁部の上端は撫で消した部分もある。節目を描く工具の原体幅は2cm程である。焼成良好で煤が多く付着する。

132は緩く湾曲した斜線を地文とした深鉢である。残存部位は少ない。口縁部が直上し、体部がやや脹らむ器形である。焼成は良くなく、煤が外面に付着する。

133~135は幅の狭い縦位の平行沈線文を地文としたものである。口縁部が外反する深鉢形らしい。口縁部に3本の平行沈線が横走る。

5類土器は燃糸文を地文としているもので、図136~165である。出土量が多い。地文とする燃糸文には網目状(格子目状)のものと単に縦位の平行線となるものの2種がある。前者が多い。

網目状燃糸文を用いているものは136~163などである。器形は平縁で口縁部が直上する単純な深鉢形がほとんどであるが138のみ小突起がついている。口縁部は肥厚するものとしなくても、平行沈線をもつもの等の違いが見られる。

136~140は口縁部が折り返し口縁となり、肥厚しているものである。肥厚部分の幅は深鉢の大きさに比例しているようである。136と137はある程度復元できた口縁部~体部片である。

142~145は口縁部が肥厚しないものである。口縁部上端を撫でて無文とするものが多い。

146~150は口縁部上端に平行沈線を施しているものである。沈線のある口縁部が肥厚するものもあるが、既述の136~140などに比べて顕著でない。146はやや肥厚した口縁部に2本の平行沈線が用いられている。147と148は沈線が1本、149と150は2本の例である。151~158は5類土器の体部片である。

159~163は5類の底部である。地文の燃糸文は底部まで施文されず、体部下位でとまる。平らな底部からすっきりと立ち上がる形状を示す。

164と165は縦の燃糸文を地文としている。口縁部が折り返し口縁で肥厚し、その上には横位

の摺糸文が施される。平縁の深鉢である。

6類は無文のもので図166と167の2点である。166は単純な器形の中型深鉢で、器面にやや凹凸がある。167は大型の壺形土器である。残存部位が少なく、体部下半は不明である。器面は丁寧にミガキが施されている。赤褐色の色調を呈し焼成も良い。

7類はⅢ群土器に含まれるが、細分されたどの類に入るのか不確実なものを一括している。図168～184である。168～170は壺形土器の口縁部である。太い隆縁文（隆帯）が用いられていることから、1類かと思われる。171～173は折り返し口縁と沈線文をもつものである。174は口縁の外傾する器形らしい。ともに口唇部に刻み目を施し、無文の地に沈線の文様である。

176～179はともに横走する沈線をもつものである。180は沈線の曲線文の他に半円形に前へ張り出す突起をもつ。突起の中央に上下へ貫通する孔がある。181～184は沈線がなく無文のものである。182は壺の181、183、184は大波状口縁の深鉢の、それぞれ口縁部とみられる。

第Ⅳ群土器（第91図185～194、写真図版44）

縄文時代晩期の土器群である。遺構に関わるものはないが主としてAⅢ、AⅣ区に主として出土している。量は多くないが、1～3類に細分した。

1類は晩期初頭の大洞B式に相当するもので図185～190などである。185と190は体部にくびれをもつ浅鉢形土器である。ともに口縁部に横B字形の小突起をもち、文様帯は三叉文を連結したモチーフで表現されている。底部周縁にも1本の沈線が巡る。190には口唇部の中央内側に三叉文を意図した隆線や貼付文が見られる。器表面は黒色を呈している。186～188は器形の不明な1類の口縁部片である。189は注口土器の注口部である。

2類は晩期前葉の大洞B C式のもので、図191～192のみである。器形不明の口縁部片で、横B字形の小突起や羊歯状文が用いられている。器表面は異色を呈している。

3類は晩期中葉の大洞C式で、図193～194などである。193は渦巻文の施された口縁部である。194は無文部と平行沈線の用いられた体部の破片である。

第Ⅴ群土器（第91図195～225、写真図版44～46）

粗製土器と底部の破片を一括して本群とした。既述の各群に共伴するものや小破片のものを含むが、大部分は第Ⅲ群（後期前葉）土器と同時期と考えられる。1類は斜行縄文のみのもの、2類は底部である。

1類は図195～211などであるが掲載しないものも多い。口唇部は単純なもの（195～201）と折り返し口縁状となり肥厚しているもの（202～207）の2種類に分けられる。いずれも深鉢形であるが、口縁部の直上するもの、緩く外反するものなどの器形がある。地文には、無節と単節の斜行縄文が用いられている。195はBⅣ区の1層中より一括して出土した大型の深鉢で、一部欠損するがほぼ完形品である。体部上半がふくらみ、下半がすばみ小さめの底部をもつ。198

は口縁部の外反した小型深鉢である。残存部は少ない。196、197、199、200は同類の口縁部片である。口唇部が平らに撫で調整されている。201はBⅢ-1ピット埋土より一括して出土した大型深鉢である。4分の1程の残存で底部を欠く。

202～207は折り返し口縁の深鉢の口縁部片である。折り返し口縁とする手法は既述のⅢ群4類や5類に見られたもので器形が類似している。肥厚部分を無文としているもの(205、206)と地文を残すものがある。207は破片であるが口径の判明したもので、肥厚部の下を一本の沈線を用いて接合部を調整している。

208～211は地文のみの体部片である。

2類は底部片で、図212～225などである。無文のもの、沈線を施文したものの、地文のものなどが見られる。灰褐色や赤褐色の色調のものが多い。無文の地に沈線の施された212、213、215～217は第Ⅲ群2類土器の、214は第Ⅲ群3類のそれぞれ底部と思われる。212は沈線の区画文の施された朱塗りのもので、底面に網代痕(平織)を残している。213は底部の周縁に1本の沈線が巡る。214は台付鉢の高台部である。磨消無文帯がある。215は底部の周縁に沈線と刺突列点文が用いられている。216と217は体部下半に沈線が見られる。218～223はいずれも無文で平底を呈している。221の底面には網代痕(3条網み)が明瞭に残る。223の底面にも木葉痕が残る。224と225は単節斜行縄文のみの深鉢底部である。

(2) 土製品(第106図:写真図版56)

スプーン状土製品、円盤状土製品、玉の3点が出土している。このうち、玉はBIV-1住居址周溝の埋土部分からの出土である。

① スプーン状土製品(第106図3,写真図版56)

中央から先端部にかけて欠損しているため全長が不明であるが、凹部が残っておりスプーン状を呈している。頭部も欠損しているが穿孔部分がみられる。

② 円盤状土製品(第106図1・2,写真図版56)

破損品のため径が不明であるが、大形品と思われる。両面とも沈線で施文している。縁辺には表面に2本の沈線、裏面に1本の沈線を巡らせている。赤色塗彩品で、部分的に赤色が認められるものである。

③ 玉(第106図4,写真図版56)

径約1.3cm、長さ約1.1cmで側面からややつぶれた形状の玉である。ほぼ中央に穿孔されており、その際に出た粘土が孔の縁に付着したままである。

(3) 石器 (第94図～第101図, 写真図版47～51)

本遺跡出土の石器は、剥片石器40点、礫石器29点の計69点である。そのうち遺構から出土したのは17点である。石核は4点出土している。うち1点は遺構からの出土である。

石器の内訳は、石鏃6点、石錐1点、石匙1点、篋状石器2点、スクレイパー18点、加工痕ある剥片12点、石棒1点、磨石10点、敲石1点、凹石3点、石錘14点である。

① 石鏃 (第94図1～6, 写真図版47)

いずれも両面に細部調整されている。1～3は凹基無茎鏃で、1は挟り込みが深い。2は浅く三角形に近い。3も浅く、やや長身である。4は基部の挟り込みの浅い凹基有茎鏃で、扁平である。5・6はやや肉厚の剥片利用の円基鏃である。

② 石錐 (第94図8, 写真図版47)

片縁細部調整された不定形な剥片の両端に錐部を作りだした双刃錐である。先端部は両方も欠損している。

③ 石匙 (第94図9, 写真図版47)

扁平な剥片を利用し、両縁に細部調整された縦型石匙である。両面調整による挟りの浅いつまみを作り出している。

④ 篋状石器 (第94図13・14, 写真図版47)

頭部にやや幅があり、側縁が直線的に開いているもので、13は刃部調整が左側縁は片面、右側縁は両面からなされ、それぞれ片刃、両刃である。14は片面細部調整され、刃部は片刃である。

⑤ スクレイパー (第94～96図, 写真図版47・48)

刃部の調整状況によって概ね4種に分けられる。

a、先端または側縁に連続的な調整によって刃部を作り出している。(10、11、18、31、32)

10は打面と反対側に片面側縁部調整による直線的な刃部を作り出している。11は片側縁に直線的な刃部を作り出している。18は片縁と先端部に直線的な刃部を作り出している。31と32は片縁調整によって凹刃を作り出している。

b、側縁にやや不規則な調整によって弧状の刃部を作り出している。(7、12、17)

7はややつぶれた状態の弧状刃部をもつ。12は片側縁両面調整によって弧状の刃部を作り出している。17は片縁細部調整による弧状の刃部をもつが、頭部側に刃部両面調整がみられる。

c、縁辺のほぼ全周に剝離痕がみられる。(16、25、33、38)

16は刃部片面細部調整がなされている。25、38は細かい剝離、33は浅い剝離がみられる。

d、1側縁ないし先端に部分的にわずかな剝離痕がみられる。(19、23、30、35、37、39)

30には片縁調整のほかにも錐状部分もみられる。他はわずかな剝離調整のみである。

⑥ 加工痕ある剥片 (第96図15・20～22・24・26～29・34・36・40, 写真図版48)

スクレイパーに分類したもののほど調整が明瞭でない剥片を一括した。この中で、15と20は雑な調整であるがスクレイパーにやや近い。27はやや深い剝離がみられる。29は側縁部の調整が使用痕が明瞭でないがややつぶれた状態の剝離痕がある。

⑦ 石棒 (第97図42, 写真図版49)

頭部のみ破損品で、その頭頂部も欠損している。非常に浅い抉りで頭部を作り出している。側面に平坦面をもつ。表面が粗く未成品ではないかと思われる。

⑧ 磨石 (第97～99図43～52, 写真図版49・50)

棒状礫を用いたのが9点、円礫を用いたのが1点出土している。43と46は三角柱状礫で長軸稜線部分に磨面をもつ。47と50は平面が三角形状礫で長軸稜線部分に磨面をもつ。44は扁平な三角柱状礫で幅の狭い側面に磨面をもつ。49は四角柱状礫で幅の狭い側面に磨面をもつ。48は四角柱状礫で幅の狭い側面と長軸稜線部分の2面に磨面をもつ。45は楕円形礫で長軸稜線部分とその反対側面に合わせて3面の磨面をもつ。51は破損しているため詳細不明であるが平板状礫で、幅の狭い側面に2面ずつと幅広部分の計5面の磨面をもつ。52は楕円形礫の両端に磨面をもつものである。

⑨ 敲石 (第99図53, 写真図版50)

楕円形礫を利用し、その扁平な2面を敲き面としている。

⑩ 凹石 (第99図54～56, 写真図版50)

54は両面に2個ずつの凹部をもつ。55は両面とも1個ずつの浅い広めの凹部が形成されている。56は扁平な礫の両面に4～5個の凹部をもつものである。

⑪ 石錘 (第100・101図57～70, 写真図版50・51)

57～63はAIV-8ピットからの出土である。全14点ともほぼ楕円形の礫を利用している。そのうち58と60の2点が短軸方向の両端を両面から打ち欠いているほかは、すべて長軸方向の両端を両面から打ち欠いているものである。59は1端の片面に大きい打ち欠きがみられる。61は1端の片面に大きい打ち欠きがみられるほか、右側縁中央部に片面からの打ち欠きがある。62の片面1端にも大きい打ち欠きがみられる。68は1端がわずかな打ち欠きで、他端が欠損している。69は両端ともわずかな打ち欠きである。70は1端が大きな打ち欠きで同端側縁部が欠損しているものである。

⑫ 石核 (第101図71～74, 写真図版51)

71は珪質泥岩、72～74は流紋岩質極細粒凝灰岩である。71は2分の1ほどの残存核、72、74は両面剝離された剥片核、73は両面とも部分的に剝離された盤状核である。

2. 平安時代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

住居址4棟は、大ブロック3地区に分散し、2棟が一部重複している。そのうち1棟は削平されて形状が不明である。いずれも灰白色火山灰が混入しており、ほぼ同時期のものである。

ピットは、いずれも埋土に灰白色火山灰が混入し、1基を除いて長方形のものである。

遺物は、住居址から墨書土器(坏)や土玉、砂鉄、鉄滓の付着した坏の底部、紡錘車などが出土しているが、全体的に土器量は少ない。なお、ここでは概要のみ記し、次の(2)出土遺物の中で詳述することとする。

(1) 住居址

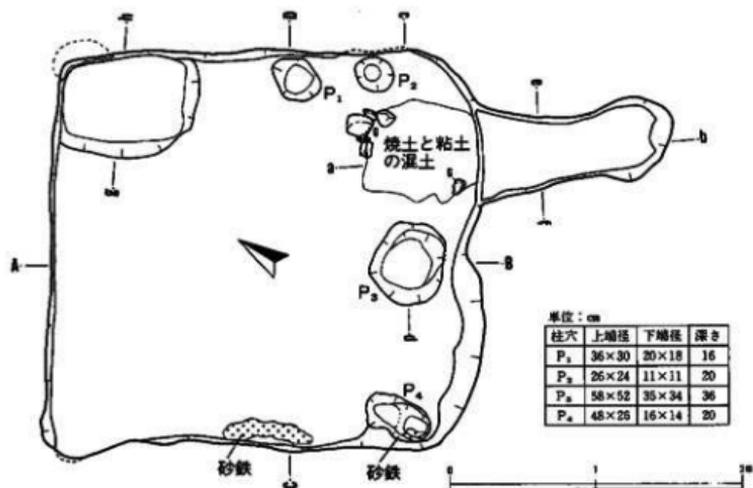
AV-1住居址

遺構(第65・66図、写真図版24・25)

(検出状況) AIV区中央やや東寄りの表土を除去した黒褐色土～褐色土層(IV～V層)面に、灰白色火山灰混入の黒褐色土の方形プランとして検出された。

(平面形) 隅丸方形で、煙道の延びる方向は北西-南東である。

(規模) 上端が2.9m×2.8m、下端が2.8m×2.7m、壁高が10cm～24cmである。



第65図 AV-1住居址 平面

(埋土) 攪乱土を除いて、灰白色火山灰や炭化物が混入する黒褐色土の単層である。

(壁) 黒褐色土層から褐色土層まで掘り込んでいる。北東壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東壁はやや外傾する。

(床面) 黒褐色土に黄褐色土がブロック状に入る貼床でかたくしまっているが、無数の黒色土の攪乱部分があり凹凸が激しい。南西壁寄りに白色粘土と砂鉄が分布する。柱穴P₄の埋土上位(壁寄り)にも砂鉄が分布している。

(柱穴) 4個確認された。埋土はいずれも黒色土と褐色土との混土である。

(施設) 北隅に長方形のピットがある。規模は開口部0.9m×0.7m、底部0.8m×0.5m、深さ0.3mで、黄褐色土層まで掘り込んでいる。また、北隅が半円形に抉り込まれている。

(カマド) 南東壁の北東寄りに位置する。崩壊しており形状は不明である。燃焼部と思われる部分は攪乱を受けて詳細は不明であるが、厚さ約2mの赤色変化を受けている。また、その下位は焼土が混入する粘土となっている。煙道部は掘り込み式で、煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下降する。煙出し部は外傾して立ち上がる。煙道部及び煙出し部の埋土は、上位が火山灰混入土、中位が土器、焼土混入の粘土で、下位は焼土や灰白色火山灰混入土である。

遺物 (第102図, 写真図版52)

出土した遺物は土師器環3点(口縁部1、体部1、底部1)、土師器甕20点(口縁部4、体部14、底部2)、縄文後～晩期の土器片26点、石器2点、砂鉄などである。土師器類のうち、床面及び貼床部から出土したものは第102図1の鉄滓が付着したB₂類の環1点、2のA類の甕1点と、3～6などのB類の甕12点である。また東隅柱穴と北西隅ピット抉部の埋土よりB類の甕の破片1点ずつ出土している。その他埋土上位よりB₂類の環2点、B類の甕5点である。当住居址の主体をなす土器は、ロクロ使用の非内黒環B₂類と、ロクロ不使用の甕B類であり、時期は平安時代(10世紀頃)と推定される。

B III-1 住居址

遺構 (第67図, 写真図版26)

(検出状況) B III区南西部、表土を除去した黒褐色土層(III層)面で、灰色火山灰の混入する曲尺状プランとして検出された。

(平面形・規模) 斜面下方側が削平され、また作業手順の誤りにより南端部が深掘りで切られているため詳細は不明である。残存する長辺は4.7mある。

(埋土・壁・床面) 削平のためいずれも確認されなかった。

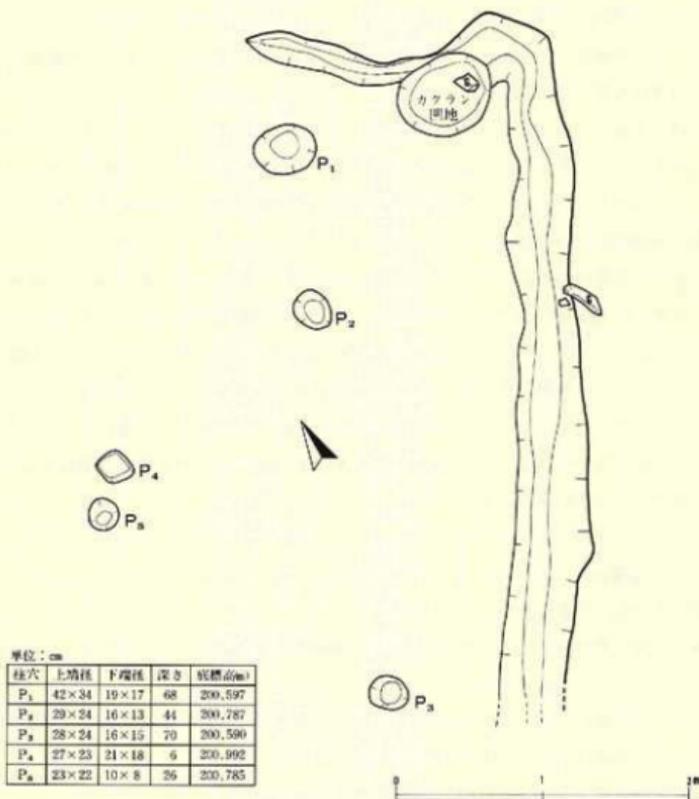
(柱穴) 5個検出されている。いずれも黒褐色土の埋土である。なお、P₂の上部から鉄製紡錘車が出土している。

(周溝) 幅40cm、深き20cmで曲尺状にまわっている。埋土は、上位が灰褐色土、下位が黒褐色土で灰色の火山灰が混入している。

(カマド) 検出されなかった。

遺物 (第103図、写真図版52)

出土した遺物は第103図15の土師器坏口縁部1点 (BIV-1住居址出土と接合した)、7の土師器甕口縁部1点、縄文前期の体部片1点、第106図7の鉄製紡錘車1点である。土師器坏はA₂類、甕はB類である。

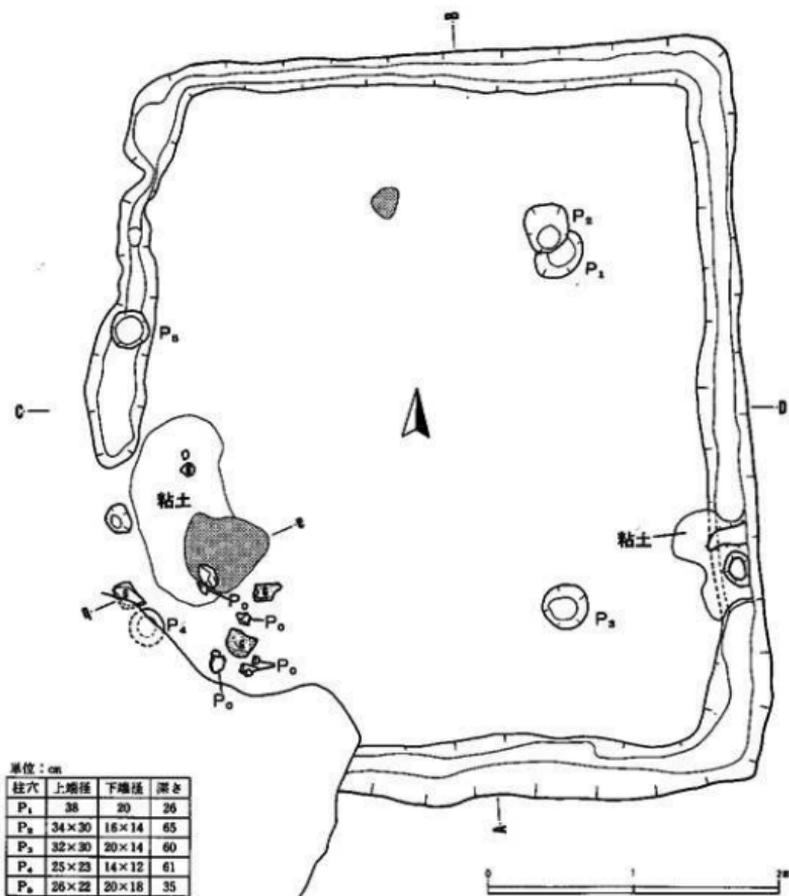


第67図 B III - 1住居址

B III-2 住居址

遺構 (第68・69図, 写真図版26・27)

(検出状況) B III区中央やや南西寄り、黒褐色土層 (III~IV層) 面で、黒褐色土の長方形プランとして検出された。



第68図 B III-2 住居址 平面

(平面形) ほぼ長方形で、長辺の方向は南—北である。

(規模) 上端5.2m×4.5m、下端4.6m×3.7m、壁高が最大54cmである。

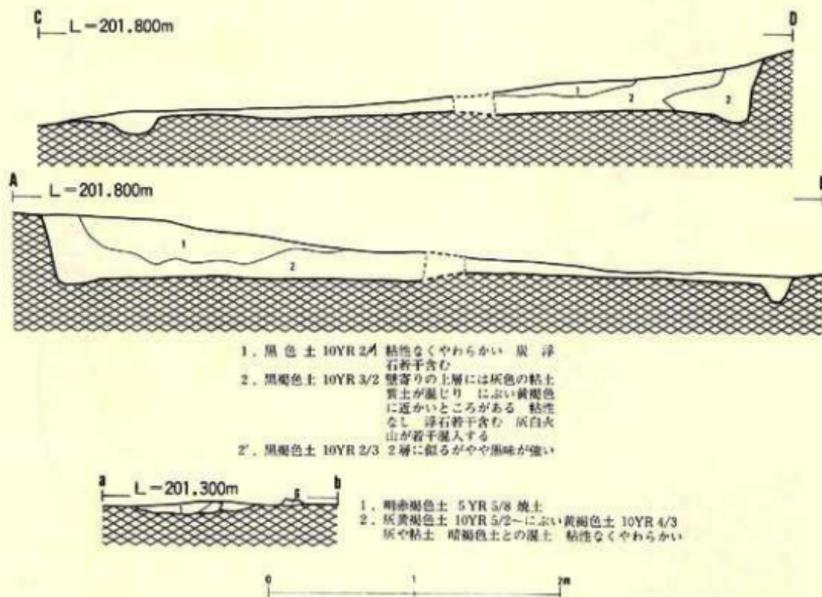
(埋土) 2層に大別される。上位は黒色土で、下位全面には灰白色火山灰が混入する黒褐色土が堆積する。

(壁) 東壁で黒褐色土層から褐色土層まで掘り込まれており、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁は削平されてすでない。

(床面) 東壁寄りが褐色土層で、中央部がIV層の黒褐色土層、西半がIII層の黒褐色土で、ほぼ平坦である。中央に部分的に貼床土と思われる褐色土がある。

(周溝) 南西隅を除いて幅20cm、深さ10cm~20cmの規模でまわっている。なお、東壁南寄りに白色粘土が分布している。

(カマド) 西壁南寄りに位置していたと思われるが、礫や土器が焼土のまわりに散乱するのみで形状は全く不明である。焼土は厚さ約8cmである。



第69図 BⅢ-2住居址 断面

(重複) 南西隅をわずかにBⅢ-1住居址によって切られている。

遺物 (第102図, 写真図版52)

出土した遺物は土器器甕11点(口縁部1、体部8、底部2)である。床面及びカマド内より出土している。土器器甕はロクロ不使用のB類に分類されるものだけである。

BⅣ-1住居址

遺構 (第70~72図, 写真図版28・29)

(検出状況) BⅣ区中央やや西寄り、表土を除去した黒褐色土層(Ⅲ層)面で、灰白色火山灰がまばらに混入した黒褐色土の方形プランとして検出された。

(平面形) 隅丸方形で、やや長い辺の方向は北西-南東である。

(規模) 上端4.5m×4.4m、下端4.0m×3.9m、壁高が15cm~73cmである。

(埋土) 5層に大別される。2には黄褐色の火山灰が、3、4には灰白色火山灰が混入する。

(壁) Ⅳ層の黒褐色土層まで掘り込んでいる。全壁ともほぼ垂直に立ちあがる。

(床面) 黒褐色土層で凹凸がある。

(柱穴) 3個検出されている。P₁、P₂の埋土は黒色土~黒褐色土で灰白色火山灰が混入する。

(施設) 東隅に円形のピットがある。規模は開口部径0.84m×0.74m、底部径0.73m×0.70m、深さ0.53mで、埋土は黒褐色土である。黄褐色土層まで掘り込んでいる。

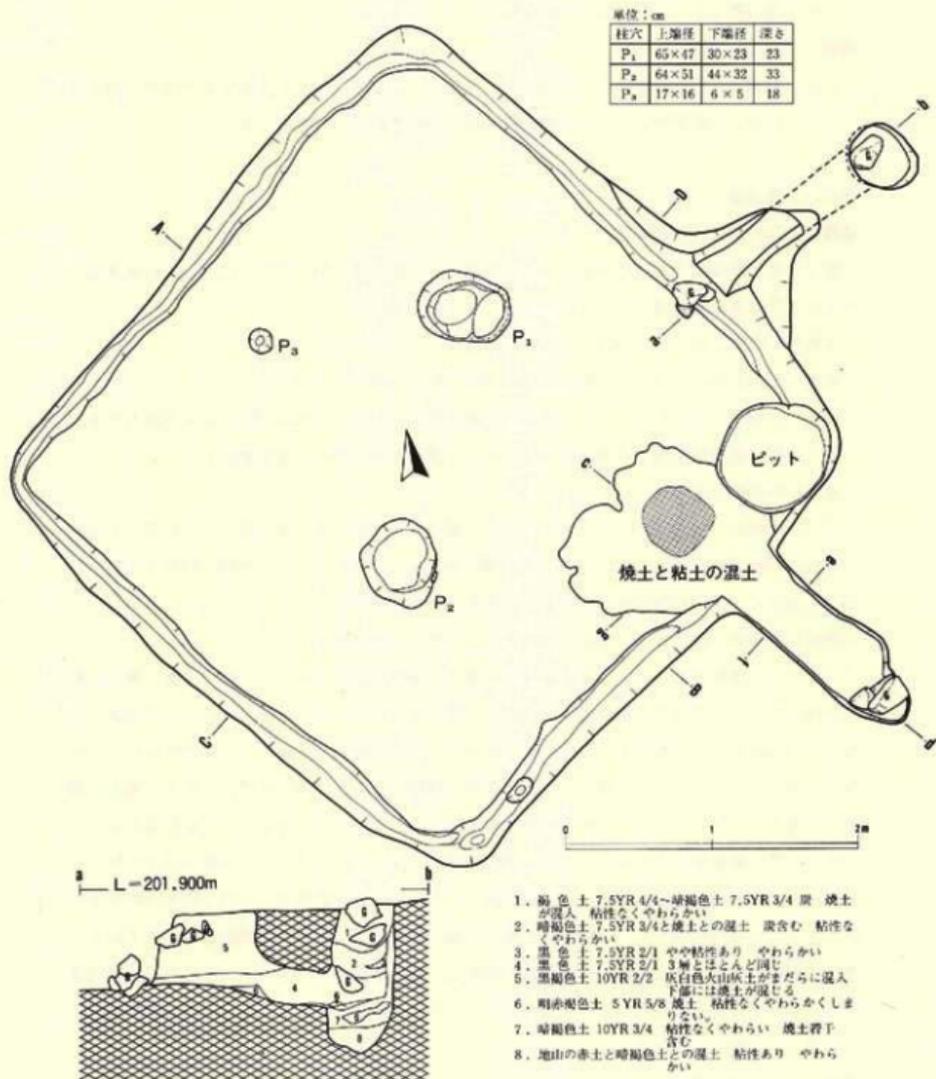
(周溝) 幅12m、深さ6cm~9cmで全周する。東側で土玉が出土している。

(カマド) 2基検出されている。1基は北東壁の南東寄りに位置するもので、煙道、煙出し部のみ残っている。煙道部は刺貫き式で、煙出し部に向ってゆるやかな傾斜をもって下降する。煙出し部は直立する。煙道部の焚き口側は崩壊し、火山灰混入の黒褐色土に礫が含まれる。底部には薄く焼土がみられる。煙出し部には礫が3個重なり、その周囲は焼けた粘土と焼土と黒色土で埋まっている。底部には焼土が厚くみられる。このカマドは廃棄されたものである。

他の1基は南東壁の北東寄りに位置し、崩壊不明のものである。カマド天井部や袖部の粘土、支脚用と思われる土器底部、礫などが広範囲に分布している。燃焼部には厚さ約8cmの焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式で、煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下がる。煙出し部は外傾して立ちあがる。煙道部及び煙出し部の埋土は、上位が火山灰混入土、中位は焼土や礫、土器混入の粘土、下位は焼土混入土である。煙出し部にはさらに大きな礫が上下に数個重なって埋まっている。

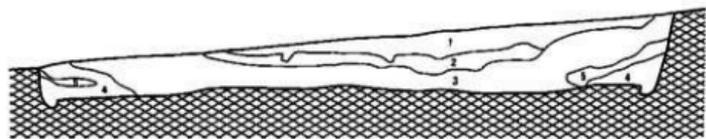
遺物 (第103~105図, 写真図版53~55)

出土した遺物は土器器坏42点(口縁部15、体部22、底部5)、土器器甕33点(口縁部9、体部20、底部4)、縄文後期の土器細片41点、石器1点、土製品1点、鉄滓2点である。土器器坏

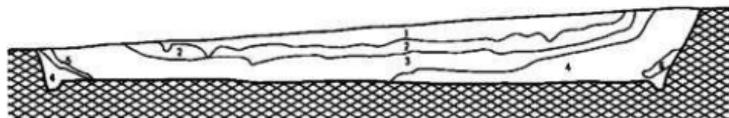


第70図 BM-1住居址

A L=201.900m

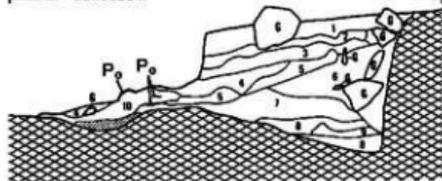


C L=201.900m



1. 黒色土 10YR 2/1 土器片 炭屑を含む 焼土含む
2. オリーブ褐色土 2.5Y 4/4-に多い黄褐色土 10YR 4/3 黄褐色 2.5Y 5/6 細粒火山灰と黒褐色土の混土 やわらかい
3. 黒褐色土 10YR 3/2 灰白色火山灰をわずかに含む やわらかい 床面直上には火山灰を比較的多く含む 焼土と炭を若干含む 土器片混土
4. 黒褐色土 10YR 3/2と灰白色火山灰との混土 火山灰がまだらに混じる 他の層に比較してサラサラしている
5. 黒褐色土 10YR 2/2 やわらかい 粘性なし

C L=202.000m

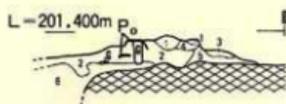


1. 黒褐色土 10YR 3/2 灰白色火山灰土がまばら(小ブロックに混入 粘性なし
2. におい黄褐色土 10YR 4/3 黒褐色土に黄褐色粘土質土が混入(軽道の上敷か?)粘性なくかたい 炭が混入
3. 黒褐色土 10YR 3/2 灰白色火山灰土がまばらに混入(ブロックのかたまりは1層より大きい)1層とはほぼ同じ土性。
4. におい黄褐色 10YR 7/3の粘土質土と暗褐色土 10YR 3/4との混土 焼土と炭を含む 粘性なくかたい 軽道の天井壁にあたるものか
5. 褐色土 10YR 4/4-暗褐色土 10YR 3/4 粘性なくかたい 炭と焼土が混じる 軽道部の上平(空洞部)での埋土であらう

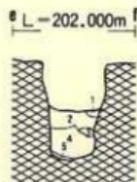
6. 黒褐色土 10YR 2/3 焼土や赤土のブロック土が混じる 粘性なくやわらかい 埋道部の先頭の埋出部へ通ずる部分の埋土であろう
7. 橙色土 5YR 6/8 焼土に黒褐色土が混じる やわらかい 焼土がつぶれており下部(底)にあたると思う
8. 黒褐色土 7.5YR 2/2 焼土を多く含む 粘性なくやわらかい
9. 橙色土 5YR 6/8 焼土と黒褐色土が混じり 得た部分 やわらかい
10. 橙色土 7.5YR 5/6-明黄褐色土 10YR 6/8 焼土と粘土質土との(粘土が焼土化したものか?) やや粘性あり かたい 土器片含む
11. 明赤褐色土 2.5YR 5/6 焼土

0 1 20

第71図 BM-1住居址 断面



1. におい黄色土 2.5YR 6/4 粘土質土（天井部の粘土と思われる一箇所）
2. 棕色土 7.5YR 7/6～明黄褐色土 10YR 8/2土主体に粘土質土が混じる 粘性なくよわっている
3. 明黄褐色土 2.5Y 6/6 2層に似るがやや黄色味が強い
4. 黒色土 10YR 7.1/1 粘性なくやわらかい
5. におい黄褐色土 10YR 4/3粘性なし 少ない 焼土若干含む
6. 黒褐色土 10YR 2/2浮石多く含む しまりよいピットの埋土



1. におい黄色土 2.5Y 6/4 粘土質土（天井部の層薄少）
2. 灰黄褐色土 10YR 4/2粘性なくやわらかい
3. 黒色土 10YR 1.7/1 粘性なくやわらかい
4. 棕色土 7.5YR 7/6 焼土に黒褐色土や灰黄褐色土が混じる（煙道のトンネル部）粘性なくやわらかい
5. 暗褐色土 10YR 3/4 焼土混じる やわらかい

第72図 BV-1住居址 断面

や甕のうち床面及びカマドより出土したのは第103図9～第105図29など22点である。坪では内黒のA₁、A₂類、非内黒のB₁、B₂類がそれぞれ5～6点ずつ出土している。部部に「本」の字を墨書している坪が11と12の2点みられる。甕ではロクロ使用のA類とロクロ不使用のB類が共伴するが、B類が多い。東カマドの煙道部から出土した土器は21の甕である。なお東カマドの支脚として倒立に掘え置かれていた土器は17と20の坪2点29の甕底部1点である。

(2) ピット

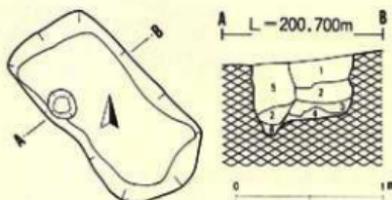
AN-5ピット

遺構（第73図、写真図版30）

（検出状況）AIV1区北辺中央の表土を除去した面（IV層、一部掘り下げV層）で、明黄褐色粘土や焼土混入土の長方形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも不整な隅丸長方形を呈し、断面形はピーカー状である。

（規模）開口部は1.44m×0.72m、底部は1.14m×0.57m、深さ0.40mである。



1. 黒褐色土 10YR 2/2と明黄褐色粘土質土 10YR 6/6との混土
2. 黒褐色土 10YR 2/3 灰白色火山灰が塊状に混入
3. 黒褐色土 10YR 2/2 黄褐色土が混入
4. 黄褐色土 10YR 5/6
5. 黒褐色土 10YR 2/3
6. 褐色土 10YR 4/6

第73図 AN-5ピット

(埋土) 6層に細分されるが、5、6層は柱穴状ピットの埋土である。2層には灰白色火山灰が混入しており、その状況は隣接するAIV-1住居址の埋土と同じである。

(壁) 黒褐色土層、暗褐色土層でやや外傾する。

(底面) 黄褐色土層で、凹凸や柱穴状ピットなどがある。

遺物 縄文土器のみで、沈線が施文された破片や晩期の破片が出土している。

AIV-6ピット

遺構 (第74図・写真図版30)

(検出状況) AIV1区西辺中央、表土除去面(V層)で、灰白色火山灰が混入する黒褐色土の長方形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも隅丸長方形を呈し、断面形は皿形を呈する。

(規模) 開口部は1.50m×1.06m、底部は1.44m×1.04m、深さ最大0.10mである。

(埋土) 黒褐色土の単層で、状況はAIV-1住居址の埋土と同じである。

(壁) 暗褐色土層で、直立するが浅く、ない部分もある。

(底面) 暗褐色土層で、ほぼ平坦である。

遺物 (第82・86図; 写真図版35・39)

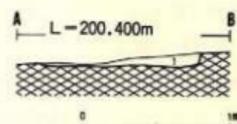
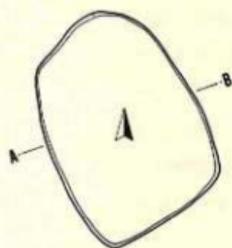
(土器) 縄文土器のみで、沈線の施文された破片(119)とループ文の施文された破片(48)が出土している。

BV-1ピット

遺構 (第75図・写真図版30)

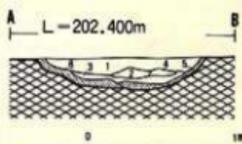
(検出状況) BIVk区南辺、表土を除去した段階で、灰白色火山灰混入黒褐色土の円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形は椀状である。



1. 黒褐色土 10YR 2/2 灰白色火山灰が塊状に混入

第74図 AIV-6ピット



1. 黒褐色土 10YR 3/2 白色火山灰 炭化物 焼土が混入
2. 黒褐色土 10YR 3/2と焼土との炭化物が多く混入
3. 黄褐色土 7.5YR 7/8 焼土
4. 濃い褐色土 7.5YR 5/4 焼土 炭化物が混入
5. 褐色土 7.5YR 6/8 焼土
6. 黒色土 10YR 2/1 炭化物 灰が混入

第75図 BV-1ピット

(規模) 開口部径1.12m×1.00m、底部径0.98m×0.80m、深さ0.22mである。

(埋土) 6層に細分される。全層とも焼土ないしは炭化物を含む。焼土の広がりや上下2面に観察された。炭化物の樹種はケヤキ、ナラである。

(壁) 立ちあがり明確でない。

(底面) 凹凸があり、中央に向かって傾斜する。

遺物 (第105図、写真図版55)

(土器) 土師器環の破片2点(30・31)と縄文土器の沈線が施文された破片や53と同一個体の破片が出土している。環はロクロ使用で、31は黒色処理されている。

BIV-3ピット

遺構 (第76図、写真図版31)

(検出状況) BIV b～f 区の黒褐色土層 (I～II層) 面で、灰白色火山灰混入土の楕円形プランとして検出された。

(形状) 平面形は開口部、底部とも隅丸長方形を呈する。断面形はピーカー状である。

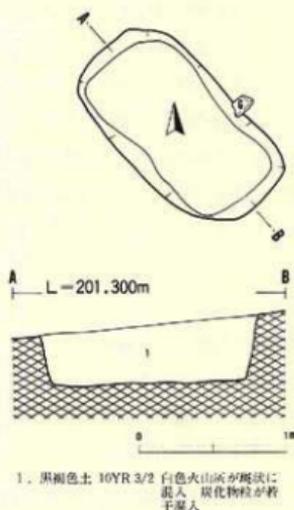
(規模) 開口部が1.50m×0.80m、底部が1.31m×0.70m、深さが0.40mである。

(埋土) 黒褐色土の単層である。灰白色火山灰が斑状に混入する。

(壁) 上部から黒褐色土層、中層浮石層、黒褐色土層であり、長辺中央部が張り出すが全体に直立する。

(底面) 黒褐色土層で、平坦であるが斜面に沿ってやや傾斜する。

遺物 ロクロ使用で黒色処理された土師器環の体部破片や沈線が施文された縄文土器破片が出土している。



第76図 BIV-3ピット

〔2〕出土遺物

平安時代の遺物は、遺構内及び遺構外を含めて土器約250点、石器1点、鉄製品1点、鉄滓6点、竈の羽口1点などが出土している。

(1) 土器 (第102～第105図, 写真図版52～55)

平安時代の土器は遺構内と遺構外を含めて、総数246点出土している。土器師の坏と甕である。これらは器形、成形技法により下記のように分類した。

土器器坏	A ₁ 類……内黒で、底部を静止糸切りで切り離した後、再調整しているもの
	A ₂ 類……内黒で、底部を回転糸切りで切り離し、無調整のもの
	B ₁ 類……非内黒で、底部を静止糸切りで切り離した後、再調整しているもの
	B ₂ 類……非内黒で、底部を回転糸切りで切り離し、無調整のもの
土器器甕	A類……ロクロ成形しているもの
	B類……ロクロを使用していないもの

坏A₁類は第103図9や10などに代表される。ロクロ成形で、内面はヘラミガキを施し黒色処理している。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で直上気味となる器形である。口径が14cm、底径6cm程、器厚は0.4cm～0.6cmとやや厚手である。静止糸切りで切り離した後、底部の周縁を手持ちヘラケズリで再調整している。

坏A₂類は第103図16などに代表される。ロクロ成形で、内面はヘラミガキを施し黒色処理している。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する器形である。口径が14.0cm～14.5cm、底径5cm程、器厚は0.3cm～0.4cmと、A₁類に比べて薄手となる。口径に比べて底部が小さい印象である。回転糸切りで切り離し、再調整はしない。

坏B₁類は図17に代表される。ロクロ成形で黒色処理がない。器形はA₁類と酷似し、体部は内湾し口縁部が直上する。大きさもやはり口径14cm前後、底径6cm、器厚が0.4cm～0.6cmとやや厚手である。静止糸切りで切り離した後、底部の周縁を手持ちヘラケズリで再調整している。

坏B₂類は図19や30に代表される。ロクロ成形で黒色処理がない。器形はA₁類と似ており、体部が内湾し、口縁部はやや外反する。口径14cm、底径5.0cm～6.5cm程、器厚は0.3cm～0.5cmで薄手である。回転糸切りで切り離し、再調整はしない。

内黒(黒色処理)の有無でA類とB類に分けたが、底部の切り離しや器形から見ると、静止糸切り再調整のA₁とB₁類、回転糸切り無調整のA₂とB₂類がそれぞれ近い関係にある。

甕A類は第104図21や23などで代表される。ロクロ成形であるが体部外面にヘラケズリやヘラナデを施す。器形には口縁部が短く外傾するものと、外傾したのち口唇部を上へ短く引きだすものの2種がある。口径は15cm～21cm程と大小がある。出土数は甕B類に比べて少ない。

甕B類は図26や28などで代表される。ロクロは使用していない。口縁部横ナデ、体部外面はヘラケズリ、ヘラナデ、内面はヘラナデ、刷毛目などを施して成形している。刷毛目を用いるものは少ない。器形には口縁部が外傾又は外反するものと、短く外反するものの2種がある。最大径が口縁部にあるものと体部にあるものとの相違が見られる。口径は11cm~20cmとバラエティーがある。又、底部は第102図6のように周縁が張り出し、屈曲して体部に立ち上がる形と、第105図29のようにすっきりした立ち上がりの2種がある。出土数が多い。器面に凹凸があり、胎土がもろくなっているものがほとんどである。

以上の分類をもとに各遺構から出土した土器の特徴を述べる。

第102図1~6はAIV-1住居址で出土している。図1は坏B₁類の底部で鉄滓が付着している。鍛冶作業の過程で、鉄滓が凝固する前に何らかの原因で破片についたと見られ、表裏に連続して付着する。図2は甕A類の口縁部片である。図3~6は甕B類の口縁~底部片である。いずれも残存部分が少ない。口縁部が外反し、体部が張りむ器形である。図6の底面は砂粒が多く付着したいわゆる砂底のものである。底部の周縁が外に張り出し、屈曲して体部へ立ち上がる。

図7はBIII-1住居址の床面出土である。甕B類の口縁部片で、口縁が短く外反する器形である。磨耗があり胎土が不良である。

図8はBIII-2住居址の床面出土である。甕B類の底部片である。底部の周縁が外へ張り出し屈曲して体部へ立ち上がる器形である。体部の下端の調整が雑で空洞部分がある。

第103図9~第105図29まではBIV-1住居址より出土したものである。これらのうち図9~図20は坏類で、坏A₁類は図9~図13の5点、坏A₂類は図14~図16の3点、坏B₁類は図17と図18の2点、坏B₂類は図19と図20の2点である。図11は全体の4分の3を残存するものであり、体部に「本」の墨書が見られる。図12も同じく「本」の墨書がある体部片である。図17は東カマドの支脚に用いられていたもので口縁部を若干欠損するがほぼ完形品である。図20の底部も東カマドの支脚とされていたものである。

21~24の4点は甕A類である。図21はBIV-1住居址の東カマドの煙道部より出土したものである。口縁部が短く外傾した長胴形で、体部上半はロクロ痕の凹凸が顕著に残る。図22と図23は口縁部が外傾後、口唇部を上へ引きだした同形の甕であるが大きさが異なっている。図24は残存部が極めて少ないものの底部と体部の一部分から、復元できた小型の甕である。底面の切り離しは回転糸切りである。

図25~図29までの5点は甕B類である。図25と図26は口縁部の外反する屈曲の仕方が他のB類に比べて強くなっている。また内面調整に刷毛目を用いている点も異なる。図26と図27は甕B類の標準的な器形で、出土量が多い。図29の底部は東カマドの支脚として据え置かれていた

もので、体部の立ち上がりはすっきりした形である。

図30と図31は、BIV-1ピットより出土した坯の口縁部片で、B₂類とA₁類である。図32と図33は土取穴より出土した坯B₂類、図34～図36は遺構外出土の坯A₁、坯B₁、坯A₂の破片である。

(2) 石器 (第97図41, 写真図版51)

砥石1点が出土している。両面ともよく使用されており、中央部で折半したものと思われる。両側面も使用されている。

(3) 鉄製品・鉄滓等

紡錘車が1点、鉄滓が6点、その他に砂鉄が出土している。

① 紡錘車 (第106図, 写真図版56)

BIII-1住居址からの出土である。軸長が16.9cm、軸径が0.6cm×0.5cm、車径が5.5cmである。形状は錆で不明瞭であるが軸断面が楕円形、車が円形を呈する。

② 鉄滓 (写真図版56)

6点のうち11と12はBIV-1住居址からの出土である。最も重量のあるものは16である。

③ 砂鉄 (写真図版56-10)

AIV-1住居址床面の2地点から出土したものである。

(4) その他 (第106図, 写真図版56)

罎の羽口先端部破片が出土している。外径6cm、内径3cm、現存長8cmで、先端部には鉄滓と自然軸がかかり内側に丸くなっている。

3. 近世・近現代

(1) 遺構と遺構内出土遺物

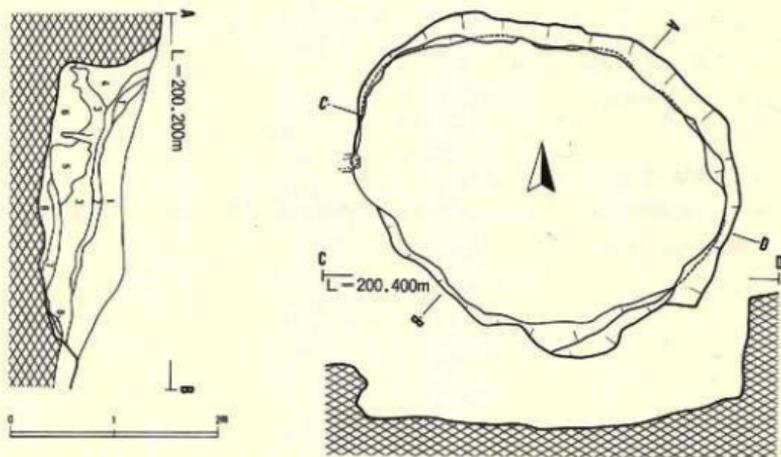
江戸時代以降の土取穴と大正末～昭和初期の炭窯で、土取穴1基には種々の遺物が紛れ込んでいる。

(1) 土取穴

遺構 (第77図・写真図版31)

3箇所検出された。いずれも調査区南端の崖にかかる位置である。AIV-1土取穴とBV-1土取穴は、平面形が住居址状で楕円形を呈するが、BV-2土取穴は湾入が多く不整形である。埋土は上位が表土であるほかは、VI層の黄褐色土やその下位の青灰色土が大ブロックで堆積ないしは混入するものである。

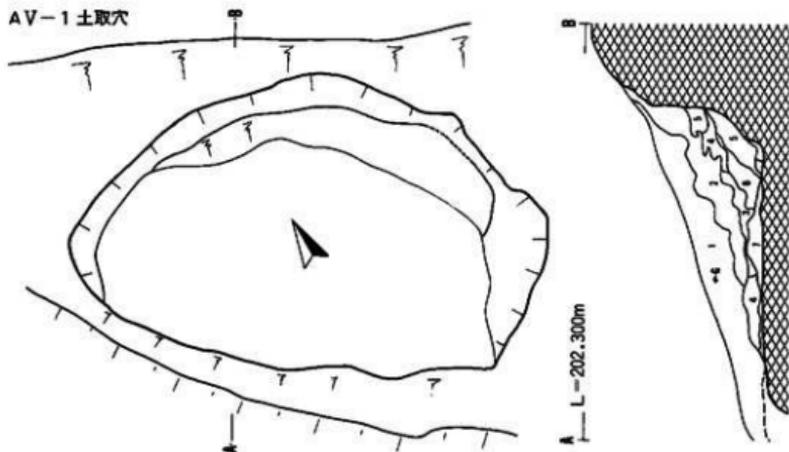
掘り込みは黒褐色土層から黄褐色～明黄褐色土層、さらに砂質と粘土質の互層からなる青灰色～乳白色土層にまで達している。底面はAIV-1土取穴とBV-1土取穴は平坦部が多い。しかし、住居址等の床面のようなかたくしまった面や柱穴等はいっさい検出されていない。



1. 黒色土 10YR 2/1 粘性なくやわらかい 植生根が多い 1'はやや浮石が少ない
2. 黒褐色土 10YR 2/2 粘性なくやわらかい 中層浮石を若干含む
3. 黒色土 10YR 2/1 粘性なく1層とはとんと同じだがややゆしまりがある
4. 黒色土 10YR 2/1と明黄褐色土 10YR 6/8との弱土
5. 暗褐色土 10YR 3/3 粘性あり かない 基本土層の第5層にあたる ブロック土
6. 黄褐色土 10YR 5/8のプロック土 粘性ありかない
7. 明褐色土 10YR 0/8とにふい黄褐色土 10YR 6/3との基土 粘性あり かない
8. 黒褐色土 10YR 2/3 粘性あり しまっている

第77図 AIV-1土取穴

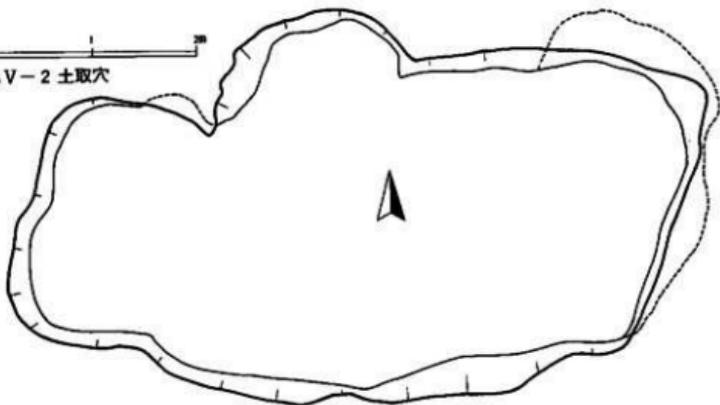
AV-1 土取穴



- | | |
|--------------------------------------------------------|--------------------------------------------------|
| 1. 黒色土 10YR 2/1 表土 植生根が多い 非常にやわらかい | 5. 明黄褐色土 10YR 6/8 壁の地山の赤土（粘土質）の崩落土やわらかく粘性がある |
| 2. 黒色土 10YR 2/1 1層とほぼ同じだが 地山の赤土が少量混入する 植生根多くやわらかい | 6. 黄褐色土 10YR 5/8 地山の赤土の汚れたもの 赤色浮石がやや多い やわらかく粘性あり |
| 3. 黒色土 10YR 2/1と地山の赤土の混土（5：1）やわらかい | 7. 淡黄色土 2.5Y 7/3 赤土の下部の粘土質土 砂質土を含む かたく粘性あり |
| 4. 地山の赤土に黒色土が混じる（赤土主体）全体の色調はぶい黄褐色土 10YR 4/3 やわらかく粘性がある | |

0 1 20

AV-2 土取穴



第78図 AV-1・AV-2 土取穴

遺物 (第82・83・91・95・105図, 写真図版35・36・44・47・48・55)

縄文時代早・後・晩期の土器 (41・65・190) や平安時代の坏片 2点 (32・33)、残存部が3分の2の寛永通宝、剥片石器 (7・36~40) などが出土している。

(2) 炭窯

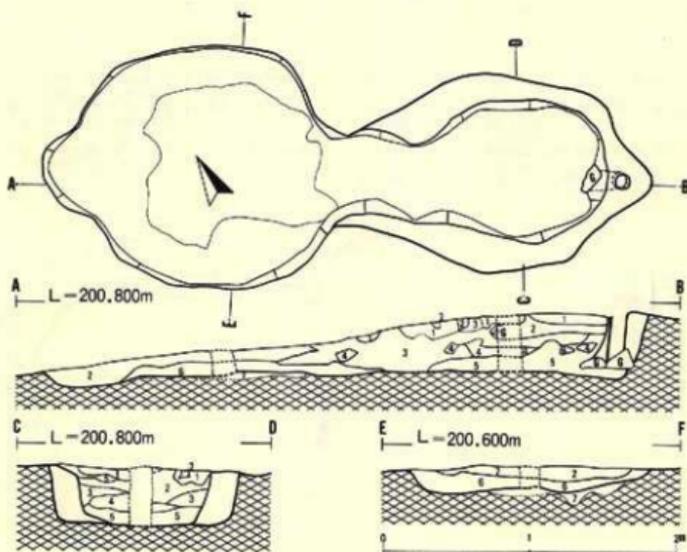
遺構 (第79図, 写真図版32)

(検出状況) A III o ~ P 区、表土を除去した黒色土中で焼土や炭化物混入土の楕円形プランとして検出された。

(形状) 窯本体と前庭部からなり、ひょうたん状を呈する。

(規模) 本体外側で2.1m×1.4m、前庭部が1.9m×1.6m、本体の深さが0.4mである。

(構造) 壁体を10cm~25cmの厚さの粘土で造っている。天井部は崩落して不明。煙出し部は下



1. オリーブ褐色土 2.5YR 4/6 粘土質 粘性あり かなくしまっている
2. 黒色土 10YR 1.7/1 粘性なくやわらかい 灰と焼土を若干含む
3. オリーブ褐色土 10YR 1.7/1 (1層)と焼土と灰白色粘土との混土 やわらかい

4. 灰白色土 5Y 7/2-オリーブ褐色粘土質土 5Y 6/3 粘性なくかたい 土壁の崩落土
5. 棕色土 5YR 7/8-6/8 焼土 やわらかい
6. 灰黄褐色土 10YR 4/2 主体に黒色土が混じる 焼土 灰を多く含む 粘性なくかたくしまっている
7. 褐色土 10YR 4/6

第79図 炭窯

部を石組みにして土管を立てている。焚き口部は不明である。前庭部の底に粘土が敷きつめられている。

(埋土) 灰や焼土、粘土などの混土である。底面には粉炭と灰が広がっている。前庭部には、不完全炭化木や炭が多く残っている。

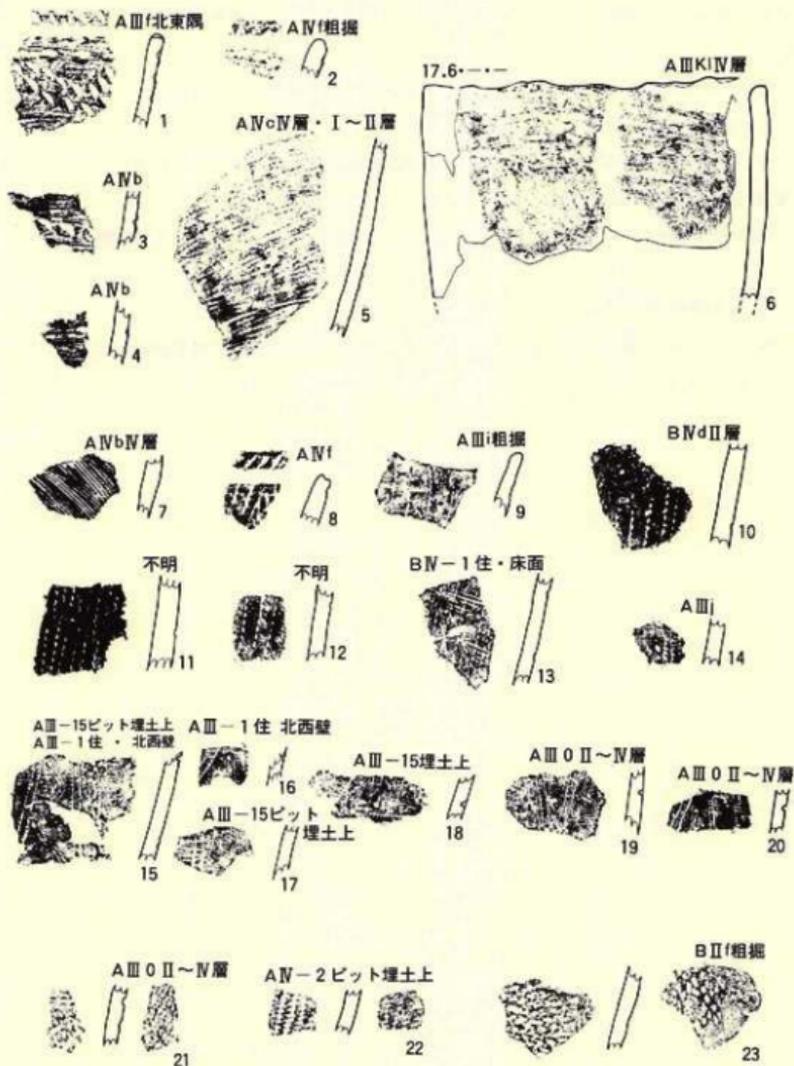
(壁・広面) 壁の内側は真赤に焼けており、底面は煙出し口に向かって下り傾斜している。

遺物 (第106図、写真図版56)

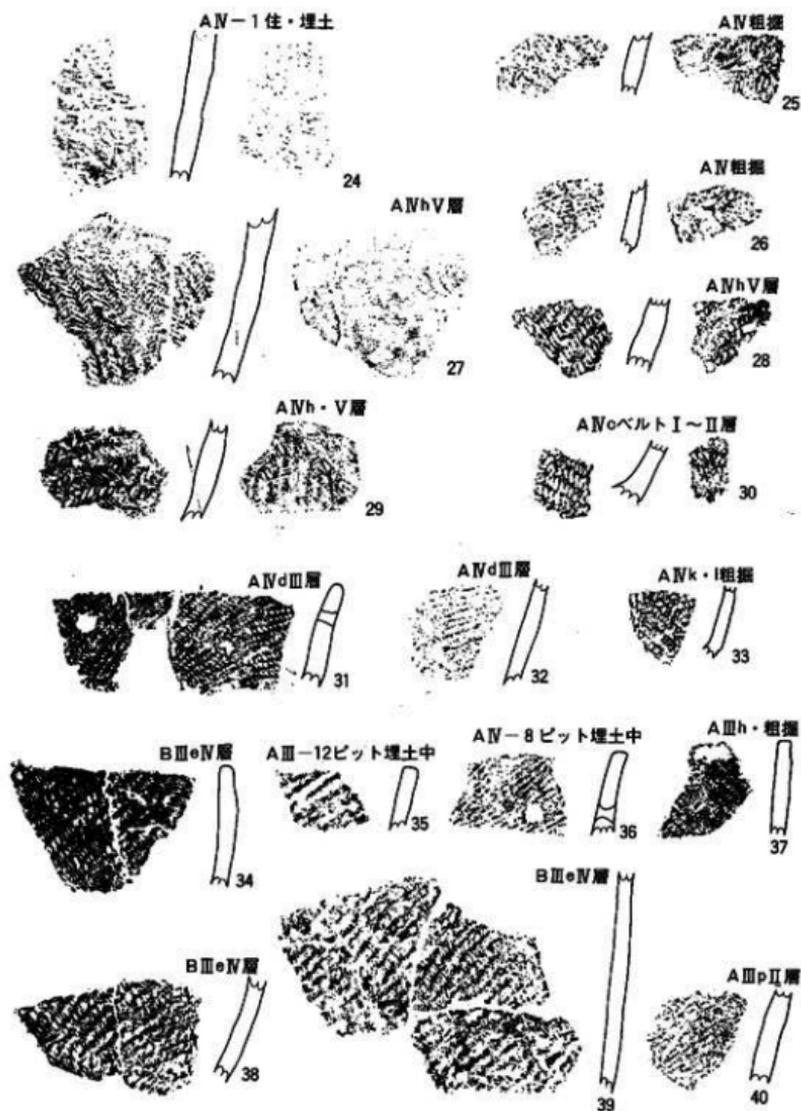
(鉄器) 鉤が出土している。カギとカマの両方ついた鉄器であるが、カマの方は欠損している。

[2] 遺構外出土遺物

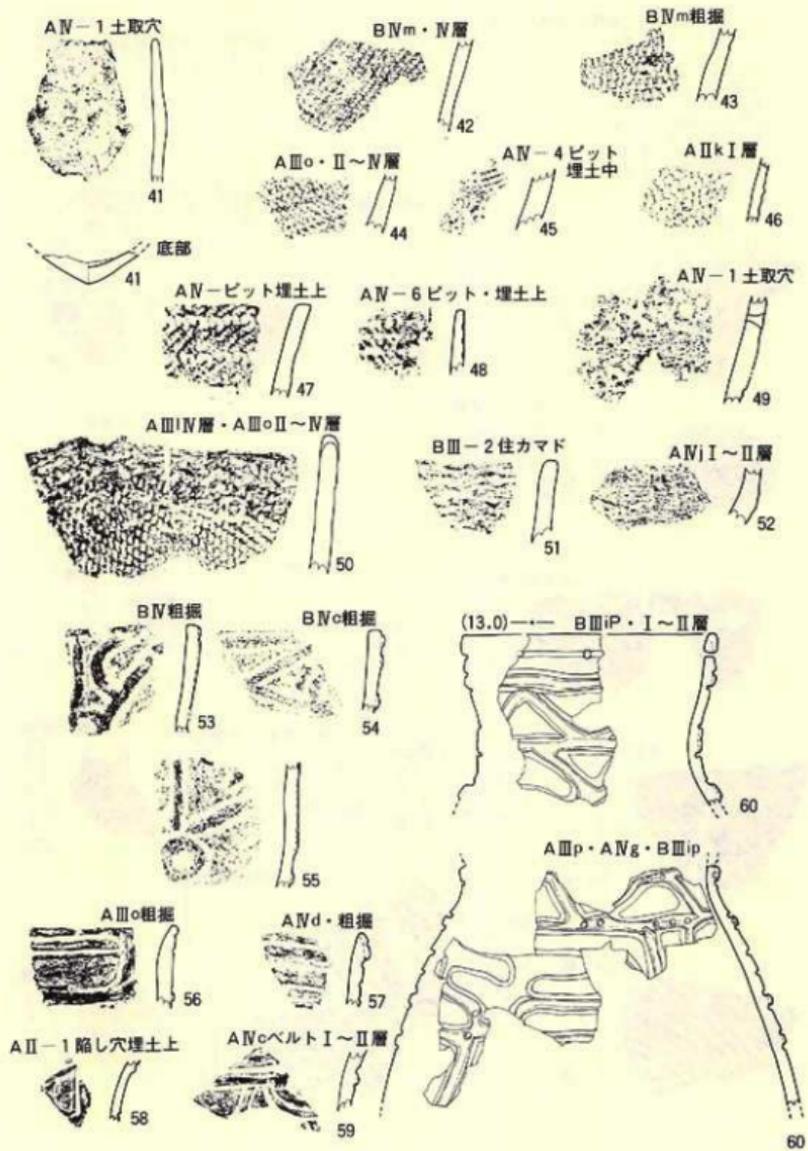
陶器が5点(青緑釉1点を含む)、磁器が4点、残存部が3分の1の寛永通寶1点が出土しているのみである。



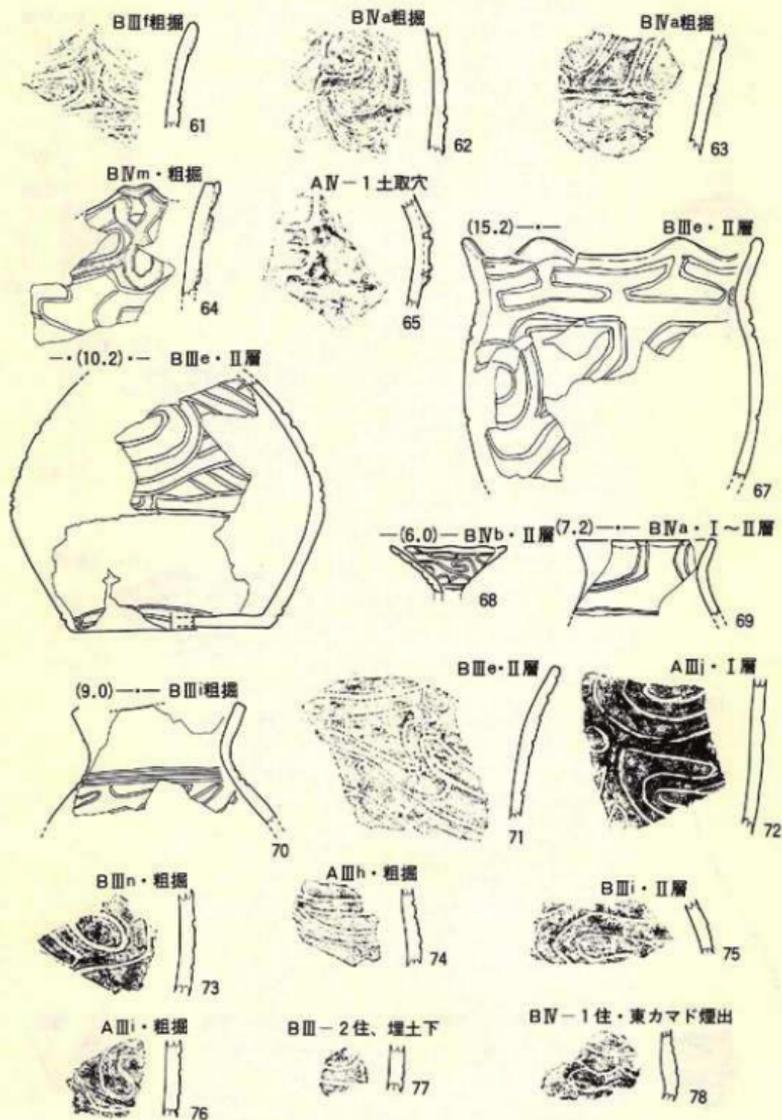
第80図 縄文土器(1) 第I・II群土器 S-1/3



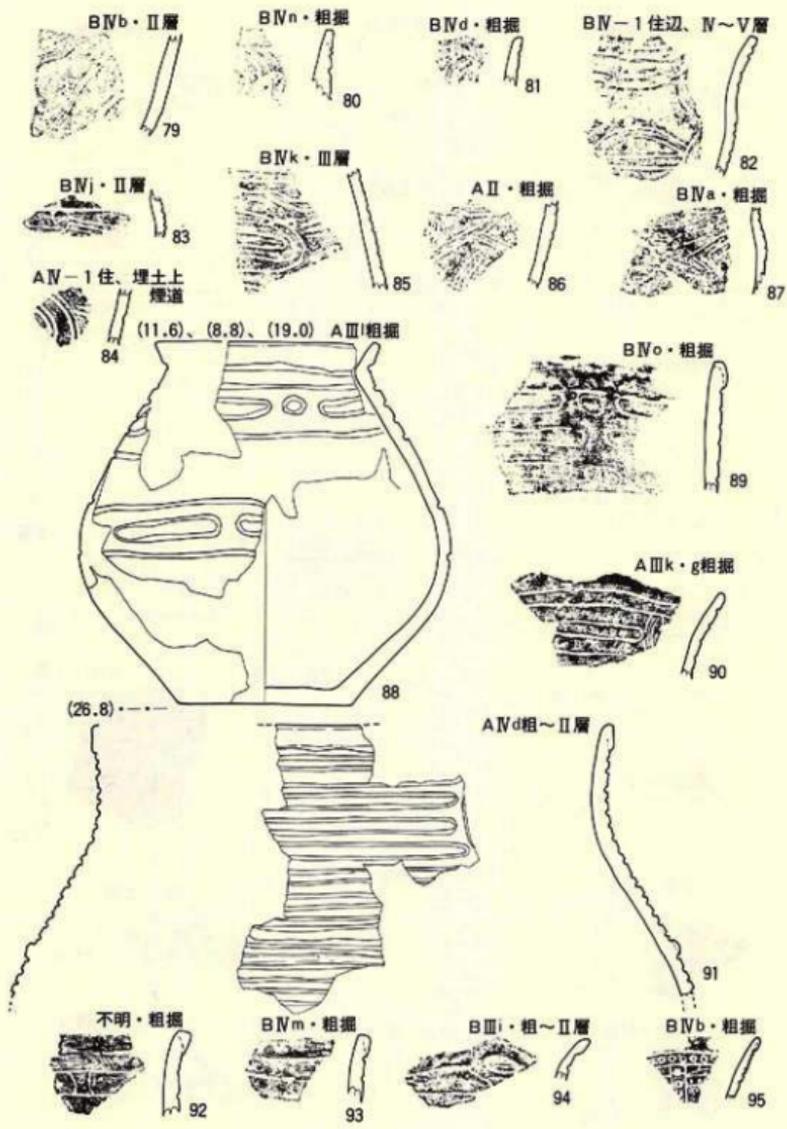
第81図 縄文土器(2) 第II群土器 S-1/3



第82図 縄文土器(3) 第Ⅱ・Ⅲ群土器 S-1/3



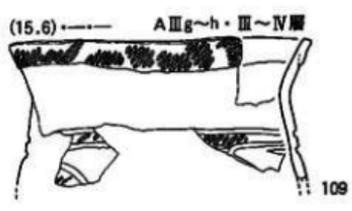
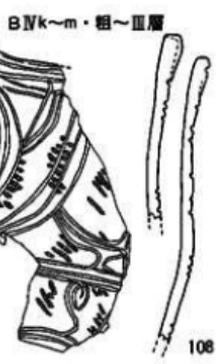
第83図 縄文土器(4) 第Ⅲ群土器 S-1/3



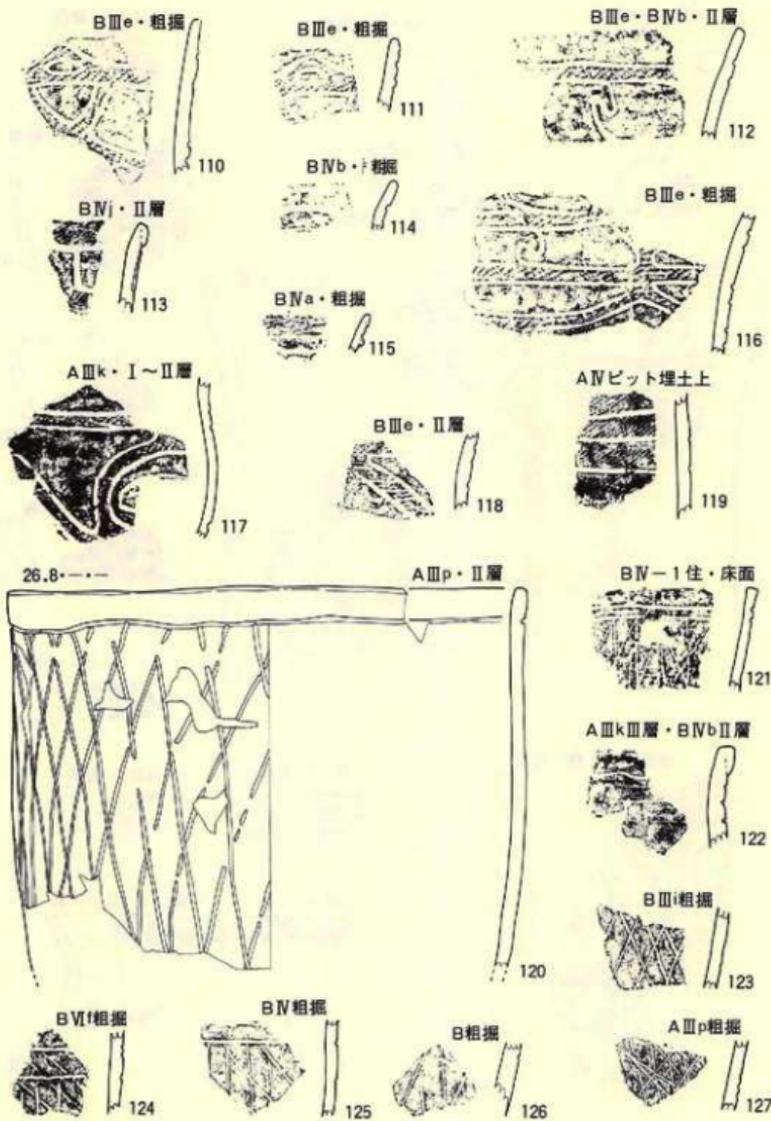
第84図 縄文土器(5) 第Ⅲ群土器 S-1/3



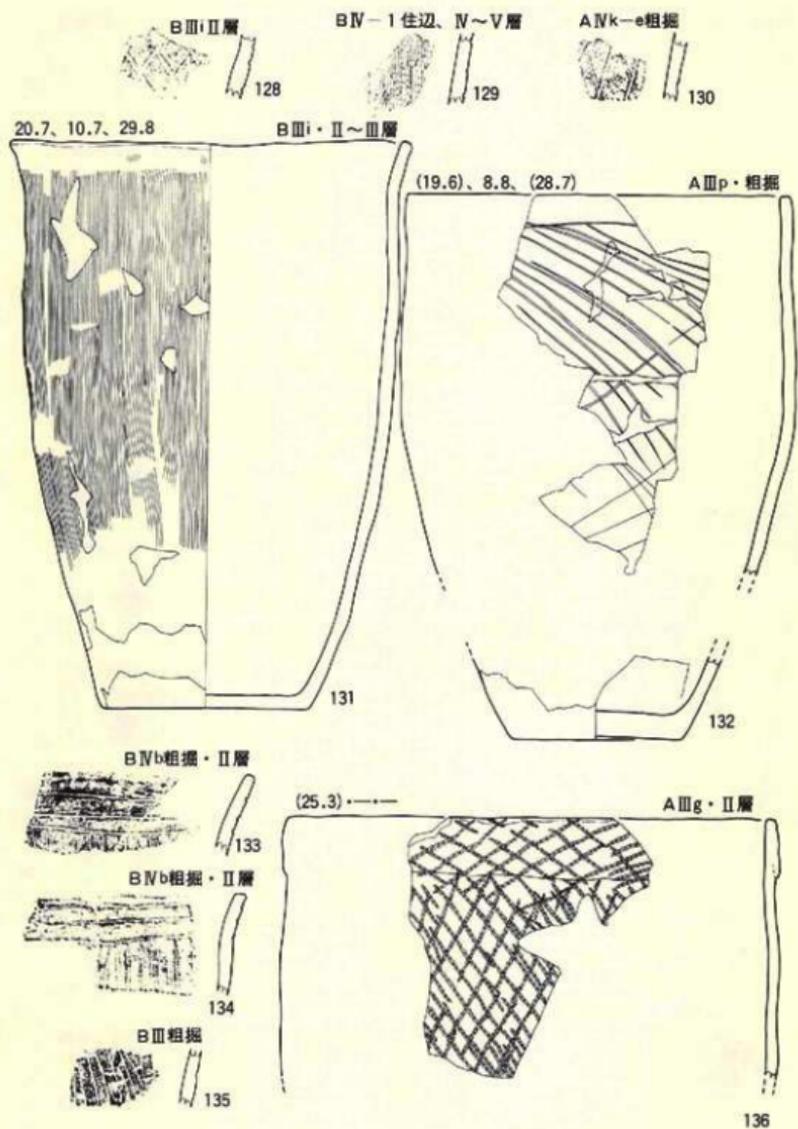
(29.2) · ---



第85圖 縄文土器(6) 第Ⅲ群土器 S-1/3



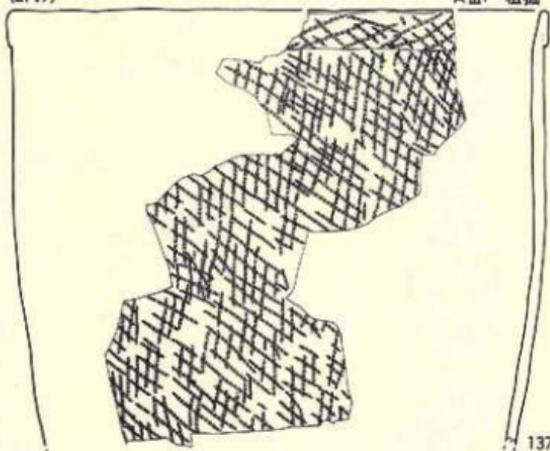
第86図 縄文土器(7) 第Ⅲ群土器 S-1/3



第87図 縄文土器(8) 第Ⅲ群土器 S-1/3

(27.7) ····

A III i ·粗掘



137

A II p III 層



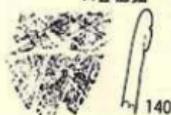
138

B III e 粗掘



139

A II 粗掘



140

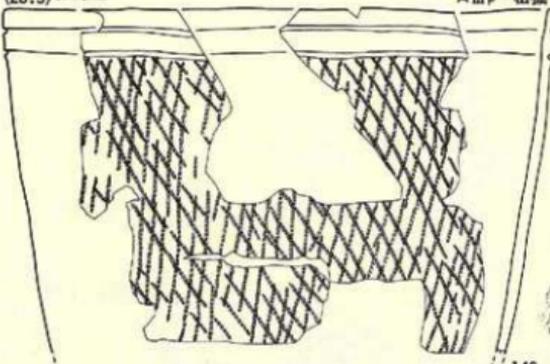
粗掘



141

(28.3) ····

A III p ·粗掘



146

B III f 粗掘



142

B III i III 層



143

B III i II 層



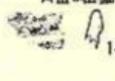
144

B III i II 層



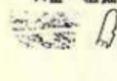
145

A III o 粗掘



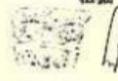
147

A III ·粗掘



148

粗掘



149

B III a ベルト I ~ II 層



150

A III k 粗掘



151

A III p 粗掘



152

B IV - 1 住辺、IV ~ V 層



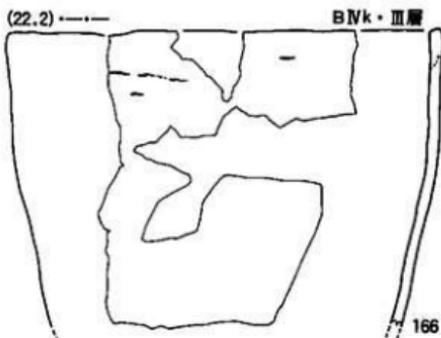
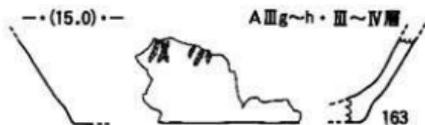
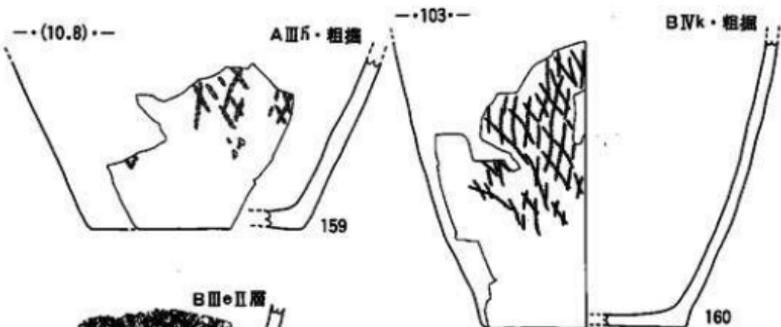
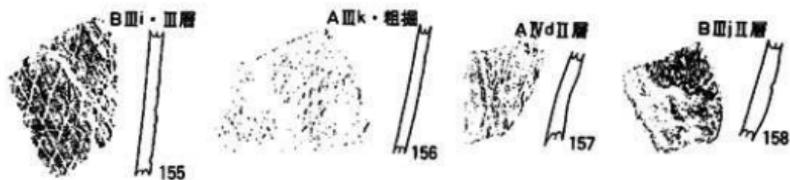
153

A IV - 1 住、床面

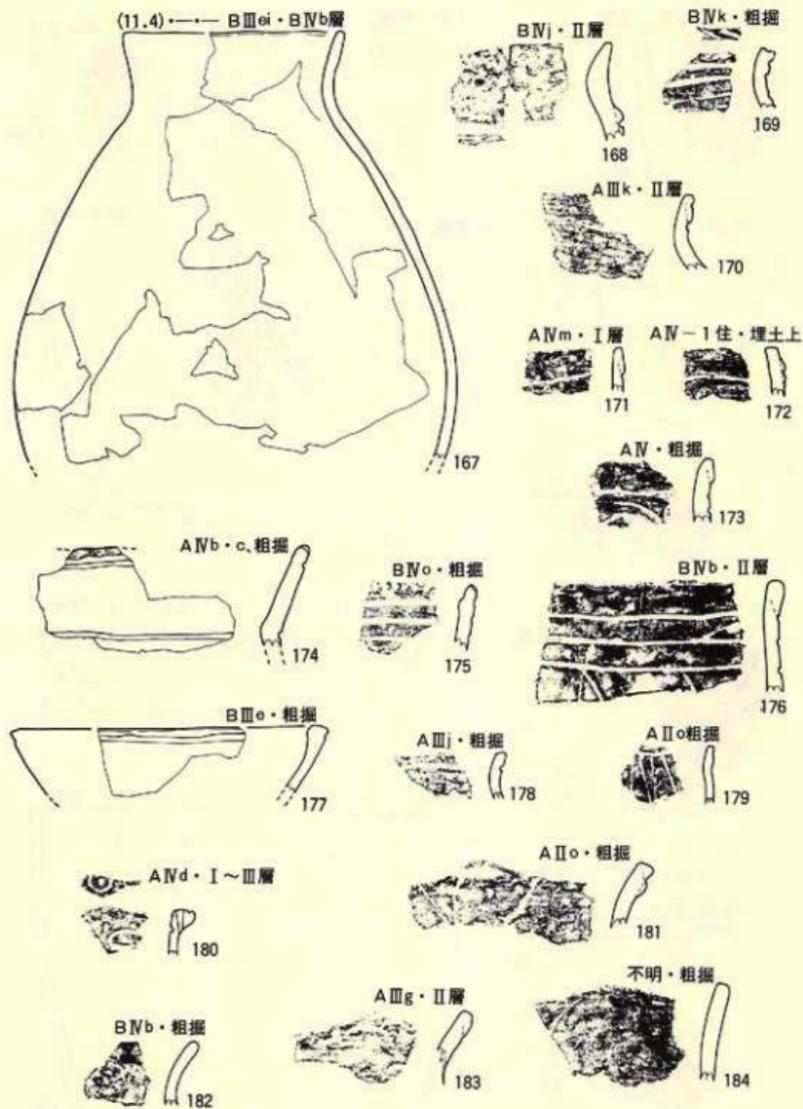


154

第88図 縄文土器(9) 第III群土器 S-1/3



第89圖 縄文土器(10 第Ⅲ群土器 S-1/3)



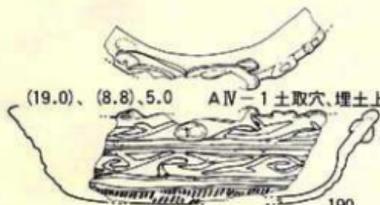
第90図 縄文土器(Ⅰ) 第Ⅲ群土器 S-1/3

(17.0)、8.5、5.9 AⅢp、AⅢd、BⅢm、I~Ⅱ層



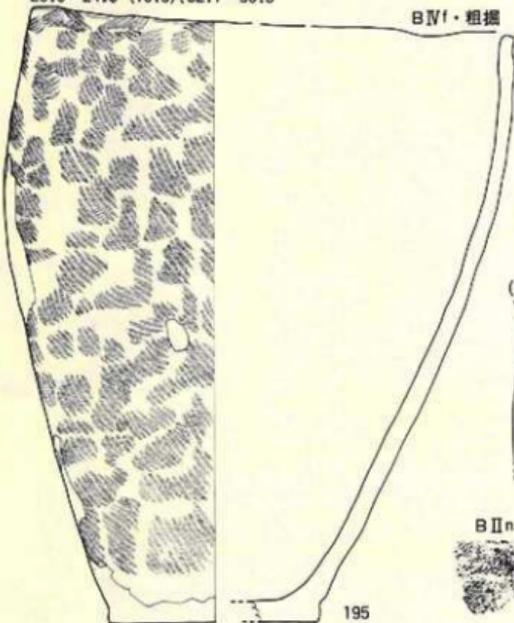
185

(19.0)、(8.8)、5.0 AⅣ-1土取穴、埋土上



190

26.0~24.8 (10.5)、32.1~30.5



195

AⅣ-1住・埋土上



186

AⅣh・粗掘



188

AⅢo・粗掘



191

AⅢ~Ⅳh-I・Ⅱ層



193

AⅣk・粗掘



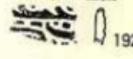
187

AⅣ・粗掘



189

AⅣ・粗掘



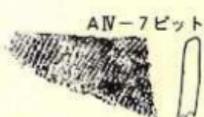
192

AⅣh・V層



194

BⅣf・粗掘



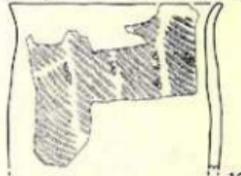
196

AⅣk・粗掘



197

(11.0) --- BⅣ-1住辺・Ⅳ~Ⅴ層



198

BⅡn・粗掘



199

AⅣl・粗掘

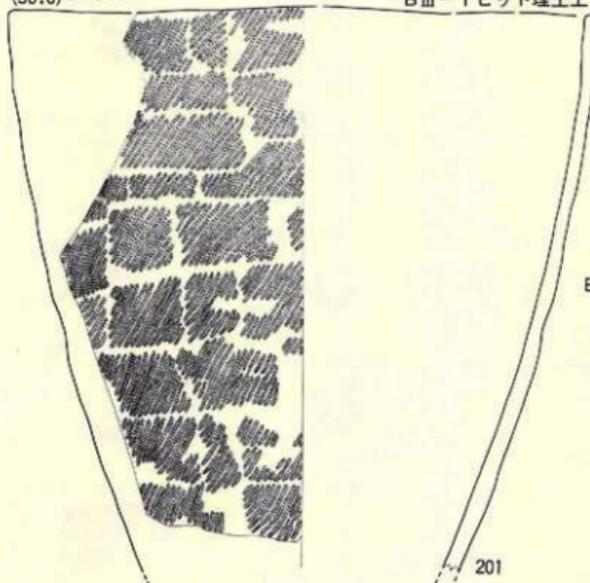


200

第91図 縄文土器(12) 第Ⅳ、Ⅴ群土器 S-1/3

(30.0) ·····

B III-1 ビット埋土上



B IV-1 住辺・IV~V層



B IV・粗掘



B IV-1 住辺・IV~V層



A IIIb・粗掘



B IVk・粗掘



(25.6) ·····

A III d・f B III e, B IV b, 粗掘・II層



A IV d~h・II層



A IV i・粗掘



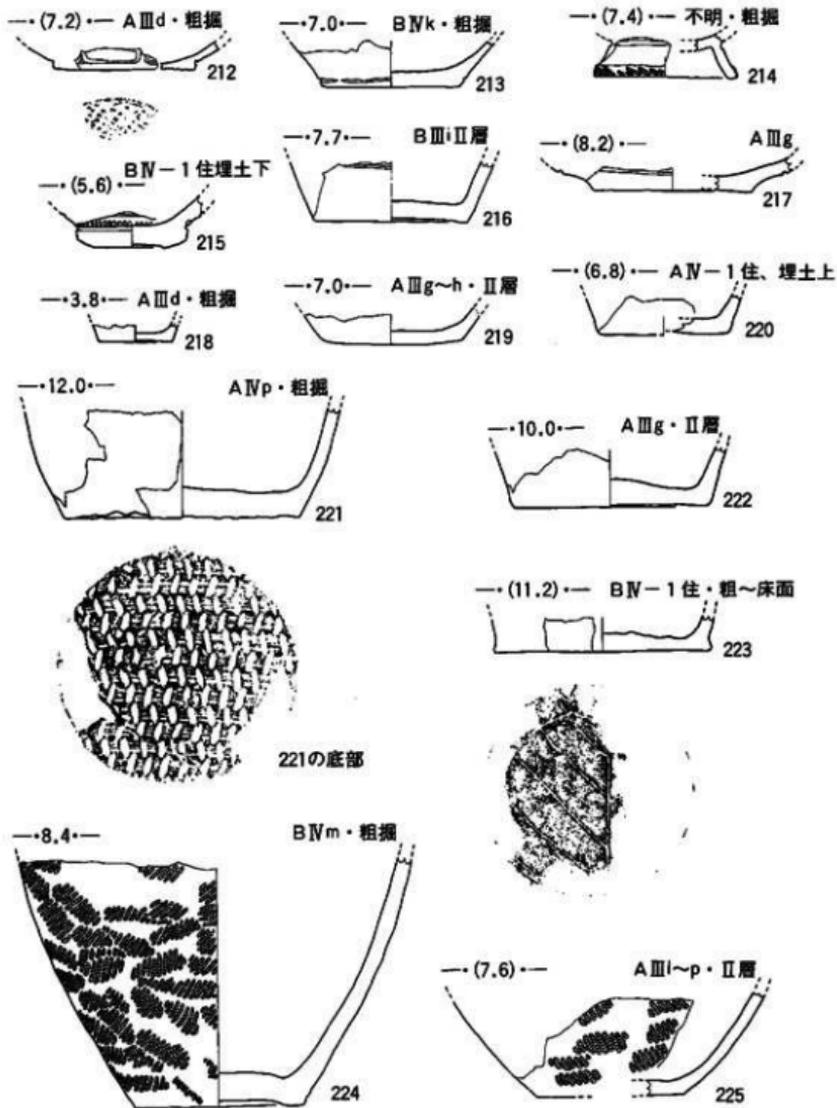
A IV h・I~II層



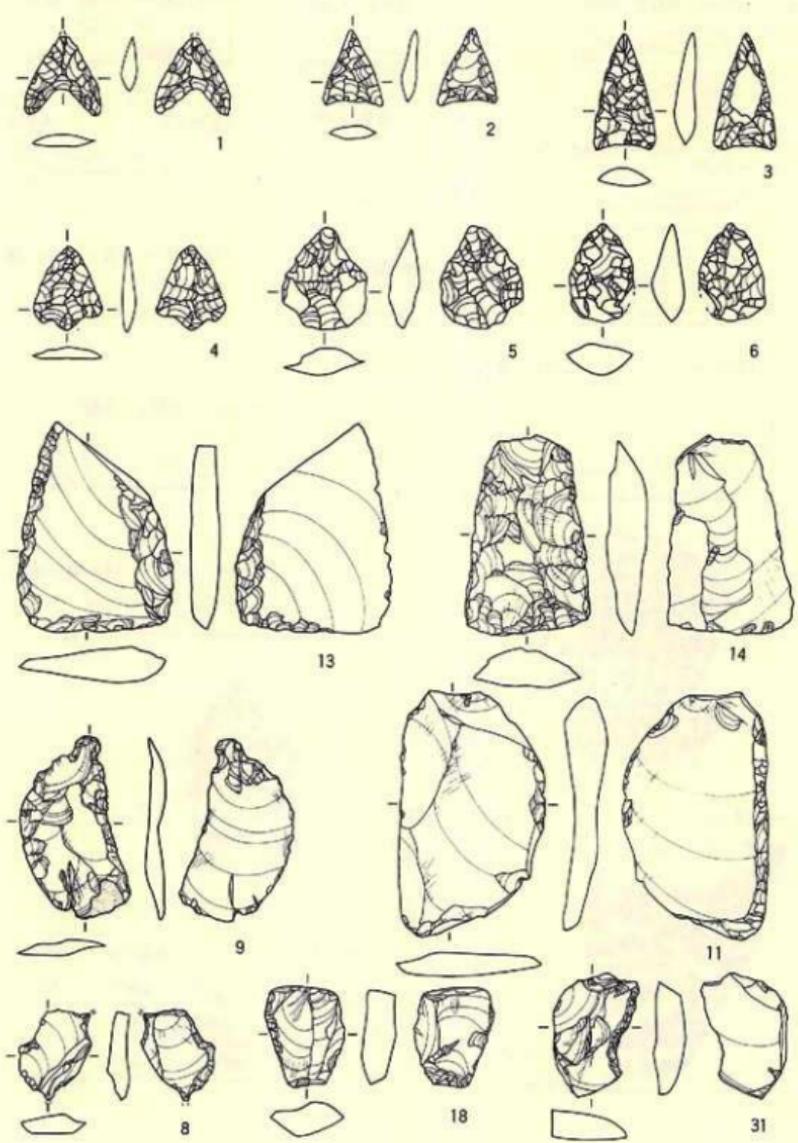
A IV h・I~III層



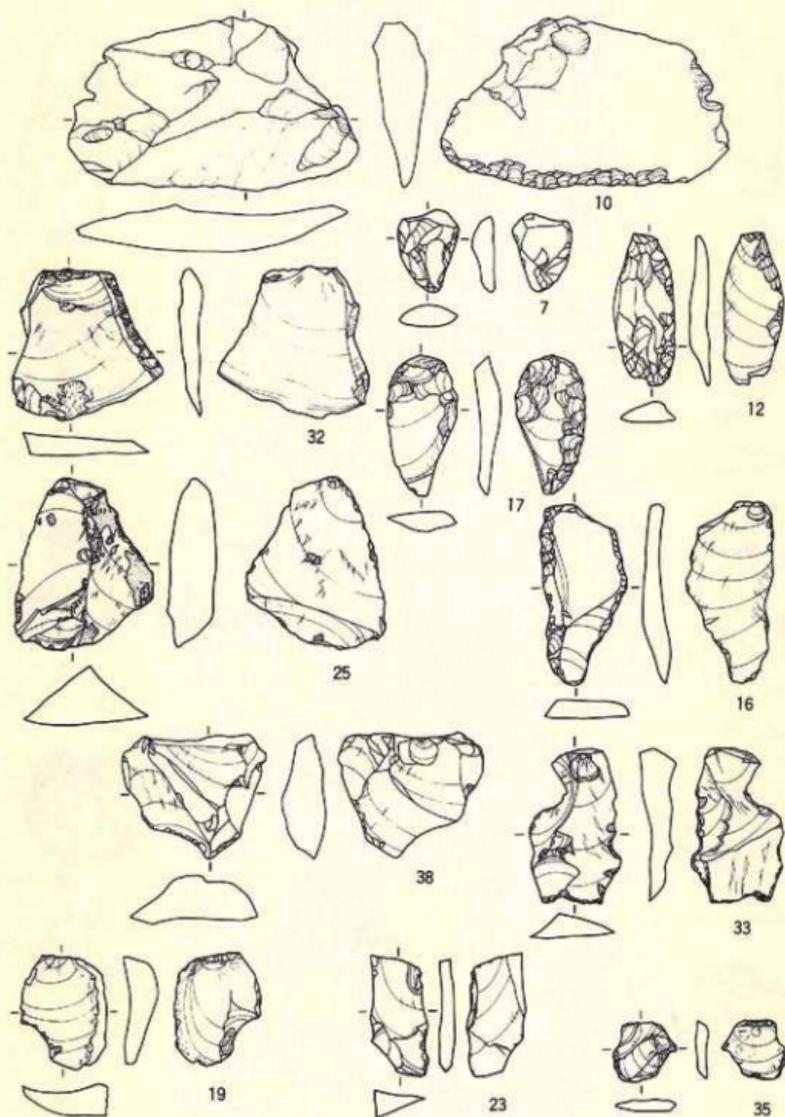
第92図 縄文土器 (13) 第V群土器 S-1/3



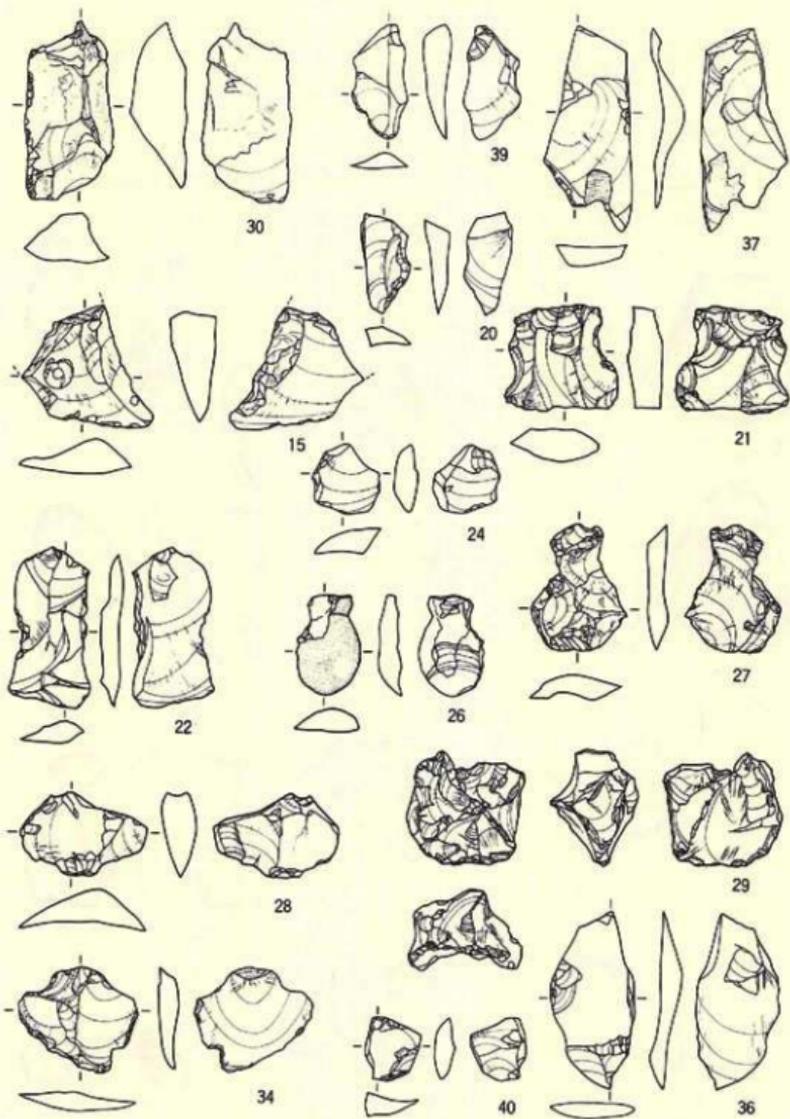
第93図 縄文土器 (14 第V群土器 S-1/3)



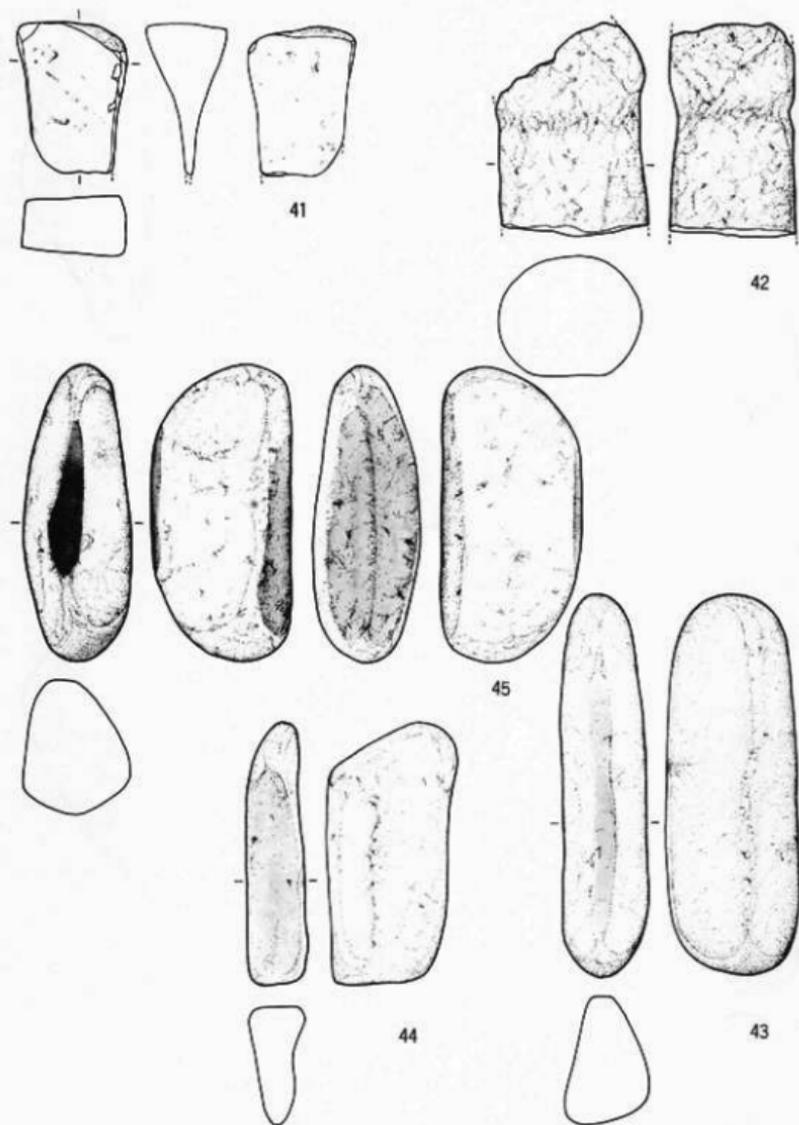
第94図 石器(1) 1~6のS-2/3、その他のS-1/2



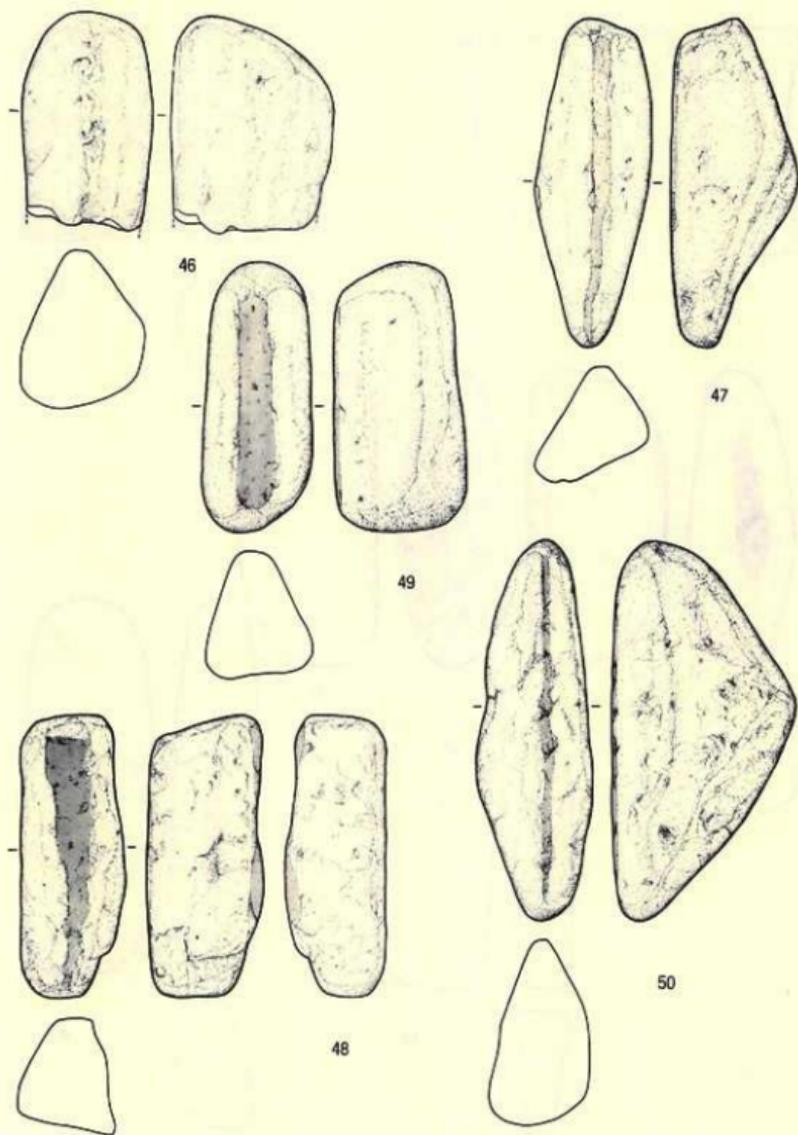
第95图 石器(2) S-1/2



第96圖 石器(3) S-1/2



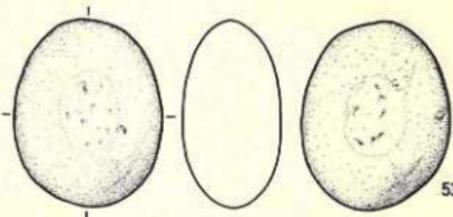
第97図 石器(4) S-1/3



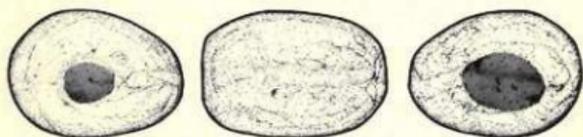
第98図 石器(5) S-1/3



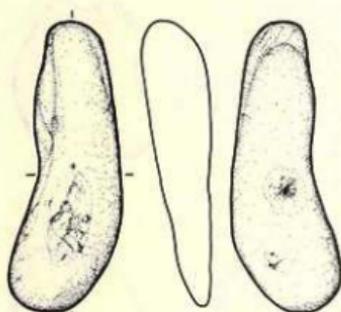
51



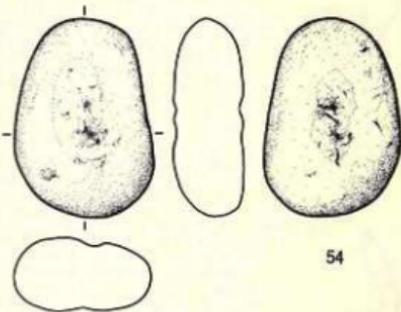
53



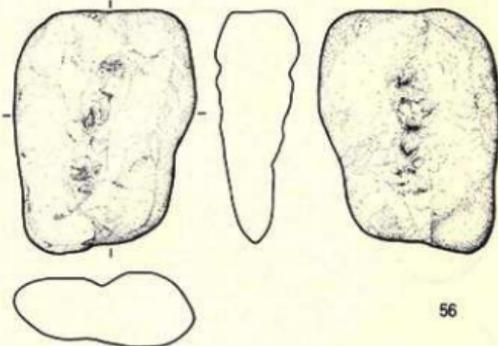
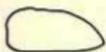
52



55

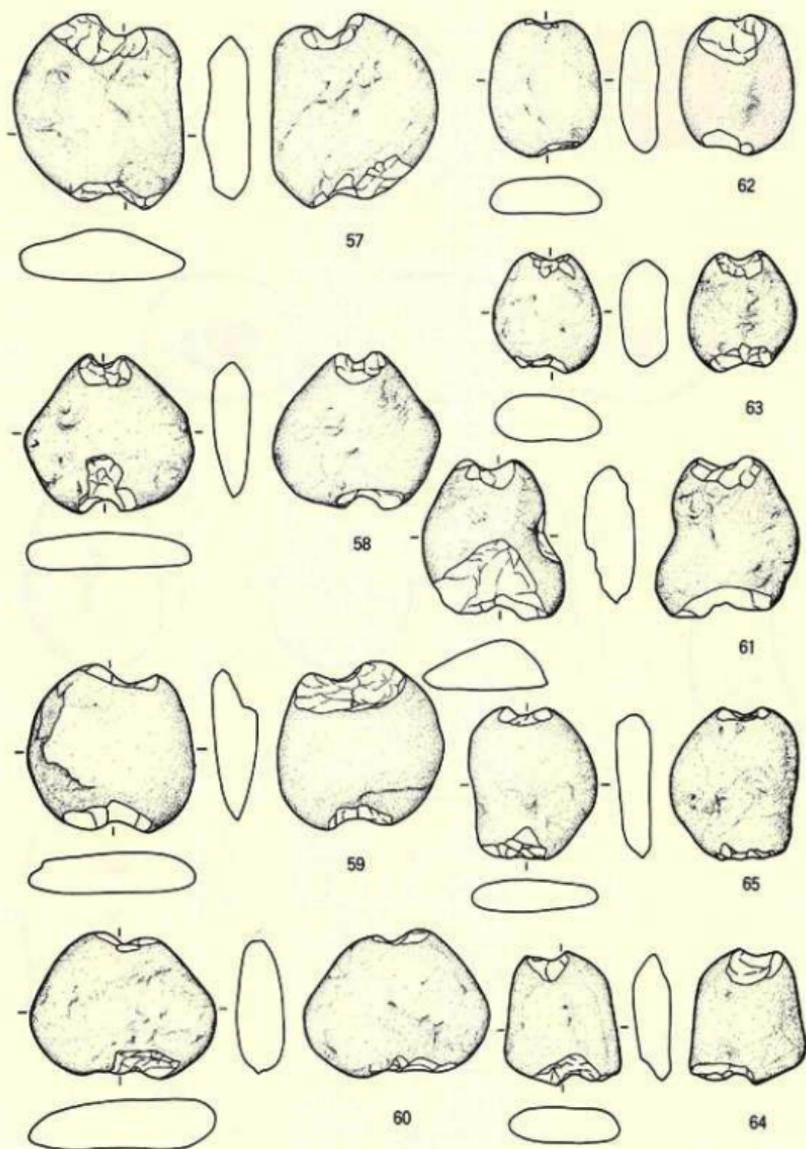


54

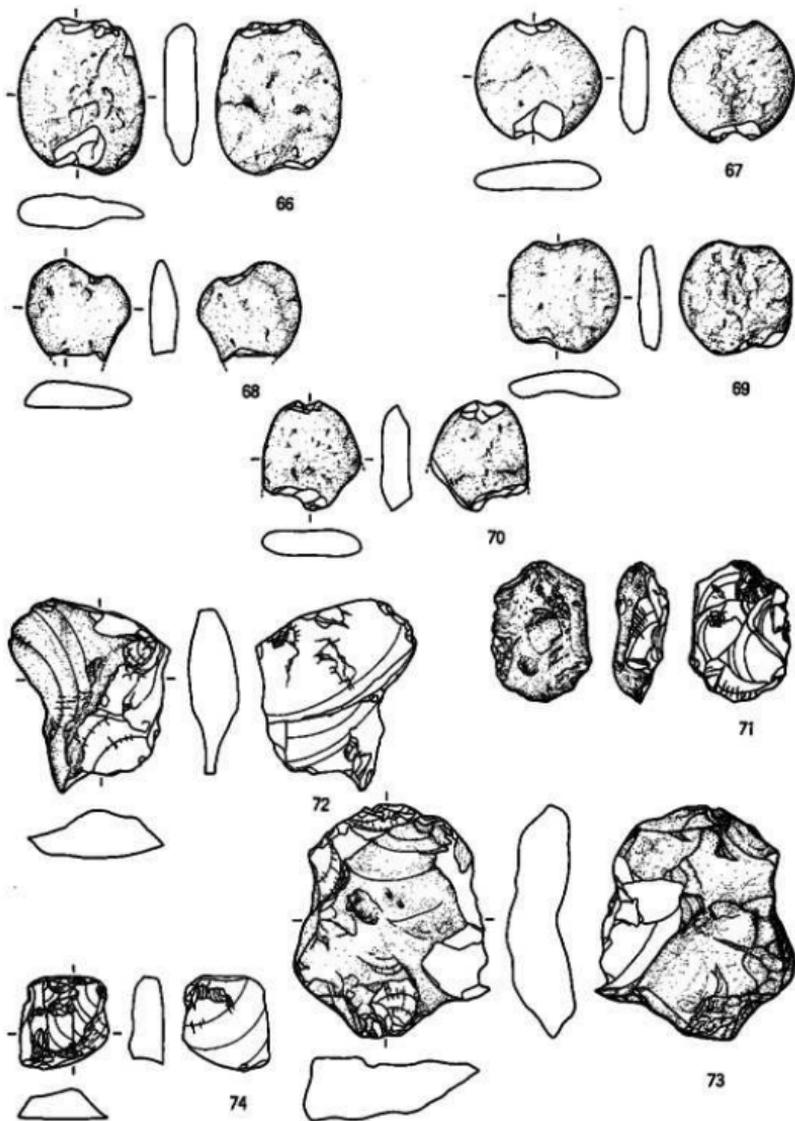


56

第99図 石器(6) S-1/3

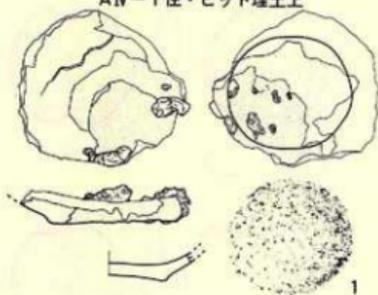


第100圖 石器(7) S-1/3

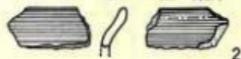


第101圖 石器(8) S-1/3

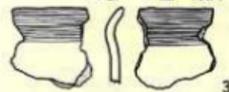
AV-1住・ビット埋土上



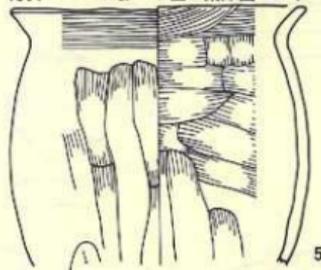
AV-1住・貼床



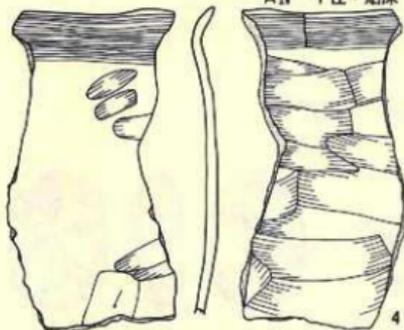
AV-1住・貼床



15.4--- AV-1住・東床面ベルト

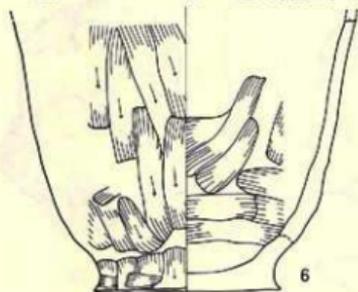


AV-1住・貼床

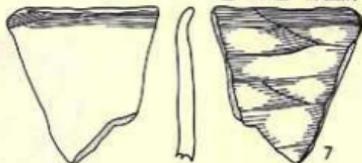


--9.6--

AV-1住・床面ビット埋



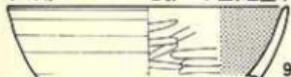
BIII-1住・床面溝



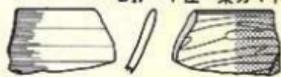
--11.0-- BIII-2住床、埋土下



(14.4) --- BV-1 住、埋土下



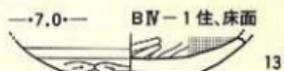
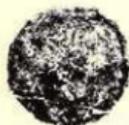
BV-1 住・東カマド支脚



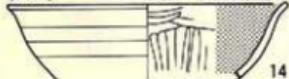
(14.3)・6.0・(4.8) BV-1 住、床面セクション



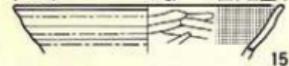
BV-1 住・2~3層



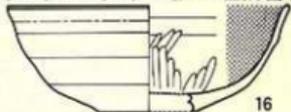
(14.4) --- BV-1 住、床面下



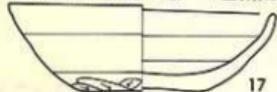
(14.0) --- BV-1 住、埋土下



(14.6)・5.0・(5.6) BV-1 住、床面下



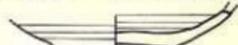
(13.7)・6.0・(4.6) BV-1 住、東カマド支脚



BV-1 住、ビット埋土



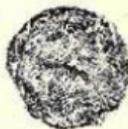
---6.3--- BV-1 住、東カマド支脚

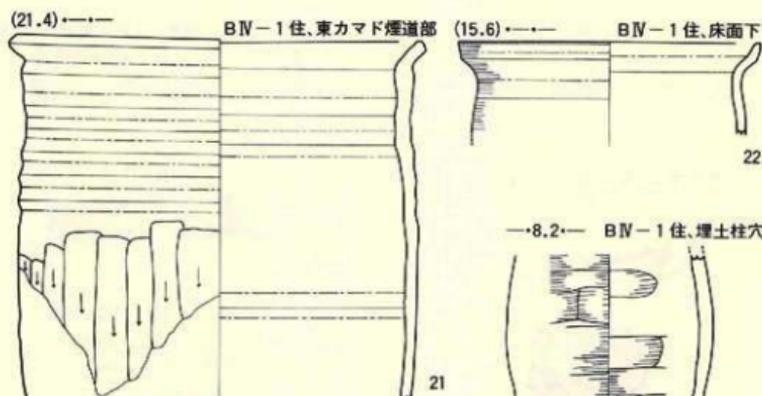


BV-1 住、床面下

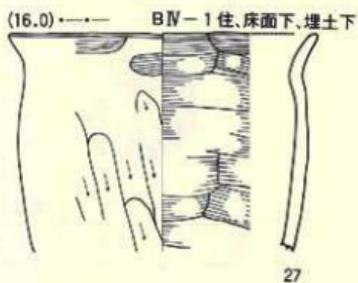
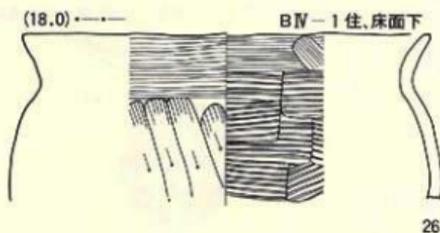
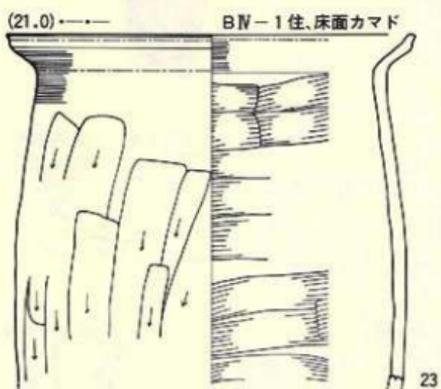
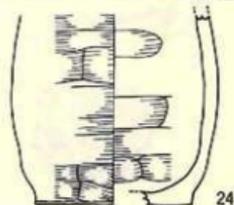


20



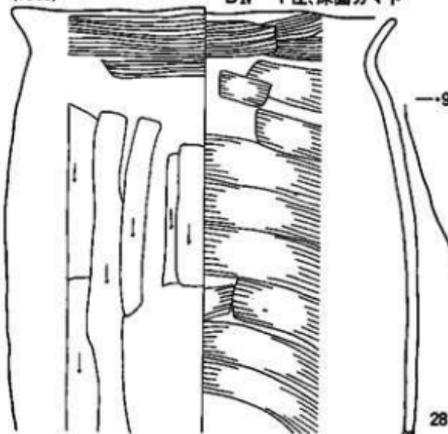


—8.2— BⅣ-1住、埋土柱穴1



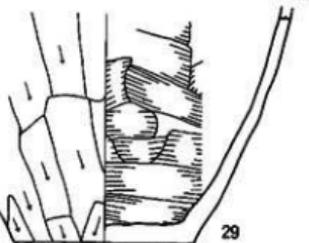
第104図 平安時代の土器(3) S-1/3

(19.8) --- BV-1 住、床面カマド



→9.4←

BV-1 住、東カマド支脚



29

28

(14.0) --- BV-1 Pセクション中

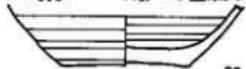


30



31

→6.6← AV-1 土取穴の埋土



32

→5.0← BV-1 土取穴の埋土上



33



34

→6.8← BIII m I 層

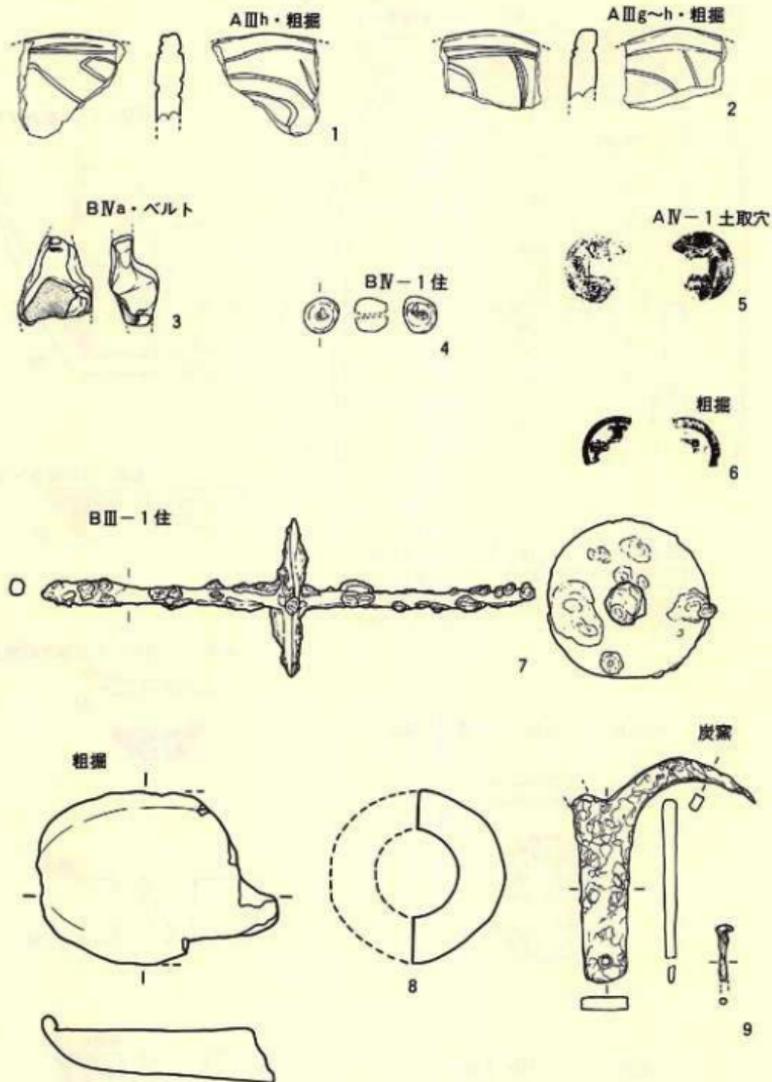


35



36

第105図 平安時代の土器(4) S-1/3



第106図 土製品・金属製品 S-1/2

遺物観察一覽表

1. 縄文土器

図版 No	器 種	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (mm)	文 様	地 文	焼成	胎土の調色	備 考	分類
1	深鉢、口縁	A田 f 北車馬	V	—	—	6~7	—	爪形刺突文	貝殻条線文	良	灰青褐色	縁合破片あり	I-1
2	深鉢、口縁	AIV f	Ⅲ	—	—	8~9	—	爪形刺突文	—	良	こぶし黄褐色	—	I-1
3	深鉢、口縁	AIV b	Ⅲ	—	—	6~7	—	爪形刺突文	貝殻条線文	良	灰青褐色	—	I-1
4	深鉢、口縁	AIV b	Ⅲ	—	—	7~8	—	爪形刺突文	貝殻条線文	良	褐色	縁合破片あり	I-1
5	深鉢、体部	AIV c I~IV	—	—	—	7	—	—	貝殻条線文	良	褐色	—	I-1
6	深鉢、口縁-体部	A田 E 黒御木	17.6	—	—	9~10	—	—	貝殻条線文	良	こぶし黄褐色	炭化物(内)	I-1
7	深鉢、体部	AIV b VI	—	—	—	8~9	—	—	貝殻条線文	良	こぶし黄褐色	—	I-1
8	深鉢、口縁	AIV f I	—	—	—	9~10	—	—	貝殻条線文	良	灰青褐色	—	I-2
9	深鉢、口縁	A田 f	Ⅲ	—	—	6~8	—	—	貝殻条線文	良	こぶし黄褐色	炭化物(内)	I-2
10	深鉢、体部	BIV j	II	—	—	8~9	—	—	貝殻条線文	良	褐色	—	I-2
11	深鉢、体部	不明	Ⅲ	—	—	10~11	—	—	貝殻条線文	良	こぶし黄褐色	—	I-2
12	深鉢、体部	不明	Ⅲ	—	—	7~8	—	—	貝殻条線文	良	こぶし黄褐色	炭化物の織埋合	I-2
13	深鉢、体部	BIV-1位 沢	—	—	—	7~8	—	貝殻条線文	貝殻条線文	良	褐色	炭化物(内)	I-2
14	深鉢、体部	A田 j	I	—	—	7~8	—	—	貝殻条線文	良	褐色	—	I-2
15	深鉢、体部	A田-15P 上 A田-1位 北西壁	—	—	—	6~8	—	爪線文、貝殻条線文、刺突文	無文	良	こぶし黄褐色	灰花骨(内、外)	I-3
16	深鉢、体部	A田-1位 北西壁	—	—	—	6~8	—	爪線文、貝殻条線文、刺突文	刺突文	良	こぶし黄褐色	炭化物(内、外)	I-3
17	深鉢、体部	A田-15P 上	—	—	—	6~8	—	爪線文、貝殻条線文、刺突文	刺突文	良	こぶし黄褐色	灰花骨(内、外)	I-3
18	深鉢、体部	A田-15P 上	—	—	—	6~8	—	爪線文、貝殻条線文、刺突文	刺突文	良	こぶし黄褐色	炭化物(内、外)	I-3
19	深鉢、体部	A田 o II~IV	—	—	—	6~7	—	爪線文、貝殻条線文、刺突文	無文	良	こぶし黄褐色	炭化物	I-3
20	深鉢、体部	A田 o II~IV	—	—	—	6~7	—	爪線文、貝殻条線文、刺突文	刺突文	良	こぶし黄褐色	炭化物	I-3
21	深鉢、体部	A田 o II~IV	—	—	—	7~8	—	刺突文	R.L	良	褐色	織埋合(炭化物)	II-1
22	深鉢、体部	AIV-2P 上	—	—	—	7	—	—	R.L	良	明赤褐色	織埋合(炭化物)	II-1
23	深鉢、体部	B田 f	Ⅲ	—	—	7~8	—	—	R.L	良	明赤褐色	織埋合(炭化物)	II-1
24	深鉢、体部	AIV-1位 上 AIV a	—	—	—	9~12	—	0段多条	中々良	良	褐色	織埋合(炭化物)	II-1
25	深鉢、体部	AIV	Ⅲ	—	—	8~9	—	0段多条	良	良	こぶし黄褐色	織埋合(炭化物)	II-1
26	深鉢、体部	AIV	Ⅲ	—	—	8~9	—	0段多条	良	良	こぶし黄褐色	織埋合(炭化物)	II-1
27	深鉢、体部	AIV h	V	—	—	12~13	—	0段多条(磨り戻し有)	中々良	良	褐色	織埋合(炭化物)	II-1
28	深鉢、体部	AIV h	V	—	—	11~12	—	0段多条	良	良	こぶし黄褐色	織埋合(炭化物)	II-1
29	深鉢、体部	AIV h	V	—	—	10~12	—	0段多条(磨り戻し有)	中々良	良	褐色	織埋合(炭化物)	II-1
30	深鉢、体部	A田 c 6-10 I, II	—	—	—	8~9	—	0段多条	良	良	こぶし黄褐色	織埋合(炭化物)	II-1
31	深鉢、口縁	AIV d	Ⅲ	—	—	8~10	—	—	R.L	良	こぶし黄褐色	織埋合(炭化物)	II-2
32	深鉢、体下	AIV d	Ⅲ	—	—	7~9	—	—	R.L	中々良	こぶし黄褐色	織埋合	II-2
33	深鉢、体下	AIV k-e	Ⅲ	—	—	5~6	—	—	R.L	良	こぶし黄褐色	織埋合	II-2
34	深鉢、口縁	B田 e	IV	—	—	6~9	—	0段多条	不良	良	こぶし黄褐色	織埋合	II-2
35	深鉢、口縁	A田-12P 中	—	—	—	8~9	—	0段多条	不良	褐色	褐色	織埋合(炭化物)	II-2
36	深鉢、口縁	AIV-8P 中	—	—	—	8~11	—	0段多条	良	褐色	褐色	織埋合(炭化物)	II-2
37	深鉢、口縁	A田 h	Ⅲ	—	—	7~8	—	0段多条	良	褐色	褐色	織埋合(炭化物)	II-2
38	深鉢、口縁	B田 e	IV	—	—	6~9	—	0段多条	不良	良	こぶし黄褐色	織埋合(炭化物)	II-2
39	深鉢、口縁	B田 e	IV	—	—	6~9	—	0段多条	不良	良	こぶし黄褐色	織埋合(炭化物)	II-2
40	深鉢、体部	A田 P	II	—	—	9~11	—	0段多条	不良	良	こぶし黄褐色	織埋合	II-2
41	深鉢、体部	A田-1 土取穴上	—	—	—	8~9	—	—	無文	良	こぶし黄褐色	織埋合	II-3
42	深鉢、体部	BIV m	IV	—	—	6~8	—	—	L.R	良	こぶし黄褐色	織埋合	II-4

図号 No	形 種	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (mm)	文 様	地 文	焼成	粘土色調	備 考	分類
43	深鉢、体部	BIVm	粗	—	—	—	8~9		多線筋糸文	良	褐色色	織継合	II-4
44	深鉢、体部	AIII o	II~IV	—	—	—	7~9		R L	不良	にじみ褐色	織継合	II-4
45	深鉢、体部	AIV-4 p	中	—	—	—	12		R L	不良	にじみ褐色	織継合	II-4
46	深鉢、体部	AII k	I	—	—	—	4~6		L R (欠)	不良	にじみ褐色	織継合	II-4
47	深鉢、口縁	AIII-土取穴	上	—	—	—	4~5 6~7	短棒末開込筑文 (ヒープ文)	0段多糸	良	にじみ褐色	織継合	II-5
48	深鉢、体部	AIII-2 p	上	—	—	—	9~10	押引ノ成織文	0段多糸	不良	にじみ褐色	織継合	II-5
49	深鉢、口縁	AIV-6 p AIII e	II	—	—	—	6~8 9		不整筋糸文	良	棕色	織継合雑群孔	II-5
50	深鉢、口縁	AIII o	II~IV	—	—	—	9~10	六条筋糸文、 小突起	R L R	良	にじみ褐色	織継合	II-6
51	深鉢、口縁	BIII-2 窪 マツ	II	—	—	—	8~9		不整筋糸文	良	棕色	織継合	II-6
52	深鉢、体部	AIV j	I~II	—	—	—	7~8 11		不整筋糸文	良	にじみ褐色	織継合	II-6
53	深鉢、口縁、体部	BIV	粗	—	—	—	5~7	隣組区画文	無文	良	にじみ褐色		III-1a
54	深鉢、口縁、体部	BIV c	粗	—	—	—	7~9	隣組区画文	無文	良	にじみ褐色		III-1a
55	深鉢、口縁、体部	BIV p	粗	—	—	—	6	隣組区画文	無文	良	にじみ褐色		III-1a
56	深鉢、口縁	AIII o	粗	—	—	—	7~9 9	沈線文、 隣組区画文	無文	良	にじみ黄褐色	炭化物(外微)	III-1b
57	深鉢、口縁	AIV d	粗	—	—	—	6~7 9	沈線文、 隣組区画文	無文	良	にじみ褐色		III-1b
58	鉢、体部	AIII-1 胎	上	—	—	—	3~4	沈線文、 隣組区画文	無文	良	にじみ褐色	赤色塗彩 (内外)	III-1b
59	深鉢、口縁	AIII c ベット I 窪 II 窪	I 窪 II 窪	—	—	—	6~7 7~8	沈線文、 隣組区画文	無文	良	褐色色		III-1b
60	壺、口縁、体部 深鉢	BIII p BIII i	I 窪~ II 窪	13.0	—	—	6~7 8~10	沈線文、隣組区 画文、新契文	無文	良	にじみ褐色		III-1b
61	口縁、体部	BIII i	粗	—	—	—	5~6	沈線文、隣組区 画文、突起	無文	良	にじみ褐色	炭化物(外)	III-1b
62	口縁、体部	BIV a	粗	—	—	—	5~6	沈線文、 隣組区画文	無文	良	にじみ褐色	炭化物(外)	III-1b
63	深鉢、口縁、体部	BIV a	粗	—	—	—	5~6	沈線文、 隣組区画文	無文	良	にじみ褐色	炭化物(外)	III-1b
64	深鉢、口縁	BIV m	粗	—	—	—	6~7 8~9	沈線文、隣組区 画文、突起	無文	良	褐色色		III-1b
65	壺、体部	AIV-1 土取穴	上	—	—	—	5~6 9	沈線文、 隣組区画文	無文	良	にじみ褐色		III-1b
66	壺、体、口縁	BIII i	II	—	10.2	—	6	沈線文、 隣組区画文	無文	良	にじみ黄褐色	炭化物、未定	III-2a
67	鉢、口、体	BIII e BIII b	II 窪 II 窪	15.2	合わせ 窪	—	6	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ黄褐色	炭化物(外)	III-2a
68	蓋(切筋密)	BIV b	II	—	6.0	—	3~4	沈線区画文 隣組文	無文	やや良	にじみ黄褐色		III-2a
69	壺、口縁	BIV a	I~II	7.2	—	—	4~5	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
70	壺、体部	BIII i	粗	9.0	—	—	5~6	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
71	深鉢、口縁	BIII e	II	—	—	—	6~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	褐色色		III-2a
72	深鉢、体部	AIII j	I	—	—	—	6~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	褐色色	炭化物(外)	III-2a
73	壺、体部	BIII n	粗	—	—	—	7~8	沈線区画文 隣組文	無文	良	棕色		III-2a
74	鉢、体部	AIII h	粗	—	—	—	5~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
75	壺、体部	BIII i	II	—	—	—	6~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ黄褐色		III-2a
76	鉢、体部	BIII i	粗	—	—	—	5~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ赤褐色		III-2a
77	壺、体部	BIII-2 窪	下	—	—	—	7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
78	壺、体部	BIV-1 窪 東金マツ窪	II	—	—	—	5~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ黄褐色		III-2a
79	深鉢、体部	BIII i	粗	—	—	—	6~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	褐色色	炭化物(外)	III-2a
80	深鉢、口縁	BIV n	粗	—	—	—	4~9	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
81	鉢、口縁	BIV d BIV j	粗 粗	—	—	—	5~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
82	鉢、口縁	BIV-1 窪 IV~V	II	—	—	—	5~6	沈線区画文 隣組文	無文	良	褐色色	炭化物(内)	III-2a
83	壺、体部	BIV j	II	—	—	—	4~5	沈線区画文 隣組文	無文	良	褐色色		III-2a
84	鉢、体部	AIII-1 窪 窪	上	—	—	—	5~6	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
85	壺、体部	BIV k	粗	—	—	—	7	沈線区画文 隣組文	無文	良	褐色色		III-2a
86	鉢、体部	AIII i	粗	—	—	—	6~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ褐色		III-2a
87	壺、体部	BIV a	粗	—	—	—	4~6	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ赤褐色	炭化物(内外)	III-2a
88	壺 口、体、口縁	AIII e	粗	11.6	8.8	19.0	6~7	沈線区画文 隣組文	無文	良	にじみ黄褐色		III-2b

図版 No.	部 類	出土地点	層位	口径 (cm)	口径 (cm)	口径 (cm)	口径 (cm)	文 様	地 文	焼成	胎土色調	備 考	分類
80	深鉢、口縁	BIV o	Ⅲ	—	—	—	7~8	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色		Ⅲ-2b
80	深鉢、口縁	AⅢ k・j	Ⅲ	—	—	—	4~5	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色		Ⅲ-2b
91	底、口~体	AIV d	Ⅲ~Ⅱ	26.8	—	—	8~10	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色	炭化物(内)	Ⅲ-2b
92	深鉢、口縁	不明	Ⅲ	—	—	—	6~7	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色		Ⅲ-2b
93	深鉢、口縁	BIV m	Ⅲ	—	—	—	6~7	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色		Ⅲ-2b
94	鉢?口縁	BⅢ l	Ⅱ	—	—	—	4~6	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色		Ⅲ-2b
95	鉢、口縁	BIV b	Ⅱ	—	—	—	4	沈線文 垂文、刺文	無文	良	紅褐色		Ⅲ-2b
96	鉢、口縁	AⅢ e~b	Ⅱ	—	—	—	4~6	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色	朱塗(内外)	Ⅲ-2b
97	鉢、口縁	AⅢ e~f	ⅢⅢ	—	—	—	4~6	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色	朱塗(内外)	Ⅲ-2b
98	鉢、口縁、体部	AⅢ k	Ⅲ	—	—	—	4~5	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-2b
99	鉢、口縁	AⅢ P	—	—	—	—	4~6	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色		Ⅲ-2b
100	鉢、口縁	AⅢ e~f	ⅢⅢ	—	—	—	4~6	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色	朱塗(内外)	Ⅲ-2b
101	鉢、口縁、体部	AⅢ e~k	Ⅲ	—	—	—	4~5	沈線文 垂文	無文	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-2b
102	深鉢、口~体	BIV a	Ⅲ	29.2	—	—	7~8	刺文、沈線文、 垂文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3a
103	鉢?体部	AⅢ P	Ⅱ	—	—	—	5~6	刺文、沈線文、 刺文	—	良	紅褐色		Ⅲ-3a
104	深鉢、口縁	BIV b	Ⅱ	—	—	—	7~8	刺文、沈線文	—	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-3b
105	深鉢、口縁	AⅢ h	Ⅲ	—	—	—	5~6	刺文、沈線文	—	良	黒褐色	炭化物(外)	Ⅲ-3b
106	深鉢、口縁	BIV a	Ⅲ	—	—	—	—	刺文、沈線文	—	良	紅褐色		Ⅲ-3b
107	深鉢、口縁	BIV c BIV m	ⅢⅢ	—	—	—	6~7	刺文、沈線文	—	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-3b
108	深鉢、口~体	BIV k	Ⅲ	—	—	—	5~7	刺文、沈線文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3b
109	深鉢、口~体	AⅢ e~h Ⅲ~Ⅳ	ⅢⅢ	15.6	—	—	5~6	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3c
110	深鉢、口縁	BⅢ e	Ⅲ	—	—	—	5~7	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3c
111	深鉢、口縁	BⅢ e	Ⅲ	—	—	—	5~7	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3c
112	深鉢、口、体	BⅢ e+BIV b	Ⅱ	—	—	—	6~7	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-3c
113	深鉢、口縁	BIV j	Ⅱ	—	—	—	6~7 8	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3c
114	鉢?口縁	BIV b	Ⅲ	—	—	—	5~6	沈線文 刺文	L R	良	褐色		Ⅲ-3c
115	鉢?口縁	BIV a	Ⅲ	—	—	—	4~5	沈線文、刺 刺文、垂文	—	良	紅褐色		Ⅲ-3c
116	口縁、深鉢、体部	BⅢ e	Ⅲ	—	—	—	6~7	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-3c
117	深鉢、体部	AⅢ k	Ⅰ~Ⅱ	—	—	—	5~6	沈線文 刺文	L R	良	褐色~黒褐色	炭化物(外)	Ⅲ-3c
118	深鉢、体部	BⅢ e	Ⅱ	—	—	—	6~7	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3c
119	底、体部	AⅢ P	上	—	—	—	6	沈線文 刺文	L R	良	紅褐色		Ⅲ-3c
120	深鉢、口~体	AⅢ P BⅢ j	ⅡⅢ	26.8	—	—	6~7 8~10	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色		Ⅲ-4
121	深鉢、口縁	AⅢ P	Ⅱ	—	—	—	5~6	沈線文	朝日状沈線	不良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-4
122	深鉢、口縁	BIV b	Ⅱ	—	—	—	8~10	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-4
123	深鉢、体部	BⅢ i	Ⅲ	—	—	—	5	沈線文	朝日状沈線	良	褐色	炭化物(外)	Ⅲ-4
124	深鉢、口縁	BIV f	Ⅲ	—	—	—	6	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色		Ⅲ-4
125	深鉢、口縁	BIV	Ⅲ	—	—	—	5~6	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色	炭化物(外)	Ⅲ-4
126	深鉢、体部	BIV	Ⅲ	—	—	—	8~9	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色		Ⅲ-4
127	深鉢、体部	AⅢ P	Ⅲ	—	—	—	6	沈線文	朝日状沈線	良	褐色		Ⅲ-4
128	深鉢、体部	BⅢ i	Ⅱ	—	—	—	6~7	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色		Ⅲ-4
129	深鉢、体部	BIV-1 Ⅲ~Ⅳ	Ⅲ	—	—	—	6	沈線文	朝日状沈線	良	褐色		Ⅲ-4
130	深鉢、体部	AⅢ e~e	Ⅲ	—	—	—	6~7	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色		Ⅲ-4
131	深鉢、底、口~体	BⅢ i	Ⅱ~Ⅲ	20.7	19.7	29.8	6~7	沈線文	朝日状沈線	良	紅褐色	炭化物(内)	Ⅲ-4
132	深鉢、底、口	AⅢ P	Ⅲ	—	—	—	6~7	沈線文	斜線状沈線	不良	紅褐色	炭化物(口縁・外)	Ⅲ-4
133	深鉢、底、口	BIV b	Ⅲ	—	—	—	6	沈線文	縦位平行沈線	良	褐色	炭化物(外)	Ⅲ-4
134	深鉢、口縁	BIV b	Ⅲ~Ⅱ	—	—	—	6~7	沈線文	縦位平行沈線	良	褐色	炭化物(外)	Ⅲ-4

図版 No	器 種	出土地点	層位	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎厚 (mm)	文 種	地 文	焼成	胎土色調	備 考	分類
125	深鉢、体部	BⅡ	Ⅲ	—	—	—	5~6			具	黄へ にぶい橙色		III-4
126	深鉢、口縁へ	AⅢ K Ⅱ	(25.3)	—	—	—	6~7	折り返し口縁	網目状磨赤文	具	にぶい褐色	炭化物	III-5
127	深鉢、口へ体	AⅢ e Ⅲ	(27.7)	—	—	—	6~7	折り返し口縁	網目状磨赤文	具	褐色	炭化物(全面)	III-5
128	深鉢、口縁	AⅢ P Ⅲ	—	—	—	—	5~6	折り返し口縁	網目状磨赤文	具	橙		III-5
129	深鉢、口縁	BⅢ e Ⅲ	—	—	—	—	5~6	折り返し口縁	網目状磨赤文	具	にぶい橙色		III-5
140	深鉢、口縁	AⅡ	Ⅲ	—	—	—	6~8	折り返し口縁	網目状磨赤文	具	褐色		III-5
141	深鉢、口縁	不明	Ⅲ	—	—	—	6~7		網目状磨赤文	具	褐色		III-5
142	深鉢、口縁	BⅢ f Ⅲ	—	—	—	—	6~7		網目状磨赤文	具	褐色		III-5
143	深鉢、口縁	BⅢ f Ⅲ	—	—	—	—	6~7		網目状磨赤文	具	褐色		III-5
144	深鉢、口縁	BⅢ I Ⅱ	—	—	—	—	6~7		網目状磨赤文	具	にぶい黄褐色		III-5
145	深鉢、口縁	BⅢ I AⅢ P	Ⅱ	—	—	—	5~6		網目状磨赤文	具	褐色		III-5
146	深鉢、口へ体	k	Ⅱ (28.3)	—	—	—	6	沈線文	網目状磨赤文	具	にぶい褐色	炭化物(全面)	III-5
147	深鉢、口縁	AⅢ c Ⅲ	—	—	—	—	6~7	沈線文	網目状磨赤文	具	褐色		III-5
148	深鉢、口縁	AⅢ	Ⅲ	—	—	—	5~7	沈線文	網目状磨赤文	具	にぶい黄褐色		III-5
149	深鉢、口縁	不明	Ⅲ	—	—	—	5~6	沈線文	網目状磨赤文	具	にぶい黄褐色		III-5
150	深鉢、口縁	AⅢ ⁸ へ I~II	—	—	—	—	5~6	沈線文	網目状磨赤文	具	褐色	炭化物(内外)	III-5
151	深鉢、体部	AⅢ k Ⅲ	—	—	—	—	6		網目状磨赤文	具	にぶい赤褐色		III-5
152	深鉢、体部	AⅢ P Ⅲ	—	—	—	—	9		網目状磨赤文	具	にぶい赤褐色	炭化物(外側)	III-5
153	深鉢、体部	BⅣ~I IV~V	Ⅱ	—	—	—	6~7		網目状磨赤文	具	赤褐色		III-5
154	深鉢、体部	AⅢ~I Ⅱ	Ⅲ	—	—	—	4~5		網目状磨赤文	不具	にぶい黄褐色		III-5
155	深鉢、体部	BⅢ I Ⅲ	—	—	—	—	6~7		網目状磨赤文	具	褐色	炭化物 (外・中)	III-5
156	深鉢、体部	AⅢ k Ⅲ	—	—	—	—	5~6		網目状磨赤文	具	にぶい橙色	炭化物 (内・外)	III-5
157	深鉢、体部	AⅣ d Ⅱ	—	—	—	—	6~7	沈線文(斜線)	網目状磨赤文	具	褐色	炭化物(内)	III-5
158	深鉢、体部下	BⅢ I Ⅱ	—	—	—	—	7~8		網目状磨赤文	具	にぶい褐色	炭化物(内外)	III-5
159	深鉢、体へ底	AⅢ U Ⅲ	—	(10.8)	—	—	8~9		網目状磨赤文	具	にぶい黄褐色		III-5
160	深鉢、体へ底	BⅣ k Ⅲ	—	10.3	—	—	6~7		網目状磨赤文	中・不具	灰黄色	炭化物	III-5
161	深鉢、体部下	BⅢ e Ⅱ	—	—	—	—	4~7		網目状磨赤文	具	にぶい褐色	炭化物(外)	III-5
162	深鉢、体へ底	BⅢ I b Ⅱ	—	—	—	—	5~7		網目状磨赤文	具	にぶい赤褐色	炭化物(外)	III-5
163	深鉢、洗部	AⅢ K~U Ⅲ~V	—	(15.0)	—	—	6~7		網目状磨赤文	具	黒色		III-5
164	深鉢、口縁	AⅢ P Ⅱ~IV BⅢ P I~II	—	—	—	—	4~5 6		磨赤文	具	褐色		III-5
165	深鉢、口縁	BⅣ b Ⅱ	—	—	—	—	7~9		磨赤文	具	にぶい黄褐色		III-5
166	深鉢、口へ体	BⅣ k BⅢ e, i Ⅲ	(22.2)	—	—	—	6~8		無文	中・不具	にぶい黄褐色	炭化物	III-6
167	壺、口へ体	BⅣ b Ⅱ	(11.4)	—	—	—	5~6		無文	具	明赤褐色		III-6
168	壺、口縁	BⅣ j Ⅱ	—	—	—	—	4~13 9~11	沈線文、沈線文	無文	具	にぶい橙褐色		III-7
169	鉢? 口縁	BⅣ k Ⅲ	—	—	—	—	5~8	沈線文、沈線文、 口唇刃法	無文	具	褐色		III-7
170	壺、口縁	AⅢ k Ⅱ	—	—	—	—	7~8	沈線文、沈線文	無文	具	明赤褐色	炭化物 (内外)	III-7
171	深鉢、口縁	AⅣ m Ⅰ	—	—	—	—	5~8	沈線文、沈線文	無文	具	褐色		III-7
172	深鉢、口縁	AⅣ~I Ⅱ上	—	—	—	—	6~9	沈線文、沈線文	無文	具	にぶい橙褐色		III-7
173	深鉢、口縁	AⅣ Ⅲ	—	—	—	—	7~8 9	沈線文、沈線文	無文	具	にぶい褐色		III-7
174	深鉢、口縁	AⅣ b, c Ⅲ	—	—	—	—	8~11	沈線文、口唇押 法	無文	具	灰黄色		III-7
175	鉢、口縁	BⅣ o Ⅲ	—	—	—	—	6~7 8	沈線文、口唇押 法	無文	具	にぶい赤褐色		III-7
176	深鉢、口縁	BⅣ b Ⅱ	—	—	—	—	9~10	沈線文	無文	具	褐色		III-7
177	壺? 洗部?	BⅢ c AⅢ	(16.3)	—	—	—	9~10 4~5	沈線文	無文	具	にぶい黄褐色		III-7
178	壺、口縁	AⅢ j Ⅲ	—	—	—	—	4~5 6	沈線文	無文	具	褐色		III-7
179	鉢? 口縁	AⅢ o Ⅲ	—	—	—	—	4	沈線文	無文	具	褐色		III-7
180	鉢? 口縁	AⅣ d I~Ⅲ	—	—	—	—	4	沈線文、突起	無文	具	褐色		III-7

編號 No	部 類	出土地点	層位	口徑 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	器厚 (cm)	文 種	地 文	構成	胎土色調	備 考	分類
181	脚鉢、口縁	AⅡ ^o AⅢ	Ⅱ	—	—	—	7 9~10	突起	無文	貝	にぶい褐色		Ⅱ-7
182	甕?口縁	BⅣb	Ⅱ	—	—	—	5~6		無文	貝	暗褐色		Ⅱ-7
183	脚鉢、口縁	AⅢ ^o	Ⅱ	—	—	—	7	突起	無文	貝	にぶい褐色		Ⅱ-7
184	脚鉢、口縁	不明	Ⅱ	—	—	—	7~8	突起	無文	貝	にぶい黄褐色	炭化物(外)	Ⅱ-7
185	洗鉢、完	BⅣm AⅢd	I~II Ⅱ	(17.0)	8.5	5.9	4~6	沈線文、三叉文、突起	R L	貝	にぶい褐色		Ⅳ-1
186	鉢、口縁	AⅣ-1位	上	—	—	—	4	三叉文	—	貝	にぶい褐色	炭化物(内)	Ⅳ-1
187	鉢、口縁	AⅣk	Ⅱ	—	—	—	4~7	三叉文	—	貝	褐色		Ⅳ-1
188	鉢、口縁	AⅣh	Ⅱ	—	—	—	4	三叉文	—	貝	褐色		Ⅳ-1
189	注口	AⅣ	Ⅱ	—	—	—	—	三叉文	無文	貝	灰オリーブ		Ⅳ-1
190	鉢、口縁、底	AⅣ-1 土取穴上	Ⅱ	(19.0)	(8.8)	9.0	器厚 3~4	沈線文、三叉文、突起	L R	貝	黄褐色 ~褐色		Ⅳ-1
191	鉢、口縁	AⅢ ^o	Ⅱ	—	—	—	4	平条状文	L R	貝	にぶい黄褐色		Ⅳ-2
192	鉢、口縁	AⅣ	Ⅱ	—	—	—	4	平条状文	L R	貝	にぶい黄褐色		Ⅳ-2
193	鉢、口縁	AⅣk ^e AⅢh	Ⅱ	—	—	—	4~5 5~6	沈線文、磨擦文	R L	貝	にぶい褐色	炭化物	Ⅳ-3
194	型、体部	AⅣh	V	—	—	—	4~5	沈線文、磨擦文	L R	貝	にぶい黄褐色		Ⅳ-3
195	脚鉢、完	BⅣl	Ⅱ(1)	21.8~ 25.0	(10.5)	32.1~ 30.5	8~9		L r	貝	にぶい褐色		V-1
196	脚鉢、口縁	AⅣ-7P	Ⅱ	—	—	—	6~7		L R	貝	灰褐色	炭化物	V-1
197	脚鉢、口縁	AⅣk	Ⅱ	—	—	—	8		L R	貝	にぶい褐色	炭化物(外)	V-1
198	鉢、口縁	BⅣ-1位 IV~V	Ⅱ(1)	(11.0)	—	—	5~6		L r	貝	灰褐色	炭化物(内)	V-1
199	脚鉢、口縁	BⅡn	Ⅱ	—	—	—	5~6		L R	貝	にぶい黄褐色		V-1
200	鉢、口縁	AⅣe	Ⅱ	—	—	—	5~6		L R	貝	明赤褐色		V-1
201	脚鉢、口縁下	BⅢ-1P	上	(30.0)	—	—	7~10 (下)		L R	貝	褐色	炭化物(外)	V-1
202	脚鉢、口縁-底	BⅣ-1位 IV~V	Ⅱ	(9.6)	—	—	8~9	折り返し口縁	L R	貝	にぶい赤褐色		V-1
203	甕?口縁	BⅣ	Ⅱ	—	—	—	6~7	折り返し口縁	L R	貝	にぶい褐色		V-1
204	脚鉢、体部	BⅣ-1位 IV~V	Ⅱ	(9.6)	—	—	8~9 7~10	折り返し口縁	L R	貝	にぶい褐色		V-1
205	脚鉢、口縁	AⅢb	Ⅱ	—	—	—	体9	折り返し口縁	L R	貝	にぶい赤褐色		V-1
206	脚鉢、口縁	BⅣk BⅢe BⅣb	Ⅱ	—	—	—	5~6	折り返し口縁	L R	貝	にぶい黄褐色		V-1
207	脚鉢、口縁	AⅢd BⅢe BⅣb	Ⅱ	(25.6)	—	—	5~6		L R	貝	にぶい褐色	炭化物 (正器)	V-1
208	鉢、体下	AⅣd~h	Ⅱ	—	—	—	5		L R	貝	にぶい黄褐色		V-1
209	脚鉢、体部	AⅣe	Ⅱ	—	—	—	7~8		R L	貝	にぶい褐色	炭化物(外)	V-1
210	脚鉢、体部	AⅣh	I~Ⅱ	—	—	—	7~8		L r	貝	灰白色		V-1
211	脚鉢、体部	AⅣh	I~Ⅱ	—	—	—	8		L r	貝	にぶい黄褐色		V-1
212	甕?洗鉢	AⅢd	Ⅱ	(7.2)	—	—	4	輪線文、沈線文	無文	不具	褐色	瓦質 (内外裏)	V-2
213	甕?底	BⅣk	Ⅱ	—	7.0	—	5	沈線文	無文	貝	にぶい黄褐色		V-2
214	台付鉢、台	不明	Ⅱ	(7.4)	—	—	4~6	磨擦文、沈線文	R L	貝	にぶい褐色		V-2
215	不明、器	BⅣ-1位 BⅢl	Ⅱ	(5.6)	—	—	6~7	沈線文、明灰文	無文	貝	灰青褐色		V-2
216	脚鉢、底	BⅣb	Ⅱ	—	7.7	—	6~7	沈線文	無文	貝	にぶい褐色		V-2
217	洗鉢?底	AⅢ ^o	Ⅱ	(8.2)	—	—	6~7	沈線文	無文	貝	にぶい褐色		V-3
218	鉢、底	AⅢd	Ⅱ	—	3.8	—	4~5		無文	貝	褐色		V-2
219	鉢、底	AⅢk	Ⅱ	—	7.0	—	5~7		無文	貝	褐色	炭化物(内面)	V-2
220	脚鉢、底	AⅣ-1位	上	(6.8)	—	—	5~6		無文	貝	黄灰色		V-2
221	脚鉢、底	AⅣP	Ⅱ	—	12.8	—	7		無文	貝	にぶい赤褐色		V-2
222	脚鉢、底	AⅢ ^o 土取穴	Ⅱ	—	10.0	—	6~8		無文	貝	にぶい褐色		V-2
223	脚鉢、底	BⅣ-1位 Ⅱ-灰	Ⅱ	(11.2)	—	—	7		無文	貝	にぶい褐色		V-2
224	脚鉢、体~底	BⅣm	Ⅱ	—	8.4	—	8~9		L R	貝	にぶい褐色	炭化物	V-2
225	脚鉢、底	AⅢe+P	Ⅱ	(7.6)	—	—	5~6		R L	貝	にぶい黄褐色		V-2

2. 石 器

番号	種 類	出土地点・層 位	最大長 (cm)	最大巾 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石 質	産 地	
1	石 鏃	BIV-1 住埋土上	(2.1)	1.9	0.4	0.9	硬質泥岩	— 新第三系中新統	
2	石 鏃	BIIIa 枕	3割	2.0	1.5	0.4	硬質泥岩	— 新第三系中新統	
3	石 鏃	AIIIb	組	3.0	1.6	0.5	珩質泥岩	新第三系中新統	
4	石 鏃	AIIIa	組	2.2	1.8	0.3	0.9	チャート	北上山地 古生界
5	石 鏃	BIVa	組	2.7	2.1	0.6	3.2	チャート	北上山地 古生界
6	石 鏃	AIV-1 住埋土上	2.6	1.7	0.8	2.7	泥質チャート	北上山地 古生界	
7	スクレイパー	AIV-1 土坑穴	2.1	2.9	0.7	4.8	チャート	北上山地 古生界	
8	石 鏃	BIIIc	組 (3.2)	2.5	0.7	10.9	珩質泥岩	— 新第三系中新統	
9	石 鏃	BIVa	4割	6.4	3.2	0.6	18.9	硬質泥岩	— 新第三系中新統
10	スクレイパー	BIIIc	2割	6.0	9.9	1.7	109.9	塊状珩質泥岩	宇石盆地西側 新第三系中新統
11	スクレイパー	BIIIa	1割	8.6	4.9	0.9	64.6	珩質泥岩	— 新第三系中新統
12	スクレイパー	AIVb	5割	5.4	2.1	0.7	13.6	チャート	北上山地 古生界
13	鹿状石器	AIVc	4割	7.3	5.2	1.2	53.7	珩質泥岩	北上山地 古生界
14	鹿状石器	AIIo	3割	6.9	4.3	1.4	47.3	珩質泥岩	— 新第三系中新統
15	加工痕ある断片	BIVa	1割 (4.3)	3.8	1.5	27.3	珩質泥岩	北上山地 古生界	
16	スクレイパー	BIVb-c	ベルト	6.3	2.9	0.8	29.2	珩質泥岩	— 新第三系中新統
17	スクレイパー	AIIc	1割	4.9	2.4	0.7	13.5	珩質泥岩	— 新第三系中新統
18	スクレイパー	AIIe	2～4割	3.6	2.6	1.2	16.4	チャート	北上山地 古生界
19	スクレイパー	AIV-2 住埋	4割	4.0	3.0	1.1	17.4	珩質泥岩	— 新第三系中新統
20	加工痕ある断片	AIVd	3割	3.6	1.6	0.8	4.2	珩質泥岩	— 新第三系中新統
21	加工痕ある断片	BIVb	組	3.7	3.9	1.2	26.4	珩質泥岩	北上山地 古生界
22	加工痕ある断片	BIVe	4割	5.6	2.4	0.7	19.7	チャート	北上山地 古生界
23	スクレイパー	BIVa	組	4.3	1.9	0.9	12.8	チャート	北上山地 古生界
24	加工痕ある断片	AIVb	組	2.4	2.3	0.8	5.9	チャート	北上山地 古生界
25	スクレイパー	AIVd-h	2～4割	6.0	4.6	2.0	48.8	チャート	北上山地 古生界
26	加工痕ある断片	BIVa	1～2割	3.8	3.6	0.6	11.7	チャート	北上山地 古生界
27	加工痕ある断片	BIVk	3割	4.5	3.2	0.7	10.9	チャート	北上山地 古生界
28	加工痕ある断片	AIVk	組	2.8	4.4	1.2	17.7	チャート	北上山地 古生界
29	加工痕ある断片	AIVj	1～2割	4.0	3.8	3.0	45.5	チャート	北上山地 古生界
30	スクレイパー	AIVj	1～2割	6.2	3.9	2.6	37.5	チャート	北上山地 古生界
31	スクレイパー	AIVj	1～2割	4.3	2.8	1.0	21.7	炭酸鈣質珩質泥岩	— 新第三系中新統
32	スクレイパー	BIVb	2割	5.2	5.2	0.7	33.5	チャート	北上山地 古生界
33	スクレイパー	BIVb	2割	5.5	3.1	1.2	21.5	チャート	北上山地 古生界
34	加工痕ある断片	BIIIe	4割	3.7	4.2	0.7	23.4	珩質泥岩	— 新第三系中新統
35	スクレイパー	BIIIe	4割	3.2	2.1	0.4	2.7	珩質泥岩	— 新第三系中新統
36	加工痕ある断片	AIV-1 土坑穴	6.1	2.9	0.7	16.6	炭酸鈣質珩質泥岩	— 新第三系中新統	
37	加工痕ある断片	AIV-1 表面	7.1	3.0	0.7	19.9	炭酸鈣質珩質泥岩	— 新第三系中新統	

番号	種 類	出土地点・備 注	最大長 (cm)	最大巾 (cm)	最大厚 (cm)	重 量 (g)	石 質	産 地	
38	スレイバー	AIV-1 底面	4.3	5.0	1.5	36.5	炭酸岩質粉砂岩	— 新第三系中新統	
39	スレイバー	AIV-1 底面	4.1	1.8	0.9	16.3	チャート	北上山地 古生帯	
40	加工痕みる割片	AIV-1 底面	2.2	2.0	0.8	2.9	チャート	北上山地 古生帯	
41	砥 石	AIV j	2割 (7.7)	5.5	4.2	138.0	炭酸岩質凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統	
42	石 錘	AIII e	2割 (11.0)	7.7	6.3	768.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
43	磨 石	AIII-1 P埋土下	20.1	4.5	6.7	949.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
44	磨 石	AIV-1 住船床	13.8	3.2	6.2	309.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
45	磨 石	AIII e 風割木炭～4割	15.3	5.5	7.3	790.0	角輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
46	磨 石	AIII e 風割木炭～4割	(11.2)	6.6	8.3	830.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
47	磨 石	AIV d～h 2～4割	12.2	5.9	6.5	660.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
48	磨 石	AIV d～h 2～4割	14.7	5.3	6.9	690.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
49	磨 石	BIII e	4割	14.1	5.7	780.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
50	磨 石	BIV k	4割	20.9	6.0	1,180.0	角輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
51	磨 石		割 (6.1)	2.4	6.7	160.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
52	磨 石	AIV l	2～4割	6.7	9.0	870.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
53	磨 石	BIII m	4割	9.8	7.7	540.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
54	凹 石	AIII e 風割木炭～4割	19.4	8.2	3.9	380.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
55	凹 石	AIII k	1割	15.2	5.8	330.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
56	凹 石	BIV m	1割	12.7	9.4	3.9	509.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
57	石 錘	AIV-8 P埋土中	9.8	8.6	2.6	260.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
58	石 錘	AIV-8 P埋土中	8.2	8.7	1.9	180.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
59	石 錘	AIV-8 P埋土中	8.6	8.5	2.3	210.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
60	石 錘	AIV-8 P埋土中	7.6	9.5	2.6	210.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
61	石 錘	AIV-8 P埋土中	8.3	7.4	2.7	170.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
62	石 錘	AIV-8 P埋土中	7.1	8.5	1.9	120.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
63	石 錘	AIV-8 P埋土中	6.2	5.6	2.3	120.0	角輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
64	石 錘	AIV d～h 3～4割	7.0	6.0	1.9	110.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
65	石 錘	AIV d～h 3～4割	7.9	6.6	1.7	140.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
66	石 錘	AIV d～h 2割	8.1	6.4	1.8	140.0	角輝石安山岩	北上山地 古生帯	
67	石 錘	AIV f	1割	6.3	6.5	1.6	90.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
68	石 錘	AIII k	2割	5.3	5.3	1.4	50.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
69	石 錘	AIII k	2割	5.9	5.7	1.2	60.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
70	石 錘	AIII k	2割 (5.7)	5.1	1.5	50.0	角輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統	
71	石 槌	AIV-2 P	7.4	5.2	2.7	145.0	角質泥岩	— 新第三系中新統	
72	割片石槌	AIII k	1割	9.2	8.3	2.5	150.0	炭酸岩質粉砂岩	— 新第三系中新統
73	盤状石槌	BIV-1 住居	4～5割	12.3	10.1	3.3	485.0	炭酸岩質粉砂岩	— 新第三系中新統
74	割片石槌	BIV-1 住居	4～5割	5.0	4.5	1.7	30.0	炭酸岩質粉砂岩	— 新第三系中新統

3. 平安時代の土器

図庫番号	種 類	出土地点	美 土 器		注 法		注 量(cm)				備 考	分 類			
			口 縁 部	体部上	体部下	底 部	口径	器高	底径	器 厚					
1	土師器環	AIV-1住居址 P埋土上位	—	—	—	回転糸切り	—	—	6.0	0.5	赤内黒 鉄錆が付着	環B ₁			
2	土師器甕	AIV-1住居址 胎実	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	0.4~0.5	曜が外面に付着 ロクロの使用	甕A			
3	土師器甕	AIV-1住居址 胎実	横 ナデ 横 ナデ	—	—	—	—	—	—	0.4~0.5		甕B			
4	土師器甕	AIV-1住居址 北東隅胎実	横 ナデ 横 ナデ	ナ デ ヘラナデ	—	—	—	—	—	0.5~0.6		甕B			
5	土師器甕	AIV-1住居址 東床部・ベレット	横 ナデ 横 ナデ	ヘラナデ ヘラナデ	—	—	—	15.4	—	—	0.5~0.6		甕B		
6	土師器甕	AIV-1住居址 床面・ピット埋	—	—	ヘラナデ ナデ(指?)	斜 底 ナ	—	—	9.6	6.5~0.8	器面に凹凸がある	甕B			
7	土師器甕	BIV-1住居址 床面・溝	横 ナデ 横 ナデ	—	—	—	—	—	—	0.6~0.8	器もうがあり胎 土不良	甕B			
8	土師器甕	BIV-1住居址 東側溝・埋土下	—	—	ヘラナデ ヘラナデ	ヘラナデ ヘラナデ	—	—	11.0	0.7	縦管の構成	甕B			
9	土師器環	BIV-1住居址 埋土下位	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	14.4	—	—	0.5~0.6	内黒	環A ₁		
10	土師器環	BIV-1住居址 東カマド支脚	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	—	—	0.4	内黒	環A ₁		
11	土師器環	BIV-1住居址 床面セクション	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	静止糸切り ヘラミガキ	—	—	14.3	4.8	6.0	0.4~0.6	内黒・底再調整 遺着あり	環A ₁	
12	土師器環	BIV-1住居址 2~3期	—	—	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	—	0.4~0.5	内黒 器蓋あり	環A ₁		
13	土師器環	BIV-1住居址 床面	—	—	ロクロナデ ヘラケズリ	静止糸切り ヘラミガキ	—	—	—	—	7.0	0.5	内黒 底再調整あり	環A ₁	
14	土師器環	BIV-1住居址 床面下	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	14.4	—	—	0.4	内黒	環A ₁	
15	土師器環	BIV-1住居址 埋土下位	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	14.0	—	—	0.3~0.4	内黒	環A ₁	
16	土師器環	BIV-1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	回転糸切り ヘラミガキ	—	—	14.6	5.6	5.0	0.3	内黒	環A ₁	
17	土師器環	BIV-1住居址 東カマド支脚	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラケズリ ロクロナデ	静止糸切り ロクロナデ	—	—	13.7	4.6	6.0	0.4~0.7	赤内黒 底再調整あり	環B ₁	
18	土師器環	BIV-1住居址 東カマド・ピット埋	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	—	0.5	赤内黒	環B ₁	
19	土師器環	BIV-1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	—	—	0.3~0.4	赤内黒	環B ₁	
20	土師器環	BIV-1住居址 東カマド支脚	—	—	ロクロナデ ロクロナデ	回転糸切り ロクロナデ	—	—	—	—	6.3	0.4~0.5	赤内黒	環B ₁	
21	土師器・壺	BIV-1住居址 東カマド埋土部	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラケズリ ロクロナデ	—	—	—	21.4	—	—	0.5~0.7	外面に煤付着	甕A	
22	土師器・壺	BIV-1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	15.6	—	—	0.5	内面に煤付着	甕A
23	土師器・壺	BIV-1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラケズリ ヘラナデ	—	—	—	21.0	—	—	0.6~0.7	No802と004土割	甕A	
24	土師器・壺	BIV-1住居址 埋土粒1	—	—	ナ デ ナ デ	回転糸切り ロクロナデ	—	—	—	—	8.2	0.7		甕A	

図面 番号	種 類	出土地点	調 査 上 段：外面		注 法 下 段：内面		規 定 (cm)				備 考	分 類
			口 縁 部	体高上半	体高下半	底 部	口 縁	高 度	容 積	厚 度		
25	土留壁・壁	BIV-1住居址 床面下・埋土下	横 ナゲ 横 ナゲ	ヘラナゲ 刷 毛 目	—	—	11.0	—	—	0.4		表B
26	土留壁・壁	BIV-1住居址 床面下	横 ナゲ 横 ナゲ	ヘラナゲ(透) 刷 毛 目	—	—	16.0	—	—	0.6		表B
27	土留壁・壁	BIV-1住居址 床面下・埋土下	横 ナゲ 横 ナゲ	ヘラナゲ ヘラナゲ	—	—	16.0	—	—	0.6		表B
28	土留壁・壁	BIV-1住居址 床面・カマド	横 ナゲ 横 ナゲ	ヘラナゲ ヘラナゲ	ヘラナゲ ヘラナゲ	—	19.8	—	—	0.5~0.7	No02土留 体下半部付壁	表B
29	土留壁・壁	BIV-1住居址 東カマド支脚	—	—	ヘラナゲ ヘラナゲ	ナゲ(推?)	—	—	9.4	0.6~0.8		表B
30	土留壁環	BIV-1ビット セクション中	ロクロナゲ ロクロナゲ	ロクロナゲ ロクロナゲ	—	—	14.0	—	—	0.3	非内黒	環B ₂
31	土留壁環	BIV-1ビット セクション中	ロクロナゲ ヘラミガキ	ロクロナゲ ヘラミガキ	—	—	—	—	—	0.4	内黒 (内外面とも)	環A ₁
32	土留壁環	AIV-1土取 穴の粗土	—	—	ロクロナゲ ロクロナゲ	回転糸切り ロクロナゲ	—	—	6.6	0.3~0.4	非内黒	環B ₂
33	土留壁環	BV-1土取 穴の粗土上位	—	—	ロクロナゲ ロクロナゲ	回転糸切り ロクロナゲ	—	—	5.0	0.4	非内黒	環B ₂
34	土留壁環	粗黒	ロクロナゲ ロクロナゲ	ロクロナゲ ロクロナゲ	—	—	—	—	—	0.5	非内黒	環B ₁
35	土留壁環	BIII m 1層	—	—	ヘラナゲ ヘラミガキ	静止糸切り ヘラミガキ	—	—	6.8	0.7	内黒	環A ₁
36	土留壁環	BIII m 1層	ロクロナゲ ヘラミガキ	ロクロナゲ ヘラミガキ	—	—	—	—	—	0.8	内黒	環A ₂

V ま と め

1. 遺構について

(1) 住居址

〈縄文時代〉

縄文時代の住居址は2棟であるが、1棟は長方形、他の1棟は形状不明である。長方形の住居址からは、物見台式期の土器が壁部分からと住居址に切られたピットの上面とから出土している。しかし、この遺物の出土状況からは時期を即断できない。埋土の状況を見ると、中塚浮石が混入する層が壁寄りにある。中塚浮石の降下年代について最近の調査結果から前期末と考えられるようになってきている⁽¹⁹⁾。このことと検出状況とを考えあわせると、この住居址の時期は、中塚浮石の降下後の前期末とみられる。

〈平安時代〉

4棟検出されている。以下、7項目にわけて簡単にまとめてみる。

① 形状・規模

平面形は、ほぼ正方形が2棟(AIV-1住居址、BIV-1住居址)、長方形が1棟(BIII-2住居址)、不明が1棟(BIII-1住居址)である。規模は、AIV-1住居址が2.8m前後と小さいが、他は一辺が4.5m前後と大きめである。

② 埋土

いずれも埋土に灰白色火山灰が混入し、BIV-1住居址上位にはさらに黄褐色の火山灰が混入する。

③ 床面

AIV-1住居址が全面、BIII-2住居址が部分的に貼床となっている。

④ 柱穴

各住居址3～5個検出されているが、配置や規模等から主柱穴と確認できたのはBIII-2住居址の3個のみである。

⑤ カマド

本体はいずれも崩壊しているがBIII-1住居址を除いて検出された。このうちAIV-1住居址は1基、BIV-1住居址は2基ある。BIV-1住居址の1基の煙道は朝貫き式、他は掘り込み式でつくりかえられたものである。AIV-1住居址の煙道も掘り込み式である。いずれの煙道も煙出し部にむかって緩い傾斜をもって下がる。朝貫き式の煙道は北東方向へ、掘り込み式の煙道は南東方向へのびている。

⑥ 施設

AIV-1住居址とBIV-1住居址の隅にピットが検出された。形状は、前者が方形、後者が円形である。

⑦ 遺物

いずれの住居址からもロクロ不使用の土師器甕の破片が出土している。また、BIII-1住居址とBIV-1住居址とから接合する土師器坏口縁部が出土している。

以上の状況から、4棟の住居址はほぼ同時期の存在で、その時期は平安時代（10世紀頃）と推定される。なお、AIV-1住居址は、床面から砂鉄や鉄滓の付着した坏の底部が出土している。また、住居址の周辺から羽口の破片や鉄滓が出土している。これらのことからAIV-1住居址は工房跡と考えられる。

(2) ピット

〈縄文時代〉

46基が検出されているが、占地をみると南半に集中している。平安時代の住居址間とII～III区間にはやや空間がある。形状で分類すると平面形が円形30、楕円形14、隅丸長方形1、不整五角形1で、断面形がフラスコ状13、ピーカー状31、皿状1、円筒状1となる。規模は底部径が1m以下のものが17基ある。最大規模はAIII-12ピットの底部径1.7m×1.6mで、最深ピットはBII-2ピットの約0.9mである。埋土の状況で特徴的なのは、中礫浮石が載っていることである。AIII-12ピットとBIII-3ピットは完全に中礫浮石が遺構を覆っているし、AIII-13ピット、AIV-2ピット、BIV-7ピットの3基は最上位に載っている。

以上の諸状況と検出状況とから、各遺構の時期を推定してみると、中礫浮石が載るピットは、中礫浮石降下以前の時期であり前期以前と推定される。また、AIII-15ピットはAIII-1住居址以前でありやはり前期以前と推定される。さらに、削平を受けていない斜面上方側のIV～V層で検出されたBIV-9～16ピット、BV-1ピット、そして中央部V～VI層で検出されたAIII-14・16・17ピット、BII-2・4ピット、BIII-2・4ピットも前期以前と推定される。そのほか、削平を受けた検出面であるが、埋土の状況などから前期以前と推定されるのがAIII-1・3・6・7・10・11ピット、AIV-1・4・8ピットである。他の15基は、後期の土器が混入していたり、埋土が全体にやわらかく、その状況が互いに似ていることから後・晩期と推定される。

〈平安時代〉

4基検出されているが、占地はいずれも住居址に近接している。形状は隅丸長方形3基、楕円形1基である。楕円形の1基は底面が碗状である。規模は隅丸長方形の3基がいずれも長辺で1.5mほどある。埋土は住居址と同じく灰白色火山灰が混入する。

位置と埋土から、AIV-5・6ピットはAIV-1住居址の、BIV-3ピットはBIV-1住居址の付属施設と推定される。BIV-1ピットは焼土や土器が混入しており、他とは性格が違うものであろう。

(3) 陥し穴状遺構

7基検出されているが、占地は遺跡中央Ⅲ区に2基、他は北東Ⅱ区に集中する。形状で分類すると長方形状を呈するのが2基、溝状を呈するのが5基である。規模は、開口部長軸方向で2.1m～2.2mのもの3基、2.6m～2.8mのもの3基、3.6mのもの1基である。埋土状況は、長方形の1基には灰白色火山灰が入り、もう1基には検出段階で同火山灰がわずかに認められたのみである。この遺構には底面3隅に杭穴が検出されている。

溝状と長方形の遺構の配置には明確な相違がある。溝状の5基の長軸方向は、3基が北西-南東方向、2基が西北西-東南東方向で、等高線に対してほぼ直交する。長方形の2基の長軸方向は南-北方向で、等高線に対してほぼ平行する。

灰白色火山灰の降下時期から、長方形遺構は平安時代以前と推定される。溝状遺構は検出状況等から縄文時代と推定される。

(4) 土取穴

3箇所とも旧道沿いにあり、埋土や掘り込みの状況から土取穴とした。遺物の状況から近世以降に当地の土蔵築造に利用されたものと考えられる^{注1)}。

(5) 炭 窯

小規模な炭窯で、土管と鉤が使用されている。土管は大正末期に使用されはじめたもので、指導員が回り始め普及したものである。また、木炭検査制度ができ、検査者や生産者がカギとカマを使用するようになったのが昭和初期である。規模としては15kg詰で4～5俵程度焼けるものである。したがって、この炭窯は昭和初期に築造され、家庭用木炭を焼いたものと思われる。

注1) 「考古風土記」8号 火山灰について

注2) 浄法寺町 資料館長佐藤基三氏の御教示による。

2. 遺物について

(1) 土 器

〈縄文時代〉

遺構内外を含めて出土総数3,500点である。第Ⅰ群～Ⅴ群に大別し、さらに各群を細別した。第Ⅰ群土器は早期中葉に位置づけられる貝殻文系の土器である。その中でⅠ類は貝殻腹縁条痕文を地文としたもので、爪形の刺突文、口縁部形態、胎土に繊維を含まない点など、白浜式に

類似する。ただし底部が不明なこと、口縁部での沈線文が見られないことで資料的には充分な比較は困難である。2類は貝殻腹縁瓦痕文を地文としたもので寺の沢式や吹切沢式に類似する。地文や器形、胎土は両者に近いと考えられるが、寺の沢式に見られる刺突文や吹切沢式に多い隆起帯の懸垂文、刺突文による帯状文、貝殻腹縁による波状瓦痕文は用いていない。県内においては二戸市長瀬B遺跡など出土例が増えつつある土器であるが、浄法寺町内では桂平遺跡、飛鳥台地I遺跡で出土している。3類は無文の地に平行沈線や貝殻腹縁文を用いて幾何学文様を表現したもので、物見台式に比定される。器形は不明であるが、胎土や器厚、文様の節目に施される小円形刺突文など、極めて相似する。浄法寺町でも出土例が多く、五庵I・II・III遺跡、田余内I遺跡などで出土している。

第II群土器は早期後末～前期初頭に位置づけられる縄文系の土器である。その中で1類は器壁の表裏に縄文を施したもので、赤御堂式や早稲田IV類に比定される。用いる縄文に多様性があり、胎土に繊維を含まず、成形がいびつであることや沈線文も見られるなど、類似する点が多い。器形や口縁部など不明な点をもち、やはり詳細な比較はできない。この類は大槌町崎山弁天遺跡、矢巾町大渡野遺跡をはじめ、浄法寺町内の五庵III、安比内I、飛鳥台地Iなどの各遺跡で出土している。2類は表面にのみ縄文を施したもので、4類を含めて、早稲田V類に比定される。単節斜行縄文以外に0段多糸縄文や多軸絡条体などの特殊な縄文を用いること、胎土に繊維を含むこと、口縁部文様帯がないことなどがその共通する点である。一方口唇部の施文がないことや底部が不明という点では不確定要素をもつ。本類は県北の二戸市沢内B遺跡、上里遺跡、中曽根遺跡などで好例が見られる。3類の位置づけは不明である。5類は2点のみであるが、胎土に繊維を含み、縄文原体の末端の回転施文（ループ文）や横方向の押し引き文を施文しており、前期初頭の長七谷地III群、早稲田VI類、大木1式などに類するものであろう。また6類は不整な撚糸文が口縁部に用いられており、大木1～2式と見られる。

第III群土器は後期前半に位置づけられる土器群である。出土量が最も多い。十腰内I式の前半期のものに比定される。関東地方の掘之内式、東北地方南東部の宮戸I式、南境式などに併行する。施文の違いから7類に分類したが、その順位は新旧を意味しない。1類は無文地に区画文を表現し、隆線のみによるもの1a類、隆線と沈線文を併用するものを1b類とした。円文や長円文、「8」字状貼付文が見られる。2類はやはり無文地に沈線による区画文や曲線文を用いるものである。その中で平行沈線を主とする2a類は、入組文や渦巻文、弧状文を体部上半に展開している。横位の長楕円形や円文を主とする2b類には口縁部への隆帯の貼り付けが見られる。3類は地文に縄文を用いているもので、沈線による区画文、曲線文で表現する。隆線区画文を一部にもつ3a類と短い棒状の貼付文をもつ3b類は、ともに縄文がまばらであり、地文が重視されていない印象をもつ。磨消縄文を用いる3c類には横S字状の懸垂文が特徴的

である。4類～7類は1～3類に伴うと考えられるものである。沈線による網目状文、平行線文などをもつ4類は、5類における撚糸文の文様効果を沈線で表現したと考えられ、器形や折り返し口縁など共通性が高い。これらの第Ⅲ群土器の器形には大波状口縁や平縁の折り返し口縁の深鉢と壺形土器が主体を占め、浅鉢や台付鉢などは見られない。同期のものは大迫町立石遺跡や東北の遺跡で出土例が多い。浄土寺町内では五庵Ⅱ・Ⅲ遺跡、海上Ⅰ・Ⅱ遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡等で出土している。

第Ⅳ群土器は晩期の大洞B～C式にわたるが、出土数は少ない。

第Ⅴ群土器は粗整土器及び底部を一括している。器形からその大部分は第Ⅲ群土器に伴うものと考えられる。

以上のことから本遺跡における縄文時代は、出土量の多さから、早期後半と後期前半の時期にその隆盛期があったと推定される。

〈平安時代〉

土器の坏と甕のみで、他の器形は見られない。総出土数は246点である。出土数が少ないため、土器の分類にあたっては器形の全体を知る個体をもとにその特徴を把握し、一部分のみの破片も含めて行った。

坏は内黒(A類)と非内黒(B類)と大別し、さらに底部の切り離し技法の違いにより、A₁、A₂、B₁、B₂の4類に細分した。A類は従来から表杉ノ入式(9世紀～10世紀)や桜井第2型式(9世紀前半)とされてきたものであり、B類は須恵系土器(11世紀～12世紀)や赤焼土器などと呼ばれていたものにあたる。一般的には前者から後者へとその盛業時期が新しくなるとされている。本遺跡全体の出土数ではA類とB類が半々の割合である。遺物の多いBIV-1住居址だけで見るとA類にくらべてB類がやや多い。粗略な見方をすれば、本遺跡のあり方はその過渡期となる10世紀代という位置づけとなる。

坏のA類とB類の器形と切り離し技法に着目すると、A₁とB₁、A₂とB₂がそれぞれ近い関係にある。A₁とB₁類は共に口縁部が直上気味の器形で、底部がやや広く厚手の器厚である。A₂とB₂類は口縁部がやや外反する器形で、小さめの底部をもち薄手である。この類似性は、製作時において、同じ手法で成形されたものでも黒色処理(内黒)される場合とされない場合があったと見ることができる。B類については酸化炭焼成された須恵器と把える見方と土器生産の流れの中に把える見方とに分かれているが、本遺跡の坏を見る限り後者と考えられる。

またA₁やB₁類における底部の静止糸切り後再調整する技法の年代観は今のところ明確ではない。回転糸切りと同時に行われてきたとすれば、9世紀以降本遺跡の時期までは続いていることとなる。隣接する飛鳥台Ⅰ遺跡や安比内Ⅰ遺跡でも静止糸切りの坏を出土しているが、

この他の県北地方での出土例は極めて少ない。この技法の存続年代は今後の課題となる。なお器壁への墨書はA₁類にのみ見られた。

甕はロクロの使用、不使用でA類とB類とに大別した。遺跡全体での出土数はA類が極めて少なく、B類が圧倒的(約10倍)に多い。この傾向は同時代と考えられる浄法寺町の各遺跡をはじめ、一戸町北館B遺跡、田中IV遺跡、二戸市中曾根II遺跡、安代町扇畑遺跡など、県北地方に一律に見られる。甕A、B類ともそれぞれ2種の口縁部形態がある。また甕B類には最大径の位置、底部の立ち上がり方、内面調整の刷毛目の有無などの相違があるものの、個体数が少ないため細分はしなかった。いずれも器面に凹凸があり、外面は粗いヘラケズリが施されている。これらB類の甕は口縁部の外反の程度が弱く短く、体部が脹らむ器形がより新しいものとする見方をとれば、BIV-1住居址は他の住居址よりもやや古い時期のものが多。ただし他の住居址の出土数が少ないので断定はできない。

以上のように本遺跡の平安時代の遺物には、坏と甕だけで他の器形はないこと、須恵器が伴わないこと、坏には静止糸切り再調整のものがあること、甕はロクロ不使用のものが主体であることなどの特徴点があげられる。時期は他の遺跡例などから10世紀代のものと考えたい。

(2) 土製品

円盤状土製品は沈線による曲線文が施されているもので縄文時代後期とみられるが、スプーン状土製品は時期を特定できない。玉は平安時代住居址の周溝部分からの出土であり、住居址に伴うものとも思われる。

(3) 石器

出土点数の最も多いのは、スクレイパーの18点、次が石錘の14点である。そのうち半数の7点が同一ピットからの出土である。また遺構外出土のうち4点もそのピットの周辺からの出土であり、漁網用か編物用の鎌としてまとまっていたことがうかがえる。その他に点数の多い器種は磨石である。その磨石も10点のうち9点までが棒状のものという特徴がある。

石質の占有率をみると、剥片石器ではチャートが45%、珪質泥岩が22.5%と2種で約70%を占める。礫石器では輝石安山岩が83%を占める。

(4) その他

遺構内外から製鉄に関係する遺物が出土している。列記すると、まず籬の羽口、AIV-1住居址から砂鉄と鉄滓付着の坏、BIII-1住居址から紡錘車、BIV-1住居址から2点の鉄滓、そして遺構外鉄滓が4点となる。

写 真 图 版



遺跡位置

(北から)



遺跡全景

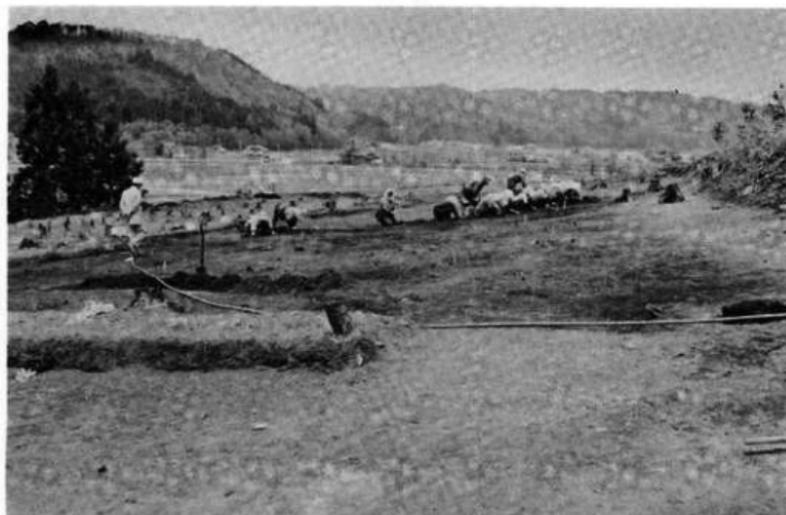
(北西から)

写真図版1 遺跡空中写真



雑物撤去

(東から)



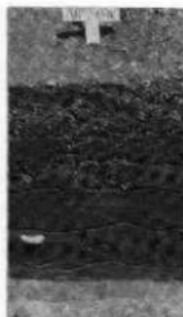
遺構検出

(南から)

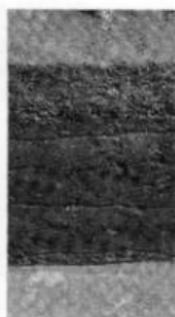
写真図版 2 調査開始状況



ANb



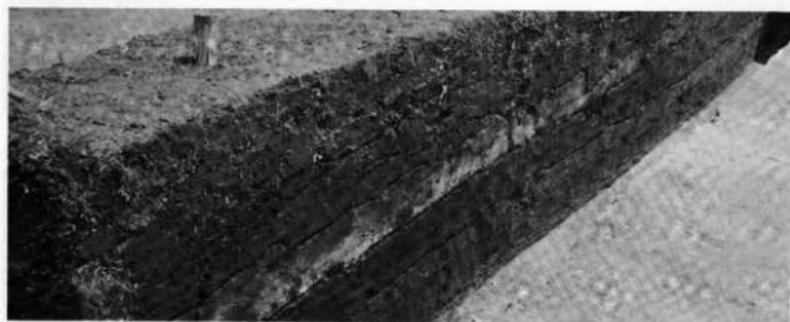
BVa



BVc



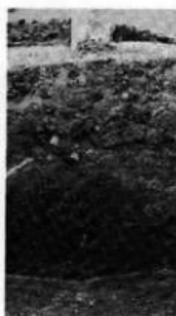
BVd



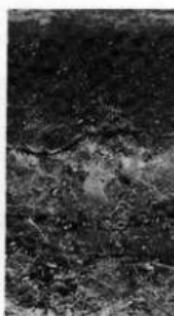
BVb~c



BIIe



BIIIa

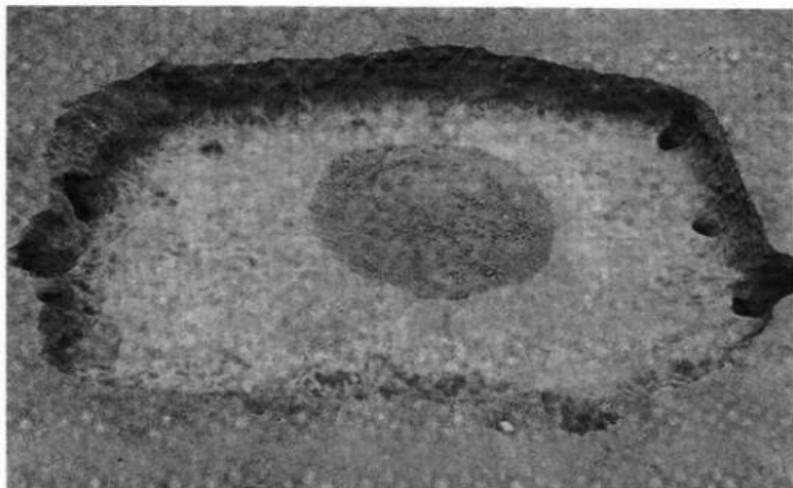


BIVe

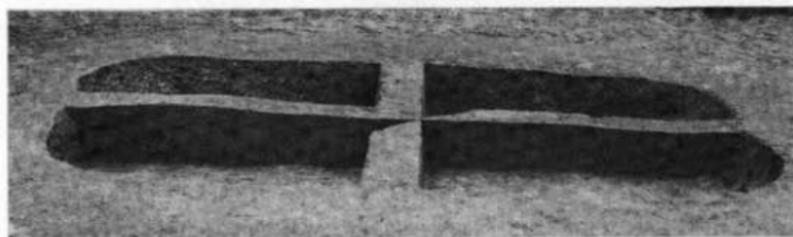


(BIVm)

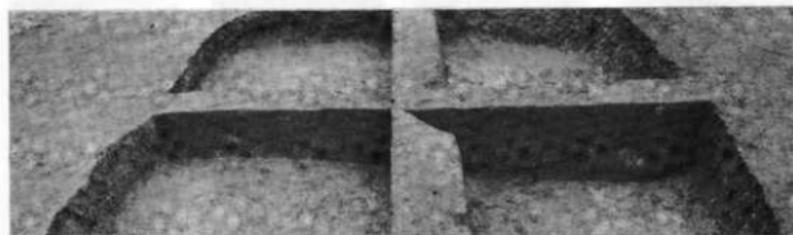
写真図版3 土層断面



平面



断面



断面

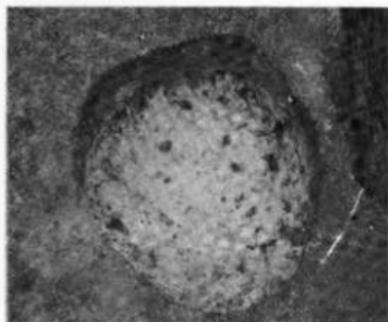
写真图版4 AⅡ-1住居址



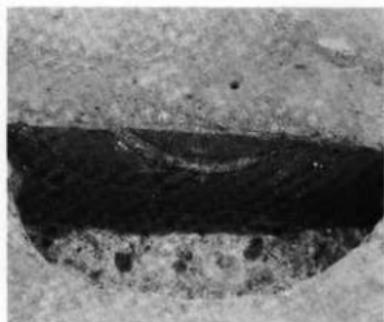
AV-2住居址 平面



AV-2住居址・炉 断面

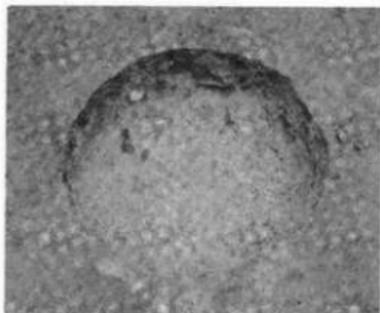


AII-ピット 平面

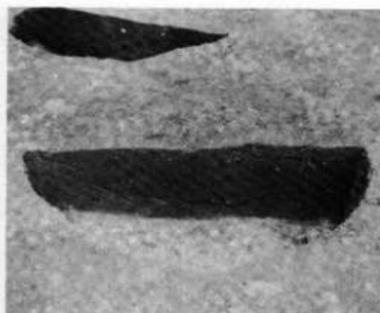


AII-1ピット 断面

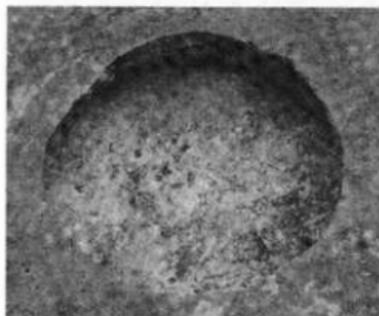
写真図版5 AV-2住居址・ピット(1)



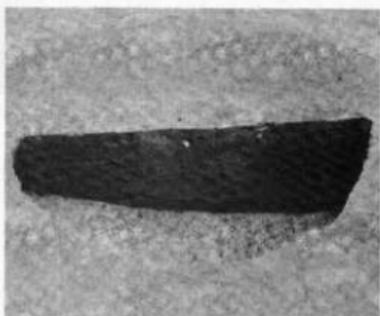
AⅢ-1ビット 平面



AⅢ-1ビット 断面



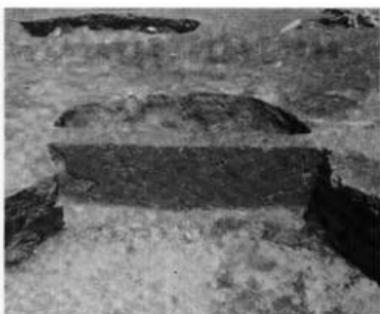
AⅢ-2ビット 平面



AⅢ-2ビット 断面



AⅢ-3ビット 平面

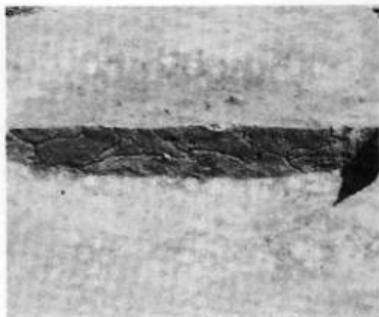


AⅢ-3ビット 断面

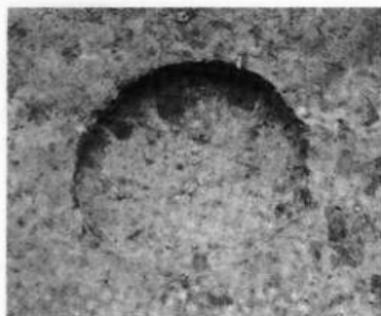
写真図版6 ビット(2)



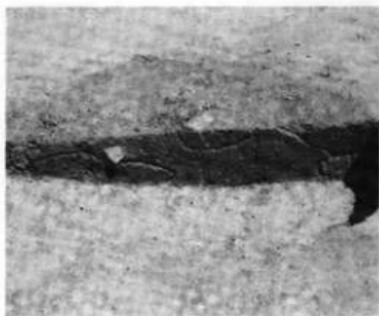
AⅢ-4ビット 平面



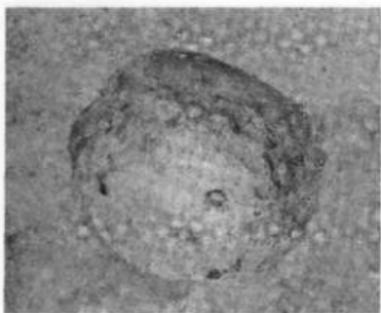
AⅢ-4ビット 断面



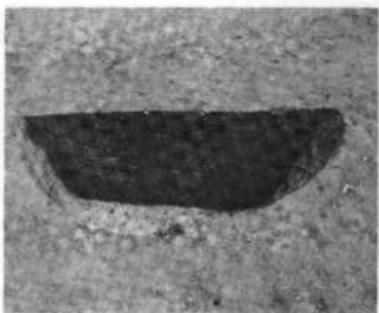
AⅢ-5ビット 平面



AⅢ-5ビット 断面

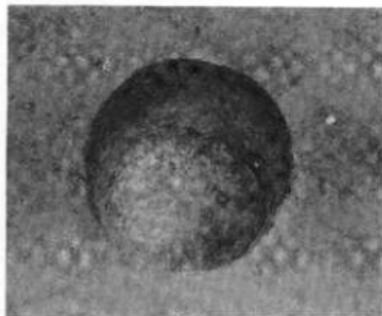


AⅢ-6ビット 平面



AⅢ-6ビット 断面

写真図版7 ビット(3)



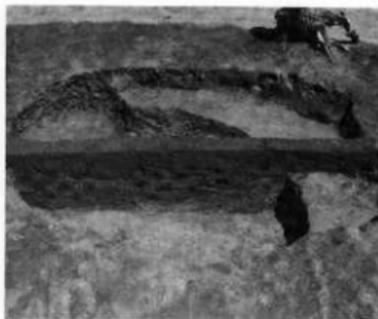
A III-7ピット 平面



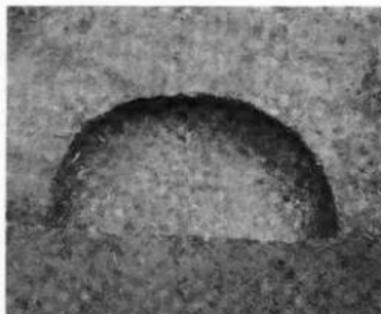
A III-7ピット 断面



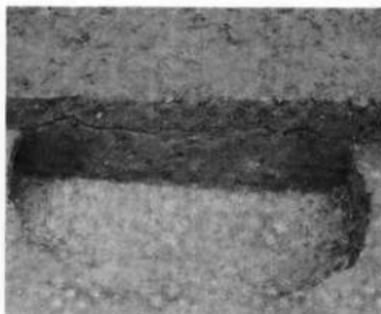
A III-8・10ピット 平面



A III-8・10ピット 断面

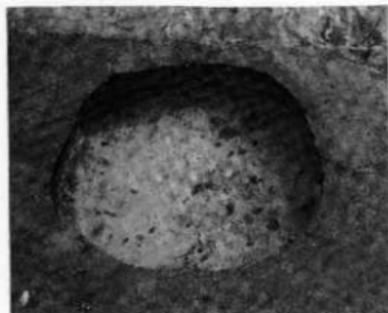


A III-9ピット 平面

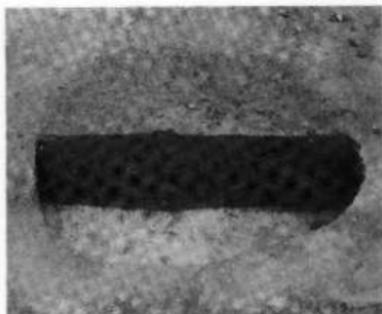


A III-9ピット 断面

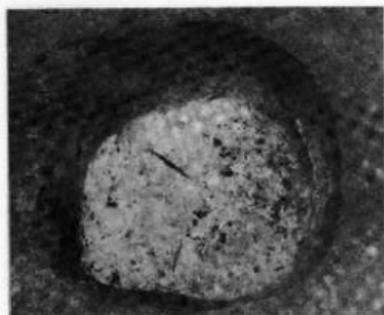
写真図版8 ピット(4)



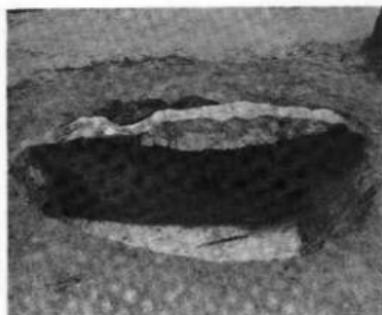
A III-11ピット 平面



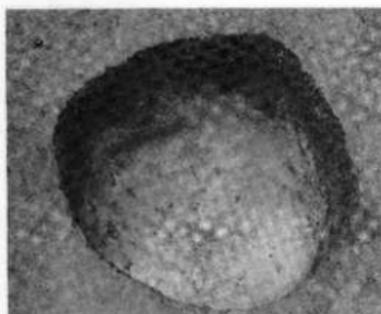
A III-11ピット 断面



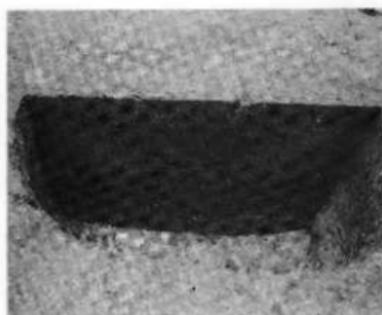
A III-12ピット 平面



A III-12ピット 断面

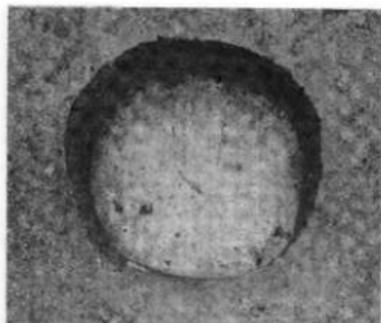


A III-13ピット 平面

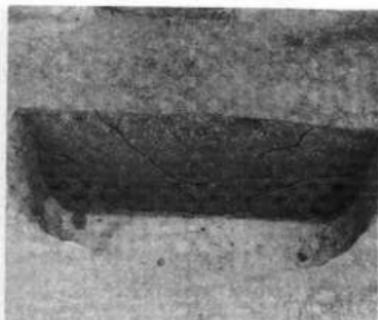


A III-13ピット 断面

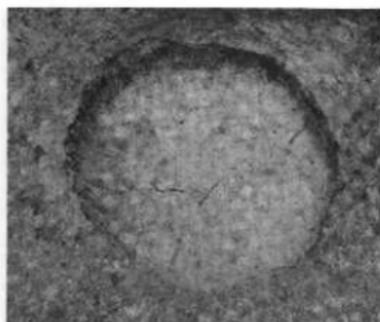
写真図版9 ピット(5)



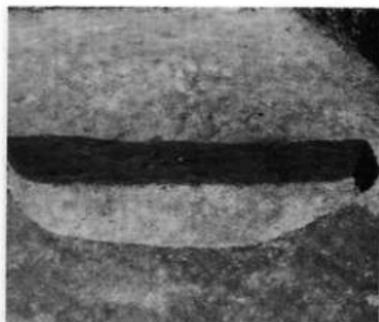
A III-14ピット 平面



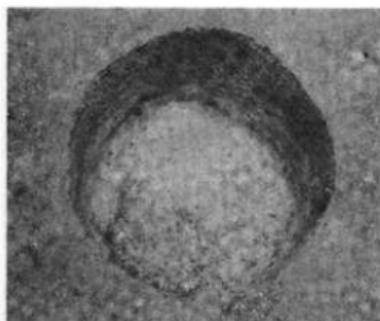
A III-14ピット 断面



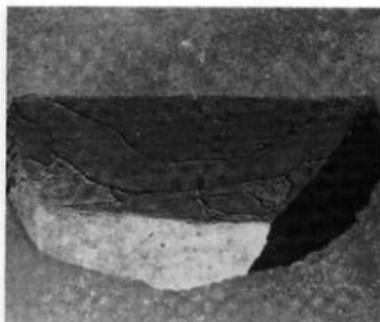
A III-15ピット 平面



A III-15ピット 断面

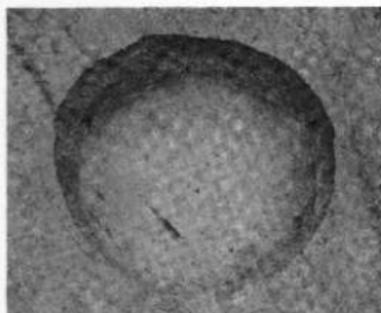


A III-16ピット 平面

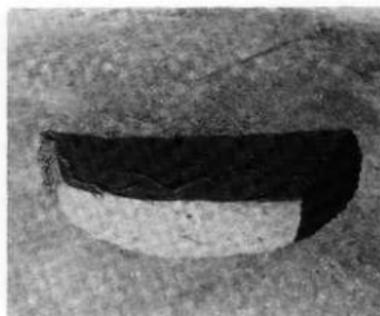


A III-16ピット 断面

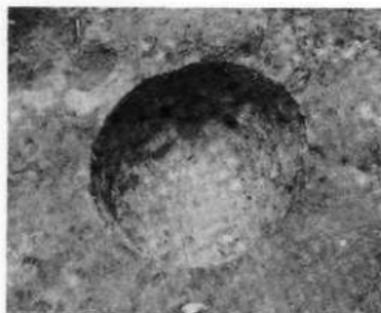
写真図版10 ピット(6)



AⅢ-17ビット 平面



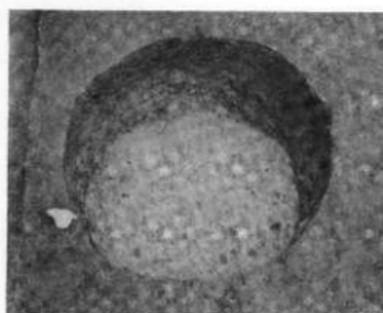
AⅢ-17ビット 断面



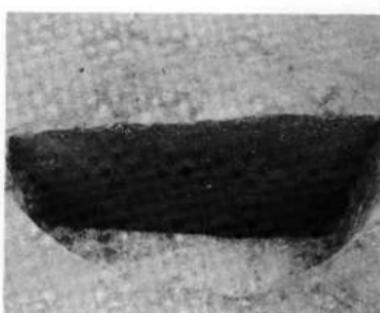
AⅣ-1ビット 平面



AⅣ-1ビット 断面

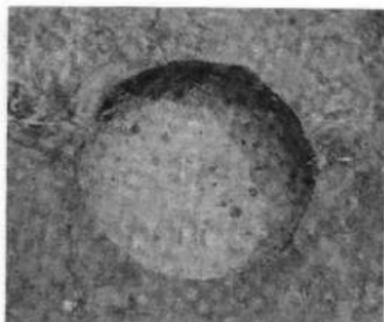


AⅣ-2ビット 平面



AⅣ-2ビット 断面

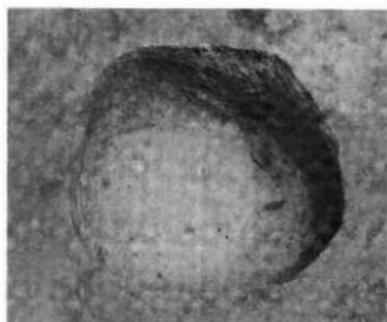
写真図版11 ビット(7)



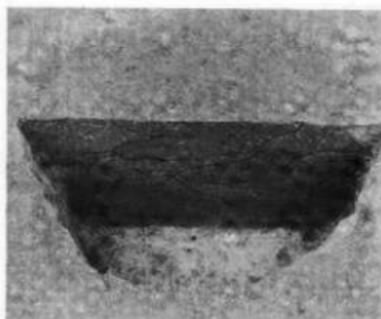
AV-3ピット 平面



AV-3ピット 断面



AV-4ピット 平面



AV-4ピット 断面

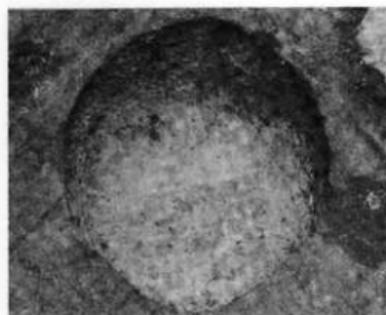


AV-7ピット 平面

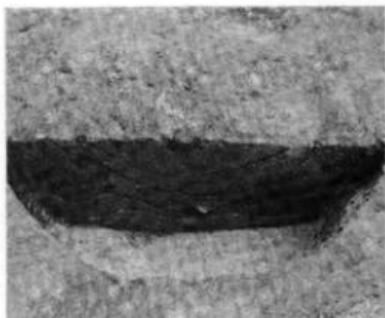


AV-7ピット 断面

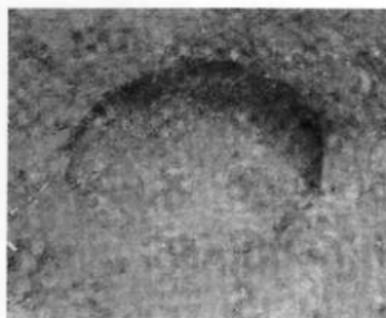
写真図版12 ピット(8)



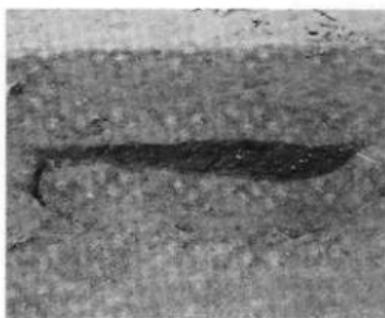
AV-8ピット 平面



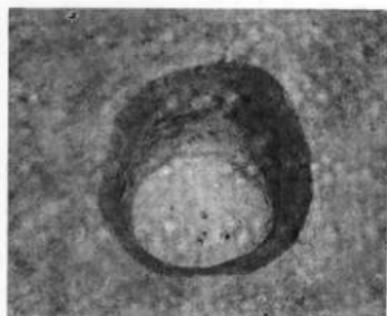
AV-8ピット 断面



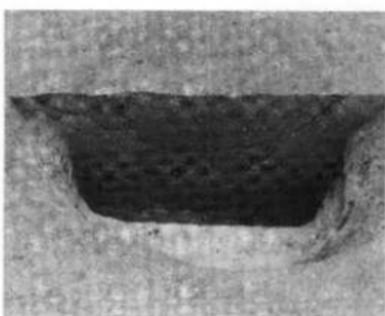
BII-1ピット 平面



BII-1ピット 断面

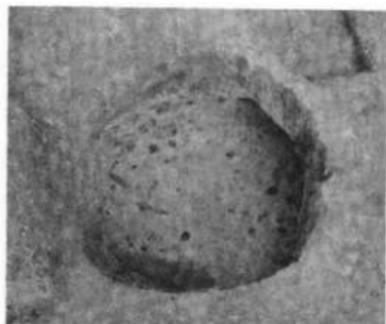


BII-2ピット 平面

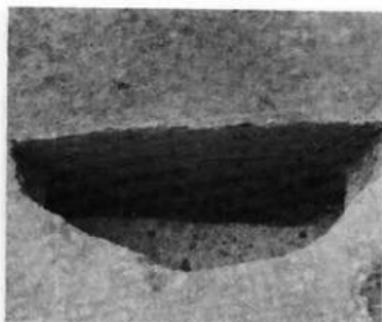


BII-2ピット 断面

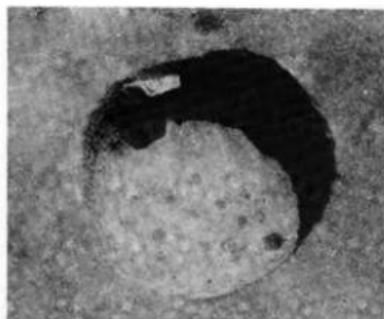
写真図版13 ピット(9)



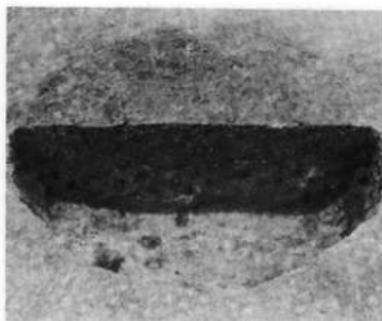
BII-3ピット 平面



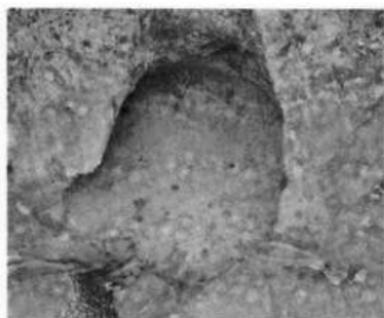
BII-3ピット 断面



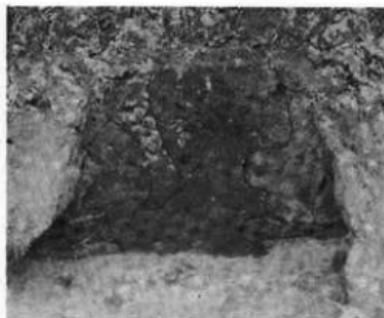
BII-4ピット 平面



BII-4ピット 断面



BII-5ピット 平面

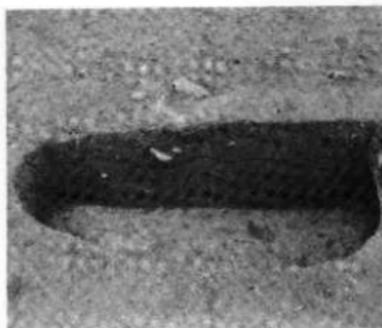


BII-5ピット 断面

写真図版14 ピット(10)



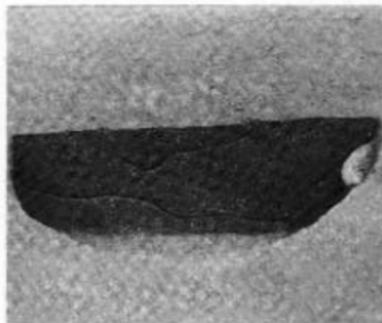
BⅢ-1ピット 平面



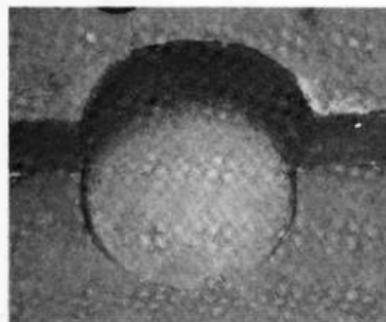
BⅢ-1ピット 断面



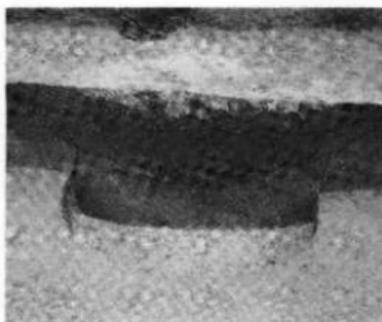
BⅢ-2ピット 平面



BⅢ-2ピット 断面

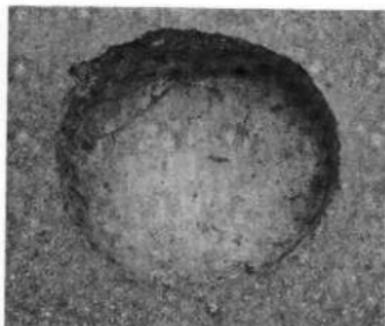


BⅢ-3ピット 平面

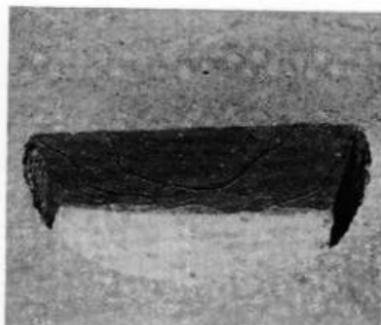


BⅢ-3ピット 断面

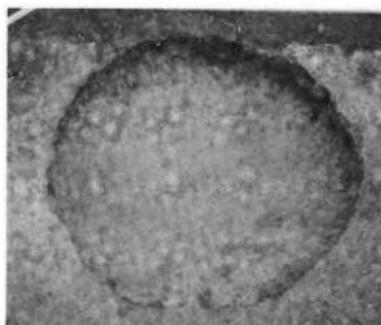
写真図版15 ピット(1)



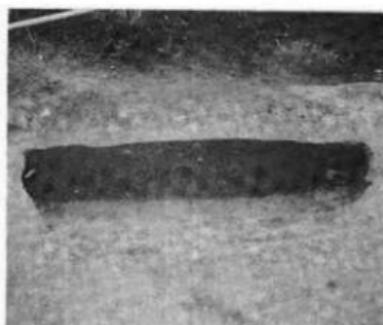
BⅢ-4ピット 平面



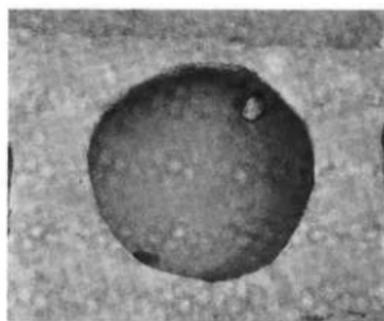
BⅢ-4ピット 断面



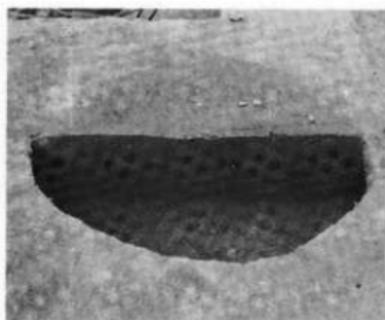
BⅣ-4ピット 平面



BⅣ-4ピット 断面

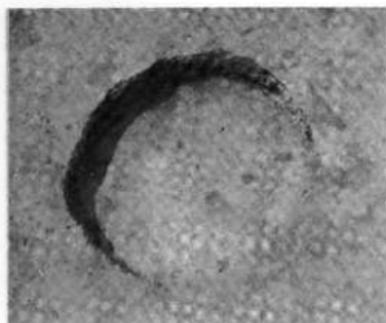


BⅣ-5ピット 平面



BⅣ-5ピット 断面

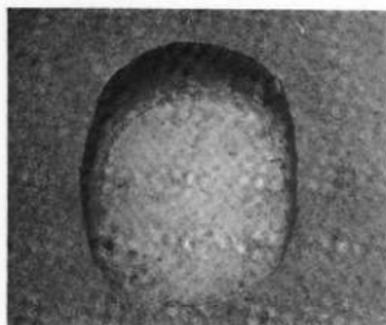
写真図版16 ピット(12)



BN-6ピット 平面



BN-6ピット 断面



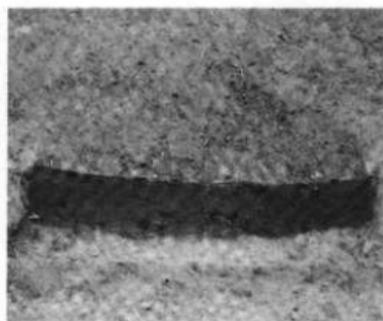
BN-7ピット 平面



BN-7ピット 断面

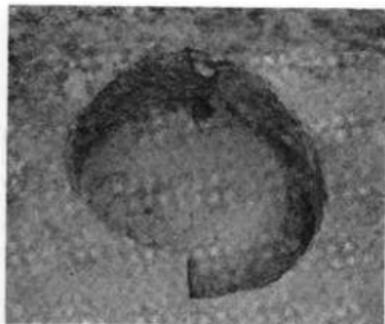


BN-8ピット 平面



BN-8ピット 断面

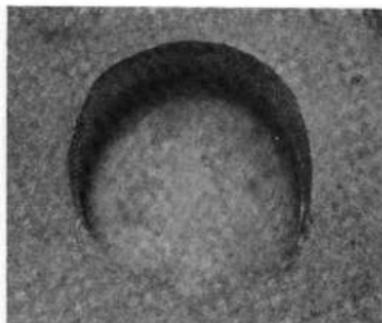
写真図版17 ピット(13)



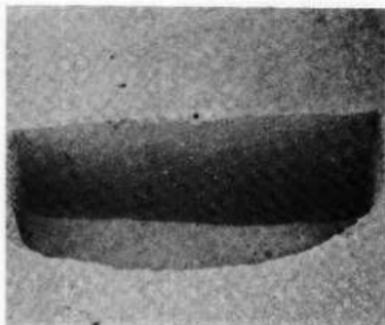
BW-9ピット 平面



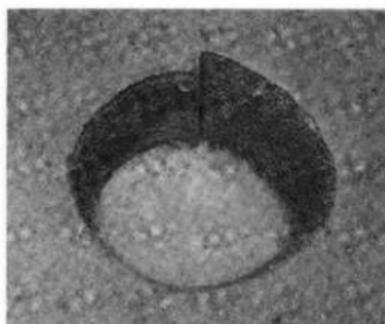
BW-9ピット 断面



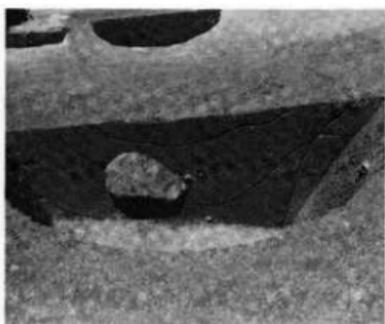
BW-10ピット 平面



BW-10ピット 断面

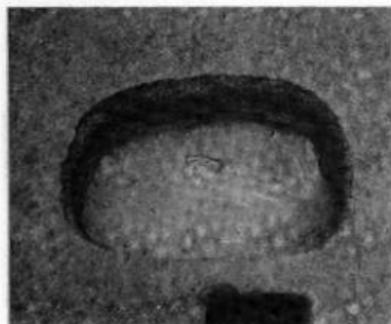


BW-11ピット 平面

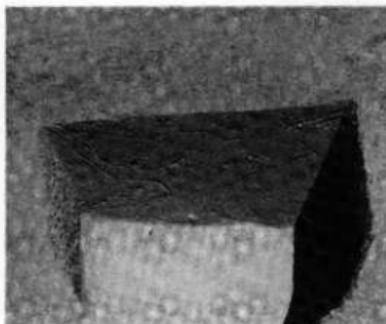


BW-11ピット 断面

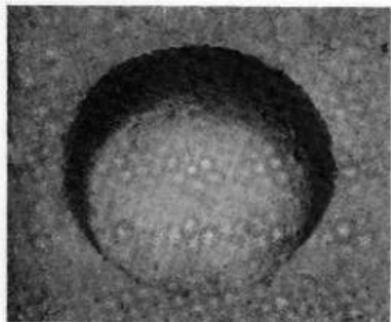
写真図版18 ピット(14)



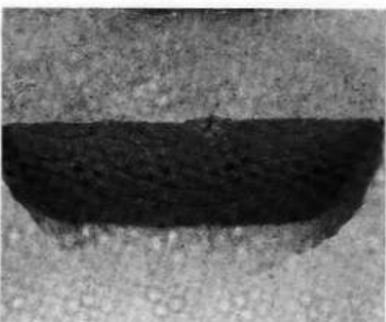
BV-12ピット 平面



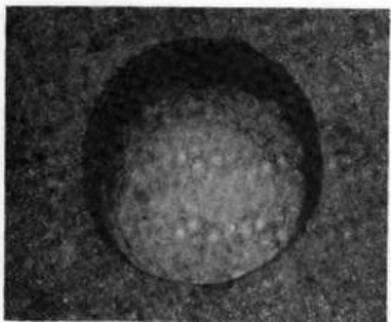
BV-12ピット 断面



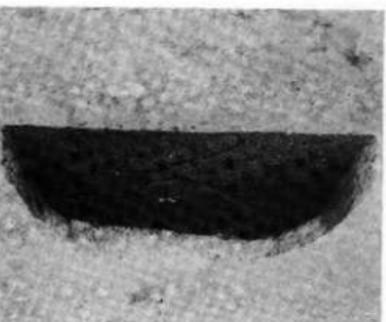
BV-13ピット 平面



BV-13ピット 断面

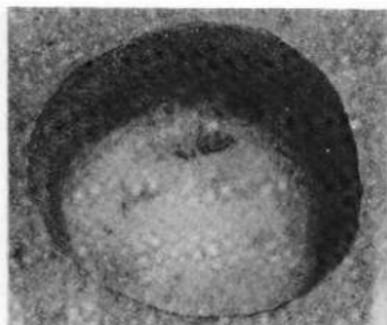


BV-14ピット 平面

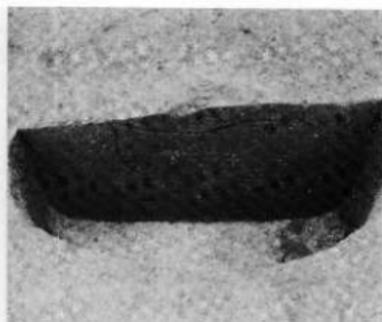


BV-14ピット 断面

写真図版19 ピット(15)



BV-15ピット 平面



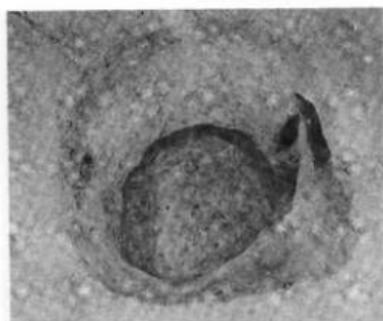
BV-15ピット 断面



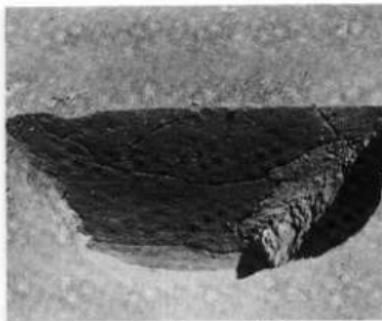
BV-16ピット 平面



BV-16ピット 断面



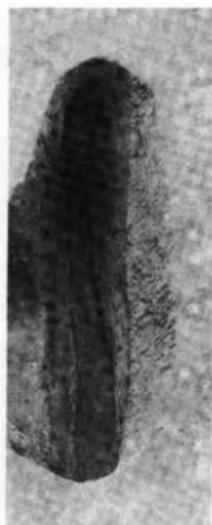
BV-1ピット 平面



BV-1ピット 断面



A II-2 陥し穴 平面



A III-1 陥し穴 平面



B II-1 陥し穴 平面



A II-2 陥し穴 断面

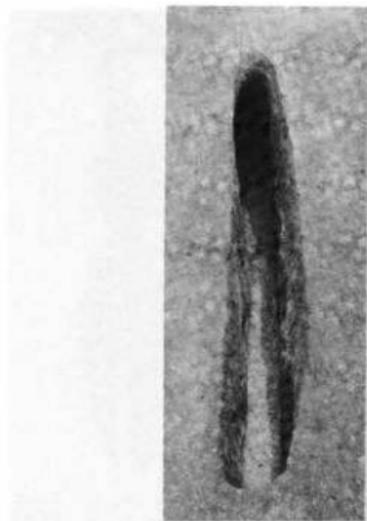


A III-1 陥し穴 断面

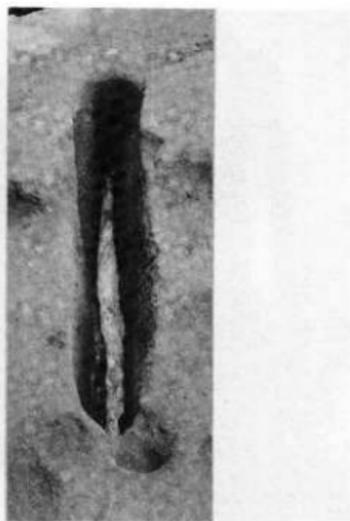


B II-1 陥し穴 断面

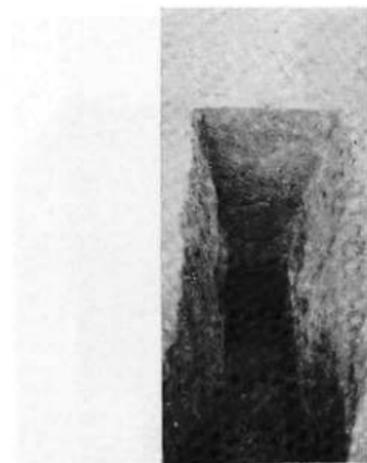
写真図版21 陥し穴状遺構(1)



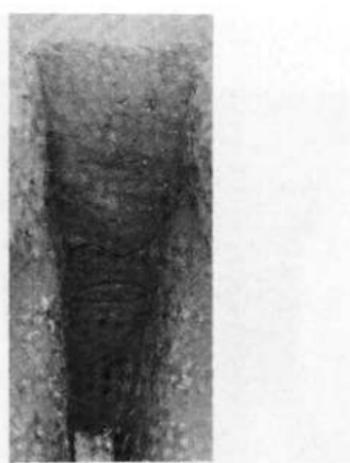
BII-3 陥し穴 平面



BIII-1 陥し穴 平面

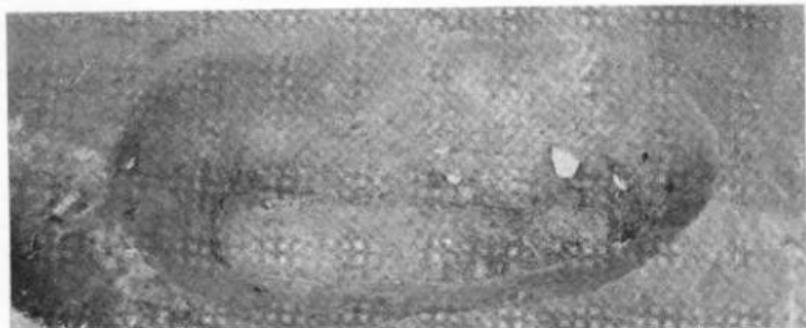


BII-3 陥し穴 断面

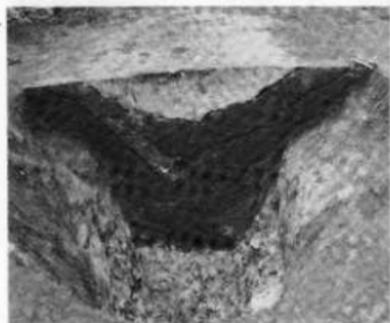


BIII-1 陥し穴 断面

写真図版22 陥し穴状遺構(2)



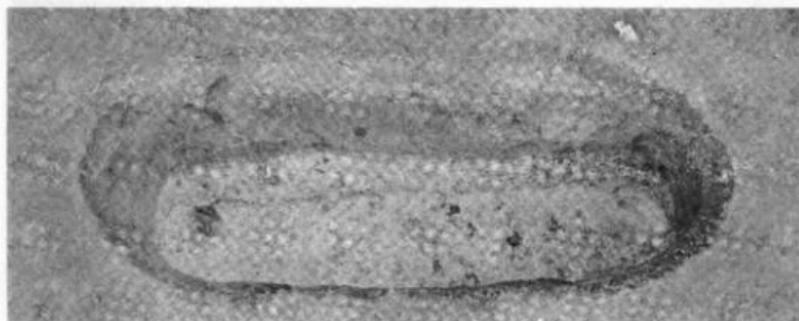
A II-1 陥し穴状遺構 平面



A II-1 陥し穴状遺構 断面



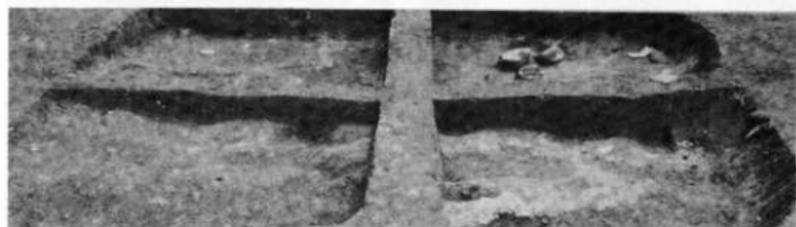
B II-2 陥し穴状遺構 断面



B II-2 陥し穴状遺構 平面



平面

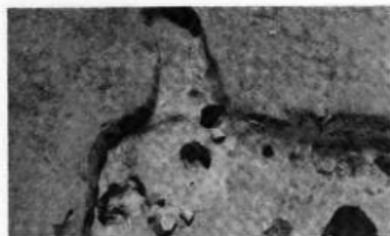


断面



断面

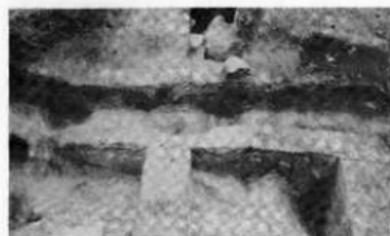
写真图版24 AM-1住居址(1)



カマド 平面



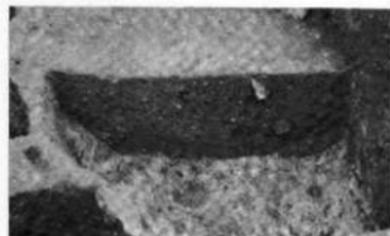
煙道 断面



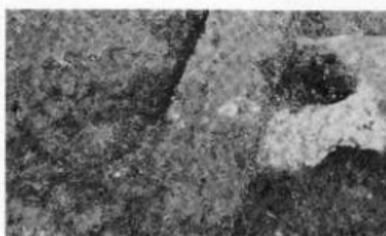
カマド 断面



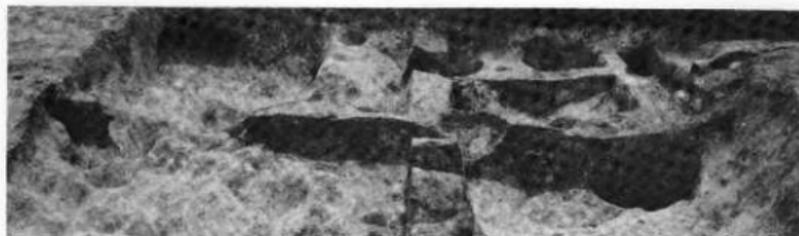
煙道 断面



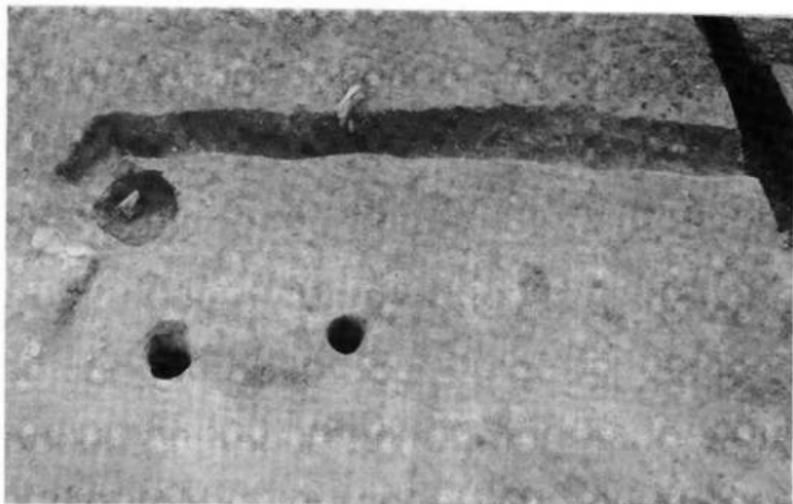
ビット 断面



砂鉄・白粘土出土状況



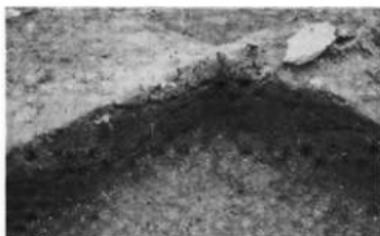
貼床 断面



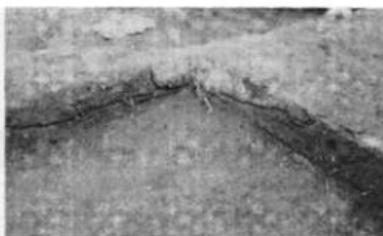
B III-1 住居址 平面



B III-1 住居址 平面

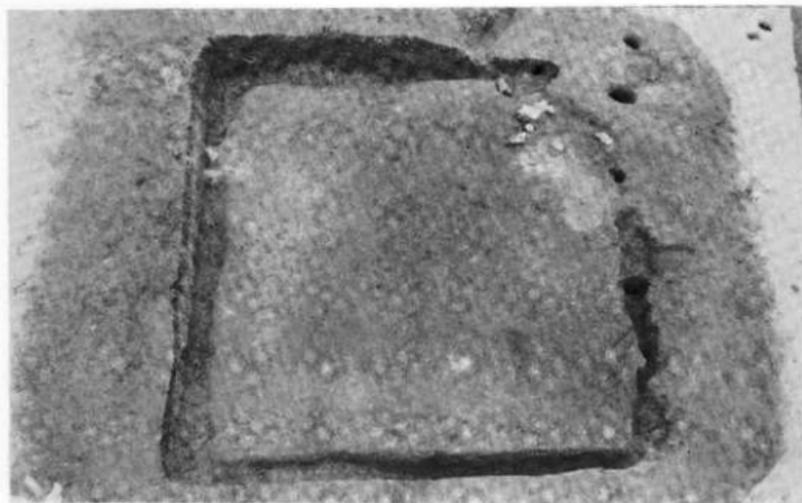


B III-2 住居址カマド 断面

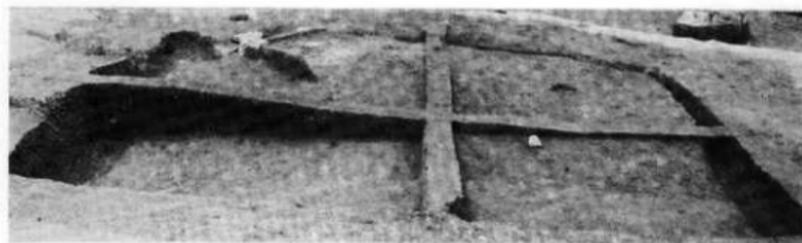


B III-2 住居址カマド 断面

写真図版26 B III-1 住居址・B III-2 住居址(1)



平面



断面



断面

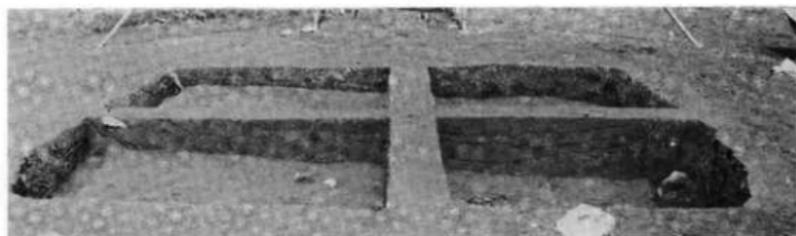
写真図版27 BⅢ-2住居址(2)



平面

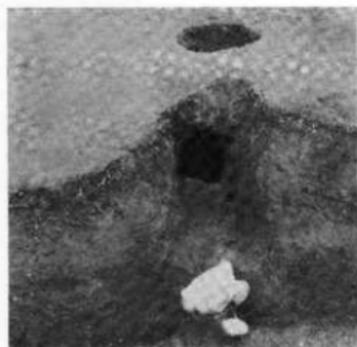


断面

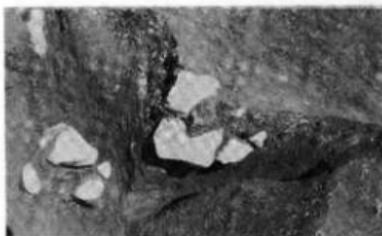


断面

写真図版28 BM-1住居址(1)



北東カマド 平面



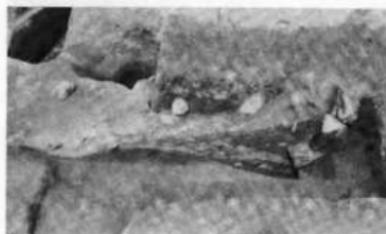
北東カマド煙道 断面



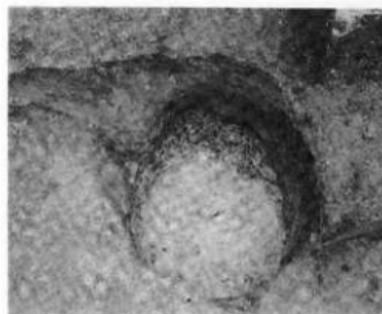
南東カマド 平面



北東カマド煙道 断面



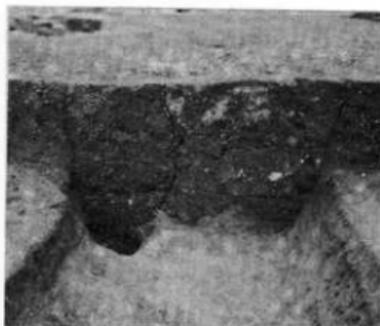
南東カマド煙道 断面



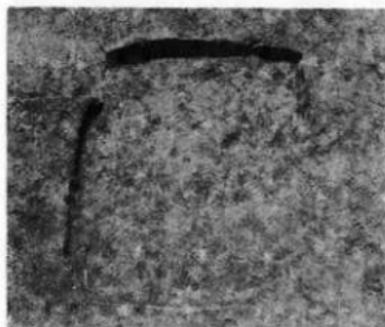
ビット 平面



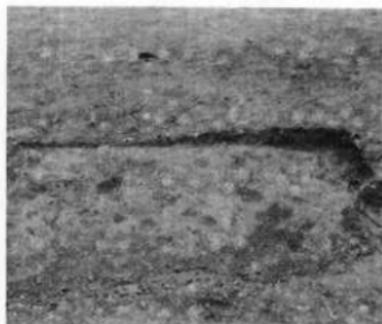
AN-5ピット 平面



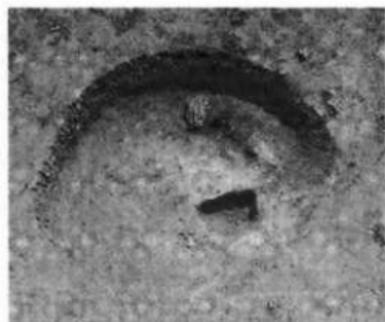
AN-5ピット 断面



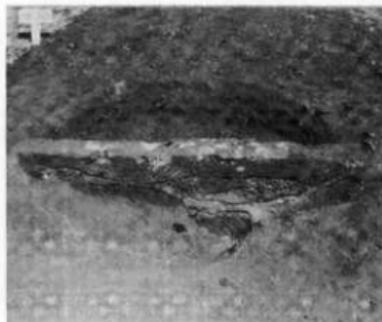
AN-6ピット 平面



AN-6ピット 断面



BN-1ピット 平面



BN-1ピット 断面

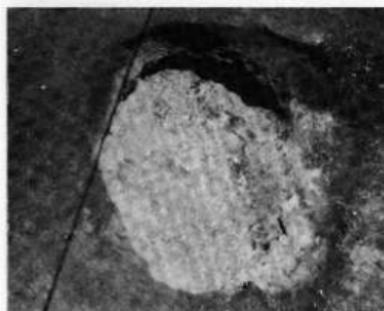
写真図版30 平安時代ピット(1)



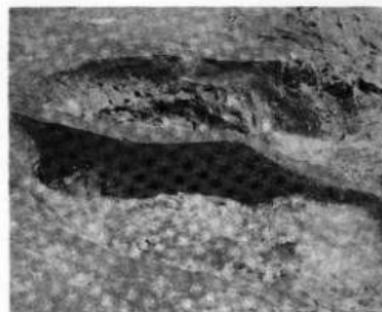
BIV-3ピット 平面



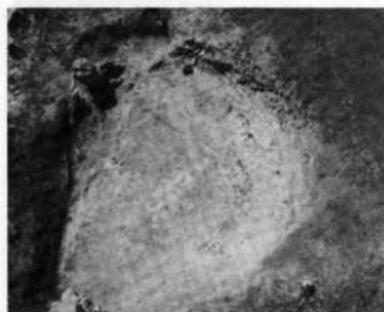
BIV-3ピット 断面



AIV-1土取穴 平面



AIV-1土取穴 断面

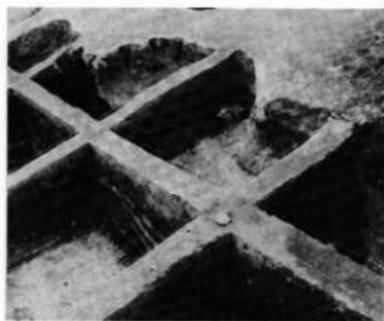


BIV-1土取穴 平面

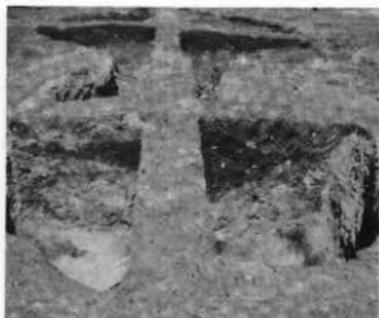


BIV-1土取穴 断面

写真図版31 平安時代ピット(2)・土取穴(1)



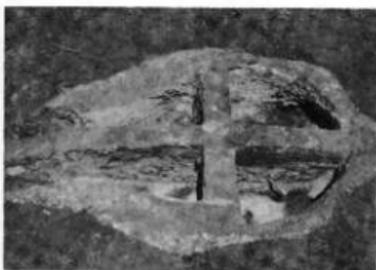
BV-2土取穴



AⅢ-炭窯 断面



AⅢ-炭窯 断面



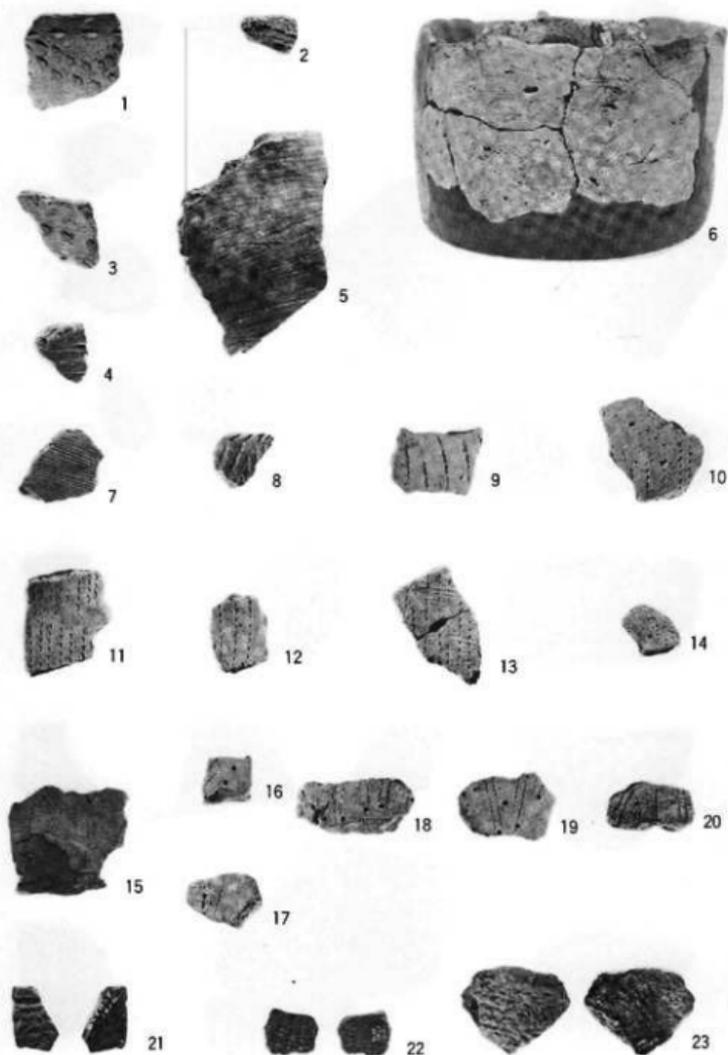
AⅢ-炭窯 断面



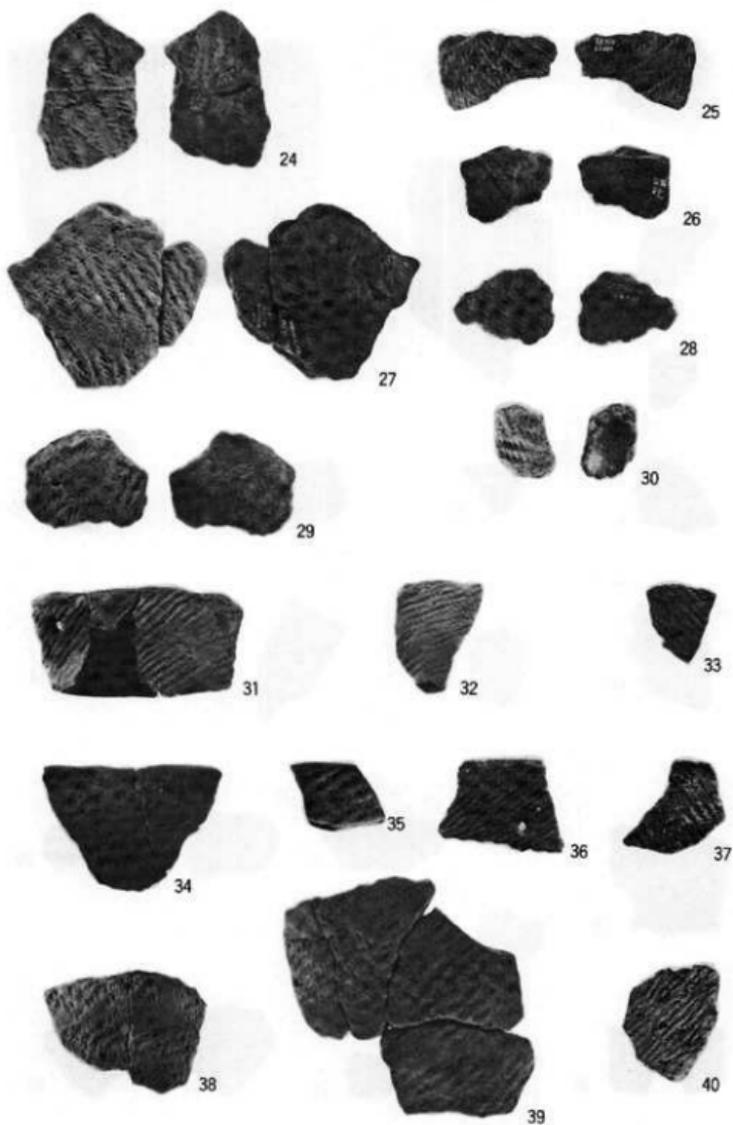
AⅢ-炭窯 平面



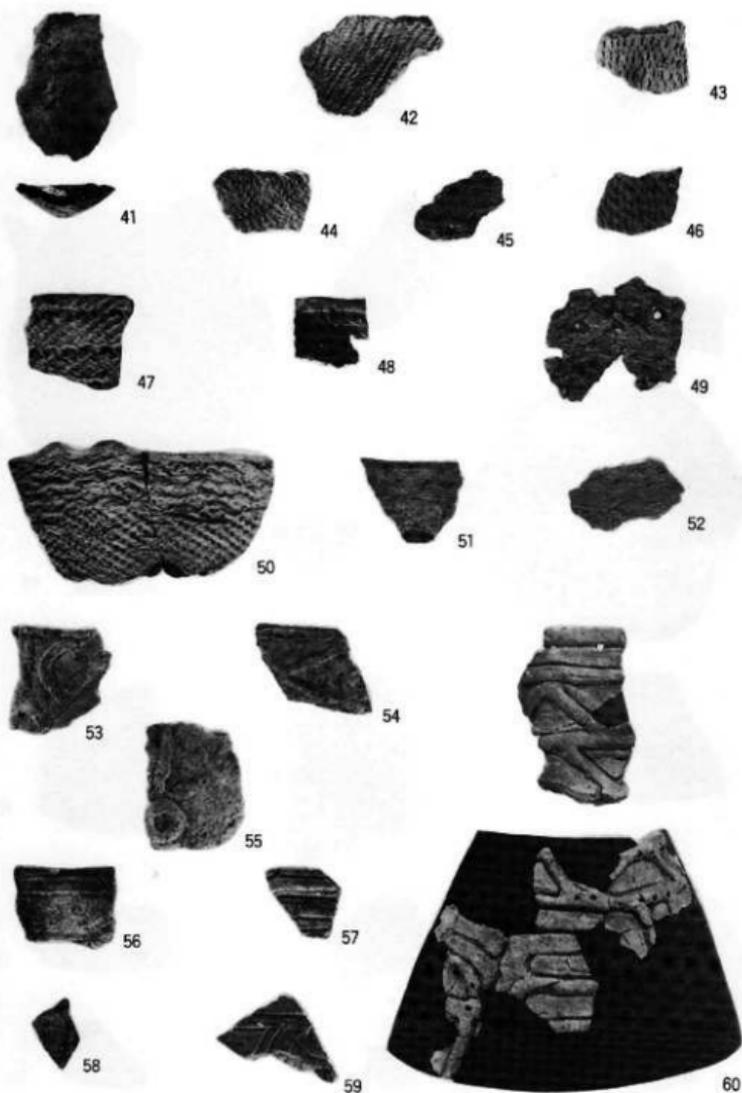
AⅢ-炭窯 煙出し部



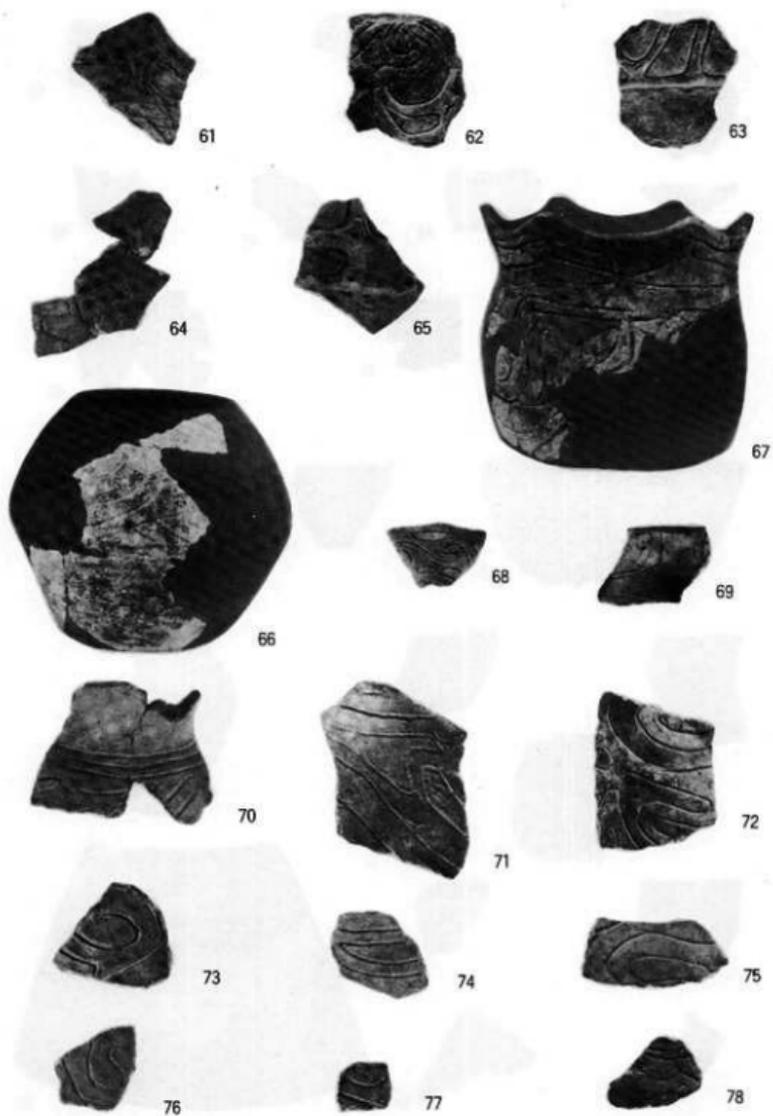
写真図版33 縄文土器(1)



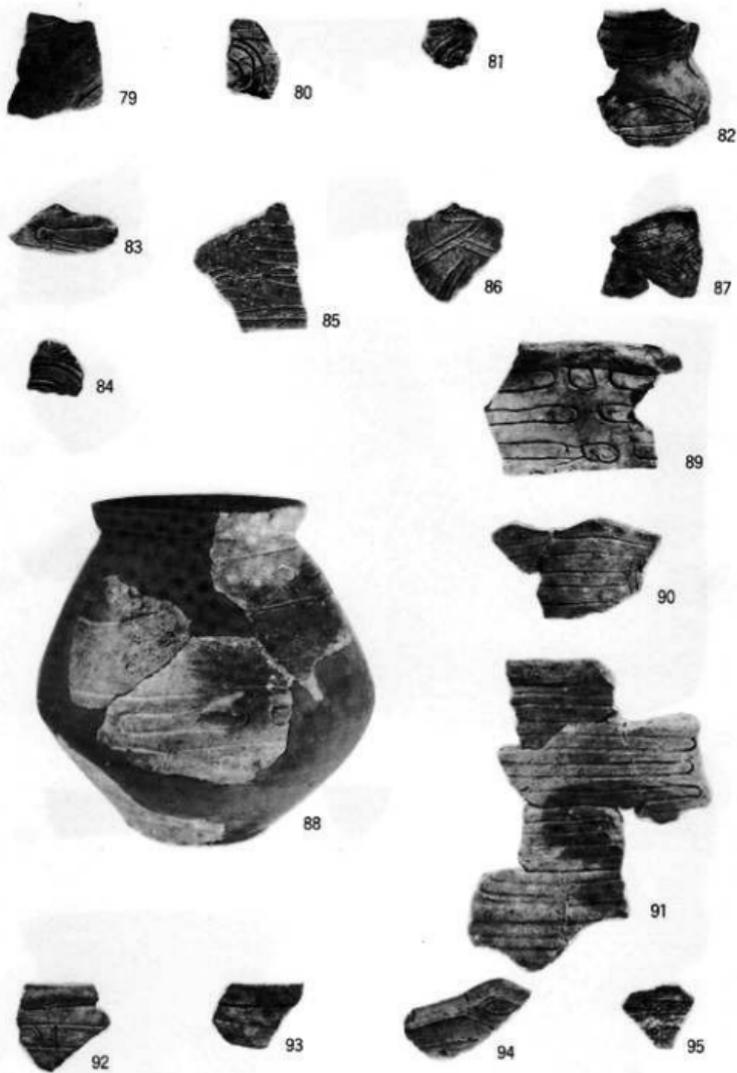
写真図版34 縄文土器(2)



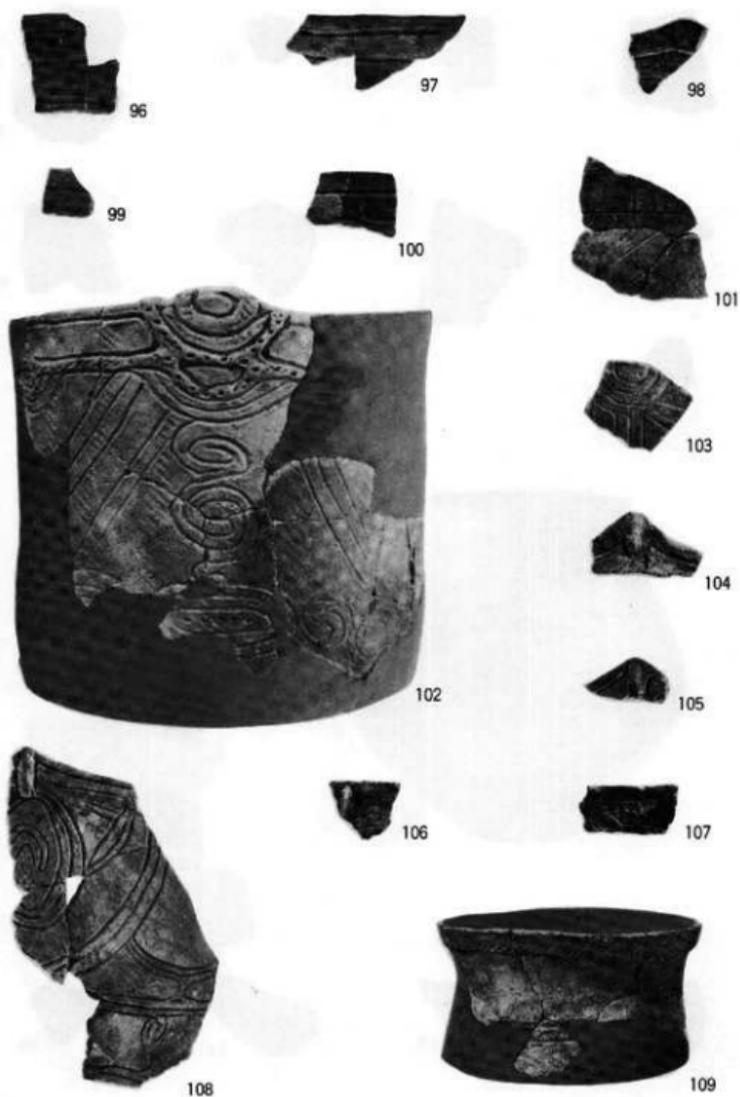
写真図版35 縄文土器(3)



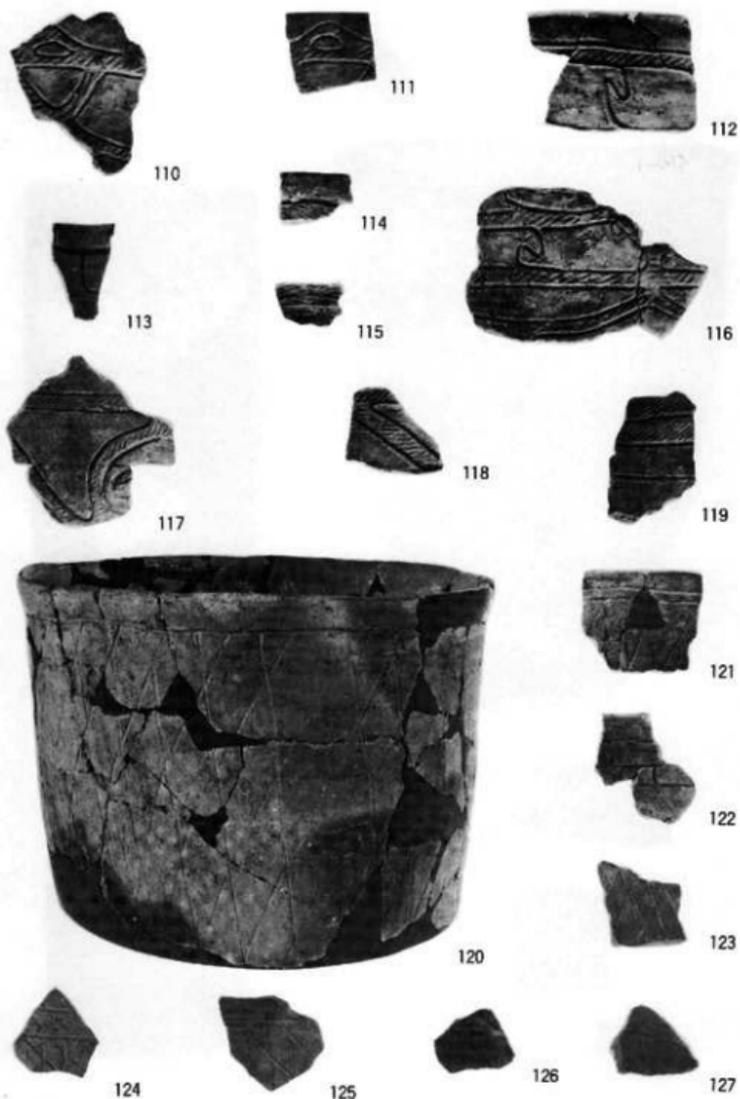
写真図版36 縄文土器(4)



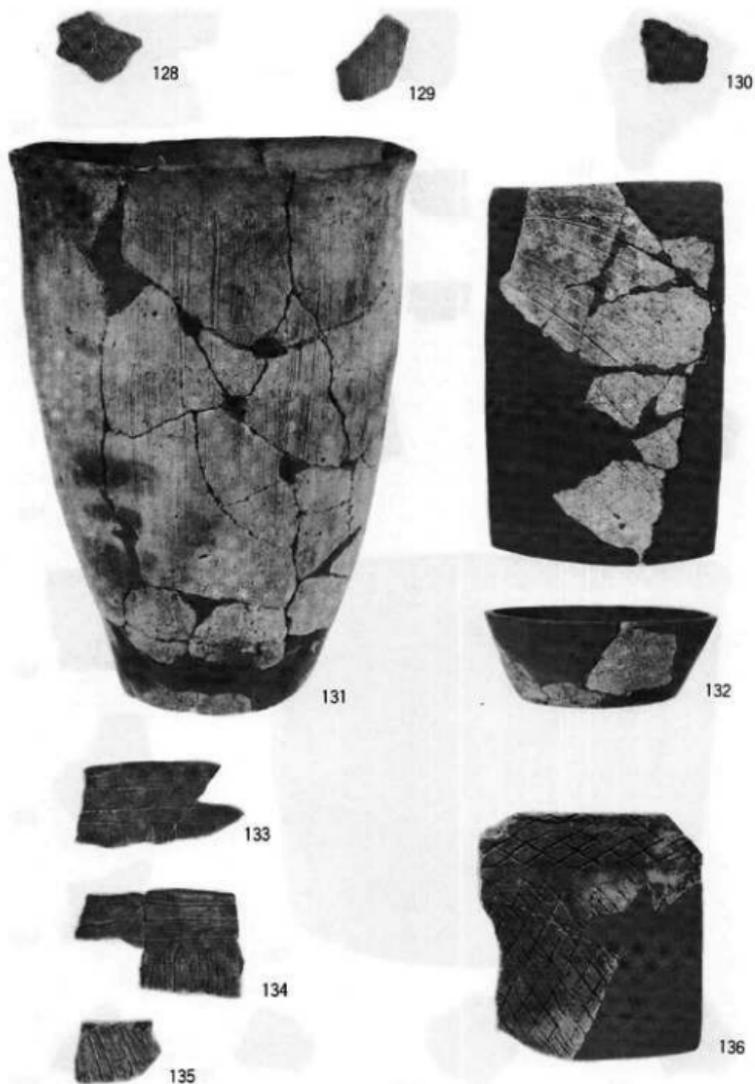
写真図版37 縄文土器(5)



写真図版38 縄文土器(6)



写真図版39 縄文土器(7)



写真図版40 縄文土器(8)



137



146



138



139



140



141



142



143



144



145



147



148



149



150



151



152

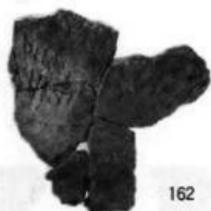
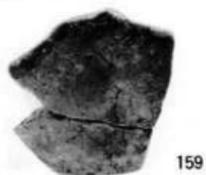
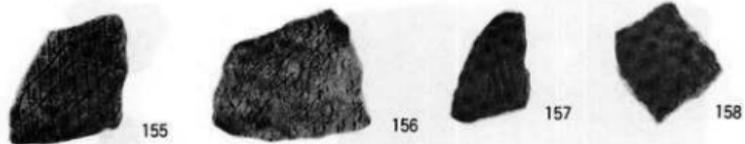


153



154

写真図版41 縄文土器(9)



写真図版42 縄文土器 ⑩



167



168



169



170



171



172



174



175



176



177



178



179



180



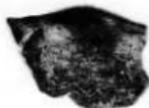
181



182

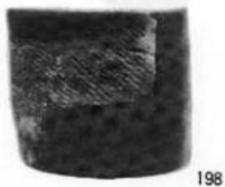


183

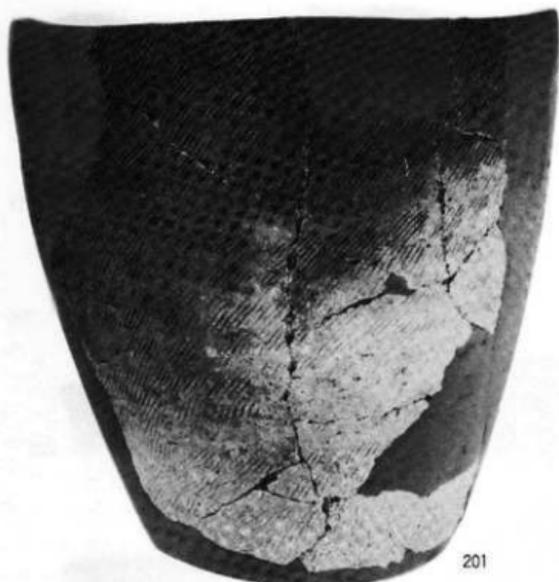


184

写真図版43 縄文土器(1)



写真図版44 縄文土器 (12)



201



202



203



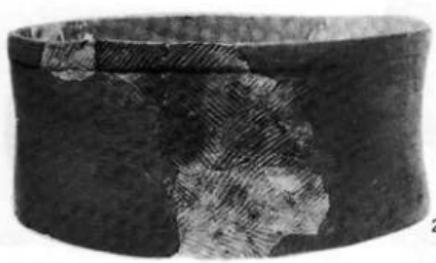
204



205



206



207



208



209

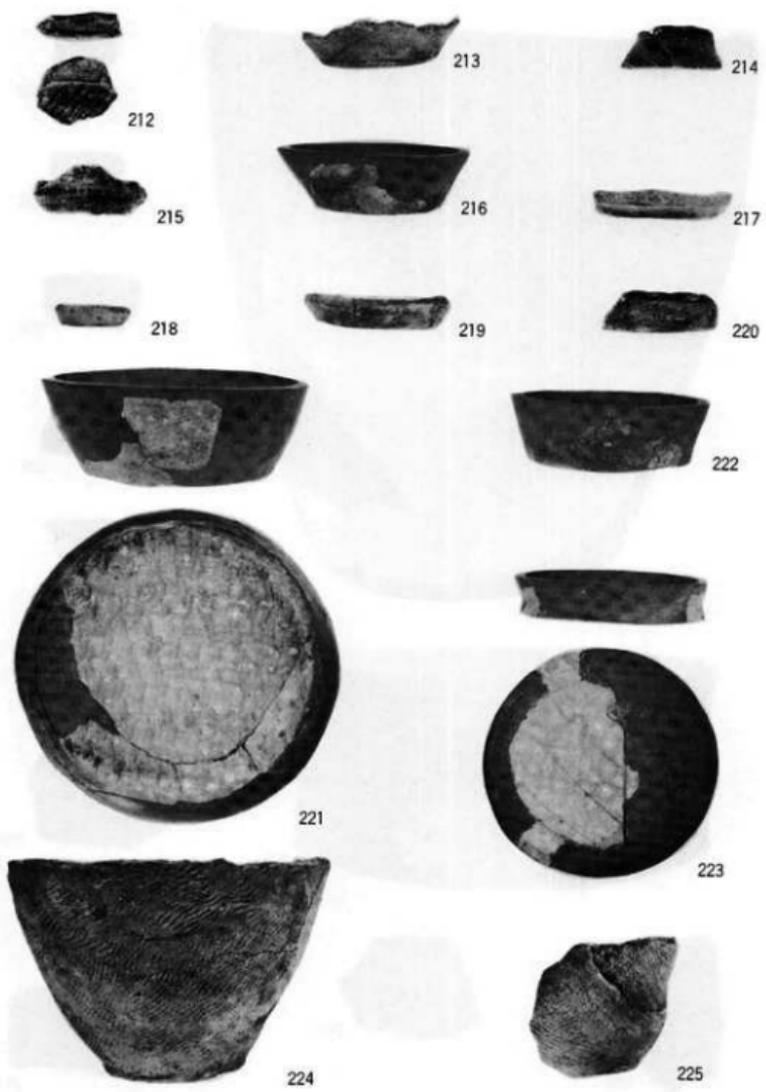


210

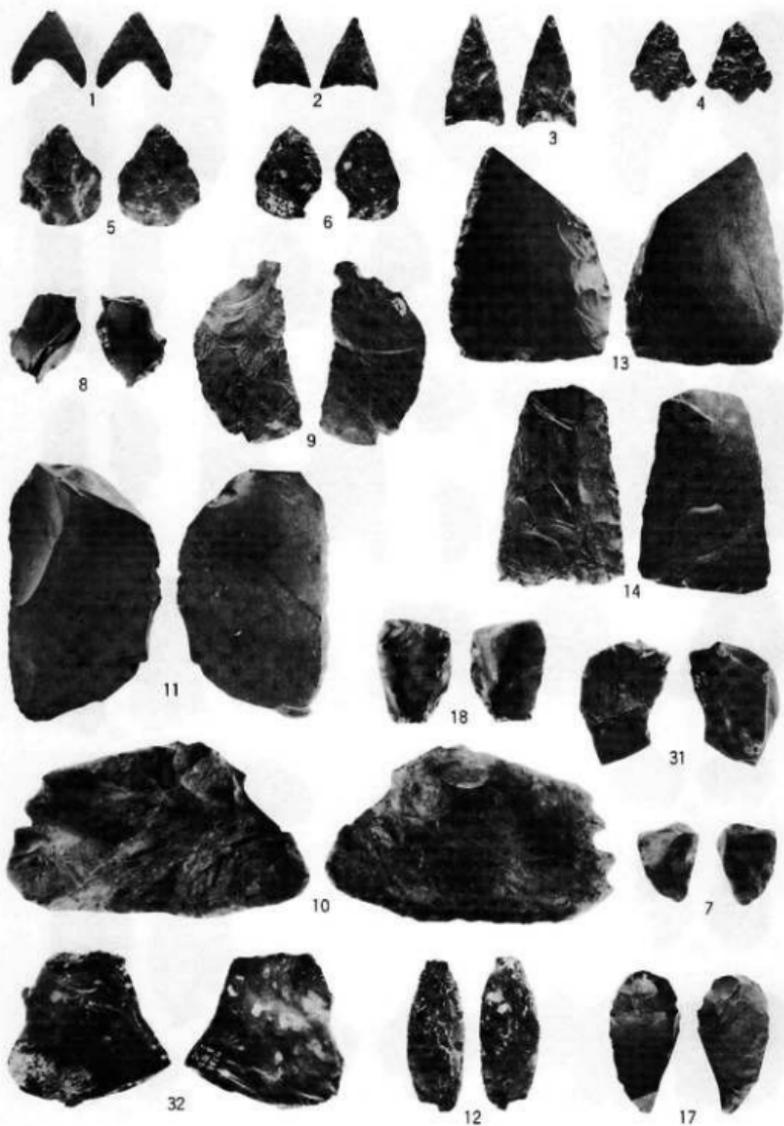


211

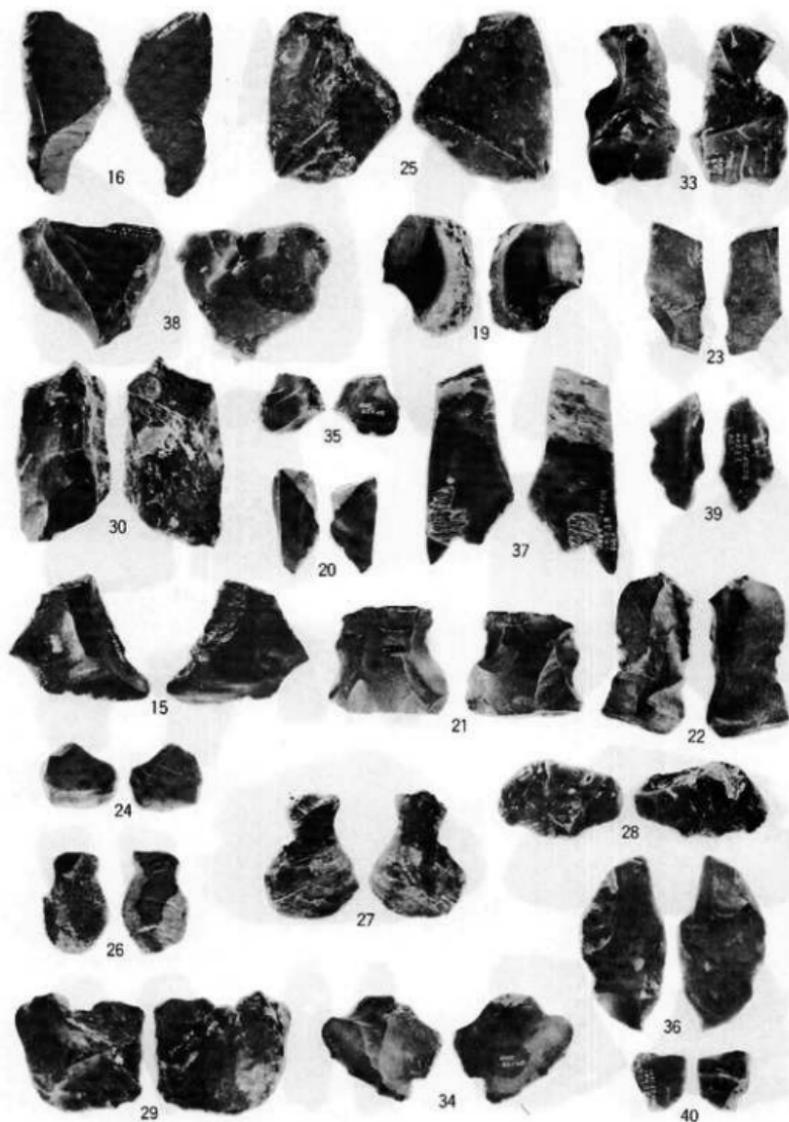
写真図版45 縄文土器(13)



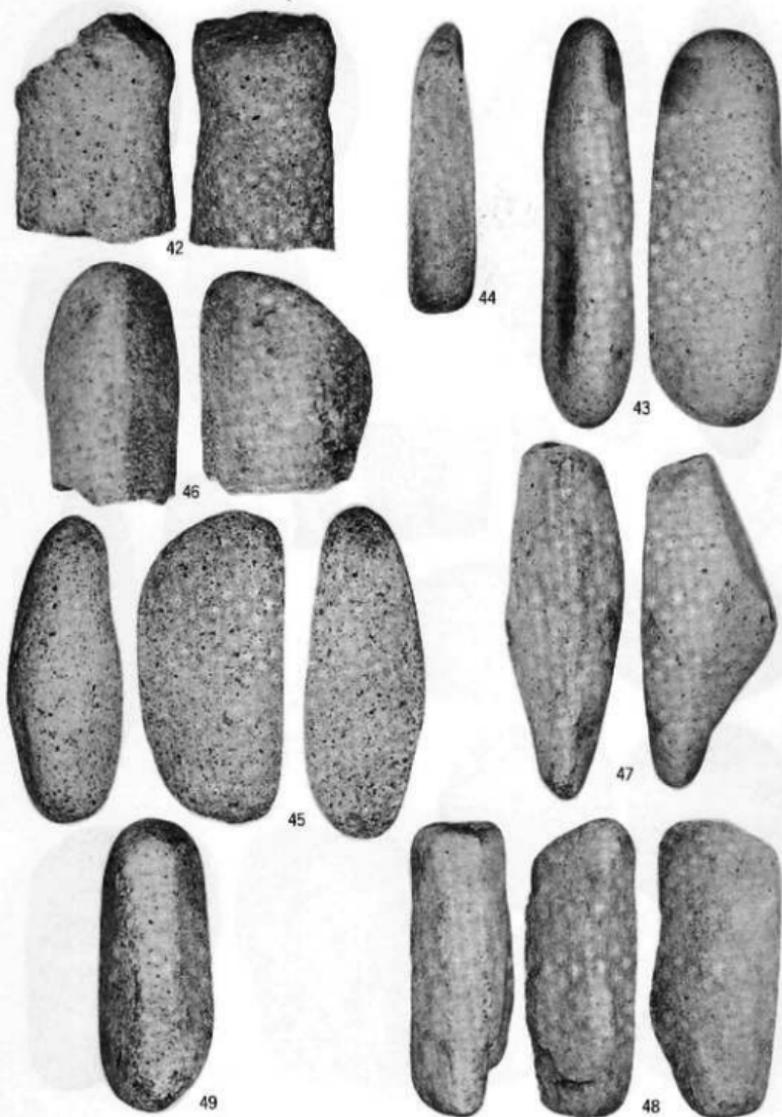
写真図版46 縄文土器(14)



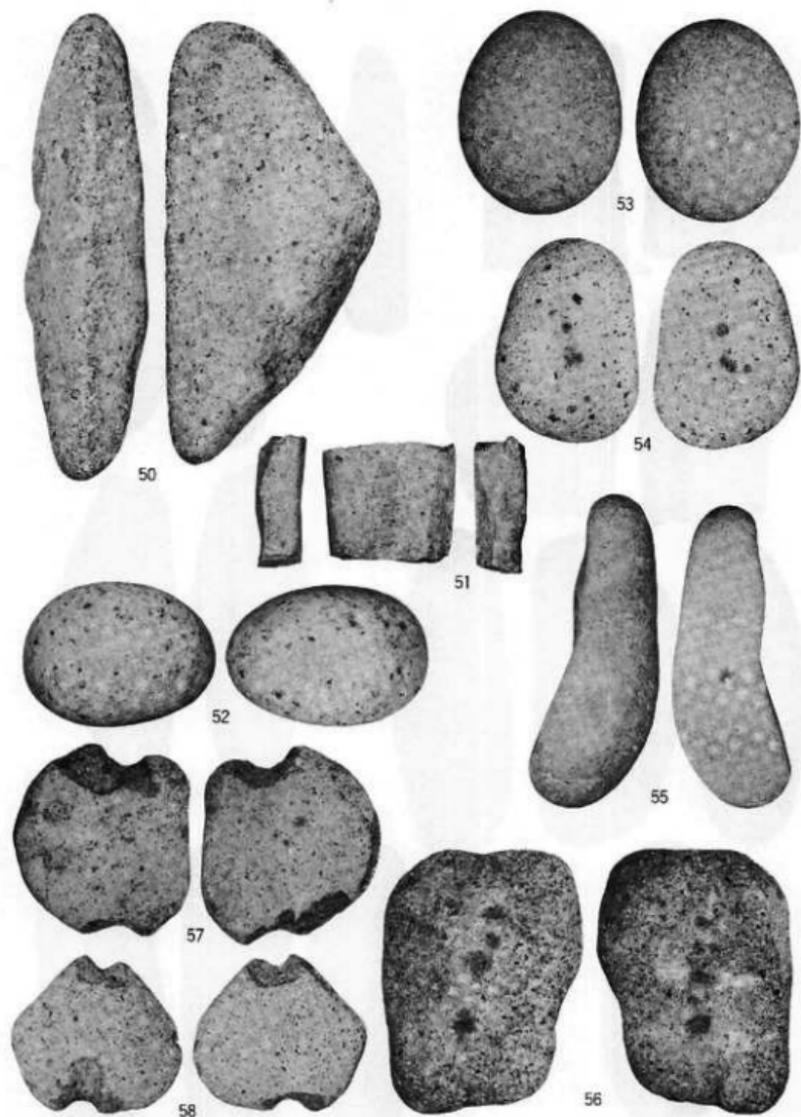
写真図版47 石器(1)



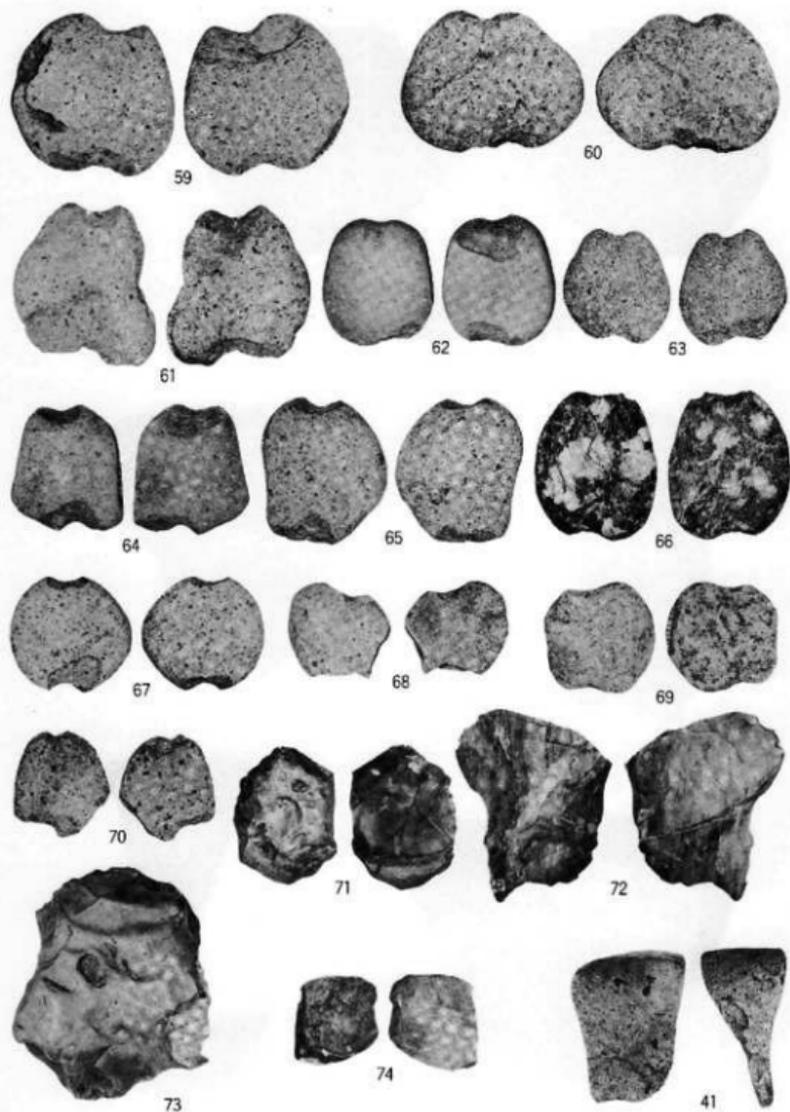
写真图版48 石器(2)



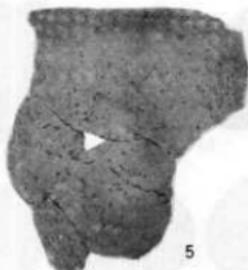
写真図版49 石器(3)



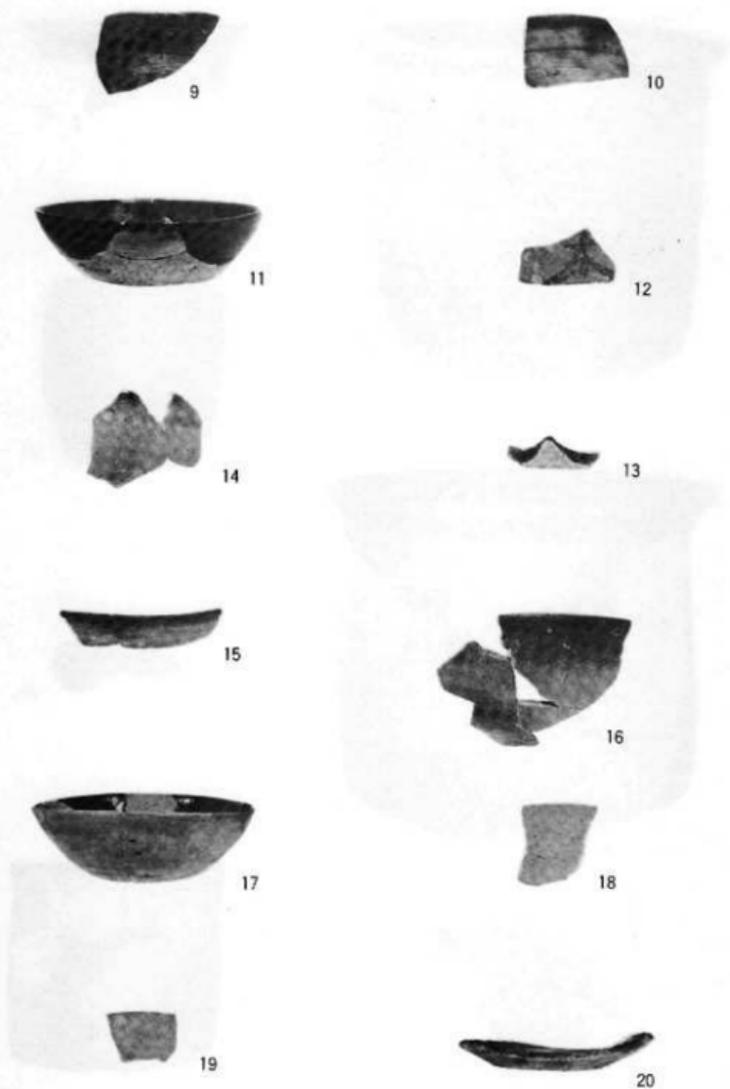
写真図版50 石器(4)



写真図版51 石器(5)



写真図版52 平安時代の土器(1)



写真図版53 平安時代の土器(2)



21



22



24



23



25



26



27

写真図版54 平安時代の土器(3)



28



29



30



31



33



32



34



35



36

写真図版55 平安時代の土器(4)



写真図版56 土製品・金属製品

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長 及 川 昌 二
副 所 長 宮 英 一

[管理課]

課 長 千 葉 久 夫
課 長 補 佐 阿 部 昭 夫
主 事 立 花 多加志
運 兼 軽 技 能 士 員 佐 藤 春 男

[調査課]

課 長 昆 野 靖
主 任 文 化 財 工 藤 利 幸
專 門 調 査 員 高 橋 与 右 工 門
" 菊 池 利 和
文 化 財 專 門 調 査 員 渡 辺 洋 一
" 田 鎖 寿 夫
" 佐 々 木 嘉 直
" 平 井 良 進
" 中 村 良 一
" 田 村 壯 一

文 化 財
專 門 調 査 員

"

"

"

"

"

光 井 文 行
玉 川 英 喜
石 川 長 喜
中 川 重 紀
高 橋 義 介
酒 井 宗 孝

[資料課]

課 長 名 須 川 溢 男
主 任 文 化 財 三 浦 謙 一
專 門 調 査 員 佐 々 木 清 文
文 化 財 專 門 調 査 員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第111集

広沖遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車関連遺跡発掘調査

印刷 昭和61年10月25日

発行 昭和61年10月30日

発行 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 紫波郡都南村大字下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 吉田印刷

〒020 盛岡市名須川町23番27号

電話 (0196) 25-2323